評議員

文學博士 萩野由之
文學博士 黑板勝美
文學博士 松本愛重
文學士 笹川臨風
文學士 菊池謙二郎
文學博士 三宅米吉

（イロハ順）

國史叢書

黑川真道編

鎌倉公方九代記 全

鎌倉九代後記 全

國史研究會藏版

時に間斷なく、往・今・來は一線の上に繋れり。夫れ現在は過去の生む所にして、未來を說き得るもの、現在に其の基脚を置けばなり。顧ふに世の人、多く現在を重んじて過去を輕んず。過去を輕んずるものにして、現在の眞想を窺知し得るものなく、現在の眞想を窺知し得ざるものにして、安ぞ未來に想到するの餘裕を存せんや。言ふ迄もなく我國の現在は、數千年に亘れる過去の產物なり。皇室の尊嚴・國民の性情、將又文物發達の徑路・治亂盛衰の顚末等、仔細に之を觀察すれば、現在の由つて來る所以を明かにし、隨つて未來の赴趨する所を察するに難からざるなり。

抑過去を觀察するには、根本史料に據らざるべからずして、一篇の成書に據るを非なりとす。蓋人各見る所あり、自家の見地は、是れ他人の見地にあらず。一篇の成書に賴りて過去を知らんとするは、卽ち自家の見地を沒却して、他人の見地に傾倒するものなり。讀史餘論・日本外史は、各其の著者の心に映り眼に現れたる日本歷史にして、之を以て眞箇の日本歷史と稱し得べからず。自ら眞箇の日本歷史を知らんと欲せば、根本史料たる當時の記錄に由りて研鑽討究せられざるべからざるなり。是惟に日本の過去を正當に知り得るのみにあらず、研究の興味、亦實に津々たるものあらん。本叢書は眞に我國を了解せんと力むる特志者に、根本史料を提供せんと欲して刊行す。

蓋世には現在にのみ齷齪して、過去を觀察する興味と餘裕とを有せざるもの多しと雖、又孜々として往を彰にし今を知り來を考ふるの士尠しとなさず。此の書、或は少數篤學の士に容れらるゝも、多數俗庸の人に迎へられざるは固より期する所なり。さばれ需要の多少を論ぜず、必ず全部の刊行を大成すべし。致て爰に之を聲明す。

國史研究會主幹

解題

鎌倉公方九代記　十二卷

又鎌倉管領九代記といふ。足利尊氏、子の義詮をして上洛せしめ、弟基氏をして鎌倉に居らしめ、東國を管領せしめしにより、玆に鎌倉公方の基をなしたり。爾來世襲して氏滿・滿兼・持氏・成氏・政氏・高基・晴氏・義氏に至る。これを世に鎌倉公方九代といふなり。

本書は此間に於ける凡二百四十年間の要領を記したるものなり。基氏に於ける鎌倉管領の創業、南方諸所勢力を失ふ事、氏滿に至りては、最早京都將軍家を謀らむとせし事勃發し、京都と鎌倉との意志隔絶せし事、滿兼に至りては、大内義弘の反逆あり、上杉憲定、持仲を迎へて鎌倉に歸る騷動起り、鎌倉公方家是より愈多端となり、持氏立つに及びて、滿隆謀叛の聞えあり、遂に持仲・滿隆等の一族亡滅せしが、尋で京都鎌倉又確執起り、遂に上杉憲實の爲に持氏生害に至り、鎌倉大亂と

なり、持氏の子春王・安王の兄弟殺され、京都にては赤松滿祐の爲に、將軍義敎公は害せられ、東西共に一時は世治まるべく見えず、京都に於ては義勝將軍に立ち、鎌倉に於ては成氏立ち、漸く世は治まりぬ。然るに兩上杉確執起り、其の虛に乘じ、北條早雲伊豆に崛起し、關東併呑の大志を起せり。政氏に至り北條早雲活動を開始し、攻むれば勝ち、順へば部下とし、領土益擴張せり。高基に至り、父政氏と不和となりしが、此の時高基の子晴氏、北條氏綱の女を娶つて妻とす。是より北條氏外戚の緣を以て、號令して益其の領土權勢共に增加せり。晴氏に至り北條氏益强大となり、晴氏の命殆ど行はれず。兩上杉は衰へぬ。小弓御所も討たれぬ。晴氏後悔して北條氏と絕つと雖、只鬱憤を晴らすに過ぎず。里見氏起りぬ。上杉謙信起りぬ。今川家起りぬ。織田信長起りぬ。斯る間に北條氏康は、鶴岡八幡宮大鳥居造營しぬ。南都北嶺の僧を請じて大供養を行ひ、神人の歡喜譬ふるに物なく、關東の人心皆靡かざるはなし。晴氏は遂に北條氏康の爲に捕はれ、子の義氏に家督を讓らしめらる。義氏に至りて北條氏の擁立する所なれば、實權北條氏に

在りて、如何ともすることなし。是より英雄は四方に割據し、大小の戰爭絕ゆる事なく、北條·武田の對陣、北條駿州を奪ふ事、信玄川中島の對陣等ありて、一時戰爭の花なりしが、盛者必滅の道理にて、氏康も身まかりぬ。信玄も身まかりぬ。謙信も身まかりぬ。信長は明智の爲に殺されぬ。天正十五年十二月廿一日には、公方義氏も逝去せられぬ。程なくさしも關東を風靡せし北條氏も、豐臣氏の爲に滅亡せられぬ。

以上本書の梗概なり。要するに鎌倉公方家に於ては、始め一二代の間こそ勢力はありつれ、氏滿に至りはや京都と確執を生じ、漸く治まりしも、是より次第に隔意を生じ、持氏に至りては、京都及び家臣と確執を起し、遂に生害するに至り、此の時に當り北條早雲伊豆に起り、次第に勢力を扶植して、公方家に關係し、晴氏の北條氏綱の聟となりしに及び、遂に公方は我が掌中に歸し、之を號令して、關東を併呑するに至れり。晴氏の子義氏は擁立されし所にして、一向北條氏の命を待つに過ぎず。然れども北條氏と雖、時來れば一朝にして遂に亡滅に歸せり。此の盛衰

を知らしめんとて、此の書は記されたるものなり。

本書作者詳ならず。一本奥書に云、斯管領記者足利尊氏末家之後記也。鎌倉管領職若干家傳雖有之、或應或違而不中其的多矣。蓋此書也從貞和年中足利基氏以來、東國管領職相續而既及九代、公方義輝公之治世、義氏當職之時、天正十五年也。此義氏於古河城卒去者也。九代年數都二百四十餘歲也。此間戰功忠賞之序次具記之畢。

此書相州玉繩之古跡什物也。久致懇望求之令開板、且不爲知者爲愚蒙改假名加圖畫者也。

于時寛文十二壬子五月下浣

史籍集覽、早稻田大學の通俗日本全史は、此の本に據られたりと見えたり。本編採收底本の奥書に、

延寶六年午四月吉日大傳馬町三丁目鱗形屋板

と見えたり。寛文十二年より延寶六年迄、纔に七ヶ年の後本なりき。其體裁上に

於ても延寶版には

基氏軍記　氏滿軍記　滿兼軍記　持氏軍記　成氏軍記

政氏軍記　高基軍記　晴氏軍記　義氏軍記

と記載せれば、一目出來事の時代を容易に知るを得べし。按ずるに本書作者及び時代知るべからずと雖、寛文版を以て最初と見做せば、徳川の初期になれるものか。寛文版の奥書に相州玉繩の古跡に得るといへば、恐らくは北條氏の遺臣など、殁落の當時を偲びつゝ、關東を風靡せし昔日の榮華を思ひ遣り、且は我身も時を失ひたるを歎き、北條氏の爲に竊に記し置かんとて、殊更に年月氏名を除きたるものなるべし。

鎌倉九代後記　一巻

本書は鎌倉九代後記と題せれば、鎌倉公方九代記の後を記したる如く見ゆれど、内容は基氏より義氏に至るまで、九代間の事蹟の要點を記し、天正十五年十二月、義氏古河に逝去せし事を主とし、且又は小田原北條氏、豐臣氏の爲に滅亡し、天下

一統に屬せし旨を記載せしものなり。

本書も作者詳ならず。史籍集覽本は昌平坂學問所本を底本とせしかど、本編は天保八年越智直澄自筆寫本を底本とす。

大正三年二月

黑川眞道識

例言

一、本編には「鎌倉公方九代記」及び「鎌倉九代後記」とを收む。

一、「鎌倉公方九代記」中、地名人名及び其他の名稱に假名書の箇所多く、誦讀に晦澁なるを以て、此等は悉く漢字を補綴し、且人名地名等にして讀難く讀誤り易きものには、出來得る限り振假名を施したり。

一、同書原本は十五卷にして之を八冊に分綴しあるも、其區分は、思ふにたゞ分綴の便利に基けるが如く、單に表紙を改めたるのみにして、內容は前卷と連續せるものなれば、本編には此等を合して十二卷となせり。且つ目次中持氏軍記の如きは「卷之」とのみ記して其下を空劃となしあり、依つて本編には餘義なく之に上中下を補うて、其順序を明瞭ならしめたり。

一、「鎌倉九代後記」は原本片假名なるも、本編には悉く平假名に改めたり。

一、地名の中たとへば岩槻・岩突・岩付、鵠臺・高野臺、簑輪・箕輪、前橋・厩橋、河鳴島・加

波鳴島の如き兩書の文字一致せざる所あるも、此等は殊吏に改竄する事なく、原本の儘に保存したり。又人名中太田資高をば、前書は源六と記し、後書は之を源六郎と記せるも、同じく原本の儘に止めて訂正を加へず。

一、假名遣、振假名等にして、原本の特長と認むべきものは、異本との對照に據るの外、猥に之を改竄せざりしと雖、其他は正しきに從つて訂正し、當字、借字又は文字の顚倒等にして他との一定を缺くものは、稀に之を訂正したり。

一、底本と校訂本との文字相異り、而も是非判定し難きものは、其の字句の左行に縱線を加へ、異本の字句を挿みたる場合には〔何々イ〕とし、校訂者の意見を註したる場合には〔何々カ〕として區別したり。且左行に縱線を施したるのみにして、其下に括弧の註記なきものは、底本校訂本共に字句同一にして、校訂者亦意見を附記せず、一に識者の是正に竢つものなり。

一、原本の蠹損、缺損等は、異本と校合して、之を補塡し了せり。

目次

鎌倉公方九代記

基氏軍記上

氏滿軍記

成氏軍記

政氏軍記

高基軍記

晴氏軍記

鎌倉九代後記

目次終

鎌倉公方九代記

序

蓋惟るに、夫れ安に居て危を忘るゝときんば、必ず墜落の恐あり。樂み矜るときんば、また傾敗の憂を抱く。之を以て明君良將の世を保ち國を治る計は、己を顧みて欲を省き、直を擧げて曲を退け、仁を施して四民を惠み、道を修めて百姓を撫す。能く此の如くするときんば、内外其所を得て、上下其化に從ひ、風儀淳朴にして、令命行ふに堪へたり。或は威に乘つて邪を計り、權を執つて利を貪るときんば、忠賢伏潛れ、佞奸時を得、禮節和を失し、謙讓軌を亂り、政理に惑ひ、怨恨を負うて、土の如くに崩れ、瓦の如くに解けて、高門貴族と雖、遂に損亡の災を招く。異域本朝古往今來皆此の如し。まさに覆車の誡を鑑み、常に恢網の愼をいたさば、鴻運無窮に傳はり、嗣系長く榮え、佳名遠近に輝きて、徳澤群彙を潤さんと云爾。

鎌倉公方九代記　卷一

基氏軍記　上

一　鎌倉草創

爰に右大將源賴朝義公を揚げ、關東旣に歸屬し、大軍馳せ從ひ、武名雲漢に揚り、威勢海內に蔓り給ふ。治承三年十月に、大庭平太景義を奉行とし、相模國鎌倉小林鄉の北の山を點じて、社頭を造營し、鶴ヶ岡の八幡宮を落慶して、源家擁護の祈願所とし給ふ。又大倉の鄉に新御館を作り、同年十二月十一日に、畠山重忠を先登とし、千葉介常胤を後陣として、彼の館に移り入り給ふ。御家人等其まはりに家作し、上下其命を仰ぎ、推して鎌倉殿と稱し、出仕の侍三百十餘人、晝夜に嚴しき守護し奉る。文治二年三月に、平家追討の大功を賞せられ、後白河院より、征夷將軍の宣

鶴岡八幡宮造營

王道衰へ武門榮ゆ

天下の權北條に歸す

を蒙り、正二位右大將に任じたまふ。剩へ六十六ヶ國の總追捕使に補せらる。因幡前司廣元と申す旨ありて、諸國に守護を置きて、國司の威を抑へ、庄園に地頭を据ゑて、本所の掟を用ひず。王道これより磷ぎ、日を追うて衰敗し、武威益盛にして、月に隨ひて昌榮す。天下其の命を守り、四海此の權に服して、大名小名伺候の諸侍、諸國集まつて、殿中市をなせり。賴朝旣に薨じ、嫡男賴家世を繼いで不肖なり。舍弟實朝其武職を奪ふ。賴家の子禪師公鶴ヶ岡の別當に補せられ、父の怨を報じて、竊に實朝を討ちたり。北條時政又禪師公を殺す。父子三代僅に四十二年にして、天下の權柄、自然に北條の手に落ちて、勢漸くは極に充ちたり。時政卒して義時權を執り、承久の亂に、土御門院・順德院兩帝を配流し、堀川院を御位に卽け奉り、掃部助時盛・武藏太郎時氏を京都に上せ、兩六波羅に居ゑて所司とし、洛都西國の成敗をいたさしめ、筑紫に探題を居ゑて、九州を守らしむ。光明峯寺左大臣道家公の四男藤原賴經公を鎌倉へ申下し、征夷將軍に補任して、關東の武將とす。義時執權として諸將諸侍、皆其令命を仰ぐ。賴嗣〔經カ〕公の一男賴嗣公の時、不慮の災

泰時の仁政

起りて、京都に歸り給ふ。其間に義時卒して、武藏守泰時世を繼いで、仁道を行ひ禮節を守り、義を重く德を厚うせしかば、天下新に淳化の風に歸す。後嵯峨院第一の皇子宗尊親王を鎌倉に下し奉り、征夷將軍に補せられ、武家の魁首となり給ふ。嫡子惟康親王世を繼いで、幾程なく薨じ給ふ。此間に修理亮時氏・武藏守經時・相模守時賴相續ぎて政務をいたせり。後深草院第二の皇子久明親王を征夷將軍に任じて、鎌倉に下し奉り、左馬權頭時宗・相模守貞時相續ぎて、政事旣に武家より出で、仁德旣に窮民を撫するに足れり。權威愈萬人の上に輝き、恩を施し義を正しくす。之に依つて四境遠近彼の下知に從ひ、七道都鄙其權勢に服せずといふことなし。

北條高時執權

二　北條家滅亡

久明親王の嫡男守邦親王武職をうけて、諸侍拜趨の禮、更に又あらたなり。此時の執權は時政九代の後胤相模守高時なり。嘉曆元年三月に入道して、法名宗鑑とぞ

北條家滅亡

號しける。然るに相模入道行跡甚だ輕くして、政道最も正しからず。唯遊興を事として、世の歎を顧みず、天理に違ひ人望に背く。見るもの眉を顰め脣を飜す。此時の帝後醍醐天皇の皇子護良親王を春宮に立て、御位を讓らるべき由關東へ仰せられけるに、高時入道肯ひ申さず、遂に後二條院の皇子邦良親王を、太子に立て參らせたり。これのみならず天下の政道諸事、叡慮に從ひ奉らず、雅意に任せて行ふことを、安からず逆鱗し給ひ、關東を亡さばやと企て給ふ。是より天下四海亂れ立ちて、天子位をあらため、臣下職をうつされ、武門、陣營を張るに時の暇なく、民家、手足を措くに所を得ず。河内に楠正成、播磨に赤松圓心、大塔宮に屬し、足利高氏上洛して御味方に參り、兩六波羅を攻め干す。新田小太郎義貞、上野國に旗を揚げ、鎌倉に攻入りしかば、守邦親王出家して遁れ出づ。程なく薨去し給ひ、高時入道以下の一族は、東勝寺に於て同時に自害し、北條家こゝに滅亡せり。伯耆に名和長年を始めて、西國北陸の武士、蜂の如くに起り、北條譜第の輩、高時被官の族、一類殘る所なく皆討たれて、天下本に返り、暫く安堵せしかども、勸賞の賜物に過不及の

怨を含み、諸將諸侍互に憤りて、又更に亂世となる。

三　足利家譜

足利尊氏
足利直義
新田義貞

足利又太郎高氏は、淸和源氏貞純親王十五代の苗裔、父は讃岐守貞氏、母は上杉修理亮賴重の女なり。從三位藤原淸子と號す。然るに高氏は、父貞氏の喪に居ながら、鎌倉の催促嚴しきによつて、力なく一方の大將として上洛し給ふ。此怨に依つて宮方に屬し、六波羅を攻め干し、後醍醐天皇を御位に返し奉る。卽ち高氏に御諱の字を賜はり、尊氏と改め、治部卿左兵衞督に任じ、從四位に敍せられ、漸々昇進して、從二位の參議に補任し、征夷將軍の宣を蒙り、關東八州を管領し、相州鎌倉に入りて、武威を輝し給ふ。舍弟直義は兵部大輔に任ぜられ、將軍の執權として、政務をつとめらる。新田義貞は左兵衞督に任ぜられ、漸く昇進して左中將に經上り、昇殿を許され給ふ。尊氏と不和になり、舍弟脇屋義助は、右衞門督になさる。軍兵を出して戰ふに勝たず。其の間に楠正成・名和長年討死す。後醍醐天皇は義貞に綸

旨を賜はり、又都を落ちたまひ、吉野の皇居に籠りましますこれを南朝とぞ申しける。

四　新田義貞自害并南帝崩御

新田・足利確執して、戰更に止む時なし。義貞の嫡子義顯は、一の宮尊良親王を伴ひ、越前國金ヶ崎の城に籠り、遂に攻破られて、宮と同じく自害せらる。同國黑丸の城には、尾張守高經籠りて強く守る。曆應元年閏七月に、新田義貞押寄せて攻められしが、流矢に中つて自害せらる。光嚴院殿御位に卽き給ひ、尊氏を正二位に敍し、舍弟直義を從四位上左兵衛督に補任せらる。同年八月十六日、南朝後醍醐帝吉野の皇居に崩じ給ふ。太子義良親王御位に卽き給ふ。後村山院と申すは、此君の御事なり。脇屋義助黑丸の城を攻落す。城主高經は加州に落ちて、富樫の城に籠る。義助は四國の勢從ひ附きしかば、武威漸く振ひし所に、同五月疫疾に依つて死せらる。義助・義治は、備前國の住人三宅三郎高德と連れて都に上り、尊氏を窺ふに、叶はず

義貞軍死

後醍醐天皇崩御

後村山天皇卽位

して、信濃國に落行きたり。

師直・師泰等專橫

五　足利直義欲レ討二高ノ師直一

高武藏守師直・同舍弟越後守師泰は、將軍の執事として、軍功亦勝れたり。尊氏公深く重んじ給へば、諸將諸侍皆恐れ愼みけり。此勢に乘りて、大に奢を極め、仁義禮讓の道德を紊り、神明佛陀の冥利を恐れず、恣に振舞ひしかば、人皆目を峙て、爪彈をいたすと雖、時の權に憚りて、廣くは沙汰もせざりける所に、上杉伊豆守重能・畠山大藏少輔直宗、既に師直兄弟と權を爭うて嫉みける故に、事不和になりたり。其頃左兵衞督直義、禪法に歸依し給ふ折節なれば、夢窻國師の弟子妙吉侍者とて、才智辯佞のものなり。師直と心よからざりければ、彼を語らひて、師直兄弟が奢れる惡逆を、直義に訴へて讒しけり。直義聞き給ひ、斯く目覺しき所行にては、世の人怨み疎まん。是れ必らず政道の邪魔、國家の亂根なりとて、內々之を誅せんと計らはれけるを、粟飯原下總守淸胤心變りして、師直に告げ知らせたり。師直大に憤

直義執權を止めらる

直義薙髮

り、軍兵を起して、直義の三條高倉の家を取圍む。直義遁れ出で、將軍の おはします近衞の東洞院の御所へ參らる。師直・師泰又御所を圍みしかば、直義詮方なく怠狀し、天下の執權を止め、上杉・畠山を越前國に流せしかば、師直卽ち圍を解き、彼兩人を配所にして誅せしむ。妙吉侍者は逐電す。師直兄弟權威益强くして、猶直義を怨むる心深かりければ、直義は世の交を絕ちて、政務を辭し、細川兵部大輔顯氏の錦小路堀川の宿所に引籠り、行年四十二にして髮を下し、法名惠源と號す。師直が見聞かんことを恐れて、事問ふ人もなく、幽なる住居なり。

六　左馬頭義詮上洛 附 御政務

將軍尊氏公の嫡子左馬頭義詮と申すは、童名は千壽王と號す。母は從二位平の登子、赤橋武藏守久時が女、北條相模守守時には妹なり。元弘三年四月に、父尊氏鎌倉の催促に依つて上洛の時、人質として、大藏が谷に止め置きしに、尊氏宮方になりしと聞きて、忍びて京都に上り、鎌倉旣に靜まり、相模入道亡びて後に、關東守護

足利基氏鎌倉管理となる

の爲め又鎌倉に下し、大藏が谷に歸る。東國の武士尊氏に歸伏し、此幼君に從ひ屬す。元服して義詮と號す。尊氏公京都西國所々に赴き合戰ある内は、鎌倉にありて東國の管領たり。從四位下左馬頭に轉任し、威勢高くおはしけり。此頃直義隱居し給ひければ、京都に上洛させ參らせ、直義の如く天下の政務を執り行ひ、師直諸事を申沙汰すべきに定まり、貞和五年十月に、義詮關東を立ちて、同廿二日將軍の亭に着入し給ひ、軈て直義朝臣の宿所三條坊門高倉の御館に移り住み給ふ。即ち政務の職に預り給ふと雖、諸事たゞ師直・師泰が計らひに出で、高家の指南を伺はざる人はなし。

七　足利基氏東國管領始

足利基氏は、尊氏公の二男義詮同腹の御連枝なり。童名龜若殿と申す。十三歲の春元服ありて、左兵衞督に任ぜられ、基氏とぞ號しける。其うまれつき力量あつて、早業に長じ、才智英賢にして、心操温和なり。武勇を內に祕して、禮讓を外に行ひ、

籌策を不意の所に廻らし、勝敗を無形の地に計る。此に因つて關東の諸侍心を寄せて、後頼もしくぞ見奉りける。義詮既に下洛し給ひ、卽ち將軍御敎書の旨に依つて、鎌倉の管領職をば基氏に讓り渡し、兵庫頭憲房が男上杉民部大輔憲顯・武藏守師直が息高播磨守師冬二人を執事として、關東の政務を行はせらる。基氏愈愼み深く、政道に邪なからんことを思ひ、欲を省き德を修め給ひしかば、關東諸國の大名諸侍、只管に思付き、從ひ靡き奉ること、風に偃す草の如し。

八　高師冬追罰

師冬反逆を計る

觀應元年の春、基氏既に從三位に敍せられける。今年十七歲、威勢益東國に輝き、餘影遠く荒に充つ。執事播磨守師冬は、父師直が元より告下す旨ありて、內々反逆を企つる由、誰人のいひ弘むるともなく、世に隱れなく取沙汰しけり。左馬頭殿聞き給ひ、上杉憲顯を召して、竊に仰含めらる。憲顯承つて、誠に斯く承りしかども、たゞ讒者の浮說なるべしと存じて、言上申すに及ばず候に、早上聞に達する上は、

基氏、師冬を討たんとす

嚴密の御沙汰を以て、實否を明らめ給ふべしと申す。基氏暫く思案して仰せられけるは、師冬がこと、殿中に召し刺殺さんこととは、鷹鷂の雀を搏つよりも、易かるべしとは雖、京都猶未だ靜ならず、適〻東國は治りたるに、今此事出來なば、世の騷ぎ人民の苦みならん。其上京都は師直が權威強く、鎌倉は師冬を引くもの多し。旁以て災の元なるべし。されども又差置くべきことにもあらず。たゞ外境に賺し出して、誅戮すべきなり。然らば先づ汝が嫡子左衞門藏人を、武藏・上野の間に下し、高倉の惠源禪師の仰なりと稱し、便宜の兵を集めて、旗を揚げさせ、之を退治の爲に師冬を遣し、上杉を以て誅せさすべしとぞ計らはれける。內通の事議定しければ、上杉左衞門、近國の武士を催し旗を揚ぐる由。鎌倉へ告げたり。左馬頭殿態と僞り驚き給ひ、高師冬を召して評議し給ふ。師冬、先づ近國の御勢を集めらるべしとて、廻文を以て、武藏・上野に觸れられしかども、軍兵はかゞしく馳せ參らず。基氏宣ふやう、若し遲々に及ばゝ、難義なるべし。敵城に勢の附かざる先に、汝早く馳せ向ひて、誅伐すべしと仰せらる。師冬申しけるは、藏人御敵になり候上は、親子の

義、父民部殿の御心の中計り難し。他人に仰付けられんより、民部殿直に御伺ひ候はゞ、父子の軍、誰か不孝の子に方人するものあるべからず。是又謀の端なるべし。然らば左衞門殿も科を悔えて、降參し給ふこともこそあれと申しければ、上杉暫し思案を廻らし、さらば某向ひ候はん。軍若し難義ならば、御勢を申給はらめとて、二百餘騎引率して鎌倉を打立ち、武藏の府に着きければ、乜黨の者共を始めとして、上野・下野・信州の勢馳せ集まつて、四萬餘騎になりにけり。高八郎次郎が、六百餘騎にて陣取つて控へたるを、大勢にて押包み、一人も殘らず討取つたり。師冬之を聞きて、さては上杉出し拔いて、左馬頭殿を計り參らせ、師冬を窺ふと覺えたり。是は一定惠源禪巷に內通し、上杉父子一黨の反逆なるべし。時節を移さず左馬頭殿直に御伺ひ候はゞ、將軍へ志あらんものは、皆御陣へ參り候べし。上杉に於ては急に攻干し申さんと、頻に勸め奉れば、左馬頭殿は師冬を引具し、三千餘騎にて打立ち、久米川を越え給ふに、三浦・鎌倉の者共を始めて、安房に竹里、伊豆に伊藤の兵共、近國の輩一萬餘騎にて馳せ附きたり。此等は豫て內通の事あり、師冬鎌倉を賺

し出されなば、軈て入變り、左馬頭殿を守護し奉らんと約せし者共なり。基氏は、伊藤武者盛谷を召して仰せられけるは、味方の大勢を以て、師冬を爰にして誅すべしと雖、さすがに郎從といひ、弓矢の法に汚き打ちやうをいたしけりと、人のいはれんも口惜しかるべし。此故に今暫く時節を待つなり。然るに三戸七郎は、師直が緣者なり。彼が所存、師直を棄てゝ、主に忠をなすべきものにあらず。召寄せて、心中を透し見んと思ふとあり。盛谷即ち三戸が陣所に行向ひ、唯今召さるゝ御使なりといふ。七郎何心もなく參りけり。左馬頭殿は、仰合さるべき事あり。近く參れとあり。七郎畏つて、御傍近く參りしかば、汝は我家にありて、執事職をも承るほどのものなり。高家の一族なれば、豫てより知るべき事なれども、我に聞することなし。定めて時を待つと覺えたり。我今度の發向は、上杉追討の爲にあらず。師冬が隱謀露顯せり。之を誅せん謀なり。汝も遁るべからずと宣ひも果てず、一尺八寸の御腰の物を拔きて、三戸が腰の番(つがひ)を切つて落し給ひけり。藪田四郎・須賀藤內を兩使として、師冬が方へ仰遣されけるは、汝が伯父師直・師泰、恩に矜り心奢り、

天道をも恐れず、人情をも恥ぢず、將軍の御所を圍み、直義を隱遁せしめ、加之御兄弟御中不和の譏を構へ、諸國を亂し、當家後代の面目を失せしむる。是皆高家の政道邪なるに起れり。汝其一類として、東國に逆威を振ふ。彼惡黨に與して、政務正しからざるを以て、動もすれば、諸人怨を含む輩多し。是汝が所爲なり。三戸七郎又我後見として、逆意に與せり。之に依つて手づから誅せり。汝をも唯今召寄せて、誅すべしと雖、われ假にも人を欺くことを好まず。汝若し主從の禮義を存せば、軍門に降つて、速に切腹すべし。一命を惜みて逃去るとも、天道は不義の臣を被はず、地理は惡逆のものを乘せずといへり。萬民指頭の謗をうけ、神明冥眦の怒を蒙り、幾許かながらふべき。軍勢を引受けて、汚き死をせんよりは、唯今自害せよ。若し又軍兵を以て、我に手向ふことあらば、之を取拉がんに時を移すに足らず。猫兒の鼠を殺し、獅子の兎を搏つよりも易からん。返事に依つて相計らはんと仰遣されたり。兩使卽ち師冬が陣に行向ふ所に、大將の御陣に騷しき事ありと聞きて、師冬急ぎ參られける。途中にて行逢うたり。上意の旨ありとて、師冬が陣に連れて

歸り、仰の趣仰渡されしかば、師冬大に驚きて物をも申さず、暫くありて、我等に於て、露ばかりも君に逆惡の心なし。師直・師泰が不義に依つて、御疑を起されんは、理の前にあつて是非に及ばず、御諚に從つて自害仕り、御憤を散じ奉るべしと申す。兩使歸りて斯くと申上げたり。今や切腹すらん。あな不便やと思ふ所に、近所の陣中より、師冬正しく落失せたりと覺え候と告げたり。人を遣して見せらるゝに、はや落失せて、殘る兵、落支度して騷ぎ合ふ。鎌倉殿聞召され、未だ遠くは延びまじきぞ。追蒐けて討取れと下知し給ふ。諸將手分して追ひけれども、疾く落ちたりと見えて、行方(ゆきがた)なし。爰に三戸七郎が舍弟三戸五郎は、猶師冬が陣に居たりし下人廿餘人を連れて、甲斐國を志して落行く所に、横山が勢追付きたり。五郎も、今は遁るゝ所なしと思ひ、返し合せ戰ふ。郎等七騎討取られ、五郎も手を負うたり。横山頻に打つて蒐る。三戸が郎等命を棄てゝ防ぎける。其間に五郎は、行方知らず落延びたり。師冬も跡なく落失せしかば、諸軍各〻本陣に立歸る。上杉父子、大勢にて御陣に參れば、軍兵愈〻雲霞の如く、集ひ重なりければ、今はこれまでなりとて、

左馬頭殿は、翌日鎌倉に歸り給ふ。民部大輔憲顯唯一人執事職を承り、晝夜をいはず勤めけるに、片時の暇もなかりけり。

九　洲澤城軍

師冬洲澤城に籠る

新玉の年立歸る春にもなりしかば、四方の山々霞棚曳き、谷の戸出づる鶯の、軒端の梅に來囀く聲までも、うれしげに聞えて、靜なる世を知らせけり。斯る所に正月廿一日、信濃國諏方下宮祝部が許より、矢野六郎左衞門といふものを以て、鎌倉へ注進しけるは、今度高播磨守師冬、主從十七騎にて甲州に落下り、洲澤の城に立籠り、北國勢を催促して軍兵を集め、旗を揚ぐる由承り候。某馳せ向ひ、攻落し申すべし。御勢を下さるべきにて候とぞ申入れたりける。基氏聞召され、師冬籠城して、北國勢を催さんに、新田の一族同心せば、由々しき大事なり。敵勢の走せ加はらぬ先に、早々罷向つて誅伐すべし。軍難義に及ばゝ、重ねて左右に依つて計らふべしとて、使をば歸されけり。諏方の祝部は、鎌倉の御下知を相待つに及ばず、事

旣に急なりとて、六千餘騎を三軍に分けて押蒐り、鬨の聲を揚ぐれば、城中にも二百餘騎、鬨を合せて、木戶を開き打つて出づ。防ぎ戰ふ寄手、疵を蒙るもの數を知らず。城强くして、要害堅固なり。容易く攻落し難く覺えければ、陣を引退き、唯矢軍ばかりにて、徒らに日をぞ送りける。寄手の中に、赤澤帶刀といふものあり。此山の案內を能く知つたり。手勢八十餘人、忍びて城の後に廻り、嵩より落し蒐る。城中皆大手へ降下りて、後には軍兵なし。帶刀思ふまゝに忍び入りて、西の櫓に火をかけ、鬨をどつと作れば、大手の木戶を禦ぐ兵士、すはや味方に、返忠のもの出來たるぞとて、途方を失ふ。八代の某一人切廻ると雖、大勢に取込められ、一足も引かず討死す。城旣に落ちなんとするに、祝部が陣中に、諏方五郎長久といふものあり。大將祝部に申すやうは、抑我れ鎌倉に候ひし時、執事師冬の爲め烏帽子子になされ、父子の契をいたし乍ら、世擧つて背けばとて、恩を忘れて、不義の振舞をばいかゞいたさん。曾參は車を勝母の里に返し、孔子は渴を盜泉の水に忍ぶといへり。君子は其せざる所に於て、名をだにも恐る。況んや義の違ふ所に於てをや。師冬殿

師冬自盡

に對面して、成行き給ふ有樣を見屆け度存候とて、祝部に最後の暇を乞うて、たゞ一人、今落つべき城中へ入りにける、心の中こそ賴もしけれ。師冬は自害を心に掛けて、味方の軍兵の、働く體を見居たりしが、長久を見てにつこと打笑ひ、いかに珍らしや。扨唯今は何の爲にか來りけん。定めて城中の案内せん爲か。今は此迄なり。疾く歸りて、左馬頭殿の勸賞に預かれといひければ、五郎は涙をはら〳〵と流して、某唯今參ることは、年頃父子の契を忘れず、恩德の深きを思ひ知り、一戰に之を報じ、九原に名を殘し、屍は空しく苔の下に埋むとも、魂は君諸共に、冥土に赴き候はんと、存ずる計にて候といひも果てず、二の木戸まで攻入りたる寄手の中へ駈入りて、命を限りに戰ひ、敵をば木戸の外へ追出し、我身も數個所の手負ひければ、城内に引入りて、今ははや防ぐに力なし。早御自害候へ。御供申候はんとて、鎧脫ぎ棄て、師冬と手に手を取り、腹搔切つて死にければ、城中の兵六十三人、大手搦手防ぎ戰ひ、思ひ〳〵に自害して、同じ枕に伏したりけり。諏方五郎が振舞、義ありて勇を兼ね、恩を知りて道を得たりと、賞めぬ人こそなかりけれ。師冬が首級

をば、祝部が許より鎌倉に送り遣す。左馬頭殿は實檢にも及ばずとて、由井の濱に梟けられけり。關東の諸侍は、愈〻威勢の重きに恐れて、靜に治まる代となりたり。

十　足利直冬井上杉憲顯附薩埵山軍

足利直冬は、將軍尊氏其上（そのかみ）鎌倉伺候の折節、越前の局と申す女房の御許へ、忍びて通はれしことあり。其腹に誕生せられしかば、始は武藏國東勝寺の喝食（かつしき）なりけるを、元服せさせ、左兵衞督直義取立てゝ、西國の探題になし、備後の鞆に居ゑられしかば、中國の成敗を司り、人皆歸伏せし所に、師直之を誅せんと計りしかば、備後國に落行き、河尻肥後守幸俊が聟になつて、筑紫九國の外まで、從ひ附けたり。將軍尊氏之を退治の爲に、中國に赴き給ふ。其夜直義入道は、石塔右馬頭賴房唯一人具して、何處とも知らず落失せられたり。是れ師直竊に義詮に計つて、惠源を討つべき企ある由、聞（きか）する人あるを以てなり。和州越智伊賀守が許に落着きて、持明院殿より院宣を賜はり、吉野の南帝と合體の事を繕ひ、宮方になりて、京都を脅し給

ひしに、高師直・師泰、餘りに奢りて、諸將にうとまれ將軍に棄てられ、諸人に惡み果てられて、一族悉く滅亡しければ、將軍父子惠源禪門和睦し給ひけり。此頃直義入道最愛の一子、四歳にして失せられたり。此憂の中に、入道殿、何とか僻み出で給ひけん。直冬朝臣を、東國の管領になさばやと思ふ心付きて、御教書を九國に遣さる。讒人ありて、惠源禪門と將軍の間に、樣々申沙汰せしかば、兩方又互に疑ふ心出來て、何といふ題目もなく、將軍御兄弟の御仲、自然に不通し給ひけり。佐々木道譽・仁木頼章・同舍弟義長・細川頼春・赤松貞範・土岐頼康、皆面々國々に歸り下る。桃井・石塔二人、高倉直義入道殿へ參りて、仁木・細川・土岐・佐々木の輩、國々へ下りて、謀叛を起し候は、將軍の御定として、勢を催し攻上り、御身の大事を計る爲なるべしと覺ゆ。たゞ夜に紛れて、北國に御下り候はゞ、越前に足利高經、加賀に富樫、能登に吉見、信濃に諏方の祝部、此等は無二の御味方なり。甲斐と越中とは、某が分國なれば、御心安かるべし。北國より御教書を、東國西海に遣されなば、誰か應じ申さぬものゝ候べきと申されければ、禪門少しの思案にも及び給はず、御前

尊氏直義不和

に有合ひたる人々計を召具して、夜半計に都を落ち給ふ。京中にありける輩、跡を追うて落行き、越前敦賀に着き給へば、六萬餘騎になり給へり。爰に畠山阿波將監國清、頻に御兄弟御和睦ましく〵、天下の御政務を、義詮に讓り給へかしと申しけるを、惠源禪門許容なかりしかば、國清大に怨みて、己が勢七百餘騎を引分けて、將軍方になりたり。此外所縁に附きて、軍兵共落失せければ、桃井、これにては越前の御座も叶ひ難し。高倉禪門と打連れて、北陸道より、鎌倉を指して下り給ふ。鎌倉の執事上杉民部大輔憲顯が方へ、竊に御書を遣して語らはれしかば、憲顯は先年、上杉伊豆守重能が事に付きて、師直に怨を含み、其本を尊氏にかけ奉りしにや。父子共に、仔細なく領承したり。將軍之を聞き給ひ、惠源禪門誅伐の宣旨を申給はり、關東に攻下り給ふ。東國は皆直義入道に屬し、遠江より東には、將軍へ參るものは、はかぐ〵しき是なし。仁木・畠山・今川・武田・二階堂の人々、僅に其勢三千餘騎に過ぎざりけり。此勢にては鎌倉へ寄せなんことは叶ひ難し。先づ要害の所に陣を取りて、宇都宮が馳せ參るを待つべしとて、駿河國薩埵山に陣をぞ取り給ひける。

尊氏直義對陣

直義入道、さらば薩埵山に向はんとて、上杉憲顯は、東國勢廿萬騎を率して、大手の大將として、由井・蒲原へ押出でたり。搦手は、石塔入道・同子息・左馬頭賴房十萬餘騎にて、空總へ廻りて押寄する。高倉禪門は總大將なれば、宗徒の勢十萬餘騎を率して、伊豆の府に控へらる。彼の薩埵山と申すは、三方は嶮岨にて谷深く、一方は海にて岸高く峙てり。敵たとひ幾萬騎ありとも、登り難しとは見え乍ら、寄手は五十萬騎、防ぐ兵は三千餘騎なり。而も馬は長途に疲れ、粮は運送乏しければ、餘りに侮りて、あながち急には攻め寄せず、唯取卷きたる計にて、矢軍をだにせざりけり。藥師寺次郎左衞門公義入道元可が勸に依つて、宇都宮旣に將軍に屬し、其の勢千五百餘騎、薩埵山の後詰として馳せ向ふ。桃井直常七千餘騎、長尾左衞門三千餘騎、後より追來つて打つて蒐る。兩陣入亂れて戰ふに、那和庄のさしも廣き野原を、東西に開き、南北に分れて攻め合ひしが、桃井・長尾打負けて、越後の國府に落行きたり。藥師寺・宇都宮に馳せ附く勢三萬餘騎になりて、後詰に參ると聞えしかば、寄手五十萬騎、暫くも怺へず、我先にと落ちて行く。仁木越後守義長勝に乘つ

て、三百餘騎にて逃ぐるを追立て、伊豆の府に押懸る。高倉禪門は一支も支へずして、北條へ落ちて行き、臆病神に襲はれて、猶北條にも怺へずして、伊豆の御山深く分入り給ひしかば、將軍より御書を遣され、畠山國淸・仁木賴章を御使に參らせらる。禪門は、今の命の捨て難さに、後の恥を忘れて、降人になりて、將軍の陣に參り給ふ。三浦・石塔・葦名・小俣、其外諸國の軍勢二萬餘騎降人となり、上杉民部は、信濃國を指して落行きたり。鎌倉管領基氏は、將軍御兄弟の御仲不和なることを、あながちに歎き思召し、御合體の御扱を、さま〴〵申させ給ひしかども、惠源禪門更に許容これなし。左馬頭殿仰せけるは、直義入道の御味方をいたさば、父に向うて弓を彎くの恐あり。又將軍の仰に依りて、禪門と某と、父子の契約これある故、之に對して戰せんも流石なりと、御身を揉みて憂へ給ふ。其間に執事上杉憲顯は、禪門に語らはれ、基氏を棄てゝ、駿河に押出でたり。今は御身も危きを蹈んで、鎌倉の御住もなり難く思召し、御船に召されて、安房に漕ぎ渡り、忍びておはしまし、出家遁世をもせばやなど、思ひ廻らされしに、將軍既に勝利を得て、鎌倉に入り給ひ、左馬

頭殿を召しけれども、固く辭退して歸り給はず。仁木・畠山樣々に申して迎へ奉り、再び鎌倉に歸り、將軍に御對面あり、父子の禮義事故なし。

十一　惠源禪門死去

直義入道惠源は、言甲斐なき降人となりて、將軍に連れられ、觀應三年正月七日に、鎌倉に入り給へば、附き從ひ奉る侍一人もなし。牢の如くなる屋形の、荒れて中々久しきに押籠められ、番を嚴しく居ゑられ、事に觸れたる悲みのみ、耳に充ち胸に塞りて、御心をぞ傷ましめらる。此頃は御心地病ひ給ふにも、藥を參らする人もなし。顏色黃に變じて、大に熱氣おはします。時々起り立つと見えしには、息荒く喘ぎ、手足顫ひ慄き、物狂はしく吟ひ伏して、恐しき事など聲高に宣ふ。四五日の程は斯く苦しみ給ふが、次第に衰へて、湯水をだに參らず、同二月廿六日の暮方に、終に果敢なくなり給ひけり。惜むべし行年四十五、未だ半白の頃にも及ばず、忽ちに無常に歸して、野原一堆の塚の主となり給ふ。世には黃疸といふ病に冒され給ふ

と披露ありけれども、實には鴆毒の故なりとぞ聞えし。此禪門は、隨分に政道正しく、仁義を嗜まれし人なれども、斯樣に淺ましく成果て給ふは、大塔の宮を殺し、將軍の宮を毒害し給ふ其報なるべし。災殃に本なし、惡事を種とすといへり。恣に振舞ひて、人を殪し人を殺すものは、天理の誠必らず報あり。若し又福力強きものは、惡行屢〻犯せども、應報來ること遲きに似たり。愚なる人これを見ては、報なしと思へり。其運命の傾くに至りては、遂に譴責を蒙らずといふ事なし。勿レ謂二天道無レ報、只來之遲與レ速といへるは此義なり。

十二　義詮公與二南方一御合體附新田擧二義兵一

足利宰相中將義詮朝臣は、將軍鎌倉に下り給ひし時、京都守護の爲め殘し置かれけるが、關東の戰の左右も未だ聞えず、京都は無勢にして、南方の敵軍、間を窺ふ時節なりければ、一旦謀の爲に、吉野殿と御和睦のことを奏聞せらる。吉野殿にも、是れ先づ謀の一途なりとて、御合體のこと、仔細あらじとぞ仰出されける。之に依つて

新田一族起つ

洛中は、暫く靜なるに似たれども、南方は、御合體僞にておはしける故に、南帝卽ち賀名生(かなふ)の山中を御出ありて、津の國住吉にまし〳〵、由良新左衞門入道信阿を以て、東國の新田が一族に宣旨を下され、足利追伐の趣を催し給ふ故、新田左中將義貞の次男左兵衞佐義興・同三男少將義宗・脇屋右衞門佐の嫡男式部大輔義治三人ながら、武藏・上野・越後・信濃の間に、在所を定めず身を隱し、時を待ちて居られける所に、此宣旨を蒙り、さらば軈て軍勢を催せとて、東八個國に觸れ廻らすに、同心の一族八百餘人に及べり。中にも石堂四郎義房入道は、高倉禪門に屬して、年來所領俸祿不足なく、隨分御恩に飽きたりしが、禪門と將軍と御仲不和の事をも、此石堂取分け勸め申したり。今度薩埵山の合戰に打負けて、言甲斐なき命ばかりを助けられ、鎌倉にありけるが、其上は仁木・畠山など、等しき威勢なりしを、今は降人といはれ、僅に懸命の地に安堵するを、過分の御恩とせられ、萬(よろづ)古に變りぬる上に、惠源禪門は逝去し給ふ。始より將軍方の諸人は、石堂を見ては、指をさして笑ひ侮(あなづ)りしかば、あはれ謀叛の人もあれかし。與力せんと思ふ所に、新田の內狀を見て、渡りに

船、流れに棹と喜びて、仔細なく同心しけり。三浦助は建武の始め、時行が起りし時、伯父大多和入道に具せられ、既に軍敗北せしかば、生捕られて、京都にして伯父と同時に斬らるべかりけるを、故新田四郎、隱し置きて命を助く。新田・足利不和になりたる頃、本領に仕居ゑられ、暫く義貞に方人せしかども、義貞果て給ひて、八ヶ國には、新田の味方といふものなかりしかば、心ならず尊氏に降參し、あはれ如何なる事もあれかし。新田に與して本意を達せんと思ひければ、此度も催に同じて、新田に與しけり。葦名・二階堂・小俣の輩は、代々相模守に恩をうけし人々なりけるを、鎌倉の執事長崎入道に怨を含み、故新田義貞に屬して、鎌倉に亂入せし人々なり。然れども公家より、さまでの恩賞なしとて、建武の亂に、一番に尊氏に屬せしに依つて、數個所の新恩を給はり、家富み門葉榮えし輩、新田殿に與したり。是れ更に古の好を思ふにはあらず、今度高倉禪門に屬せし人々をば、薩埵山の後詰せし輩は、爪彈をして笑ひけるを、無念の事に思ひて、此度新田殿に同心して、本意を達せんと思ふなるべし。石堂・三浦、竊に扇が谷に寄合ひて、軍の手立を計り、相圖

を定めて待ちたりけり。さる程に新田武藏守義宗・同左兵衞佐義治、手勢八百餘騎にて、西上野に打出でらる。之を聞きて、國々より馳せ參りける一族、他門の人々、江田・大館・宇都宮・丹・小玉黨を始めとして、都合其勢十萬餘騎、所々に火をかけて、武藏國へ打越える。武藏・上野より早馬を打つて、鎌倉へ急を告ぐること、櫛の齒を引くが如し。敵の勢はいか程あると問へば、凡そ廿萬騎も候べしと申す。仁木・細川の人々之を聞きて、扨は由々しき大事なり。鎌倉中の御勢は、之に十分一もあるまじく覺ゆ。國々の軍兵は、たとひ集まるとも、今の用には立ち難し。先づ安房・上總の方へ御開きありて、御勢を附けられてこそ、御合戰は候はめとぞ申しける。今川五郎入道申されけるは、今夜の中にも、御味方へ集まる勢多く候べし。此御勢ばかりにて戰はんに、不足あるべからず。新田方は皆若き大將達にて、戰の手立、思ふにはかばかしかるべからず。兵は皆、諸國取集めの勢なれば、是又恐るゝに足らぬ所なり。日を重ぬれば、强るものにて候ぞ。延引せば大事とこそ存ずれ。房州の御下向は、思ひも寄らぬ御事なりと申す。畠山國淸申されけるは、今川殿の仰、

甘心いたす所に候。將軍若し安房・上總へ御開きあらんには、武藏・相模・上總・上野・下野・伊豆の間には、味方へ志あるもの多く候と雖、敵に隔てられて、心ならず寄手に屬せん。新田鎌倉に入變りて、威を東國に振はゞ、京都は宰相中將殿、南方御合體のこと忽ち破れ、一日も都に足をば留めさせ給ふべきや。小勢を以て大敵を討つ謀は、御座あるべきものなり。たゞ此御勢を以て、將軍御發向候て、武藏國關戶入間川に御陣を居ゑられ候はゞ、大高・田中・宍戶・梶原・和田・長井の者共は、御味方に屬し奉るべきものにて候。御出馬を聞傳へ申さば、たとひ此者共の參らずとも、爭でか軍兵一二萬騎は、馳せ集まり申さゞらん。御思案までもなく、御立ち候へかしと申されたり。將軍は、義者の意見は背かれずとて、近習八千餘騎を、五千餘騎引分けて、基氏に附けて鎌倉に殘し、諸國の大名小名の軍勢を、三千餘騎に差加へ、都合其勢二萬餘騎にて、將軍鎌倉を立出で給ふ。左馬頭基氏は、南遠江守を以て仰入れられけるは、基氏御名代として馳せ向ひ候べし。將軍は先づ鎌倉にお はしまし、諸國の勢を催し給ひ、味方若し難義に候はん時、後陣に御出馬あらんに、

小手差原對軍

敵恐れずといふこと候まじ。これも一端の謀略なるべしと、再三强ひて仰せければ、ども、御許なく、閏二月十六日の早旦に軍立して、武藏國久米川に着き給へば、江戸・川越・土屋・高坂・土肥・曾我・一ノ宮・澁谷・海老名・小早川・那須・東間・島田・鹿島・豐田・白鹽・高山を始めて、都合其勢八萬餘騎、將軍の御陣へ馳せ參ず。此勢を以て同廿日の辰の刻に、武藏野の小手差原へ打臨み給ふ。新田方には義宗・義興・義治三方に別れて控へたり。兩陣閧の聲を揚ぐれば、四王忉利の空に聞え、下は水輪金軸の間に響くらんと夥し。聲既に三度に及び、互に進みて相懸りに戰ふ。一所にさつと入亂れ、火花を散らし馳せ違ひ、太刀の鍔音、汗馬の足並、天に渡り地に滿ちて、或は引組んで、首を取るもあり取らるゝもあり、或は切つて落すもあり、落さるゝもあり。血は涿漉の野を浸して、紅葉に注ぐ雨の如く、屍は鳥江の草に横つて、尺寸の地も餘さず。追靡け駈立てられ、將軍の御陣崩れ立ちて、引色になりければ、新田武藏守義宗、旗より先に進みて、天下の爲には朝敵なり。我等が爲には親の敵なり。只今尊氏が首を取つて、軍門に曝さずば、いつの時をか期すべきというて、

義興義治敗る

追懸け給ふ。小手差原より石濱まで、坂東道四十六里を、片時が間に追付きたり。川向ひに渡して、落行く軍兵三萬餘騎、引返して防ぎければ、義宗僅に五百餘騎、後より續く味方はなし。安からぬものかなと、齒嚙をして、本陣へ引返さる。味方の諸軍は、逃ぐる敵を追うて、十方に散り行きたり。日既に暮れければ、此の勢にては叶ふべからず。越後・信濃の勢を待ち揃へ、重ねて合戰をすべきなりとて、笛吹の峠を指してぞ落ちられける。新田義興・脇屋義治は、軍勢共と東西に隔り、僅に三百餘騎になりて、仁木左京大夫頼章・同舍弟越後守義長が三千餘騎に出合ひて、さんざんに戰ひ、氣疲れ力撓(たわ)みて、東を指して落行くこと廿餘町にして。誰々討たれたると數ふるに、三百騎の中百餘騎討取られ、義興も義治も薄手負ひたり。太刀は鍔元を打折り、長刀を取換へて持たれしも、峯は簓の如く切られ、刃は鋸のやうに折れたり。兩大將疵を蒙る上は、軍兵共痛手切疵負はぬものはなし。武藏守義宗は、行方なく見失ひたり。此の勢にては、上野へも歸り得難し。落ちて行くべき方もなければ、たゞ鎌倉へ打入りて、足利左馬頭に遭うて、討死すべしとて、鎌倉へこ

そ赴かれけれ。

鎌倉公方九代記卷二

基氏軍記下

一 鎌倉合戰

同閏二月廿三日、新田義興・脇屋義治は、二百餘騎を率して鎌倉に赴き、夜半ばかりに、關戸の邊を打過ぐる所に、軍兵五六千騎もあらんと覺えて、西を指して下る。これは定めて搦手へ廻る勢なるべし。扨は爰にして屍を曝すべきと思ひ定め、馬を一所に駈寄せ、これは誰殿の御勢にて候ぞと問はすれば、石堂入道・三浦介、唯今新田殿へ參り候なりとぞ答へける。義興も義治も、こはいかにと手を打ちて喜び給ふ。此勢と打連れて神奈川に着きて、鎌倉の樣を問ひ給へば、將軍の御子息左馬頭殿は、三浦に御敵ありとて、南遠江守其外安房・上總・下總の勢を催して向はれし

義興義治鎌倉を襲ふ

に、如何なる者の申出しけん、僞にて侍りければ、今日鎌倉へ歸り給ひしと申す。然らば唯今向はんに、合戰は時刻を移すべからず。さらば軍の用意をせよとて、面面兵粮つかひ、馬に糠飼はせて、三千餘騎を二手に分けて、源氏山鶴が岡へ旗差少少遣し、大御堂の上より、眞下(まつくだ)りに押寄せたり。彼の源氏山と申すは、古(いにしへ)八幡太郎義家、東國征伐の爲に下り給ひ、先づ鎌倉に打入りて、此山に旗を立て、遂に强敵阿部貞任・宗任を亡し給へば、或は旗立山とも名づくとなり。新田殿は、時に取つての吉例なりとて、御陣をめされけり。案の如く鎌倉には、唯今三浦より歸り、未だ鎧の上帶をも解かず、甲を脫がぬ程なれば、敵寄せたりと聞きて、小袋坂・粧坂に集りて固めたれども、分内廣き所に、防ぐ兵多からねば、寄手ははや小路々々に亂入して、由井の濱・塔の辻まで攻寄せたり。三浦・葦名・二階堂の兵共は、鎌倉の案內は知りぬ。人馬は疲れず。此處の谷、彼處の小路より駈入り駈破り、さん〳〵に戰うたり。小俣小次郎は今日の軍奉行にて、手勢七十餘騎を勝(すぐ)りて、敵の叢立(むらだ)ちて控へたる中へ、切つて懸る。辰の刻より午の下刻に及ぶまで、兩陣互に息をも繼がず

攻め戰ふ。爰に鎌倉勢の中、佐久間三郎左衞門といふもの、若黨三人を具して、若宮小路に駈合ひ、三浦が勢と戰ひ、さん〴〵に駈立てられて、由井の濱、東の在家の蔭に休み居たりつる所に、誰々とは知らず、武者四騎立合ひて、火花を散らして戰ふ。一人は矢庭に切落され、一人は手負ひて引退く。今一人は暫し切結びしが、眞額を二つに切割られたり。三人ながら討果して、馬に息つがせ、北に控へたる新田の陣へ靜に引きたり。佐久間之を見て、あはれ器量の兵かな。いかさまにも名ある敵と覺えたり。何處迄か遁すまじとて、追懸けたり。これは新田義興にてぞおはしける。味方に懸離れ、大勢の中に戰ひ合うて、小手の手蓋を切流さるゝ。太刀にて手綱の周を切られ、弓手の方、手綱、土につかりて、馬の足に踏まれけるを、太刀をば左の脇に狹み、鐙のはなに落下り、左右の手綱を取合せて結ばれけるを、佐久間追付きて、甲の端と揚卷附とを、三打四打健に切付け、馬の諸膝薙がんと、前懸りになつて、太刀を振上げたり。義興鐙に力を入れて、蹴立てたりければ、馬は驚きて、二三間向ふに飛立ちしかば、佐久間續いて後より拜打に丁と打つ。これにも騒が

ず、靜に手綱を結びて、鞍壺に直り、後を顧みず、引退き給へば、佐久間、適れ大剛の兵かなと、高聲に感じて、若宮の合戰に馳せ向ふ。塔の辻には、脇屋義治・小俣・三浦、一つになりて戰ふ。敵、魚鱗になつて懸れば、寄手、鶴翼に備へて開き、雁行に連り、虎韜に集り、駈け通り靡き廻り、塔の辻は破れけり。南遠江守防ぐべき力なく、左馬頭殿に參りて、今は此戰、利あるべしとも見えず候。一先づ落ちさせ給ひて、重ねて御本意を達せらるべきなりと、申されたりければ、基氏卽ち鎌倉を落ちて、將軍のおはします石濱へ御渡りあり。新田は思の外の軍に勝ちて、鎌倉に入變り、暫は東國の成敗を司り、兩大將と仰がれて、威勢を八州に振はれけり。

新田勢鎌倉に入る

二　笛吹峠軍附河村城殁落

新田武藏守義宗は、笛吹の峠に陣を取りて、後醍醐天皇第二の皇子上野親王を大將として、都合其勢二萬餘騎、備を堅固にして籠められたり。將軍尊氏は石濱に在して、人數旣に馳付きて、八萬餘騎に及べり。義興・義治公、七千餘騎にて鎌倉にあり。

新田勢敗軍

何方へ向ふべしと評定ありしが、先づ大敵を打退けなば、鎌倉の小勢は、戰はずとも落散るべしと、衆議一途に極り、同廿八日將軍笛吹峠に押寄せ、やがて軍始まり、戰ひ暮らし、夜に入りければ、城中の兵、今日の軍に利を失ひ、若干討たれしに氣を屈して、思ひ〳〵に落失せければ、上杉民部大輔、信濃を指して落ちにけり。新田武藏守も力及ばず、其曉、越後國に落下られしかば、唯今まで新田・上杉に屬せし武藏・上野の兵共、上總・下總の諸侍、我も〳〵と、皆將軍へ馳せ參りける程に、其勢今は百倍して、八十萬騎になりにけり。新田義興・脇屋義治は、此由を聞き給ひ、此上は力なし。尊氏大勢にて押寄せば、爰にて討死すべし。同意なき人々は、はや疾く落ち給へと宣へば、六千餘騎の兵共、本より新田一家厚恩に預りし者なれば、誰れ落つべしといふ人はなし。斯る大軍を引受け、命を自刃の下に棄てゝ、骨を青苔の上に曝さんと、思切つたる有樣なり。相州の住人松田・河村の人々、進み出でて申すやうは、我等が所領の中、相模川の川上國府津山の奧こそ、屈竟の要害にて候。唯それへ先づ引籠らせ給ひて、京都の御左右をも聞召し、越後・信濃の諸將達にも牒じ合せら

れ、天下の機變を得て、重ねて運命を御開き候へと申しければ、義興・義治諸共に、三月四日鎌倉を出で、石堂・小俣・葦名・三浦・松田・河村・酒匂以下六千餘騎を率して、國府津山の奥へぞ籠られける。將軍は、四月八日に鎌倉に入り給ひ、河村の城へ人數を遣し、攻められけれども、山嶮しくして苔滑に、人馬の足の立つべき所もなし。分内狹く要害嚴しければ、大勢が附上りて攻むべきやうもなく、たゞ遠矢射させて、徒に城を守りて、暮らすより外の事なし。畠山國淸五千餘騎を加へられしかども、城の落つべき手立もあらざれば、兵粮詰にせよとて、陣所々々を固めて居たりけり。此城中に兵粮だにあらば、幾年攻むるとも、仔細あるまじかりけるを、僅に一年計の用米を籠め置きたれば、今は旣に兵粮も盡きたり。時を待つべき謀も叶ふべからずとて、觀應三年三月五日の夜半に、義興・義治城を落ちて越後に下り、義宗と一所になり、越後半國を領知して、時運を窺うてぞおはしける。

義興義治越後に退く

三　尊氏卿御逝去

河村の城落ちて、將軍卽ち上洛し給ひければ、京都又大勢になり、諸國宮方の人々、足利右衞門佐直冬を始めとして、京都に攻め入りたりけるも、一戰に利を失うて、皆分國に歸りしかば、京都は物靜になりたりけり。然るに將軍尊氏卿、御背に癰瘡出で、文和二年四月廿九日に逝去し給ふ。御年五十四歲なり。中一日ありて、衣笠山の麓、等持院に葬し奉る。等持院仙山如義大居士とぞ號しける。武將に備はりて、廿五年天下を治めて、六十餘國棟梁忽ち挫け、柱礎速に碎けて、身は化して、暮天數片の煙と上り、骨は止まつて、卵塔一掬の塵となりにけり。

四　新田義興自害

宰相中將義詮、飛脚を以て、將軍御逝去の由鎌倉へ告げられたり。左馬頭基氏は申すに及ばず、御恩に預りし人々、愁歎の色深く、御忌に籠り給ひ、佛殿を壯嚴し、五山の僧を請じて、形の如く作善をぞ營まれける。悲みの淚掻暮れて、これさへ止まらぬ光陰五旬、程なく過ぎけれども、思ひは愈〻勝りにけり。尊氏逝去のつひえに

乘りて、諸國の宮方又蜂起して、京都・鎌倉へ攻上らんと企あり。新田左兵衞佐義興・同義宗・脇屋義治は、越後國に城郭を構へ、半國許を領知して居られしが、武藏・上野の者共の中より、二心なき由の連署の起請を書きて、御兩三人の中に一人、東國に御下り候はゞ、大將に取立て、義兵を揚げ候はんとぞ申したりける。義宗・義治は思慮深き人なりければ、いや〳〵此頃の人の心は、左右なく賴み難しとて許容せられず。義興は大逸りにして、忠功、人に先立たんことを、いつも心に懸けて思はれければ、遠慮を廻らさるゝ迄もなく、僅に郎從百餘人を召連れ、竊に武藏國へぞ越えられける

義興の強勇

古、新田義貞に恩顧を蒙りし族、今、畠山道誓に遺恨を含む輩、竊に音信を通じ、頻に媚を締ひ、催促に從ふべき由を申すもの多かりけり。義興今は勢漸く國中に滿ちて、世に隱れなかりしかば、鎌倉殿寧からず思召して、畠山道誓に相談を遂げられ、其在所を聞出して、大勢を差遣すに、國內通計して跡を晦し、道に待かけ、夜討にせんとすれども、義興更に事ともせず、蹴散らかしては打通り、駈破りては圍を出で、千變萬化、凡て人間の業にあらずと申す。今はすべきやうなしと

て、手に餘りてぞ覺えける。基氏仰せけるは、唯今大軍を催して、義興を討たんとせば、又東國の騷動、諸人の難義たるべし。打棄てゝ置かば、漸く蔓りて、國家の惱となりなん。謀を以て味方を損せず、新田を失ふべき手立あるまじきことかと宣ふ。畠山入道暫く思案して、竹澤右京亮を招きて、御邊は先年、武藏野の軍に義興に屬して、大功を顯せり。義興も定めて、其舊好を忘れじと思ふぞ。此人を僞り討たんずるは、御邊に過ぎたる人あるべからず。如何なる謀をも廻らし、義興を討つて、左馬頭殿の見參に入れ給へ。恩賞は請によるべしとぞ語らはれける。竹澤は元來欲心深く、人の嘲をも顧みず、古の好をも思はず、恥を忘れて、情のなきものなりければ、一議にも及ばず、さらば御制法を背き、御勘氣を蒙り、左馬頭殿の御內を出でたる體にて、本國へ罷下り、義興に取寄りて、謀り申候べしとて、次の日より傾城博奕の遊に晝夜を別たず。畠山大に僞り怒つて、竹澤の所領を沒收して、其身を追出しけり。竹澤は、あなことゞゝし。左馬頭殿に使はれぬ侍は、身すぎはなきかと廣言吐き散らし、己が所領に歸りにけり。數日經て、竊に新田義興殿へ仔細を

述べて、降參申しけれども、暫くは許容なく、對面にも及び給はずして打過ぎたり。竹澤京都に人を上せ、宮家の御所より、少將殿とて、十六七歳の女房の、容貌類なく、心ざま優にやさしく、情の色もいと深きを申下し、己が養君にし奉り、竊に兵衞佐殿に參らせたり。義興元より色を好む心深かりしかば、類なく思ひ通はして、一夜を隔つる枕をだに、千歳を經る心地し、其方樣の草のゆかり迄も、露ばかりも疎ならぬ思に打解けたり。彼の大公が兵書に、好レ利者與二財珍一迷レ之、好レ色者與二美女一惑レ之と、敵を計る道を敎へけるを、知らざりけるこそ愚なれ。兵衞佐殿は、竹澤に打解けて見參し給ふ。竹澤大に喜び、鞍置きたる馬三疋、唯今威し立てたる鎧三領、御召換の爲とて引參らせ、其外兵共、御身近き輩にも、程につけて馬・物具・衣裳・太刀・刀に至る迄、漏らさず引きたりける。兵衞佐殿も、他に異なる思をなし、朋輩共も、これに過ぎたる御用人はあるべからずと、喜び合ひたり。義興も、今は何事に付けても、心を置き給はず、謀叛の計略、與力の人數、一事も殘さず、心底を盡して知らされけるこそ淺ましけれ。九月十三夜の月見に事寄せ、酒宴の砌、討ち奉らんと企

てしに、少將の御局夢見惡しきとて、御文遣して止めらる。竹澤支度相違して、次の日御局を刺殺して、堀に沈めたり。竹澤一人しては叶はじと、竊に畠山にいひ遣し、一族江戸遠江守・同甥下野守を、左馬頭殿御勘當ありとて、所領を沒收して追出す。江戸伴り怒つて、稻毛の庄に要害を構へ、兵五百餘騎を集めて謀叛を企て、竹澤執し申して、義興に對面す。江戸申すやう、鎌倉へ忍びて御越し候はゞ、常家の御一族三千計も候上は、俄に起り立ちて、左馬頭殿を討ち奉らんは、容易かるべし。これより東國は御手に屬し、押して天下を覆さんは、案の內にて候はんとて、武藏・上野の內、新田に志ある輩に相觸れ、十月十日の曉、義興忍びて鎌倉へ急がせ給ふ。江戸・竹澤豫て用意の事なれば、矢口の渡とて、河の面四町に餘り、浪逆卷きて、落つる水、矢を突くが如し。東國第一の渡なり。此川の渡船に、底に二所鑿をさし、義興と郎從十三人を、一艘に乘せて漕出し、河中にて鑿を拔き、櫓を流して、渡守は水に飛び入りて逃げ失せたり。江戸が軍兵五百餘騎、向ふの川端に駈け出づる。竹澤が兵百五十騎、此方の岸に立並び、兩方鬨の聲を揚げて、あさましや方便に落さ

れて、唯今犬死する人の有樣見よやとて、箙を叩きて笑ひけり。此人々は、安からぬことかな。日本一の不道人に誑られ、運命爰に盡きたり。汝が爲に終に怨を報ぜんものをとて、思ひ〳〵に自害をぞせられける。水は船に湧き入りて、人は底に沈みける、心の中こそ痛はしけれ。土肥三郎左衞門・南瀨口六郞・市川五郞三人は、皆底を潛り、向ふの岸に駈け上り、敵五人切伏せ、數多のものに手負はせて討死す。江戶・竹澤、水練を入れて、人々の死骸を搜し求め、首を取りて鎌倉殿に遣し、新田內通の侍百八十人を誅せしかば、今は東國の內に、新田贔屓のものとては一人もなく、靜謐の世となりにけり。

義興自盡

五　畠山道誓上洛附同關東下向、謀叛、滅亡

左馬頭基氏は、新田の殘黨、上野に起らんとする聞ありければ、此等を退治せん爲に、鎌倉を出で、其勢三百〔三萬カ〕六千餘騎、武藏國入間川を前に當て、陣を取つておはしますこと、數年に及べり。新田方に志あるものをば、御自身押寄せて誅伐し給ふ。

義詮の放縱

此故に東八ヶ國には、新田を引く人多しと雖、頭を差出すものなし。東國は既に無爲の化に歸しけれども、京都は更に靜ならず。新將軍義詮は、たゞ好色を事とし、大酒を專にして、歌道遊興に心を傾け、政道の事は、外になし給ひければ、世の人疎み奉りけり。又其中に讒者ありて、鎌倉殿の仰なりとて、近習外樣に沙汰しけるは、基氏常々宣ふは、我は庶子にぞ生れたれども、武勇政道は、少しも兄に劣るまじきものをと、御廣言あり。いかさまにも內には、逆心の御企あるべしと囁きければ、將軍義詮聞召して、我力量の少し勝れたるに慢じて、左馬頭左樣には申すらめと宣ひける程に、御兄弟の御仲も快からず。畠山入道は、細川賴之の方へ、南方發向の事を申上せけり。義詮宣ひけるは、都近き敵を拂はんに、左馬頭が力を賴む迄もなしと仰せけるを、賴之諫め申しけり。鎌倉の執事畠山入道は、左馬頭殿に申すやう、御兄弟の御仲快からず。斯くおはしまさば、故將軍殿と惠源禪門との二の舞なるべし。御名代として上洛仕り、南方の敵を攻め亡し、將軍の御疑をも、散じ奉らばやと申す。基氏は、此儀尤然るべしとて、卽ち諸將に催促して、都合其勢二十萬騎

畠山國清上洛

を、畠山入道道誓に差添へて、十月九日に入間川を立ちて、上洛せられたり。京都にありける大名達は、東國の大勢上洛せよかし。南方の敵を追落し、天下靜謐をいたさんと思ひしに、畠山上洛してより、權威自然に強く、京都にして威勢ある人々は、影もなくなりて、天下の政事、大小共に、新將軍と畠山入道にぞ評定し給ひける。之に依つて今迄權威に誇りし仁木の一類、嫉む心ぞ出來ける。仁木を嫉みし土岐・佐々木・細川の人々は、此畠山入道を、持扱うてぞ覺えける。道誓は、又生得に奢の高き人にて、我は是れ左馬頭殿の名代として、南方發向の大將なりと、思へる心色に顯はれて、無禮なる事多かりければ、諸將達思ふどち寄合ひて、畠山を誹る人あれば、入道聞付けて、過怠をかけんとせしかば、親しきも忽に疎み、怨を抱くもの多し。南方の敵和田・楠を始めとして、宮方大に起り出でけるを、將軍馳せ向ひ、畠山を搦手の大將として、押寄せて攻め給ふに、宮方防ぎ倦みて引入りければ、諸將歸洛して、此間の辛苦を慰みけるに、仁木右京大夫義長が、天下の執權として、無道不義の振舞を惡む人々、細川相模守清氏・土岐大膳大夫入道善忠・佐々木佐渡判官崇

畠山道誓鎌倉に歸る

永以下、畠山が宿所に寄合ひ、仁木を討つべき企あり。義長聞きて、將軍に訴へ申すに、これは定めて人の讒なるべしと仰ありしを、義長深く用心して、將軍の御前に入れ立てず守りけるを、佐々木道譽竊に盜み出して、西山に落ちさせ給へば、義長が軍兵皆落失せて、今は賴む所なしとて、伊勢國に逃げ下り、長野の城に立籠り、宮方にぞなりにける。世の人皆、今度畠山の上洛は、南方退治に事を寄せて、仁木を亡さん爲なり。之に依つて和田・楠を始めて、宮方又蜂起して、勢盛なり。押寄せて攻むれども、物ともせず。東國西國の武士共、粮に詰り、馬・物具を賣代なして、或はぬけ〳〵に本國に忍びて歸る。是れ皆畠山入道が所行なりと、惡まぬものはなし。京童共、歌に詠じ詩に作りて言囃しければ、畠山、身一人に懸ると思ひ煩らひ、京にも堪り得ず、將軍に暇をも申さず、二萬餘騎にて、關東にぞ下りける。參河國は、仁木が多年の領知なれば、守護代西郷彈正左衞門、矢矧に出張して、道を塞ぎければ、山陰道を廻りて、鎌倉に下着す。基氏は京都の有樣、先立ちて聞き給ひ、畠山に宣ふやう、汝、大軍を率して上洛せしことは、將軍より基氏を疑ひ給ふ故に、其憤

を止めんが爲なり。何ぞ仁木と不和になつて、私の宿意を達せんと思ふや。亂を鎭むる迄こそなからめ。却つて亂を起し、我名代と號して、不義の企をいたす。是れ何の面目あつてか、基氏今天下の人に見えんやと、御氣色變りて宣ふ。畠山入道、事もなげなる體にて、仰の旨、不思議にこそ候へ。定めて讒人の申すことにて候はん。仁木義長と不和になりたること、其の仕業にあらず。義長權に矜り、奢に依つて上意を用ひず、我意に任せ、政道よこしま無禮不義なること、前代未聞なり。諸大名諸侍之を惡み目を峙て、斯くては天下靜なるべからずと、口々に申すに依つて、將軍の御憤深く、義長退治の上意あり。西國南方未だ鎭まらず、暫し時節を待ち給へと、諫言をこそ申して候へ。和田・楠又蜂起せしむ。某天王寺へ發向して、打退け候所に、京勢は下らず、諸國の軍兵皆國々へ歸りぬ。無勢なれば、續く軍勢を相待ち候所に、義長謀叛を起さんとして、咎を某にかけて、將軍を取籠め奉り、某を始めて、天王寺へ向ひし武士を討たんと、計り候に依つて、某力及ばず、一矢射て、腹を切らんと存ずる所に、將軍卽ち義長を棄て給ひ、御所を忍び出でて、西山に御陣

を居ゑられ、仁木追討の由仰出され候ものを、某の企故と御耳に入れ候こそ、難義のことに候と申せば、左馬頭殿は、さればと計り仰せられて、御座を立ち給ふ。いと無興にぞ見えたる。畠山入道は、猶此にも懲りずして、今度京都より忍びて下りし大名諸侍の所領、懸命の地を歿收して、人民高卑の差別なく、私の振舞甚し。近國の武士共之を怨みて、訴、日毎に絶えず。初の程は畠山耳へも聞入れず、奉行頭人請取りて披露するものあれば、大に怒つて追籠め、當座にはなをつかせければ、之に恐れて、訴訟のこと取次ぐ人もなし。されば懸命の領知を歿收せらるゝとも、訴訟を經て裁斷に及ぶ上に、非に落ちて、缺所せられんは力なし。畠山入道が私曲に依つて、過なくして咎人となる。是れ何事ぞや。向後畠山を執事として、政道行はれなば、御成敗に從ふまじきなり。此事惡しと思召さば、如何にも仰付けらるべしと、一千餘人、神水を呑み連判して、左馬頭に差上げたり。基氏は下剋上の所行、安からず思召すと雖、又申す旨、理に當れりとて、軈て入道が館に使を立てられ、汝が日頃の逆意、今既に顯はれたり。抑誰人の下知に依つて、諸將諸士懸命の地を歿收

畠山道誓修善寺に攘る

する條不思議なり。剩へ奉行頭人等を追籠め、萬事の沙汰を我意に任せ、上意を伺はず、人の怨少なからず。是れ國家亂逆の基にして、政道の邪魔なり。早く鎌倉を出で、何方へも赴くべし。若し違義に及ばゝ、兵を遣して誅伐すべしと仰越されたり。畠山入道一言の義にも及ばず、父子兄弟一族三百餘人、十一月廿三日に鎌倉を出で、伊豆の修善寺に立籠る。左馬頭殿聞召して、新田四郎が妾の腹に生れし、藤王丸とかや、世良田の城を攻落せし時、十四歳にて生捕られ、基氏の御前に參る。心ざま臆せず、餘りに容貌美しければ、助け置きて召使ひ、元服せさせて、新田四郎義一と名乘らせらる。武勇にして才智あり。之を大將として東八ヶ國の勢廿萬騎を遣して、基氏は箱根の山に出陣ありて、新手を入變へて攻めらるゝに、城の要害堅固なれば、中々落つべき樣もなし。竊に謀を以て豐田因幡守・武藏川越次郎二人を使として、仰越されけるは、力を以て攻め干さんは、いと易かるべしと雖、譜代當家の下臣、舊好恩顧の小恩、何ぞ不便に思はざらん。汝東國の管領として、權威既に萬人の上に在り、一類皆榮華に誇りし。是れ重恩を戴くに非ずや。然るを政事に

非あることを戒るは、治國の法、古今の式なり。汝今、道を重んずるの心怠り、奢を極むるに依つて、諸民の憂を顧みず、正に訴を負うて、國家騒亂に及ばんとす。一往之を戒る所に、却て主に向ひて楯を突き弓を彎き、諸人を惱す條、是れ汝が奢の故に非ずや。所詮子孫の爲を存じ、忠義の實を思はゞ、速に先非を悔えて首を延べ、陣頭に降參すべし。溫和の仁政を以て、本領を返し與へんと、宣ひ遣されしに、城中今は兵粮乏しく、落つべき方もなかりければ、たゞ討死と思ひける所へ、此使を給はりしかば、畠山が一族、喜ぶこと限りなし。畠山道誓は首を延べて禪僧になり、伊豆の府に出でらる。舍弟尾張守義深は、左馬頭殿の箱根の御陣へぞ參られける。此程情なく當りし朋輩も、いつしか言葉を卑くし、禮を厚くして媚び諂らひ、追從をいたしけり。四五日過ぎて、稻生平次竊に道誓に囁きけるは、降參御免のことは、元より出し拔かるゝことに候へば、明日討手を向けらるべきに候。豐島因幡守俄に陣換して、道を取塞ぐ體に見えて候といふ。道誓やがて舍弟式部大輔に目配せして、其夜藤澤の道場まで落着きて、尾張守義深は結城中務大輔に賴みて、鎌倉の

畠山道誓死去

陣中を出で、道誓が許に行き至る。此人は終に御免ありて、越後の守護に補せられ、國の成敗穩に、萬民德に歸せりとかや。道誓は忍びて上洛し、宇知の郡に居て、楠正儀が方へ賴みて、南帝へ降參申すべき由いひけれども、許容なかりしかば、此處彼處にさまよひて、幾程もなく舍弟式部大輔と同じく病み出して、果敢なくなりけるこそ哀れなれ。人間の榮耀は風前の塵といひ、富貴は草頭の露といふは、誠に理(ことはり)なるかな。去々年の春は、廿萬騎の大將として、南方へ發向せしかば、威風高く仰ぎて、靡かぬ草木もなかりしに、今年既に一夫となり、敵陣の境にさまよひて、恥を路徑の巷に蒙り、尸を叢野の苔に埋み、魂獨り亡鄕の鬼となりけるこそ悲しけれ。

六　芳賀禪可與上杉不和 附 合戰

上杉民部大夫憲顯は、故高倉入道惠源に屬して、上野國板鼻の合戰に、宇都宮に打負け、後には薩埵山の軍に、味方の負をして、信濃國に逃げ下り、宮方になつて居たりしが、新田四郎義一を以て緣に屬し、鎌倉殿へ申入れたるは、故將軍と惠源禪門

と、御兄弟の御仲不和の事ありし刻、三條殿に親しき故あるを以て、故將軍の御惡みをうけたりける上、一往新田の人々に與し申して候へ。今は浮世の望も絶えて候へば、出家入道して、世を遁ればやと存候。然らば御許されを蒙り、東國の間を、心安く修行いたさばやと申されたり。基氏も幼少より、此憲顯に抱き育てられ給ひし舊好、棄て難く思はれければ、別義を以て召出され、それより三四年は、遁世の體にて、常に御傍近く參りければ、鎌倉殿、或時新田四郎義一に宣ひけるは、上杉入道は、我幼少の時より、抱き育てけれども、更に好惡の分別もなかりしが、此兩三年、彼が行跡を見るに、仁道篤實にして私なきものなり。學文なんどもいたせしと覺ゆ。國政をも執行ふに、不足あるまじく思ふは如何にと宣へば、義一は、仰の如く故直義禪門に近仕したる人にて候へば、故實をも存ぜられ候らん。若かりし時に、學ありし人ならば、今は殊更物の心をも、能く分別せられ、政道の事も、さこそ不足はあるまじきかと、某若輩の愚意を以て、自分に斯くとは申し難く候と申されける。基氏兎角思案し給ひ、卽ち上杉を還俗させさせ、執事職を許し、越後國の守護

基氏、芳賀禪可を討つ

にぞ補せられける。爰に越後國の住人芳賀兵衞入道禪可は、越後の守護職にてありけるが、降參不忠の上杉に思ひ代へられ、忠賞恩補の國を召離さるゝやうやある。鎌倉殿は御失念のこともありなん。上杉何ぞ案內會釋にも及ばず、懸命の地を奪ひけるこそ遺恨なれとて、人數を催し、上杉が城を取卷きて戰ふに、禪可打負けて利を失ふ。愈〻腹を居ゑ兼ねて、上杉鎌倉へ上るを待ちて、又軍兵を集め、宇都宮にて、道に出向ひ戰はんとて、上野の板鼻に陣を取る。上杉通り得ずして、鎌倉へ告げたりければ、左馬頭殿聞召し、怨あらば退きて訴ふべし。恣に狼藉を企つる條、言語道斷の振舞なり。差置くべきにあらず。基氏向ひて退治すべしとて、近習外樣一萬八千餘騎を卒して、六月十五日に鎌倉を立ちて、武藏國若林野に陣を居ゑられたり。芳賀入道之を聞きて、さらば鎌倉殿と戰はんとて、我身は宇都宮にあり乍ら、嫡子伊賀守高貞・次男駿河守に八百餘騎を差添へて、武藏國に遣しけり。六月十七日の辰の刻に、若林野に着きしかば、谷の底を前に當てゝ、小塚の上に打上り、鎌倉の御陣を見渡せば、先陣は新田四郎義一を大將として、三浦・山內・川越八郎以

下白旗一揆五千餘騎、甲の星を輝かし、陣を張りて控へたり。右の方には安房の里見・阿曾・岩崎・布施因幡守以下の諸大名十三人、軍勢一萬二千餘騎、陣を固くして備へたり。左の方は平一揆三千餘騎、戟矛の勢すさまじく陰森たり。冬枯の林を見るに異らず。大將左馬頭殿は、二引兩の旗一流れ、朝日に映じて飛揚せる其影に、左補右弼巖しく、騎射馳突の兵共、三千餘騎にて控へ給ふ。上より見越せば、數百里に連つて、坂東八ヶ國の勢共、唯今馳せ參ると覺えて、雲霞の如く見えたり。伊賀守兄弟駈け出でて、眞先に進みて、三浦・山内が三千餘騎に駈合ひて、前後左右に切つて廻る。爰には外の道もなく、左右は沼にて、懸引自由ならず。駿河守が軍勢三千餘騎、さんぐ\に射る程に、新田が陣亂れ立ちて、大將の御陣になだれ懸る。駿河守が手より七百餘騎、魚鱗になつて沼田を追越し、勇み懸れば、高貞が軍兵七百餘騎、備を亂さず進みけるに、新田・岩崎は、二百餘騎になりて引退くを見て、遁さじと追懸くる。岩崎・新田終に討たれて、軍勢ちりぐ\に落ちて行く。鎌倉殿大に怒つて、此敵を討取らでは、何の面目かあるべき。進めや者共と下知し給へば、八千

餘騎の軍兵、一手になつて押懸る。高貞が七百餘騎、魚鱗に備へ進んだり。舍弟駿河守は二十餘騎の兵を前後に立てゝ、鎌倉殿を目に懸け、既に間近く寄せたり。基氏元より力量早拔に長じ、武勇撓ぬ猛將なり。三尺八寸の太刀を拔き、駿河守に寄せ合せ、橫手切に馬より下へ切落し給へば、近習の兵進み懸りて、二十餘騎の者共、一人も殘さず討取つたり。さる程に高貞が勢七百餘騎、馬に鞭を合せて、鎌倉勢三千餘騎の眞中へ、魚鱗になつて駈入りけるを、中を開きて押通し、先へ進むを切つて落し、後に懸れば、馬の諸膝薙ぎするゝ、跳ね落させて首を取り、一所に寄れば中を割り、さんぐに戰ふ。高貞が郎從、討たるゝもの三十餘人。手負は數を知らず。叶はじとや思ひけん。殘兵を集めて落ちて行く。基氏眞先に進みて、追懸け給へば、高貞取つて返し、火出づる程戰うて、兩陣さつと引別れたれば、基氏の太刀の刃、鋸のやうになり、御身に立つ所の矢九筋、血の流るゝこと瀧の如し。白絲縅の御鎧、さながら緋縅とぞなりにける。御內の兵に岩松治部大輔直國は、能く慮ありて、軍の變を計る者なりけるが、基氏動もすれば、人より先に進み給へば、敵も今は大將

を見知り奉りて、目蒐けて討たんとすること度々なれば、危きこと多し。鎌倉殿討たれ給はゞ、後悔すとも叶ふべからず。御命に變り奉らんと思ひて、左馬頭殿に申すやう、御鎧の色を、敵の見知りて候とて、我が紺糸の鎧を、鎌倉殿に着せ換へ奉り、基氏の白糸の御鎧を、我れ取つて着換へたれば、敵更に知ることなし。伊賀守高貞は、駿河守を討たれ、我子の八郎は、馬に離れて行方を知らず。此者は未だ幼稚なれば、生捕られてあるらん。今一戰して實否を定めんとて、岡本信濃守富高以下一所に集り、白糸緘の鎧こそ、大將左馬頭殿よ。自餘の葉武者に目を懸くるな。大將と組めやと下知して、兩陣又亂れ合ひて戰ふ。岡本信濃守、白糸の鎧着たる岩松を、左馬頭殿と目に懸けて、引組まんと近付く。岩松が郎等に金井新左衞門、岩松が馬の前に馳せ塞がり、岡本と引組み、馬よりどうと落ち、互に刺違へてぞ、共に命を止めける。岩松は、左馬頭殿の命に代らんと鎧を着換へ、金井は、岩松が命に代りて討死す。主從共に義を守り、節を重んずる忠義の程こそ難有けれ。芳賀八郎は生捕られけれども、幼稚の上、垂髮なりければ、軍散じて後に、人を附けて返されける

とかや。優にやさしとぞ申しける。去程に芳賀が軍兵、昨日は二日路を一夜に打ちしかば、馬皆疲れぬ。今日は又入代る勢もなくて、終日戰ひ暮らしければ、兵、息をつきあへず、所存、今は此迄とや思ひけん。日既に夕陽になりければ、打殘されたる兵僅に三百餘騎を具して、宇都宮へぞ歸りける。左馬頭殿は十萬餘騎にて、先づ小山が館に打越え給ふに、宇都宮急ぎ參じて、禪可は其身逐電いたし候と申すに、鎌倉殿は深き御遠慮やおはしけん、翌日鎌倉へ打歸り、上杉憲顯執事職を許され、關東其風に歸し、萬民此德にあきて、管領鎌倉殿の威勢愈重く、大名諸侍の一揆も止みて、靜に治る國となれり。

七　基氏逝去

關東今は靜に治り、淳和の德を謳ひける所に、今年春の頃より、東國に病はやりて、諸人惱むもの多し。何の病とも知ることなく、五日十日の間、半死半生の體にて吟ひ伏し、或は夢中の如くになりて、鼾睡濛々として日を送る。されば死するは百人

にして五三人なり。日を重ね月を越ゆれば、多くは皆本復せり。鎌倉殿も御いたはりまし〳〵けり。潮熱不食し給ひければ、鎌倉中の名醫共數十人參り集りて、藥治方術を考へ、劑料加減をいたすと雖、更に其驗なし。四月二日のあした、鎌倉の左京進安東九郎を始めとして、廿二人を殿中に召寄せて、侍共に仰せて誅せられ、人々の所領へ、各二人の大將を差遣し、家人妻子、根を絕し葉を枯らして、悉く誅戮せらる。これは新田義宗・義治東國に在りて、動もすれば軍を起すこと數年なり。これに與して敵となり味方となり、手の裏を覆すが如く、剩へ畠山が執事を惡みて、連署を以て訴を企て、我意に任せて公儀を輕しむ。下剋上の徒黨なり。鎌倉殿宣ひけるは、我れ死せば、亂を起さんこと、一年の內を出づべからず。政道の邪魔、偏に此者共にあり。疾く退治すべかりしを、序を待つて延引す。我が命幾程もなく覺ゆれば、後の爲に斯く計らひ侍りとぞ仰せられける。金王丸殿とて、今年六歲になり給ふ御息、又四歲になり給へる姬君、當歲二月に誕生し給ふ若君おはしけり。基氏御心地頻に惱ましく重らせ給ふか、上杉民部大輔父子、近習外樣の諸侍達を、御前

に召されて宣く、今は憂世の賴みなく、事終るを待つのみ。風前の燈に譬ふべし。旁年頃の好も、今暫しの事ぞや。基氏遂に上洛せず、いかにもして新田義宗・義治を誅伐し、東北國を打鎭め、大軍を催して上京し、將軍に代り奉りて、南方西海の强敵を退治し、天下國家の靜謐を成立し、天子の御憤を散じ、將軍の御心をも安め奉らんとこそ思ひしに、皆あらまじごとゝなり、夢に成行く本意なさよ。たゞ南方西海の事のみ心に懸りて覺ゆるなり。基氏死去せば、京都へ申せ。金王丸をば上杉民部入道守立て參らせ、東國の政務は、將軍の仰に任すべし。千葉介・結城大藏次郎・河越治部少輔は、當家に二心なき忠心を運び、私なき輩なれば、若君の事、深く賴みて育て參らせよ。關東の管領職を金王丸に補せらるゝとも、一往は辭退すべし。重ねて御敎書あらば、上杉父子執事として、千葉介直種・小山朝明に評定して、萬端審に沙汰すべし。若し東國に敵起らば、時日を移さず、上杉父子軍勢を催し、金王丸を具して馳せ向ひ、速に誅伐すべし。敵を亡す迄は、鎌倉に歸ること勿れ。我れ東國靜治の爲、入間川に在陣せしこと六ヶ年。其内終に一度も鎌倉に歸らず、

之を以て能く知るべし。將軍の上意御敎書のあらんには、基氏がせし如くに敬ひ愼みて、假にも疎にいたさず、御下知を守り奉り、國人の訴訟あらば、匹夫卑賤のものといふとも、私用を差置きて早く對面し、廉直を專として沙汰あるべし。奉行頭人、贔屓の裁斷これあらば、其職を止め、其科を檢め、罪の輕重に從つて斷るべし。政事正しからざるは、邪欲より起る。天下國家の亂根は、私欲に過ぎたるものなし。故人之を戒しむること、書典皆斯の如し。金王丸既に來年七歲なり。文武の道に入りて成長の後、行跡に邪なきやうに嗜ましむべきなり。武藝は是れ家業なれば、片時も忘るべからず。諸侍に憐みを思ひ、諸將に厚く交り、人の怨を負ふこと勿れ。當歲の若は無爲に人とならば、金王丸が助けとすべしと仰せければ、皆頭を俯れ、淚に咽びて物をも申さず。上杉入道淚と共に御請を申しければ、左馬頭殿、今は思ひ殘す事もなしとて、面々退出の暇を給はりぬ。いと御心苦しげに見えさせ給ふか。其日の未の刻に、御息絶えさせ給ひにけり。惜むべし今年二十八歲。貞治六年四月廿六日、命根忽ち風前の塵と共に枯れて、草頭の露と同じく消え給ふ。鎌

倉中は申すに及ばず、東國諸方の貴賤上下、愁歎の塵に惑ひ、悲涙の波に漂へり。翌日の暮方に葬送の事を營み、北芒新舊の苔路を穿ち、東岱前後の煙と燒上げ奉り、瑞泉寺殿と號し、佛事を執行はれ、御跡を弔ひ奉る。此由京都に告げたりければ、將軍義詮大に驚き給ひ、御連枝とてもたゞ二人、京都東國の鎭撫となつて、二翼兩輪の如くにおはしけるに、一方の柱石碎けぬれば、柳營の力衰へぬと、御歎きは淺からず。卽ち金王殿に、東國の管領たるべし。上杉父子執事職相違あるべからずと、御遺言に從つて御敎書を下さる。此より政務を行はるゝこと、故左馬頭殿の御成敗に違はず、關東の諸將諸侍、萬民共に德風に歸し、靜に治まる國となれり。

鎌倉公方九代記　巻三

氏満軍記

一　自京都賜御教書

足利氏満管領となる

左馬頭氏満は、基氏の嫡男、童名金王丸と號す。康安元年八月十二日に誕生せらる。貞治六年四月に、父基氏に後れ給ひ、御年僅に六歳なれば、何の御思慮もおはしまさず、關東の世の中いかゞあるべきと、諸人危み奉りける所に、京都の將軍義詮、殊に御愁傷あり、又此若君の御事を、深く御愛憐まし〱、御教書をなし下され、故左馬頭の如く、東國の管領として、上杉民部大輔父子、相違なく執事たるべきの旨、上意ありと雖、故左馬頭殿の御遺言に任せ、屢〻辭し申されしかども、將軍更に御許なく、度々に御教書下さる。此上はとて御請申し、若君御幼稚にましませば、内外の

事小大となく、上杉父子御名代として沙汰いたしければ、政道直(すなほ)にして私欲を忘れ、禮義正しくして過奢を省きしかば、關東の諸將諸侍、皆其機に服し、其命に從はずといふことなし。

二　將軍義詮薨去

義詮逝去

京都の將軍義詮公、同九月下旬の頃より、御心地例ならず惱み給ひしかば、和丹兩流の名醫、治療四診の妙術の手を盡して、御藥を奉ると雖、君臣佐使の方、補瀉溫涼の劑、更に其驗なく、定業極まらせ給ひて、同十二月七日、御年三十八にて、忽ち無常に歸し給ひけり。恩顧舊好の輩、悲歎の淚を血に代へて、泣く〳〵葬禮佛事等營み奉りけり。今年は如何なる年なれば、京都鎌倉等しく愁夢の中に迷ひ、柳營の連枝、忽に同樣空しく枯れ給ひぬれば、天下の敵、此弊(つひえ)に乘つて、四海に逆浪を上ぐべきかと、歎きの中に手を握り、危き上に胸を冷しけれども、京都には義詮公の嫡男義滿、當年既に十歲にならせ給ふを、細川武藏守賴之、天下の管領職に選ばれ、執事

上杉憲顯上洛

職を司る。諸事の沙汰に私なく、前代貞永の舊規に、外相内德の正理を明かにす。武族重んじ他門從ふ。京都東國、德風共に仰ぎ、中夏邊鄙、仁澤等しく行はれ、靜治無爲の世とぞなりにける。

三　上杉民部大輔上洛 附 關東平ノ一揆退治

貞治七年に改元ありて、應安と號す。上杉民部大輔憲顯は、若君金王丸の御名代として、正月二十五日に鎌倉を立ちて、二月八日に將軍の亭に參上申す。東國靜謐の旨を言上し、將軍の御家督御元服の用意を賀し申しけるに、執事以下皆關東治世の安穩なることを感ぜらる。かゝる所に鎌倉より飛脚到來す。今月八日武州河越の館に於て平ノ一揆逆心を企つ。上杉藏人大夫、二千五百餘騎を引率して發向す。是に依つて東國靜ならずと告げ來れり。民部大輔卽ち御暇給はりて、鎌倉に下向し、金王丸殿を具し奉り、野州に發向し、反逆の黨類を退治し、又宇都宮に一揆ありけるも、尋いで亡びたり。鎌倉に歸陣して、今度平一揆に與せし輩、科の輕重に依つ

て、或は死罪、流刑或は所帶を歿收して、以後を懲らすの政道を行ひければ、諸將諸侍親み、道德仁義の政理に服膺すと雖、在々所々に新田の殘黨斷絕せず。何とは知らず東國物騷しく、萬人足を爪立て肝を消し、安き心もなかりければ、竊に聞立て見出して、與力同意の輩を搦取り、召縛むるも少なからず。

新田義宗義治兵を擧ぐ

四　新田義宗・義治出張　附　義宗討死

爰に新田義宗・脇屋義治は、近年足利家の威風強く、日本の武士大概將軍に屬して、與力同心の諸侍も少なければ、越後國に退去し、時を窺うておはしけるが、鎌倉の管領基氏死去の弊に乘つて、鎌倉を攻め落して、本意を達せんと計られけるに、武藏・上野に、新田贔屓の方へ竊に廻文して、催促せられしかば、各〻一味したりけり。義宗・義治、卽ち越後と上野の境に旗を揚げられしに、軍勢各〻馳せ付きて、五六百騎に及べり。上杉民部入道此由を聞きて、子息彈正少弼憲將・次男兵部少輔能憲・三男越後守憲春を大將として、其勢五千餘騎、武藏國より大手の口に向はる。千葉・

宇都宮・小山・結城の人々は、三千餘騎にて、下野より搦手に向ひけり。新田方には未だ勢の馳せ來るものもなく、僅の兵を以て、敵の大軍を防ぐとすれども、寄手は新手を入變へて急に攻め、味方は變る兵もなく、夜晝のわかちをいはず防ぎ戰へば、心撓み力疲れて多くは討取られ、殘る者共に、手を負はぬはなかりけり。五十餘日は、兎角して籠り居たりけれども、後詰の援兵もなく、又立籠る人も聞えねば、新田の人々、心は猛く思へども、勢力盡き果てゝ、脇屋義治は出羽の方に落行きて、三崎山の麓に隱れ、義宗は郎等三十騎計にて、松村邊まで落ちられしに、敵諸方より出向うて、終に討たれ給ひけり。是より東北國の間に、新田の一族とては、根も葉も共に枯れ果てたり。其上義貞、鎌倉を亡し給ひけるより以來、父子兄弟皆南帝に忠義を專とし、志金石よりも堅く、御味方をいたせしも、此處彼處にて、皆討たれ給ひしは、たゞ偏に南朝の御聖運開かるまじき徵（しるし）なり。

五　上杉憲顯入道死去

上杉憲顯逝去

同年九月上旬、上杉民部大輔憲顯入道、假初に心地煩ひ出で、日を重ぬるに從ひ、漸漸に重くなり、水穀更に口に入らず。同き十九日に、終に卒去せられけり。金王丸を始め參らせ、諸人氣を失ひ力を落し、飛鳥翼を殺がれ、遊魚の鰭(ひれ)を切られしが如く、呆れ惑ひしかども詮方なし。空しき尸をば、伊豆の國勝寺に葬送し、薪を積みて、夜來一片の煙となし、遺骨をば、郊原一塊の塚の主となして、佛事作善形の如く營み、從類別離の涙を滴(した)でて、卒都婆に向ひ、花を手向け香を炷きて、頓生菩提と回向し、聲々に拜むも理(ことわり)に過ぎて哀れなり。道號は桂岩、法名は道昌、今年六十三なり。

兩上杉

次男兵部少輔能憲・彈正少弼朝房二人、管領職に補せらる。鎌倉の管領兩上杉とぞ稱號す。彼の朝房は、憲顯入道の兄中務少輔憲藤の子なり。後に在京して、都城にて卒すといふ。

六　金王丸元服 附 本田合戰 并 中村・馬淵夜討

應安二年十一月廿一日、金王丸十一歲にして元服したまひ、御諱氏滿とぞ號しける。

御年よりは才智おはしまし、成長し給はゞ、父基氏の御器量にも劣り給ふまじくぞ見奉りける。兩上杉も、管領職の勤め晝夜に怠らず。己を尅して道を修め、私欲を棄てゝ仁義に歸りしかば、父入道にも相變らず、東國皆從ひ愼みけり。同年の暮方より世に沙汰ありて、西上野に新田の殘黨起りて、武藏・上野の間に出張し、近國に催促して、軍勢を集むる由聞えあり。年明けぬれば、軈て正月六日、軍兵五百餘騎集り、所々に火を放ち米穀を追捕し、兵粮山の如くに積み上げたり。鎌倉へ注進すること、櫛の齒を引くが如し。さらば速に馳せ向つて蹴散らせとて、上杉彈正少弼朝房、五千餘騎を先陣とし、畠山左衛門佐基國、三千餘騎を後陣として、二月七日鎌倉を立ちて、同じき九日武藏國本田に着陣し、明くれば十日の卯の刻に矢合(やあはせ)と陣觸(ぢんぶれ)して、皆陣々を取固めける。其夜は夥しく雨雲被ひ、月の入方(いりかた)より、篠を束ねて降出でければ、目刺すとも知らず暗かりしに、陣屋の篝も消え果てゝ、車軸を流す雨の足に、上漏(うへも)り下濕(しため)れて、原憲が扉(とぼそ)ぞ思はるゝ。新田が陣中に中村某・馬淵某は、同じ陣所にありけるが、兩人竊にいひけるやう、敵に味方を合すれば、廿分が一にも

足らず。駈合の軍には、利を得ること難かるべし。變る方便に寄手を脅し、其騒に附けて討つにあらずば、爭でか小勢を以て大敵を退けん。幸に大雨降り、雨陣晴を待ちて、皆打解けてぞあらん。いざ一夜討して不意を計らんとて、兩人が郎從二百餘騎、竊に畠山が陣の前に進み寄りて、鬨の聲を上げたりければ、軍は明日にてぞあるべきとて、弓の束を外し、馬の鞍を下し、甲を枕とし、高鼾かきて眠り伏したる畠山が軍兵、鬨の聲に驚き、寢惚れ乍ら立上りけれども、度に迷ひ方を違へて、敵味方を知らず。されども大將基國が從弟に、畠山五郎正國といふもの、太刀押取り走り向うて、敵三騎討取り、猶混み返るものを防ぐ。上杉の陣には鬨の聲を聞きて、夜軍の始まりぬるぞと、同じく鬨を合せたりければ、此勢に辟易し、中村・馬淵は本陣に引返す。斯くて夜明けゝれば、畠山の軍兵共、夜討を洩らしぬることを、面目なしとや思ひけん。三千餘騎同時に喚いて押懸る。新田方にも屈竟の射手を前に備へ、矢種を惜まずさんぐに射る。畠山が先手七百餘騎、これに射竦められて、叢立ちたる所を、新田小三郎といふもの、主從二十餘人拔き連れて打つて懸る。七

百餘騎の兵、二十餘人に捲り立てられて、右往左往に亂れたり。後陣の大勢、新手に入變り、新田が二十餘人を眞中に引包みて、一騎も殘さず討取つたり。馬淵・中村も、今夜の本意を達せんとや思ひけん。郎從三百餘騎、上杉の陣に打つて懸る。上杉の五千餘騎、鶴翼に備へて、中に取籠めんとすれば、馬淵・中村は、魚鱗になつて後に駈通り、取つて返しては、敵に遭うて打合ひ、西に別れ東に集り、七八度が程揉合ひければ、上杉方にも、五十三騎討たれて、手負又數を知らず。馬淵・中村も、軍兵二十餘騎討取られ、重手薄手あまた負ひたり。軍兵も手負ひて疲れたりければ、今は此迄なりとて、信濃を指して落ちて行く。殘る兵共、或は討たれ或は落失せて、軍も卽ち散じけり。馬淵・中村信州に落下り、軍兵を語らうて一揆せしむ。上杉・畠山猶勢を進め、跡を追うて信州に發向す。大軍の向ふと聞えしかば、兵皆聞怖(きゝおぢ)して、程なく無爲になりしかば、四月中旬、上杉・畠山は鎌倉に歸られたり。

七 管領氏滿公任二左馬ノ頭一

同六年十一月廿八日、京都將軍參議に任せられ、左近衞中將を兼ねて、從四位下に敍せらる。玆に於て左馬ノ頭を辭退し、鎌倉の管領氏滿に讓り給ふ。執事上杉兵部少輔能憲上洛して、御氣色に依つて仰を蒙り、從五位下に任せられ、御暇給はりて、能憲鎌倉に歸る。氏滿敍爵の御悅あつて、殿中の賑ひ、國郡の喜びいふ計なし。諸將諸侍各々鎌倉に參上し、賀し申されければ、程々に從ひて賜物これあり。同十二月廿五日は、氏滿御判始めとぞ聞えし。めでたかりし事共なり。

八　上杉彈正少弼朝房上洛 附 菊池肥後守歿落

同七年の春、京都の將軍義滿公より御使あり。此頃九州菊池肥後守武政、南帝に與し奉り、長門の國に攻め入りて、猛威を振ふ由聞えたり。將軍今年十七歲、大軍を催して、自ら御向ひあり、一時に菊池を攻め干し、四海太平の大功を立てんと思召す。然るに有合ふ諸將諸侍、手分して所々に遣し、京都に然るべき警固なし。管領氏滿は、鎌倉に在りて東國を守護し、執事上杉朝房を京都に上せて、王城を警固せし

菊池武政起る

上杉朝房上洛

めらるべしとぞ仰付けられけり。是に依つて安房・上總・武藏・相模の軍勢を催促し、三萬五千餘騎を引率して、朝房京都に上洛あり。將軍家評定あり、細川左京大夫頼章が二男仁木兵部大輔義尹を勢州に遣し、國司北畠殿を襲ひ討たしむ。山名民部少輔氏清を、河内・和泉に遣して、和田・楠を退治せしむ。小笠原信濃守・武田太郎藏人義賢を伊豫に遣して、金谷・武市・村上を討たしむ。其外の軍兵、北國は越後を限り、東國は伊豆を限りて、諸國の軍勢十萬餘騎を召具して、三月上旬將軍家都を立ちて、九州に赴き給ふ。細川頼之・斯波義將・畠山義深・土岐・佐々木・赤松・今川已下の大名三十九人、前後に供奉して、同四月に、先陣既に長門國に着きて、菊池肥後守と戰ふ。菊池屢〻打勝つと雖、島津は心變りし、原田・秋月・三原・山鹿は降人に出でたり。菊池は將軍の宮を具し奉りて、筑後に引退き、高良山に陣取りけるに、軍兵落失せて防ぐに力なく、同九月に、京都の將軍は、宰府に御陣を居ゑられたり。

氏滿武政和す

遂に和平の事なりて、菊池は肥後國に歸る。同十月八日、將軍都に歸り入り給ひ、同十一月に、上杉朝房御暇下されて、鎌倉に歸りけり。

上杉能憲逝去

九　上杉能憲病死附同舍弟憲春被レ補ニ管領一

永和元年六月廿五日、氏滿十七歲、始めて評定場に出座あり。文の道を專とし、政邪なく行はせらる。東國の武士皆在鎌倉して、いとゞ富み賑ふこと、日頃に過ぎたり。同四年四月十七日、管領上杉能憲病死せり。年四十六。道號は敬堂、法名は道諲とぞ號しける。舍弟刑部大輔憲春、管領職に補せらる。同八月廿七日、長井の掃部頭入道道廣、卽ち頭人となる。これより愈〻上に廉直の裁斷を事とし、下に賄賂贔屓を絕す。爭論是非の批判、訴訟對決の勝負、評定の所に於て、非に落さるゝものも、理と法との差別明かにして、更に恨を抱かず、己を責めて屈伏せり。古、北條泰時の貞永の式目に違はずと、諸人皆甘心す。

十　上杉安房守押ニ出三島一附氏滿謀ニ將軍家一井執事憲春諫言自殺

氏滿漸く驕慢

康暦元年三月に、土岐の一族謀叛の事あり。京都の將軍家、軍兵を催し、不日に退治せらるべし。東國の武士急ぎ上洛せしむべき由、鎌倉に仰せられたり。左馬頭氏滿公、卽ち關八州に催促し給ふ。諸將諸侍等召に應じて、我も〱と馳せ參り、軍兵雲霞の如くなり。管領上杉安房守憲方入道道合に、左馬頭殿の御旗を給はり、諸軍勢を引率して鎌倉を打立ち、伊豆の三島に着きける所に、土岐が降參して、城を明渡し侍る由聞えければ、それよりして引返し、鎌倉にぞ歸られける。氏滿公は、斯く關東の諸侍、其命を重んじ、催促に從うて、背くものなき體を見て、いつしか心奢り威に矜りて、あはれ此數を以て京都を傾け、日本を手に屬し、恣に猛威を振ひ、榮華を極めばやと思ふ心ぞつきにける。同四月七日、竊に管領憲春を召して宣ふやう、關八州の武士、我が鋒先に恐れて、靡き從ふこと、風に偃す草の如し。誰か更に背くものあらん。召に應じて走せ集ること、いづれか二心を存ずるものあるべき。軍勢凡そ五十萬騎は侍らん。此人數を以て京都を攻めんに、何の危きことかあらん。然らば京都鎌倉一統して、南方を攻め亡さんは、掌の內に在り。日本一州、

太平の徳風に歸せば、我が生前の本懷たるべし。近日の內に、在鎌倉の諸大名に相觸れ、竊に廻文して、在々の諸軍を催促し、若し遲儀に及ぶものをば、卽時に攻め干さば、愈〻權威に服して忠節をいたさん。戰功ある輩には、恩賞多く宛行はんに、誰か恨を含むべき。急ぎ祕計を廻らすべしとぞ仰せられける。憲春承つて與をさまし、こは勿體なき御心の附かせ給ふものかな。京都鎌倉、兩輪の如く御合體あり、魚と水との如くなればこそ、權威高く雲の上まで輝き、武名遠く天下に蔓り、諸國の大名小名、恐れ從ふ御事にて候。其根を斷たんときんば、梢必ず枯れ、其源を乾すときんば、流れは次いで竭き候事、古來例の多く候。東國の武士とても、一旦御威勢に伏して、恐れ從ふとは見えて候へ共、心中には如何なる野心をか挾み候も、外には顯はれ候はねども、御心を許さるべき人はこれまじく候。此事京都に洩れ聞えなば、由々しき大事にて候ものを、あなかしこ思召止まり候へかしと申しければ、氏滿公、御氣色を損じ給ひて仰せられけるは、此大事を思立つほどのことに、豫てより人の心を鑑み窺ふことなからんや。結城・千葉にも內々語らひしかば、汝が心を

こそ、如何あらんと危み侍れ。其身に於ては、隨分の軍忠を盡し奉らんと領掌せり。其外誰か二心を存すべきと宣へば、憲春淚をはら〱と流して、夫れ富には忠を忘れ、安ければ危きを忘るゝは、常の人の習と申しながら、たま〱國家靜謐なれば、又此騷亂を思召立ち給ふ。君更に道に疎くおはしまし、德を修め給はず。たゞ權威を專とし給はゞ、外には從ふ色ありとも、內は必ず反き候べし。結城・千葉は當家恩顧の人なれば、爭でか仰を否とは申すべき。故殿の御政道、正しくおはしましける故にこそ、東國は治り、今も御威勢の輕からざるは、遺風の强き所なり。京都將軍の御覺も、偏に當家に御恩淺からず。それに唯今御陰謀の御企ましまさんは、樹に捿む鳥の枝を枯らし、水に託する魚の、流れを濁すと申すものにて候。構へて斯る御事は、夢にも思召企て給ふべからず。再三諫め申しければ、左馬頭殿宣ふやう、不義の主君を諫言するは、臣の忠なり。我れ更に憤るべきにあらず。さりながら京都の有樣を窺ひ聞くに、將軍家大に奢を極め、政道猥にして、行跡を恣にす。諸人之を疎みて、忠勤の思ひなし。此故に國家更に治まらず。終には他人の爲に

憲春諫死

天下を奪はれ、一家滅亡に及ぶ時は、悔ゆとも甲斐あるべからず。世の爲め家の爲め時節既に到れり。是れ全く私の爲にあらずと宣へば、憲春今は諫むる力なくして、御前を立ちて私宅に歸り、門を閉ぢて出仕を止め、暫く籠居いたしけり。左馬頭殿は、竊に諸大名を語らひ、在々の武士を催促し、軍の用意をし給へば、國中に隱れなく、既に京都に聞えけり。將軍家大に驚き給ひ、誠しからず思召され、御敎書を差下され、管領憲春に給はり、東國無爲に靜治いたすべき由、再三に及びしかば、憲春餘りに制し兼ねて、竊に報恩寺に行きて、自害をぞいたしける。氏滿大に仰天し、千度百度後悔し給へども、歸らぬ道の悲しさ、力及ばせ給はず、京都に使者を立てられ、將軍家へさまざま和平を請ひ給へば、此上はとて御許されを蒙り、事故なくなりにければ、上杉安房守憲方を管領とし、始めて山の内に居住せしめ、政道を執行はせらる。

十一　小山下野守義政歿落

同二年の春、氏滿公を從四位下に敍せられ、左兵衞督に任じ給ふ。京都將軍家の御覺めでたくぞおはしける。かゝる所に此頃小山下野守義政と、宇都宮基綱と、水火の如く確執して合戰に及ぶ。其起りを尋ぬるに、宇都宮が所領の地を、小山が地下人さいめを爭ひ、百姓三人を打殺しけり。宇都宮安からず思ひて、人數を遣して、小山が地下人を追捕す。是に依つて雙方互に憤を含み、既に合戰に及ぶ所に、宇都宮利を失ひて、遂に小山に討たれたり。氏滿公此事を聞召され、大に怒つて仰せられけるは、遺恨あらば管領に訴へ、理非の裁斷を相待つべし。私の憤を以て、公儀を輕しめ合戰を企て、強きを以て弱きを討たば、小身なるは大身に服して、國家の騷亂となるべきなり。吳越の戰は、國の境の桑を爭ひ、女子の爭論漸くに蔓りて、終に國王の戰となり、吳越勝負の地を代へたり。小山既に宇都宮が領地を犯すのみならず、却て基綱を討取ること、邪欲非道の罪科人なり。急ぎ退治せずんば、亂逆の基なるべしとて、上杉安房守憲方に、五千餘騎を差添へて、討手に向けられける。安房守は、軍兵を率して馳せ向ひ、小山に陣取りて、急に押懸けて攻めたりければ、

俄の事にてはあり、何の用意もなかりしかば、叶はじとや思ひけん、下野守義政は、髮を剃つて出家し、墨の衣を身に纏ひ、法名を永賢と號して、降人になつて、數通の起請文を書き、樣々歎き申しければ、此上はとて御免を蒙り、剩へ本領に安堵したり。されども如何なる宿意にや、鎌倉へも出仕をいたさず、世の嘲、人の誹、とりぐ〵なりければ、口惜しき事限りなく、又野心を起し、軍兵を集めて、要害を構へて居る。

小山義政兵を擧ぐ

氏滿公聞き給ひ、斯る不義のものと知らば、其時討つて棄つべきを、溫和仁政の道を以て、助け置くのみならず、本領迄も安堵せしむる所に、恩を戴きて恩を忘れ、氏滿に向ひて楯を突くこと、是れ國家の蠹賊、政道の邪魔なり。此度は氏滿馳せ向ひ、たとひ如何なる事ありとも、攻め干して討果さんと宣ひて、永德二年四月に、左兵衛督殿自ら一萬五千餘騎を率して、小山の城に押寄せたり。城中の兵共は、寄手大勢にて、鎌倉殿の向ひ給ふと聞きしより、皆ぬけぐ〵に落失せて、今は僅に譜第一族の輩、百餘騎には過ぎざりけり。此小勢にて城に歸り、防がんとするには、中中叶ふべからず。唯打出で敵に組んで、討死せんこそ然るべけれ。自餘の葉武者

に目をばし懸くるな。大將鎌倉殿に組めやとて、木戸を開き、逆茂木を除けて、下野守義政眞先に進み、百餘騎を一手になし、魚鱗に備へて打つて懸る。寄手の先陣白石八郎が二千餘騎、此の小勢を中に取籠め、一人も餘さず討取らんと、鶴翼に開きて押包まんとする所に、小山、物の數ともせず、集る兵を蹴散らして、後に駈拔けたりければ、二陣に控へたる葛西小二郎が二千五百餘騎、僅の小勢に駈立てられ、備亂れてちり〴〵になる。小山之をば打棄てゝ、大將の御陣旗本を目に蒐けて、勇み進む有樣、獅子奮迅の如くなり。さしもの鎌倉勢、此の勢に辟易して、中を開きて通しけり。上杉安房守之を見て、安からぬことかな。これほどの小勢に切立てられ、正なくも見ゆる人々かな。いで〳〵軍を勵まんとて、長刀押取り駈出でつゝ、勇み誇る小山が勢、一陣に進む山田兵衞が馬の諸膝薙ぎて、跳ね落させ、押へて首を取り、續いで走せ寄る敵を切伏せ給ひしかば、味方これに色を直し、散々に攻め戰ふ。小山が軍兵、心は猛く勇むと雖、さすがは小勢なり。多くの敵に當つて戰ひ疲れ、終に大軍に押隔てられ、此處彼處にて、殘なく討たれにけり。下野守義政は、猶此迄

と戰ひしが、未の刻より酉の刻まで、息をも繼がず攻め合ひたり。其身鐵石にあらざれば、あまた所手を負うて、力撓み勢失せ、賴みたる郎從は皆討たれて、一人も見えざりければ、今は此迄なり。時節をこそ待つべけれと獨語して、東を指して落行きけるを、安房守が郎等三十餘騎、遁すまじとて追懸くる。義政、叶はじとや思ひけん、かすお山に駈入り、腹掻切つて伏しにけり。哀れなるかな義政、今年未だ三十三歲、四月十三日の暮程に、憂世の命は絕えければ、修羅の巷の苦みは、永劫更に殘るべからず。軈て首を掻落して、大將の御陣に差上げたり。左兵衞督殿は、御感悅淺からず、翌日凱陣し給ひけり。

小山義政自盡

十二　上杉憲方執事職辭退同還任

同じき五月朔日、左兵衞督氏滿公、鎌倉に歸りて大御堂に入りたまふ。管領上杉憲方は執事職を辭退し、卽ち入道して、法名道合とぞ號しけり。されども今更、其職に補せらるべき人なし。器量を見立て給はん迄、政道元の如く執行うてたべと、樣々

仰せける故に、憲方入道力及ばず、同六月廿七日、管領職を還任せられ、政理相變らず、仁慈謙讓愈〻愼み、廉恥儉約益〻守られける故に、東國の大名諸侍恐れ靡きて、其命に背く人なし。同じき年十二月廿日、左兵衞督、大御堂より本所に御歸座ましましけり。

十三　小山若犬丸反逆附武勇并歿落自害

去ぬる永徳の敗戰に、小山下野守義政は、かすお山にて自害せしかば、一族郎從皆討死して、殘黨更にあるべしとも思はざる所に、始め義政、城より切つて出でし時に、とても此軍、利あるべしとも覺えず。討死すべしと思ひ定む。子息若犬丸、今年未だ十四歲なり。敢なく敵に生捕られ、憂目を見んこと疑なし。城中を忍び出でて、奥州白河に赴き、田村庄司則義は一族なれば、よも見棄てべからず。打賴みて時運を待つべしとて、乳母子（めのとご）の野崎兵次を添へて、差下しける所に、田村甲斐々々しく請取りて、深く忍び隱し置きたり。其間に弓矢・太刀打・早技（はやわざ）を稽古し、山に登りて岩

石を走り、川に入りては流水を潜り、力量人に勝れ、荒馬に乘つて一散に駈くれども、危しとせず。今年既に十八歳、凡そ武藝に長じ、心飽迄不敵なり。田村に語りていふやう、此年頃の御情、其恩徳の高きこと、山も更に低く、海も却て淺く覺えて候。此有樣にては、生前に報ずること叶ふべからず。黄泉の下までも、忘れ置くべき道にあらず。然れば鎌倉の左兵衞督殿は、父義政の敵なれば、いつ迄か外(よそ)に見て、あたら月日をば過し候べき。いで怨を報せばやと思ひ立ちて候。小山は、領知の所、戰場の跡なり。野風端(はした)なく吹きては、松の梢を渡り、朝露必ず置きては、叢の間を潤し、亡魂怨を含みては、夕の霧に嘯き、幽魂空にさまようては、曙の雲に浮かれぬらん。某彼處に赴きて、父の尊靈、一族郎從の爲め弔戰(とぶらひいくさ)して、腹切らんと存ずるなりと、涙を流して申しければ、田村も理(ことわり)に伏して、共に涙を押拭ひ、誠に汝の申さるゝ如く、軍に負くるは、常の習といひ乍ら、本意にもあらで討死せし怨恨、定めて堪ふべからず。之に向ひて弔軍せば、苔路の下に朽ちたる靈骨も、再び宍づきて戰ふが如く、さこそ嬉しと思ふべきに、さらば用意をせよやとて、末々の家子郎從を、

小山若犬丸小山城に據る

竊に招き集めしかば、此處彼處より馳せ集つて、百五十餘騎になりたり。鎌倉殿より人數を遣さるれば、定めて大軍にてぞあるべき。今此程の小勢にて、敵の大勢を引受けんは、蟷螂が斧を上げて、龍車の轍に當らんが如し。勝つべき道はなけれども、親の敵に向うて討死せんことは、是れ孝行の本意なりとて、至德三年六月に、白河を打立ち、小山の城にぞ入りにける。近隣の村里を燒拂ひ、兵粮を運び要害を固くして、敵を待かけたる心の中こそ不敵なれ。此の事鎌倉へ頻波うつて告げたりければ、左兵衛督殿、さらば押懸けて討干さんとて、近國の軍勢五千餘騎を率して、同じき七月中旬に、鎌倉を軍立して、古河の廣野に押詰め、陣を取固め、三手に分けて攻寄せ給ふ。若犬丸は緋縅の鎧に、鍬形打つたる甲の緒を締め、其頃奥州生立の黒馬といふ荒馬の、丈豐に七寸に及ぶに、厚總かけて打乘り、屈竟の兵五十餘騎を、前後左右に立てゝ、九尺計の樫の木を八角に削らせ、筋金を入れ疣を植ゑさせ、右の脇に搔込うで、木戶を開きて打つて出でつゝ、寄手の先陣一千餘騎の眞中へ、會釋もなく駈入りつゝ、さいばうを以て敵を打つに、或は馬共に後に打居ゑられ、甲

の眞額を打たれて、頭は胴へにえ入りて、立ちながら死するもあり、又は中天に打上げられ、落ちざまに首の骨を突折りて、矢庭に空しくなるもあり、四角八面に追卷り、打つて廻りければ、此勢に辟易して、先陣一千餘騎、蜘蛛の子を散らすが如く、亂れ立ちてぞ崩れたる。二陣は榛谷七郎朝賢、七百餘騎にて控へたり。小山が有樣、鬼神の如きに恐れて、戰はんとするものはなく、たゞ馬に當てられじと、中を開きて通しけり。若犬丸は、向ふ敵をば打伏せ、集まる兵をば、馬にて乘倒し、縱橫無盡に振舞ひ、小高き所に打上り、暫く息をついで、味方の兵を數ふるに、卅餘騎討たれたり。鎌倉にも、手負死人二百餘騎に及べり。日既に暮方になり、西より照す倒景の、高く見ゆる折節、執事上杉憲方入道の郎從早尾新五といふもの、力量勝れて相撲を好み、凡そ關東には、之に續く人なし。黑糸縅の鎧に、同じ色の甲の緖をしめ、白月毛の馬の太く逞しきに、白鞍置きて打乘り、三尺五寸の太刀を拔きて駈出でつゝ、若犬丸に馳せ向ふ。小山きつと見て、あな物々しや、之を受けて黃泉の筐にせよとて、棒を取延べ、丁と打ちけるを、新五は太刀にて受流し、棒の端をむずと捉へ、兩

方互に引きければ、二人が乘つたる馬は、一所に押合ひたり。さしもの大力、棒の端を握りて、えいや〳〵と引きける程に、筋金共に中より折れて、雙方に別れたり。諸將諸侍之を見て、あはれ近來の見物かなと、感ずる聲、暫しはどよみて止まざりけり。若犬丸は、棒は引折られぬ。三尺九寸の大太刀を拔きて、當るを幸に薙伏せ切伏せ、馬人共に面を向ふべき樣はなし。憲方入道下知せられけるは、此陣中に、強弓の精兵はいくらもあり、矢先を揃へて射竦めよとぞ申されける。相州玉繩の住人瀨河兵衞宗泰を始めて、屈竟の射手卅餘人、陣の面に進み出でて、差詰め引詰め、矢種を惜まず散々に射ければ、若犬丸が鎧は、札能く緘したりければ、矢は立ちながら裏をかゝず。乘つたる馬の太腹草脇に、五筋まで立ちける矢に、さしもの黑鹿毛堪り得ず、諸膝折りてどうと伏す。小山は力なく、鎧を越して下立ち、只一騎歩立になり、群る敵を追卷り、城中に引入らんとす。鎌倉殿は御覽じて、續いで押入れや者共と下知し給ふ。寄手五千餘騎、鬨の聲を作りて、木戶逆茂木を引退け、我も我もと押懸る。城に殘りし百餘騎の兵共、下合うて防ぐと雖、寄手いやが上に重り

若犬丸自殺

て、切れども物ともせず、打たるれども顧みず、打合ひ刺違へ切落し、隙ありとも見えざりしが、城兵殘りなく討たれて、三方より込入りけり。若犬丸は、午の刻申の刻まで、三時計の軍に勢力疲れて、一方を打破り、奥州を指して落ちて行く。上杉憲方入道の子息兵庫助憲孝、七百餘騎にて、跡に附きて追うて行く。若犬丸は、白川へも下り得ず、會津を指して赴き、宿借す人もなかりければ、自害して果てにけり。此序に田村庄司が館に押寄せ、急に攻入りしかば、俄の事にてはあり、郎等七八人出合ひて防ぎしかども、叶はずして、田村は家に火をかけ、腹切つて死にければ、郎從皆討取られたり。田村が子息、今年既に七歲と五歲とになりけるを、乳母子之を抱きて落ち行く所を、葦名兵衞生捕つて、鎌倉殿に具して參る。即ち六面の沖に沈めにぞかけられける。同七月廿五日、左兵衞督殿は鎌倉に歸陣あり、勸賞とりどりにぞ行はれける。

十四　宍戸男體城殁落

嘉慶元年三月に、常州より飛脚到來して申しけるは、去ぬる正月より、小田五郎が一族野心を起し、宍戸男體の城に立籠り、近隣を犯して、兵粮を掠め取り、百姓を追捕して資財を奪ふ。諸方の溢れもの之に與し、既に五百餘騎に及べり。急ぎ討手を差下され、御退治候はずば、漸々に與黨重なり、大勢になつて、由々しき御大事たるべしとぞ告げたりける。これは去ぬる觀應年中に、小田が一族新田に與して、懸命の地を歿收せられ、牢浪の身となり、新田の大將達は、近年所々にて討たれ給ひ、今は賴むべき便もなく、磯にもつかず海にもつかず、只管飢に臨み、溝瀆の間に殪れて死するを、待つより外のことなし。とても死すべき我等が命を、戰場に落して、名を後代に止めんとて、五百餘人神水を呑みて一所に集り、逆心をぞ起しける。氏滿公聞き給ひ、新田が殘黨所々に隱れて、時を待つもの諸方にあるべし。此事を聞傳へて馳せ集り、大軍になりなば、容易く攻干し難からん。時日を移さず打散らせとて、上杉中務少輔朝宗入道禪助を大將として、近國の軍兵二千餘騎を差添へて、同十一月下旬、宍戸にぞ向けられける。軍兵既に押寄すると等しく、潜き連れて攻

上る。城中には鳴を靜めて待かけ、能き圖に引うけ、豫て用意したる大木五六を、一同に切つて放つに、寄手の兵共、之に當つて手足を打折られ、谷底に捲り落され、疵を蒙るもの數を知らず。彼の男體の城といふは、四方の谷深く、岩石峙ちて、松柏生ひ茂り、嶮しき峯に要害を構へたりければ、たとひ幾萬騎を以て攻むるとも、只人數のみ損じて、落つべきやうは更になし。始の程は侮りて、城中僅に五百騎、思ふに小勢なり。此大軍を以ては、たゞ一揉みに攻干さんものをと、面々思ひけるが、案に相違して覺えたりければ、此城更に力攻めにはなり難し。兵糧詰にせよやとて、城の四方の麓に陣屋を構へ、夜討の用心嚴しくして、徒に守り居たり。城中には、寄手の多勢に恐れて、頭を差出さず、たゞ要害を強く固めて、空しく月日を送りける程に、兵糧既に乏しくなりて、賴み少うぞ覺えける。いざや寄手の陣に一夜討して、兵粮を打取らんといふものもありけれども、元より寄合武者の習、評議更に一決せず。年改まり春も過ぎて、五月の頃になりしかば、城中今は兵粮も盡き果て、苔を炊ぎ木の葉を蒸して、一日の飢を養ふと雖、夜明くれば、又喉を潤す食を絕

し、首陽の蕨を食ひ盡し、膚萎け力疲れて、立居も心に任せざるを、寄手之を見すまし、四方より鬨を作り、潛き上りければ、城中の五百餘人、柵の際まで蹌き出でけれども、敵に遭うて、防ぎ戰ふべき力もなく、岩角に倒れ伏して、皆自害をぞいたしける。今年五月十八日、小田五郎を始めて、一族與黨悉く亡びしかば、新田與力のものとては、根も葉も絶え果てゝ、關東大に靜なり。

十五　由比濱大華表建立

上杉安房守入道道合は、鎌倉の管領として、政道正しく執行ひ、仁を施し義を守り、禮を專とし、德を正しくせられければ、東國の諸將其風に歸して、道に志す人多かりけり。上に行ふ所、下之を學び、國俗漸く淳和の德を慕ひ給へり。是れ偏に源家嘉運の威勢によるといひ乍ら、朝廟守護の神力を以ての故なり。且うは擁護の恩を謝し、且うは武運の永久を祈らんが爲に、由比の濱に大華表を建てられ、鶴が岡に寄進せらる。同二年六月に、年來の願望を遂し、落慶供養をぞ遂げられける。抑

鶴ヶ岡八幡宮

此鶴が岡八幡宮と申すは、其上後冷泉院の御宇に當つて、源ノ賴義朝臣敕を承つて、安倍貞任を誅伐の時、康平六年八月に、石清水を勸請して、宮居を相州由比の鄕に立てられしを、永保元年に子息義家朝臣、修復を加へられ、治承四年十月に右大將賴朝卿、卽ち之を小林の鄕の北の山に移され、寶殿新に作り磨きて、崇め拜し奉られしより以來、神德旣に東國に施し、利生も正に八州に遍し。源家擁護の宗廟として、靈威奇妙の勝砌たり。宮司幣帛を捧げて、金谷苑の英を添へ、社僧法施を供しては、海潮音の響を移す。皷の聲鼕々として、山更に靜なり。鈴の聲さつ〳〵として、風渡りて潔し。神供は時を追うて、夜燈は光明かなり。步を運ぶ老若は、瑞籬の邊に袖を連ね、祈を懸くる貴賤は、御階の下に返申す。利生の著しきことは、鏡に影の映るが如く、谷の響に應ずるに似たり。誠に尊き靈場なれば、諸人頭を傾けて、仰ぎ奉らぬものはなし。

十六　從二將軍家一賜二出羽奧州管領御敎書一

氏満出羽陸奥の管領となる

明徳二年の春、京都將軍義滿公より、大館氏信を關東に差下され、鎌倉の管領氏滿公へ、出羽陸奥兩國を、管領政治し給ふべき旨、御教書をなし下されたり。氏信を御殿に請ぜられ、諸國在鎌倉の大名小名、悉く伺候せらる。氏滿公は、晴の裝束きらびやかに出立ち給ひ、大館を上段に上せて御對面あり。其式甚だ嚴重なり。斯くて菖蒲作りの太刀一振・唐綾縅の鎧一領・河原毛の馬に、金覆輪の鞍置きて、引出物にぞ給はりける。鎌倉逗留の程、樣々の饗應、いと丁寧なる御事なり。氏信京都に歸參して、將軍家へ、具に言上せられしかば、義滿公、いと御心よげに打笑ませ給ひ、それこそ義滿が名代として、下られたりし崇敬なれ。誠に道を知りて、禮法を勤めし人なりと、大に感悅ましまし〱けり。翌年の夏四月上旬より、安房守入道所勞ありて、執事職を辭退せらる。氏滿公の仰に依つて、入道の子息上杉兵庫助憲孝を、管領職に補せらる。父の入道にも相變らず、政道正しく行はれしかば、大小各〻德澤に霑ひ、上下悉く仁風を仰ぎけり。

十七　若宮八幡御遷宮

同年五月より、若宮の八幡御造營あり。十二月廿一日、既に造畢の功を遂げられ、御遷宮まします。管領兵庫助御名代として、其參向の有樣、漆塗の輿に乘りて、路頭の行粧、美々しくぞ見えたりけり。將軍家を始め參らせ、棧敷を打並べ、家々の紋付きたる幕打廻し、見物の貴賤行集ひて、錐を立つる地もなし。近國警固の勇士五百餘人、色々の甲冑を帶して、辻小路を固め、小具足に長刀を横へ、非常を戒むる武士八十人、怪しきを咎め、疑はしきを通さず。供奉の騎馬三百餘人、太く逞しき名馬を選(すぐ)り、總・鞦・鞍・鐙、思ひ〳〵に飾りかけ、花を散らし色を交へ、歩立の侍七百餘人、狩衣・水干・布衣・直垂・衣紋、あたりを拂つて、好粧目を驚かす。或は代々の重寶をさし、或は新調の美麗を用ひて、弓・箙・太刀・刀、金銀珠玉を彫めたり。凡そ中間雜色に至る迄、今日を晴と出立ちて、織色染物樣々の狂文、手を盡し好みを代へて、本所より若宮まで、二行に連つて歩ませ、左手右手(ゆんでめて)定間(ちやうま)を配り、一群々々打通る。既に

黄昏に及びしかば、辻々の大篝、小路々々の松明は、宛ら白晝に異ならず。禰宜神主は、幣帛を大床に捧げ、別當社僧は、經の紐を解きて、玉の砌に讀み奉り、八人の八乙女は、裳を開きて透廊に舞ひ、五人の神樂男は、鼓を合せて拜殿に候す。幽燈の影暗く、内外の鳴を靜めて、竊に遷宮し奉れば、祝部卜部の某は、太祝言を申す。聲をかしく打咳き、訛り歪める調子にて謹請再拜、此敷島の地に大宮柱太しき立ちて、祝ひ鎮め崇めまつり、久方の天津御空、あらがねの下津岩根のあらん限は、神の守り徳明かに、世の政道正しくして、四海の外まで平らけく治り、武運傳はりて門榮え、壽命保ちて盡くる時なからん。災は千里を隔て、幸は家毎に來らん、再拜々々と唱へ上げて、幣を振りて禮をいたせば、伶人樂を奏して、國家の爲には太平樂、榮久しき千秋樂、命は盡きせぬ萬歳樂、齡は長き採桑老、とり〴〵に調べたり。時移り事終りて、下向道を告ぐるなる、還城樂の舞の袖、雪を廻らし花を翳し、松の梢に吹く嵐も、絲竹の聲に和しければ、參詣の上下老若をいはず、歡喜の涙を流されけり。東國既に靜治の世となり、神德益々光を添へ、安全無爲の化に歸しける。威勢めで

たき例(ためし)とかや。

十八　上杉道合卒去

上杉憲方逝去

上杉安房守入道道合は、たゞ假初の所勞と號して、籠居せられたりしかば、さしたる事とも思ひ寄らざる所に、或は卒中昏倒して、俄に半身痲痺不仁し、聲言葉澁り、立居心に任せ難し。鍼灸湯藥の治療さま〴〵なりと雖、日に從ひ月を追うて重く惱み、應永元年十月二十四日、朝の露と諸共に、消え行けるこそ哀れなれ。人間の浮生は水上の泡、一世の光は雲中の電(いなづま)、夢の如く幻の如し。來りては口瀧に止まる朝の露あり、槿籬に殘る夕の花なし。高きも卑しきも、誰か無常を免るべき。空しき尸をば極樂寺に送りて、草根一堆の塚の主となし、幡をたて卒都婆を立て、形の如くの孝養をぞ營まれける。此の涙の積りにや、嫡子兵庫助憲孝、心地例ならず惱みて、管領職を辭退申されしかば、翌年三月九日に、上杉中務少輔入道禪助を、管領に補せられ、內外の政道執行はる。

十九　龜谷山壽福寺炎上附開基

同二年十二月二十日の夜、壽福寺炎上す。抑此寺は、右大將賴朝の妻室北條遠江守平時政の女從二位政子、後に賴朝卿に後れて尼となり、嫡子賴家卿の政道を補佐し給ひけり。尼御臺の仰とだにいへば、天下の大名小名、恐れ從はずといふことなし。正治二年閏二月十三日、尼御臺の御願として、鎌倉龜谷に伽藍を建立すべしとて、葉上房禪師榮西に、此地を寄附せらる。貴賤男女結緣の檀施、山の如く積りしかば、頓て建立の事始あり。不日に土木の功を勵し、程なく造畢落慶し、供養をぞ遂げられける。即ち龜谷山壽福寺と號して、正法傳持の名地、大道省悟の靈場なり。時世は移り變ると雖、法水の流れは、源愈〻深く湛へ、年行き人改まれども、別傳無相の發明は、古今是れ同じき所に、忽に一火迸り出で、片時の間に燒け亡びけるこそ淺ましまれ。

二十　圓覺寺佛牙ノ舍利上京附開基

圓覺寺建立

同三年四月に、京都の將軍御使を鎌倉に下され、圓覺寺の佛牙の御舍利を、上せ奉るべき由仰せ遣されたり。大宋國の祖元出家して、佛鑑禪師に拜謁し、狗子佛性の話に依つて、忽ちに得道し、法席を延ぶる所に、宋國の紹運既に傾き、天下兵亂しける故に、席を卷きて隱居す。此頃本朝後宇多院の御宇に當つて、鎌倉の執權相模守平時宗、疏幣を備へて請ぜられしかば、卽ち明州に纜を解きて、弘安二年六月に、筑紫の太宰府に着岸し、同八月に、相州鎌倉の建長寺に入り給ふ。時宗深く崇奉して、同五年に、圓覺寺建立あり。祖元を以て開山第一の祖師とせらる。開堂の日、群鹿其場に來りしかば、是れ法流の吉兆なりとて、瑞鹿山圓覺寺とぞ號せられける。同九年九月三日、六十一歲にして入寂し給ふ。佛光禪師と謚す。祖元、本朝に來り給ふ時、此佛牙の御舍利を、袈裟に包みて渡され、圓覺寺の寶物たり。感應奇特の靈威を施し、時々光明を放ち給ふ。京都の將軍聞傳へて、召上せ給ふ。氏滿深く惜み給ひて、仰に任すまじき由、返答あるべきに議定せしかども、此一固の佛舍利に依つて、京鎌倉不和になりなば、天下の亂逆の根となり、人民の惱たるべき旨、再三諫め申

されしに依つて、氏滿は力及ばず、京都に送り上せける。

廿一　左兵衛督氏滿逝去

足利氏滿逝去

應永五年の秋より、左兵衛督氏滿公御不例ましく、漸々に重くならせ給ひしかば、御内外樣の人々、大に歎き奉り、名醫の聞えこれあるをば、千里をも遠しとせず、招き請じて藥を求め、樣々治療を盡さるゝと雖、天年の限り極まる故にや、終に効驗を告ぐる色もなし。氏滿卽ち管領朝宗入道を召して、國政靜治のこと、細々と仰含められ、同十一月四日、世間有待の習に任せて、人生無常の道に赴き給ふ。去ぬる永德三年六月に、竊に隱居の志ありて、瑞泉寺に移り給ひしを、京都の將軍家より、逆心の企もあるかと疑ひ思召されて、御許もなかりしかば、力及ばず、又國政に立返り給ひしに、一朝花落ちて嵐に伴ひ、三冬枝枯れて霜に朽ち、昨日までは鬼神の如く思はれて、諸人恐れ從ひしも、今日は黃泉の下に歸り、憂を家門の袖に殘し、主を失ふ、名のみに成行き給ふぞ哀れなる。法名は道全、永安寺殿とぞ申しける。生

年卅八歲なり。

鎌倉公方九代記 巻四

滿兼軍記

一 滿兼家督附大内義弘入道反逆

大内義弘兵を擧ぐ

左兵衛督氏滿逝去の由、京都に告げ申されしかば、將軍義滿公大に驚き思召し、管領職の事、御息滿兼相違なく、關東の政理執行はるべき由、御敎書を差下され、左兵衛佐に任せしめらる。關東の大名諸侍、一人として命に從はずといふことなし。

應永六年七月に、出羽奥州國分巡行の爲に、鎌倉を立ちて、奥州白川に赴き、稻村の御所に逗留し給ふ。下司代官はいふに及ばず、村老村主其威に伏し、諸將諸侍其德を仰ぐ。同じき十一月、滿兼鎌倉に歸り給ふ。同年十月に、大内左京權大夫義弘入道有繫逆心を起し、竊に筑紫中國の軍勢を招き集めて、泉州の境に立籠る。前將軍

義滿公聞召れ、使を立てゝ義弘を召さるゝに、參らず。又中津絶海和尙を以て、樣々仰せ宥めらるれども、更に許容せず。是に依つて前將軍自ら諸軍を整へて、八幡山に押出で、陣を取り居ゑ、管領畠山基國・管領斯波義將・細川賴元等に五百餘騎を差添へて、泉州に差遣さる。大内入道、卽ち矢倉井樓を築きて防ぎ戰ふ。土岐宮内少輔詮直は、義弘に一味して、美濃國長森の城に立籠る。將軍家、卽ち土岐美濃守賴益を攻めしむ。山名滿氏が子滿氏は、丹波に旗を揚げ、京極五郎左衞門は、近江にして反逆す。各軍兵を遣して、之を攻め討たしめらる。同十二月二十一日に、泉州の寄手諸軍一同に詰かけ、四方より攻め懸つて、城に火をかけたりしかば、大將義弘入道、手の郎等百餘騎を前後左右に立て、城より切つて出でつゝ、畠山上總介基國が陣に駈入り、大長刀を水車に廻し、向ふ敵を薙伏せ切倒し、四角八方に追捲りしかば、畠山が二千餘騎、僅の勢に切立てられ、むら〳〵に引退く。基國が子尾張守滿家、たゞ一騎踏止まり、義弘入道と戰ふ所に、義弘運命盡きたりけん、長刀を打折り、太刀を拔かんとせし所を、滿家すかさず馳せ寄つて、内甲に太刀先を入れたりけれ

ば、義弘流るゝ血に眼眩みて、終に滿家に討たれたり。大將旣に討たれしかば、軍勢四方に散り亂れて、思ひ〳〵に落行きけるを、追詰め〳〵、殘りなく討止む。義弘が子大內新介は、父が不義の企に、子として一味仕りしは、見棄て難き所なり。今は此迄にて候。御許されを蒙り奉らんと、降參せしむる故に、命を助け、諸軍京都に歸られたり。內々聞及ぶに、大內義弘・土岐詮直・山名滿氏・京極五郎左衞門、皆鎌倉に一味して、此反逆を企てたり。同十一月廿一日、左兵衞佐滿兼、一萬餘騎を率して鎌倉を打立ち、外には、京都將軍の加勢の爲と披露し、實は、土岐宮內少輔詮直が長森の城に後詰して、寄手を追散らし、其勢を以て、直に京都に打つて上り、將軍を討ち奉りて、天下を傾けんとの支度なりと、沙汰いたしけるが、義弘入道亡びたりと聞えしかば、左兵衞佐殿は、武州の府中に逗留せらる。

二　京都將軍隱居附足利直冬卒去

去ぬる應永元年十二月に、京都の將軍義滿公、旣に征夷大將軍の職を辭して、嫡子

金閣寺

三管領四職

足利直冬逝去

義持公に讓られ、太政大臣の宣下あり。翌年二月に御飾を下され、同三年四月に、北山新造の別業に移り住み給ふ。其壯觀綺麗なること、いふ計なし。玉を鏤め金を彫りて、善盡し美盡せり。世に之を金閣寺と號す。即ち鹿苑寺のことなり。京都室町の亭、花の御所は、義持に讓り渡さる。斯波・細川・畠山、互に相代りて管領となる。之を三管領と稱す。山名・一色・京極・赤松、之を四職と號す。天下の政道、皆此手より出で、權勢高く雲の上に上り、武威廣く四海の外に振ひしかば、公家・武家共に恐れ從うて、靡かぬ草木もなかりけり。されども東國西海の間には、動もすれば反逆違亂のものありて、國家動亂す。鎌倉若し京都に反き給はゞ、由々しき天下の大事たるべし。いかにも唯今は靜に治めて、溫和の政道を行ひ、暫く天下の氣を窺ふは、是れ上策の規なるべしとて、新將軍義持公より、鎌倉へ御敎書を遣し、野州足利庄を遣されしかば、滿兼大に喜悅して、同七年三月五日、府中を立ちて鎌倉に歸り給ふ。同月中旬に、足利直冬卒去せらる。始め義詮將軍の御時に、菊池が取立て參らせて、西海の大將と仰ぎ、屢〻軍兵を語らひ中國を侵し、攻め從へしことありと雖、義

満公の御治世に至りて、降參せられしかば、石見國に微なる小地を與へて置かれたりけるに、諸人疎みて、參り從ふものもなく、寂しき床の上に、重き病をうけて、終に果敢なくなり給ひけるこそ痛はしけれ。

三　上杉憲定迎二持仲一歸二鎌倉一

同五月廿五日、上杉憲方が次男安房守憲定、伊豆の三島に參詣す。滿兼の仰に依つて、直に上州に赴き、外戚の腹にて乙若殿と申す、後に元服して、持仲とぞ號しける。之を仰へて、竊に鎌倉に入れ參らせけり。同じき九月八日、斯波左京權大夫詮持、奥州に於て、宇都宮氏廣・其子氏公・島氏等を誅戮して、首級を鎌倉に持參す。滿兼即ち侍所に出でて實檢し、詮持には、宇都宮が一跡を給はりけり。

四　伊達入道反逆

同九年の春、奥州伊達大膳大夫入道某、逆心を起して鎌倉に從はず。軍勢を集めて

赤館に閉籠り、近郷を放火し、兵粮を掠め、猛威を振ふ由、鎌倉に告げ來る。是に依つて上杉左衞門佐氏憲に、七千餘騎を差添へて、奥州に向けらるゝ。五月廿一日鎌倉をたつて、赤館に赴きしに、城の要害嚴しく、切所を塞ぎ、壘を固くして籠りしかば、容易く攻寄せ難し。さらば兵粮詰にすべしとて、城の四方に柵をふり、寄手七千餘騎、陣々を固めてぞ居たりける。城中之に氣を屈して、夜討をせんとすれども、寄手の用心撓みなければ、叶はず。兎角する中に兵粮盡きたり　今は此まゝ飢ゑ疲れて、居ながら死するより外の事なし。とても遁れぬ我等の命を、何の仕出したる色もなく、暗々と棄てなば、黄泉の底、修羅の巷に赴くとも、何をか今生の面目にせん。いざや切つて出で、討死して果たさんとて、城中二百餘騎、一時に木戸を開き、逆茂木を除け、鬨を作りて、どつと打出でたり。寄手は思ひも寄らず、馬には鞍をも置かず、弓には弦をもかけず、或は圍碁・雙六を打ち、或は大酒に醉ひ伏してぞ居たりける。人々鬨の聲に驚き、すはや城中の軍兵共の、切つて出でたるぞ。馬よ物具よと犇く程に、鞍は置けども、鞍はかけ得ず、弦はかくれども、矢を取らず。先

新田義則自殺

陣山本兵衛五郎が五百餘騎、立つ足もなく逃げ散りたり。二陣矢田七郎が七百餘騎、未だ物具をも固めず、半は跣裸(すはだ)にて戰ひしが、四角八方に切靡かされて、風に木葉の散るが如し。其間に城の裏より、忍(をし)兵部が一千餘騎、入變りて鬨を作る。城兵之に氣怯(きおくれ)して、思ひ〲に落ちて行く。寄手勝に乘つて、逃ぐるを追うて打伏せ切伏せ、殘り少なになりしかば、城の大將伊達入道は、郎從七八騎にて、大勢の中を切拔け、會津の山中に分入りしが、後に其行方を知らず。城既に落ちければ、討手の大將上杉氏憲は、鎌倉にぞ歸られける。

五　古我入道討二新田義則一

新田一族の末相模守義則は、僅に影を隱し、底倉の庄に居住して、時節を待ちける所に、古我彦六入道聞付けて、手勢二十餘人を率して、夜中に押寄せたりけるに、新田は郎等二人と共に起き合せ、散々に戰ふ。さすが大勢の敵なれば、叶はずして、あまた所手を負ひ、今は防ぐに力なく、主從三人家に火をかけ、腹掻切つて失せに

けり。新田の一族は、雲に上り穴に隱れても、日本國中には跡を止め、時を窺ふに、更に身の置き所なし。

六　上杉憲定管領となる

同十二年九月十二日、上杉中務少輔朝宗入道禪助、管領職を辭退せらる。同十月八日、安房守憲定入道長基を以て執事となさる。東國の大名諸侍參候して、權に伏し禮を整ふ。世を諛ひ事に阿る輩、我も〳〵と來り集ひ、機を取り色を窺ふこと、日夜更に絕間なし。昨日に今日は引換へて、門外には、馬の立所もなかりけり。

七　鎌倉御所回祿附圓覺寺炎上

同十四年八月廿九日の夜、鎌倉の御所遠侍の間より、失火燃え出で、折節濱風烈しく吹しいて、焰飛び散りければ、棟を列べ軒を軌りて作り磨かれし殿中、同時に燃え上り、黑煙天を焦し地に滿ちたり。滿兼は百餘騎にて、宍戸遠江守入道が館に入

圓覚寺焼く

りたまふ。これをこそ稀代の珍事かなと申合せける。同じき十一月六日巳の刻ばかりに、圓覚寺の塔中より火燃え出で、魔風頻に吹き迷ひ、車輪の如くなる焔、黒煙の中より四方に飛び散りて、佛殿・鐘樓・經藏、凡て同時に燒け上り、猛火地に滿ちて、餘煙空を犯す。左兵衛佐殿は、門前に馬を控へられて、回祿の災に世を危み給ひ、寺院の僧衆は、法滅の煙に胸を焦す。老若足を爪立てゝ之を悲しみ、貴賤手を握りて之を歎く。其上北條相模守平時宗の建立して、佛光禪師祖元を以て開山とせられ、奥法弘道の砌、佛心眼藏の場に、誠に衆生の靈地なり。其頃禪師、此寺に移住して、弟子に語り給はく、我此日本に來ること、因緣なきにあらず、宋國に在りし日、禪定の中に、嘗て奇異の神人を見る。其姿世に氣高く、首に冠を戴き、手に笏を正しくして、我に向ひて曰く、願くは和尚、君國に渡りて、佛法を弘通し給へ。然らば我れ守護を加へて、法味をうくべしと請ぜられしこと、度々なりと雖、誰人とも知らず、如何なる國とも辨へず。又彼の神人來り給へば、一つの金龍附き從ひ、我衣の袖に入り、青白の鳩來りて、我膝の上に止まると覺ゆ。更に其由を知らず。心中に怪しみ

思ふ所に、此日本に渡り、鎌倉に入るに及んで、或人語りけるは、此所に鶴ヶ岡の八幡大菩薩とて、威靈あらたに、効驗著るき御神おはします。和尙此境に捿居すべしと思召さば、先づ神祠に參籠し、燒香禮拜し、法施を奉りて、加護を祈り給へと申すに依つて、我れ卽ち八幡宮に參り、梁の上を見るに、數十百の木鴿あり。人に尋ぬれば、これは此御神の使鳥なりといふ。さては宋地にありし時、我を請せし空中の偉人は、此八幡の御神なりしと思ひ合せ侍り。我滅後に、若し我形像を作らば、膝の上に鴿を作り、袂の下に金龍を作りて、先兆の徵とせよと語り置き給ひけり。八幡宮の神境、大菩薩の靈地として、寺觀擁護の御趾を廻らし給ひ、法水遠く霑うて、頓悟近く蒙ること、偏に佛陀の慈悲に起り、神明の利生によるものなり。然るに火災は、世の常の事といひ乍ら、此頃打續きて、本所靈寺の回祿する、いかにも國家の大變を知らするなるべしと、諸人唇を飜し、怪しみ思はぬものはなし。

八　鎌倉新御所造營

同十五年七月十三日、御所新造の釿始めあり。上杉右衞門佐氏憲之を奉行す。此頃東國無爲の化に歸して、諸民安堵の思をいたすと雖、猶未だ困窮の憂を忘れざる時節なれば、國々の地頭御家人等に、所領に附きて、課役をかけらるべしと雖、國費え民苦しみなば、却て亂の端となるべき故に、たゞ假初のやうに御屋形を取立て、さのみに美麗造營の沙汰にも及ばず、八月廿七日に、上棟のことあり。同十二月に作り納められ、御移徙おはしけり。國家を治むる正道は、民を惠み費を省き、奢侈を止めて、儉約を守るに如くはなし。仁德既に天地に應じ、禮讓また人望に叶ふときんば、たとひ三徑荒れにつき、四壁疎にして、茅茨切らず、柴椽削らずとも、本所は是れ權威高く、管領は猶ほ德澤を施すに足れり。實に國家安全の政道、命運長久の祕計なり。

九　左兵衞佐滿兼逝去

同十六年の夏の頃より、兵衞佐殿御心煩はしく、國家の政道をも聞召さず。樣々醫

療の手を盡さるれども、更に驗を得給ふ色も見えず、日に添へて、重く覺えさせ給ひければ、諸國の大名諸侍伺候の輩、聲をだに高くせず、鎌倉中打潛まりて、安き思もなかりけり。去年五月六日には、京都前將軍義滿公、北山の亭にて薨じ給ふ。春秋五十一歲。鹿苑院殿と稱し、道號は天山、法名をば道義と號す。禁裡の御愁傷斜ならず、太上天皇の尊號を贈らせたまふ。異朝大明の成祖皇帝は、祭文を作りて、恭獻公と諡し、愁歎の色を含み、其志を盡し給ふ。此憂に取り重ねて、今年七月廿二日、又鎌倉の管領從四位下左馬頭兼左兵衞佐滿兼、終に逝去し給ふ。生年未だ三十歲。勝光院殿とぞ申しける。京都の歎、鎌倉の憂、其地は變りて其人は別なれども、悲みは同じ袖の涙、乾しあへぬこそ哀れなれ。

足利滿兼逝去

十　前管領朝宗入道遁世

前管領上杉中務少輔朝宗入道禪助は、去ぬる應永十二年の秋の末に、執事職を辭退して、籠居せられしかども、左兵衞佐滿兼、いかにも此人は御憑みの思深く、日夜御

前に召されて、内外の事、隔なく仰下され、暫も御傍を離れ奉らず。近習外樣の人人も、目覺しく思ふほどに侍りける所に、思の外なる憂に沈み、悲しきことは、身一つに集まれる心地して、胸焦れ喉咽び、泣々御葬禮の御供をいたすにも、雨と降行く涙の色、外の見る目も哀れなり。斯くて家にも立歸らず、直に遁世して、上總國長良の山に閑居し、行澄ませる墨染の、衣の袂苔深く、柴庵、隙おろそかにしては、香煙に霧を薫じ、松戸扉緩くしては、懺悔の風しきりなり。岩畔の花は匂徹にして、後苑の昔の色に同じからずと雖、深洞の月は影澄みて、禪席の今の心に準ふべし。世を背きて棄つる身なれば、訪れ來る友人だに、今は中々煩くぞ覺ゆる。昔良峯の宗貞は、深草院に仕うまつり、君の御覺、他に異なりしに、嘉祥三年に、天皇崩じ給ふ。御中院の間は、山科の安祥寺に、人々皆籠りて、果の日になりしかば、裝束の袂を翻し、花のいろ〳〵あらためて、各〻家路に歸り給ふ。宗貞はいとゞ悲みに堪へ兼ねて、

みな人は花の袂になりにけり苔の衣よかはきたにせよ

と詠みて、家にも歸らず遁世して、君の御菩提を弔ひ奉りけり。花山の遍昭僧正とは、此宗貞の事なり。今の入道禪助も、斯る例をや思はれけん、愁歎の色深く、世をすて人となり給ふ。時にとつて聞傳ふる輩までも、哀れといはぬ人はなし。

鎌倉公方九代記 巻五

持氏軍記 上

一 持氏家督

足利持氏管領となる

京都には、前將軍義滿公の嫡男義持公、既に天下の政事執行ひ、卽ち土岐右馬允持益を以て使者とし、御教書をなし下され、左兵衞佐滿兼公の御息持氏を、左馬頭に任ぜられ、關東の管領、遺跡相違あるまじき旨、仰下されけり。持氏今年未だ十二歲、童名幸王丸(さちわうまる)とぞ申しける。何の遠慮もあるまじきに、京都の使節に對面あり、御年よりも才智賢く、進退宜しきに從ひ、禮義正しく整り給ふ。土岐右馬允大に感じ奉り、御幼稚におはしますだに、平人には拔群にして、世の常ならず。御成人の後には、さこそ政理に、道義を守り給はん。關東の公方と仰ぎ奉らんに、不足なる事はおは

しますべからずと、賞め參らせしかば、執事を始めて、當座伺候の大名諸侍、皆悅び申しけり。

二　新御堂滿隆謀叛の雜說

應永十七年六月廿九日、評定始めあり。幸王殿未だ童形故に、御出座の儀なし。鎌倉爰に祖父左馬頭氏滿の三男滿隆は、幸王殿には伯父にて、父滿兼の舍弟なり。鎌倉の新御堂殿と稱して、連枝一族の御事なれば、東國の貴賤恐れをなし、大名諸侍にも餘情重く、時々の訪れ、折節の拜禮、更に絕ゆることなく、門前までも、常に賑ひ給へば、何の不足かおはしますべきに、隱謀の沙汰に及ぶ。內々軍勢を招き、諸大將を語らはるゝ由、幸王殿聞き給ひ、先づ竊に管領入道長基が山內の宅に入り給ひ、近藤五郎を以て、隱謀の仔細を尋ね遣されしかば、滿隆大に驚き、努々其企をいたすにあらず、中々心に思寄り候事にもあらず。只是れ人の申沙汰仕る讒諂の言葉、必ず御許容候まじとて、數通の起請文を書き進ぜられしかば、扨は世間の虛說なり

とて、同じき九月三日、本所に御歸座あり、御心解け給ひけり。

三　幸王殿元服

同十八年正月十六日、上杉安房守入道長基、病に依つて執事職を辭退せらる。同二月九日、上杉中務少輔入道禪助の嫡子右衞門佐氏憲、管領に補せらる。同三月十二日、上杉大藏少輔重藤を以て、京都に上洛せしめ、將軍義持公の御諱の字を申給はり、鎌倉に下向す。同四月二日、幸王殿元服あり、左兵衞權督に兼任して、持氏と號せらる。翌年三月五日御判始めあり。國家の法式先規を守り、政治の理道前代に變らず。世は温和の德に歸し、民は淳化の澤に浴して、鎌倉の賑ひ日頃に越え、一陽春臺に上り、萬物膏雨に霑ふとは、今此時なるべしと、悦ぶこと限りなし。

四　憲定入道頓死

同十二月十八日、前管領憲定入道長基、歲末の祝儀と稱して、一族親類等殘りなく

上杉長基死去

集めて、終日の酒宴あり。一獻に一種の肴を出し、凡そ海陸の珍味を代へ品を備へ、樣々の能者を召して謳ひ舞ひ、樂み誇りて、日の暮るゝをも覺えず。旣に燭を採り、猶酒を勸めたり。主の長基座に在つて、彼方此方より循る盃に、數杯を傾け、沈醉甚しく、壁に倚り懸つて鼾睡せり。人々立寄りて、如何に、醉伏し給ふかとて、起せども〳〵、唯寢入りたる如く、喉に痰の纏はれて、凡て人事を顧みず。滿座興を冷し、こは如何なることぞとて、醫師を召して見せらるゝに、六脈共に上り、藥を入るれども、口より流れて通らず。漸く息も弱りて、其夜の子の刻計りに、終に卒去せられけり。樂み盡きて悲み來り、引換へたる有樣、内外色を失ひて、はや葬送の營をいたし、東岱の秋の雨、涙を綴りて、累々として袖に餘り、北芒の冬の嵐、聲を添へて、歷々として愁を催す。白楊の下、黃壤の底に埋みて、靑塚一塊の主とぞなしにける。形の如くの孝養をいたして、聖靈佛果の爲と、回向するこそ哀れなれ。

五　伊達松犬丸揚旗

同二十年四月十八日、二階堂信濃守が飛脚と、信夫常陸介の早馬と、同時に鎌倉に參着して申しけるは、伊達大膳大夫入道が子息松犬丸、生年二十一歳、會津山中に隱れ居たりしが、家子郎從此處彼處より馳せ參り、懸田播磨守定勝入道玄昌を語らひ、近邊のあふれもの共を招き集めて、其勢五六百騎に及ぶ。大佛の城に閉籠り、百姓を脅して、資財を掠め奪ひ、民屋に亂入して、米穀を取運び、軍勢日に從ひて馳せ着く。漸く國中に蔓り候。城の要害極めて堅固に、切岸高く峙ち、小勢を以て攻干し難く候。早く討手を向はせられずば、災、大になり候べしとぞ告げたりける。持氏聞召し、畠山修理大夫義忠に、八千餘騎を差添へて向はしめらる。既に城近くなりしかば、大手・搦手、同時に押寄せたりけれども、容易く攻上り難し。愁の事に、人數を損じては然るべからずとて、城の麓に陣屋を取固め、夜討の用心してぞ居たりける。城中之に氣を屈して、たゞ折々は、逆茂木の際まで下り立ちて、鬨の聲を作り、矢を射出し、敵を小引きて日を送りけり。斯くて十一月にもなりしかば、嵐に交る時雨は、間なく時なく降りみ降らずみ、朝置く霜の霜柱、膚に徹りて凄じく、

夕積む雪や雪霙、凍え渡りて堪へ難し。手屈まぬ藥もがなと、彼の北越の戰まで、思ひ合せて物わびしく、心細さは限りなし。斯る所に、城中いかゞしたりけん、俄に失火燃え出でて、折節吹荒ぶ嵐に、作り並べし小屋共、一時の間に焼けにけり。いかさま城中に、返忠の者ありけるかと、互に疑ひしが、四方の櫓は、堅固に防ぎて恙なし。寄手八千餘騎、すはや城中の者共の、自滅するぞやとて、四方の軍勢一同に潜き連れて、攻上りしかども、懸田入道は、さすがに老功武勇のものにて、少しも騒がず、郎從に下知して、張置きたる石弓を切つて放つに、寄手若干之に討たれ、むらむらになつて引退く。其間に、火は既に鎮まりぬ。寄手も重ねて進み得ず。されども城中には、山の如く積み置きたる兵粮を焼き失ひ、とても此城を、持遂ぐべきにあらずとて、十二月廿一日、竊に城を落失せたり。松犬丸・懸田入道落失せたる上は、軍兵皆思ひ〳〵に、夜に紛れて落行く所を、寄手の兵追詰め〳〵、或は打伏せ切倒し、或は生捕り搦め取りて、首三百餘を切懸けて、大將畠山を始めて、諸軍事故なく鎌倉に凱陣す。寄手の人數を損ぜずして歸りしは、神妙なるに似たりと雖、永

永の在陣に、さして仕出したる功もなく、城は自滅に落ちて、大將を討洩らしつることを、持氏いと無興し給ひければ、歸陣の首尾、何を以て取繕すべきこともなく、修理大夫は面目なく、暫し出仕を止め、閉門してこそ居られけれ。

六　管領入道禪助卒去

前管領朝宗入道禪助は、長良山に閑居して、滿兼の御菩提を深く弔ひ奉り、霜の夜に、膚は冷なれども、氷を叩きて水を汲み、雪の朝に、手は屈まれども、嵐に向ひて薪を拾ひ、机案に肱を屈しては、思を自性の眞理にかけ、繩床に趺を結びては、心を一境の妙道に沈め、寂寞たる草庵の內に、經讀み念佛して、隨分の行法に隙ありとも見えざりけり。其上東國の管領として、政道を執行はれし時は、名利の瘴霧心頭に被ひ、愛戀の蠱毒意地に塞がり、神魂徒に自繩自縛して、日夜に寧き暇もなかりしに、今は引換へて、耳を松風の梢を渡るに涼しむれば、妄想の雪忽に霽れて、心月自ら光を增し、思を澗水の靜なる流に與へ、洗へば煩惱の垢、速に除りて、意樹既に花

上杉朝宗死去

を開く。明くれば經を讀み、暮るれば念佛して、西方往生の素懐をのみ、心に懸けて念ずる外、更に別の暇なし。棄つる身ならでは、いかで此樂を知るべきと、喜び給ひしが、同二十一年八月二十五日午の刻に、西に向ひ端坐合掌して、永く逝去せられたり。行年七十六歳。雙樹、影おさまり、提河、水澄めり。一族集りて喪に赴き、薪を積みて、夜半の煙と燒き上げたりけれども、燃え盡せる朝、既に寒灰となる。遺骨を拾へば、薰馥自ら鷄舌香を讓り、旃檀却て匂を恥かしめけり。七々の中陰、念佛孝養して、懇に弔ひ申されたり。平生の願望、此時に成就して、往生を遂げられしこと、疑なき驗には、佛事營みける結願の日、西の方に紫雲棚曳き、空の間に花ふりけるこそ不思議なれ。之を見る人、奇特の思いたしけり。

七　建長寺炎上附蘭溪來朝并影向の松

同十二月廿八日の酉の刻に、建長寺門前の在家より、俄に失火出來しかども、靡て燒け鎭まりける。僅の細炊一つ、遙に七八町を隔てゝ飛去り、建長寺の塔の五重の

建長寺燒く

上に落懸る。初の程は、燈籠の火の如くにて、消えもせず燃えもせで見えけるが、塔頭の僧達、身を揉み手を跪きて、跪き惑ひけれども、登るべき懸橋もなく、打消すべき便もなければ、たゞ徒に足を爪立て、空をのみ見てぞ居たりける。此細炊漸くに燃え蔓り、黑煙天を掠めて燒け上る。猛火雲を卷きて翻る色は、四方忉利の上までも上り、九輪地に響きて落つる音は、金輪際の底にも、聞えやすらんと夥し。折節青嵐端なく吹渡りて、餘煙四方に被ひければ、本堂・祖師堂・方丈・衣鉢閣・鐘樓・輪藏・寮舍・浴室・鎭守・土地堂・山門・脇門・廊下・總門に至る迄、同時に燃え立ちて、一宇も殘らず灰燼となる。佛具・經論・資財・雜物は、運び除くべき暇もなし。僧・喝食・維那・侍者等、我身をだに除れ兼ねて、垣を潛り壁を傳へ、辛うじて逃げ出でたり。左馬頭殿は、人數五百計にて、門前に馬を止められ、下知を加へて、消させらるれども、回祿の時至りけるにや、水をかくれば愈〻燃え、打消せば益〻燒け、或は崩るゝ軒の枝に頭を打損じ、或は倒るゝ柱に當り、手足を打折られ、又燒爛れ疵つきて、半死半生になるもの數を知らず。抑此寺は、後深草院の御宇建長三年に、最明寺の時賴の

草創蘭溪道隆禪師の開基なり。禪師は元是れ宋の西蜀涪江といふ所の人なり。十三歳にして、成都の大慈寺に於て薙染し、無準・癡絶等の大老に見え、無明の性禪師と謁して、心印を開覺せり。其志常に遊化を專とし、東域今盛に禪法弘興すと聞きて、商船に乘つて纜を解き、本朝後嵯峨院寛元四年に當りて、筑紫の宰府に着岸し、都城に上りて、泉涌寺の來迎院に入り給ひ、又錫を突きて、相州鎌倉の壽福寺に到り給ふ。平時頼卽ち常樂寺に招請して、政事の暇に、佛法の大道を問ひ、其間に、巨福・建長寺を造營し、建長五年十一月廿五日に、慶讃供養を遂げらる。導師は是れ開山道隆禪師なり。丈六の地藏菩薩を中尊として、同一千體の地藏尊を作られたり。禪師既に移轉し給へば、東關の學徒、笈を負うて集り、講師に連りて大道を求む。然るに禪師、寢室の後に池あり。池の畔に一木の松あり、亭々として直立てり。或日梢偃して、枝撓み葉を布きて、室の軒に傾き懸れり。衆僧甚だ怪しみければ、道隆語つて宣く、今朝何處とも知らず、美しく裝束したる異人來り、此松の上に座して、我と語り給ふ。何處の人ぞと尋ねしかば、此山よりは左の方、鶴ヶ岡に住み侍りと

て、形は其儘隱れ給へり。其人の座せし故に、松の梢は偃したりと宣ふ。疑ふ所なく鶴ヶ岡の八幡大神の、影向し給ふ印なりとて、此松の邊に垣結ひ廻し、八幡所座の靈木と崇め、影向の松とぞ號しける。弘安元年七月廿四日、禪師既に遷化し給ふ。闍維の後、五色の舍利數千粒、灰中にこれあり。荼毘の煙の融たる所には、木の葉草の葉にも、舍利を綴りて累々たり。貴賤葬所に集ひて、拾ひ得るもの少なからず。道隆常に所持し給ふ一面の鏡あり。門人の夢に見るやう、禪師の御影をば、此鏡に止むるなりと告げ給ふ。夢覺めて鏡を見れば、觀世音菩薩の尊像、映りておはします。時賴之を聞き給ひ、取寄せて見られしに、鏡曇りて定かならず。疑を起して磨せらるゝに、大悲觀音の御像形、歴々として拜まれさせ給ふ。時賴大に驚き、謝して禮敬せらる。是れ末代の奇特なりとて、大覺禪師と諡を贈し給はる。本朝禪師號の始めとかや。斯る不思議の靈場も、時節の災を逃れずして、燒失することこそ悲しけれ。地藏菩薩と申すは、からだ山に所住の淨土を構へ、忉利天宮に如來の附屬をうけ、無佛世間の大導師、有情界內の慈仁者なり。柔和忍辱の膚をば、八熱奈落迦の

猛火に焦し、楞嚴三昧の姿は、八寒泥梨耶の堅凍に破り、一切衆生の苦に代りて、六道四生の悲みを救ひ給ふ。六環の金錫は、威德を振うて迷を轉じ、一顆の摩尼は、寶財を降らして、乏しきを賑はし給ふ。たとひ日月は地に落つるとも、濟度利生に、人を棄つるの時なし。是に依つて一千一體の尊容を磨き、安置せられし梵刹なれども、佛殿形像諸共に、一時に煙となり給ふ。法滅の瑞相かと、歎き給ふ計なり。又影向の松と申すは、其上幾年經たりとも、生長の始めは知る人なし。彼の奇特の名を得しより、今に至りて百六十餘歲、星霜重なり木立物古りて、端直森々として梢を捧げ、福祠の節々枝を垂れ、四時を貫して葉を返す。三冬に堪へてよく霜を凌ぎ、花は十返の色を顯し、綠は千歲の德を布きて、兎絲上に惑ひ、神苓根に生ず。誠にめでたき靈木なれども、火災の難に罹りぬれば、空を燒く薪となり、立ち乍ら炭灰と變じけるこそ怪しけれ。八幡大菩薩の神慮も、いかゞと計り難し。何さま國家の爲め、宜しかるまじき先兆なりと、諸人高きも卑しきも、心にかけて危みけり。

八　越幡六郎追放附上杉禪秀籠居

同廿二年三月五日、左馬頭持氏、評定意見始めあり。諸國の政事を聞召されしかば、管領職を始めて、評定衆・奉行・頭人に至る迄、各〻其所職役義を守りて、誤りなからんことを思ひ、私を顧みて順理に從ふ。是に依つて道義正しく、禮讓亂れず、直なる軌に歸し侍る所に、持氏、如何なる心や附き給ひけん、政道妄に雅意に任せ、人望に背くこと少なからず。爰に常陸國の住人越幡六郎は、當家に於て、他念なき忠勤をなせしものなり。此頃在鎌倉の間、病氣さし起り、暫く養保を加へて、出仕をいたさず。近習の人、持氏に惡しく取なしけるを、持氏之を信じて、評議にも及ばず、仰出されけるは、越幡此頃虚病を構へ、出仕を止めて遊興を事とし、殿中を蔑にして、濫行を恣にする由、所爲甚だ然るべからず。一人寛容の哀憐を施せば、諸人必ず之を倣ひ、行義既に亂るゝときんば、國家騷動の基となる。早く戒を加へて、向後の懲とすべきなり。六郎が所帶、悉く闕所いたせと下知し給ふ。管領禪秀之を聞きて、持氏を諫め

申しけるは、凡そ國家を治むる道と申すは、仁慈道德を本とし、寛大溫和を行ひ、禮を專として敬に歸るときんば、人是れ木石に非ず、恩を戴き惠に浴して、且は恥ぢ且は恐れて、惡を改め風に歸して、終に淳厚の化に靡き從ふものなり。然るに一事の細故を以て、罰を強くするときんば、人是れ外には恐るゝに似て、伏するが如くなれども、內に怨を含みて、終に國家災の根となり、或は傾き立ちぬれば、諸人の心一同せず、土の如くに崩れ、瓦石の如くに解けて、其亡ぶこと、手を飜すよりも速なり。此故に恐れて伏するは、如かじ、懷めて從ふにはといへり。苛政は溫宥に優らず、警誡は慈惠に如かずと申す事の候。たゞ枉げて穩便の御沙汰を以て、宥め許さるべしとぞ申しける。持氏聞き給ひ、科を宥めて惠を厚くし、罰を緩くして賞を大にすることは、上代正直の世の政事なり。今の世の人には當るべからず。威を立て權を逞しく、罪過は強く理り、戒は嚴しくして、後を懲すに如しくはなしとて、許容の色なかりければ、禪秀本意なき事に思ひ、翌日より所勞と稱して、出仕を止めて籠居せらる。持氏大に怒つて宣はく、人を諫むるといふは、道に依つて理を立て、法に從ひて

時を計るべし。何ぞ上代聖賢の政道を以て、末世愚民の教化に宛ふ。是れ猶ほ鷄犬に金銀を與へ、牛馬に花屋を見するが如し。更に受容るべからず。然るを禪秀贔屓の沙汰を以て、越幡を宥めんとす。是れ災害の種を貯へ、毒賊の根を育するに非ずや。斯る不義のものは、後に必ず亂を起す。唯疾く災を拂ふに如くことなしとて、六郎が領地を沒收し、其身を追放せられけり。又禪秀は、持氏を怨みて籠居せりと覺ゆ。力なき事なりと仰せられけり。禪秀聞きて彌心ならず、五月二日に職を辭す。同十八日に、安房守憲定が長男憲基を安房守に任じて、管領に補せられたり。

九　浮説に依つて鎌倉騷動

同七月の始め、鎌倉中俄に騷動して、何とは知らず軍兵四方に馳せ違ひ、或は殿中に入來り、或は連枝方に集り、又は前の管領の本、今の執事の家、思ひ〳〵に參り集ふ。町小路の諸人は、すはや大事出來して、鎌倉中只今軍あるべしといふ沙汰し、男女巷にさまよひ、資財雜具を持運ぶ。其中に盜賊ありて、或は財寶をかち落し奪ひ取り、

逃げて行くを追詰めて、打伏せ切殪すもあり、或は女童を捉へて、涇むくり赤裸になされ、辻小路に立ちて泣き叫ぶもあり。これは抑も如何なることぞ。何の目に見えて、斯くは騷ぎけるぞやとて、奉行頭人等町中を走り廻り、汗水になりて觸れけれども、唯騷ぎにどよめきつゝ、谷七郷の間、物音も聞え分かず。日既に暮方になりて、持氏より御使を出され、連枝一族の御許へ、如何にも穩に申鎭めらるべき旨、仰遣はされしに、如何なる事とも、其根元を知る人なし。魔障の所爲なりと心づきて、夜に入りて後、漸々鎭りぬ。翌日之を聞けば、禪秀深く持氏殿を怨みて、殿中に押寄せ、憤を散ぜんとする由沙汰ありて、此騷動は起りにけり。上杉入道禪秀は、中々思ひも寄らざることに、此沙汰の侍るは、いかさまにも禪秀を讒する者のありて、申出しけりと覺ゆ。靜に其人を聞出し、嚴重の罪科に行ふべしとて、其夜左馬頭殿へ參向して、誤りなき旨さまぐ〵陳謝いたし、八月九日より、又出仕をぞいたされける。

十　滿隆・禪秀反逆 附 鎌倉軍

夫れ功名は立つこと稀にして、亡ぶること早く、禍亂は起り易くして治め難し。故左兵衞佐滿兼に、四人の連枝おはします。次郎滿直は、左兵衞佐に任ぜられ、稻村殿と號す。三郎滿隆は、右衞門督に任ぜられ、新御堂殿と號す。四郎滿貞は、篠川殿と號す。五郎滿孝は、大御堂殿と號す。太郎滿兼は、父氏滿の家督をうけ東國を治め、子息持氏に世を讓り、鎌倉の管領として、權威高く東國に輝き給ふ。持氏別腹の兄持仲は、先年奧州より迎へ入れ參らせ、連枝一家相守り、大名諸侍共に從ひ、治め鎭めし關東の世の中、たとひ如何なる事ありとも、鎌倉の御所には、手を指す事もなるまじき所に、此頃持氏政道の行、理非正しからず、心に任せて進退し、無禮にして短慮におはします。是に依つて連枝一家も疎く隔り、諸將侍民も怨を含む人少なからず。叔父新御堂殿竊に計りて、鎌倉の世を傾けばやと、思ふ心ぞ附きにけり。同廿三年八月に、上杉入道禪秀、此色を見て、滿隆の家に行きて、謀叛のことを申勸めたり。今是れ持氏の御行跡、萬雅意に任せ、無禮非道なること、甚だ人望に背き給へり。諸國の間怨を含み、憤を存ずるもの是れ多し。君日來の御志、德を施し道を守り、惡を

足利滿隆上杉禪秀兵を擧ぐ

以て人を棄て給はず、恩を以て他を憐み給ふ。陰德既に時到りぬ。若し思召立ち給はゞ、誰か背き申すべき。禪秀又同意仕る程ならば、東國の輩一味の人、諸國にあるべく候。早く祕計を廻らし給へと申しければ、滿隆大に喜び、虛病を構へ出仕を止め、滿隆の廻文に、禪秀己が狀を添へて、竊に東國に觸れ廻らす。同意の輩には、千葉新介・新田・岩松・澁河左馬介・舞草太郎が一類、倉賀野を始めとして、武州に丹黨・荏原・蓮沼・別府・玉井・瀨山・甁尻、甲州に武田、信州に小笠原、豆州には狩野の一族、相州には曾我・中村・土肥・土屋の輩、常州には名越一黨・上總入道・佐竹の一族・小田太郎・常陸大掾・小栗左近丞、野州には那須・越後入道・宇都宮左衞門尉、奧州には葦名・白川・田村・石川・南部・葛西の輩、篠川殿を大將として、御館に馳せ集まる。御所中の侍には、木戶內匠助・伯父二階堂・佐々木の一族に與す。同十月二日の夜、新御堂滿隆・乙御所持仲、忍びて御所を退出し、西御門寶壽院に入り給ふ。軍兵馳せ違ひ、上杉入道の館に集まることは百餘騎、禪秀大將として、持氏の御所を圍み、鬨の聲を揚げ、門を打破り塀を乘越して、殿中に攻入りけり。持氏は宵

の酒宴に沈醉して、前後も知らず伏し給ふ。近習木戸將監は、物具すべき暇もなく、太刀計押取り、廣庭に走り出でつゝ込入り、寄手三人を切伏せ、殘る者共を門の外に追出す。其間に持氏は、上杉安房守憲基が佐介の亭へ入り給ふ。相從ふ人々には、一色兵部大輔・同子息左馬助・次男左京亮・故讃岐守が舍弟掃部助・同甥左馬助・龍崎尾張守・同嫡子伊勢守・早川左京介・同舍弟下總守父子・梶原但馬守兄弟・印東次郎左衞門尉・新田四郎・那波掃部助・島崎大炊助・海上筑後守・同信濃守・梶原能登守・江戸近江守・三浦備前守・高山信濃守・今川三河守・同修理亮・板倉式部丞・香河修理亮・畠山伊豆守・筑波源八・同舍弟八郎・藥師寺常陸介・佐野左馬助・二階堂・小瀧・宍戸大炊助・同五郎・小田宮内少輔・高瀧次郎、都合五百餘人、御所中に集り防ぎ戰ふ。寄手叶はずして、四方に靡き散りて、禪秀が館に引退く。持氏のおはします憲基が亭へ、馳せ來る人々には、上杉修理大夫滿朝・長尾出雲守・大石源左衞門尉・羽繼修理亮・同舍弟彥四郎・安保丹後守・長井藤内左衞門尉、其外木部・寺尾・小幡・白倉・加沼・金子・金田・刀石の輩、我も〳〵と馳せ參る。五千餘騎になりたり。禪秀は、旣に持氏御所を落

ちて、佐介の亭に入り給ふと聞きて、人數を點檢するに、七千餘騎なり。之を以て押寄せ、戰を一擧に決し、憤を片時に散ぜんと、同十月四日辰の刻に、佐介の亭へ押寄すると聞えしかば、上杉憲基、さらば諸口に人數を出して防ぐべしとて、方々の手分をぞ致しける。濱表法界門へは、長尾出雲守入道郞從二百餘騎、上杉安房守憲基が手勢百騎を差添へて向はる。海小繩小路へは、佐竹左馬助義憲二百七十騎にて向はる。藥師堂面へは、結城彈正少弼二百餘騎にて向はる。無量寺口へは、上杉憲光が男藏人憲長百七十騎にて馳せ向ふ。氣生坂へは三浦介手勢五百騎、相州在々の狩武者五十騎を率して馳向ふ。扇が谷へは、上杉伊豫守顯定が子息彈正少弼・同男治部少輔持定、四百五十騎にて固めたり。殘る軍兵は諸方の攻口、弱からん方へ加勢の爲とて、佐介の館に止め置かる。新御堂滿隆は、五百餘騎にて寶壽院を打出で、若宮小路に陣を張り、旗の手を山風に靡し、甲の星を並べて控へらる。千葉新介・同嫡子修理大夫・同陸奧守・相馬・大須賀・原・圓城寺の兵共は、米町表に陣を取る。佐竹上總入道・嫡子刑部大輔・二男依上三郞・三男尾張守・土佐美濃守・三河五郞は、濱の大鳥居

より、極樂寺口に押寄せたり。大縣入道禪秀が陣には、嫡子中務大輔憲房・上杉修理亮氏顯、郎等には千坂駿河守・子息三郎・岡谷豊前守・嫡子孫六・次男彌五郎・同從弟式部大輔・恒谷入道・同舍弟平次左衛門尉・蓮沼安藝守・石川助三郎・加藤將監・矢野小次郎・長尾信濃守・同子息帶刀左衛門尉・坂田彈正忠・小早川越前守・同甥孫六・矢部伊勢守・嫡子三郎、其外臼井・小櫃・大武・沓係・太田・神田・秋本・神崎・曾我・中村の一族一千七百餘騎、鳥居の前より、段々に東に向ひて陣を取る。同六日の巳の刻に、禪秀が軍兵共五百餘騎、六本松に押寄せ、上杉霜臺四百五十餘騎にて、扇が谷より出で、岩松・澁川が兵と相戰ふ。上杉方の家人上田上野介・疋田右京亮討死す。霜臺安からず思ひ、一陣に駈出で、續けや者共と下知しけれども、後より崩れ立ちて、霜臺深手を負ひける故に、力なく引退く。禪秀之を見て大に勇み、勝に乘つて岩松治部少輔に手勢を添へて、氣生坂に押懸る。持氏は、上杉彈正氏定、手負ひたりと聞き給ひ、新手の加勢を遣すとて、御馬廻に梶原但馬守・海上筑後守・同信濃守・椎津出羽守・園田四郎・飯田小次郎に、二百餘騎を差添へて、坂口に向はせらる。勢ひ懸りて、勝に

足利持氏小田原に奔る

乘つたる岩松が軍兵共、之を物ともせず、坂の上を追下し駈上り、半時計り戰ふ間に、梶原・椎津は、敵に組まれて討死す。其外の兵共、皆疵を蒙り、終に氣生坂をば攻破られ、園田・飯田・海上は、無量寺に引退き、上杉藏人憲長が陣と、一つになりて防ぎ戰ふ。憲長が家來大庭式部丞を始めて、五十六騎討死す。岩松・澁川が兵、國淸寺に火を懸けゝれば、味方の諸軍、煙に咽び火に迷ふ。江戸近江守・畠山伊豆守以下の諸大將、三十餘人討死す。軍兵共は、右往左往に落ちたりけり。餘煙四方に滿ちて、佐介の亭に燃え懸り、左馬頭殿は、後の小川より出で、極樂寺に退き、肩瀨・腰越の汀を經て、相州小田原に落ち給ふ。土肥・土屋が兵共出向うて、前を支へ後を切つて、鬨を作り矢を射懸けたり。一色兵部大輔・同左馬助・今川三河守討死す。同七日の暮方に、左馬頭持氏は、箱根に落着きて、別當刑部少輔案內者として、伊豆の名古屋に至り、草堂に入り給ふを、狩野介聞付けて、走湯山の大衆を語らひ、押寄せて討ち奉らんとす。木戸將監を始めて、二十餘人防ぎ戰ふ。今日終日の疲れに、心ばかりは猛しと雖、力撓み足もとをりければ、內に引入り堂に火をかけ、各〻腹搔切つて死に

ければ、其間に左馬頭殿は、管領憲基・佐竹左馬介義憲、僅に七人になりて、駿州大森が館より、山深く分入りて、國司今川上總介を賴みて、瀨名の奥、安樂寺に落着き給ふ。管領憲基・佐竹義憲は、越後を指して赴きけり。

十一　持仲・滿隆不和附佐竹義憲出張

さる程に新御堂殿は、我れ既に此大事を思ひ立ちて、漸く本意を遂げたり。鎌倉の管領の事、誰か爭はんと手に握りて思はれけり。持仲は又、我こそ故左兵衞佐殿の嫡子なれば、關東の事は相知るべきなり。諸將諸侍皆我旗下に屬すべしと、奢心の附きしかば、滿隆と持仲と、それとはなしに互に隔つる色あり。持仲既に大名諸侍に向ひて、無禮なること多かりしかば、一味同心の輩相反きて、先非を悔えて、持氏方に屬するもの多かりけり。十一月廿一日、上杉伊豫守憲盛、既に大將乙御所持仲を具足し、武州に發向せられし所に、東一揆・江戸・豐島・二階堂下總入道、各持仲公に屬しければ、從ふ輩、皆ぬけ〳〵に落失せて、陣中物寂しくなりにければ、此にては

中々敵退治の謀叶ふべからずとて、持仲・憲盛は軍を引きて、入間川より鎌倉に歸られたり。持氏は、瀬戸の奥より飛脚を以て、京都將軍家に告げられたり。管領憲基は、越後より早馬を立て、京都に申訴へらる。將軍義持公聞き給ひ、東國の騷動すること、且は國家の大事なり。早く加勢を遣して、左馬頭を鎌倉に安堵せしむべきなりとて、山名宮內少輔時熈に、三千餘騎を差添へて向はせらる。佐竹左馬助義憲は、同十二月十五日越後を立ちて、同十九日、臼井坂を越えて上州に赴き、那須・宇都宮が一族と相戰ふに、京勢大軍にて下ると聞きて、那須・宇都宮崩れ立ちて、四角八方に別れて、皆散々になりたり。之より上州近邊の者共降參して、持仲・禪秀を反きしかば、道開けて、心安く信州に發向す。

十二　持仲・滿隆・禪秀一族自殺

新玉の年立返り、昨日に變らぬ空の景色も、珍かなる春を迎へ、白雪は未だ溶けざれども、霞は山に棚曳き、千歳を祝ふ元三の朝、家々屠蘇を酌むと雖、滿隆・持仲は、反

くもの多しと聞きて、更に安堵の思なし。同廿四年正月朔日に、禪秀が一族を先として、都合一千七百餘騎、鎌倉を立ちて、同五日世谷原に着きて陣を取る。南一揆・江戸・豐島の者共、爰に出向ひて、暫く戰ふと雖、僅に百餘騎入替り、新手もなく、終日戰ひ暮らしければ、味方若干討たれて、江戸・豐島の輩、戰は之に限るべからずとて、夜に紛れて落失せたり。持仲・禪秀、門出よしと喜び、軍兵を招きて、佐竹を討たんと相計り、先づ人馬の足をぞ休めける。陣を取固めて、馳せ來る味方を相待ちける所に、岩松四郎賴氏が一族、大に戰功あり、度々の軍に先を駈け、當る所敵を靡け備を破り、武勇既に諸軍に越えて、目を驚かしければ、持仲も禪秀も、此人に過ぎたる忠戰のものなしと思はれたり。是に依つて岩松甚だ奢る心附きしかば、諸將同心の輩に、無禮緩怠の有樣、傍若無人なり。澁川左馬助・舞木太郎の諸將、之を目覺しく思ひて、此軍の勝利、我一人に在りと、鼻の先、蠢くこそをかしけれ。大將持仲・禪秀も、我等が戰功を外になし、岩松一人を、世になき武勇者と、思はるゝ事こそ安からねとて、諸將諸侍、皆岩松を嫉みて不和になり、戰の評定にも出合はず。同九日

の卯の刻に、旗の手山風に靡き、明白む横雲に閃きて押來る。禪秀之を見て、あれは敵か、但味方の加勢の馳せ來るかといふ程こそありけれ。佐竹左馬助一千五百餘騎を率して押寄せ、二手になりて鬨の聲を上げたり。岩松・倉賀野・別府・玉井・曾我・中村の兵共、すはや敵の寄せたるは。大將はたぞと問ふに、佐竹左馬助なりと聞きて、取る物も取あへず、馬に鞍を置かせ、物具を固め、我も〳〵と進み出で、敵味方相懸りに懸りて、打合ひ攻合ひ、散々に戰ふ。佐竹が先陣五百餘騎開き靡き、八十餘騎討たれてさつと引く。二陣駈出でて入替り、半時ばかり戰ふ。別府・中村、手を負うて引退く。曾我・玉井打立てられて、引色(ひきいろ)になる所を、滿隆の郎從金子左近太郎、大長刀を水車に廻し、向ふ敵三騎を薙伏せ、七八騎に手を負はせたりければ、之に辟易して、進み兼ねてぞ見えたり。佐竹此由を見て、四尺一寸の大太刀を拔いて、眞先に駈出で、金子を目蒐けて馳せ來る。金子、佐竹を目に蒐けて、あはれ敵やと待かけ、長刀を取延べ、馬の諸膝薙がんとしたりけるを、佐竹心得て、金子が右の脇を乘り拔け、手綱を返すかと見えし所に、如何したりけん、金子が甲の鉢を健(したゝか)に打たれ、目昏れ心

消えて、長刀を杖に突き、立竦みになりて、既に討たれんとしける所に、禪秀此由を見て、金子討たすな者共とて、手勢百餘騎、拔き連れて懸りしかば、佐竹が軍兵進みて懸合ひ、入り亂れて戰ふ。或は組んで首を取り、或は組まれて首を取られ、手負を助けて、横切に引くもあり。之を追懸けて打止め、又は引返して討取り、馬煙空に廻りては、土風の微塵を吹立てたるが如く、太刀の鍔音、鬨の聲、山も崩れ地も動く計りなり。鞍の上空しき放れ馬共、禪秀・持仲の陣中に走り入り、佐竹が兵の鋒先には、手に〳〵首を貫きて差上げたり。これは如何にと、いふ程こそありけれ。持仲の旗本より崩れ立ちて、軍兵散々に落ちて行く。佐竹之を見て、すはや味方打勝つたり。進めや兵共とて、眞先に駈けて攻立つるに、後をも見返さず、我れ先にと逃げ散りければ、持仲も禪秀も、心ならず引立てられ、鎌倉を指して退き歸りて、口々を固めんとするに、軍兵散々に落失せて、手分をいたすべき様もなし。其間に佐竹、軍兵を進めて、鎌倉に押懸り、四方に手配して、口々を切塞ぎ、一人も漏らさじと取固めしかば、近國の武士馳せ加はり、軍兵は雲霞の如し。鳥ならば、空を翔りても遁るべく、

魚ならば、水を潛りても逃ぐべきを。岩を擘き地を穿つべきやうもなし。持仲・滿隆・禪秀以下、男女僅に百餘人、雪の下に集まりて、湛水の魚の如く近付く命を松風の梢を渡る音までも、あはや敵よと胸を冷し、額を合せて泣くより外の事なし。滿隆仰せけるは、弓矢取る身の家に生れ、思立つ事の本意を遂げず、利を失ひ軍に負けて、死すべき所に死を遁るれば、汚き恥を見るといへり。昨日の軍に討死すべかりしものが、一日の命を惜みて此まで引返し、味方の兵とては悉く落失せ、敵はや四方より攻め近付くと見えて、鬨の聲、只此處許に頻に聞ゆ。言甲斐なき者共に生捕られ、尸を馬蹄の叢にさらし、恥を死後の人口に殘さんことも、口惜しく覺えたり。敵此一所に限るといはゞ、打拂ひ切拔けても落つべし。今は諸國諸侍等反きて、誰か落人を惠むものあるべき。爰にて爽に腹切つて、恨を泉下に報ぜんと宣へば、禪秀申しけるは、御運漸く傾き、滅亡の時既に近きに在り。是れ天理の來る所、更に謀の拙きにあらず。舞木・澁川等の者共は、皆敵に屬し、曾我・中村等は落失せたり。頼み切つたる岩松・倉賀野だに、跡をも見せず成行き候へば、今は誰を賴みに、何をか

禪秀自盡

滿隆持仲自盡

待つべき。一方を打破り落行き候とも、向ふ所は御敵となり、御力を合すべきものはあるべからず。雜兵の手にかゝらんよりは、たゞ御自害あるべし。死して物知ることあらば、恨は終に報ずべし。敵はや亂れ來れり。禪秀御道しるべ申さんとて、腹搔切つて伏したり。同嫡子憲盛生年二十九歲、次男五郎憲春、續いて自害しければ、鶴が岡の別當僧快尊・極樂寺の僧禪瑾、皆禪秀が末子なりければ、出家なれども、謀叛人の子といはれ、如何なる憂目に遭はんことを恐れて、同じく腹を切りにける。滿隆・持仲之を見給ひ、刺違へて伏し給へば、女房達姬君などは、奧深く住み給ひて、斯る事は未だ見慣れぬ憂目に、今の別れの悲しさ。恐しき中に取集めて、夢現とも辨へず。聲を限り泣叫ぶ有樣、譬へていはん方もなし。長尾兵庫助氏春申されけるは、女性の御身は苦しかるまじ。敵の中を通り給ふとも、殺し奉る迄の事は候まじ。何方へも紛れ行きて、片邊土に御身を隱し、暫く世の鎭まらん程を待ちて、都へ忍びて上り給はゞ、所緣の人々、爭でか見棄て參らすべき。我等も自害いたすべければ、爰におはしまさば、敵の參りて、重ねて見苦しき事もこそあるべきに、疾く〳〵何方

へも立忍び給へと、涙と共に申されしかば、滿隆の北の方宣ひけるは、此折節幼き女童を引具して、見も知らぬ邊に立迷はゞ、誰か其方樣の妻や子供と思はざらん。又日頃知りたる人の許へ、忍びて宿り侍らば、敵聞付けて搜し出され、我身の恥を見るのみならず、幼き子供の憂目に遭はんも、心憂かるべし。たゞ爰にて刺殺し、世を秋風の露の命を、元の雫となしてたべやとて、女房達は、長尾が鎧の袖に縋り給へば、さらば此上は力なし。西に向ひて念佛申し給へとて、十八人の女房達を引寄せ〳〵、刺殺し參らせ、我身も自ら首掻落し、北枕に伏しければ、其外の輩、或は腹を切り、或は刺違へ、皆重なり伏したり。血は席下に溢れ、漫々として河を流し、尸は地上に横り、累々として墳を築く。滿隆・持仲の親族五十七人、上杉禪秀が家族四十二人、男女合せて九十九人、一時に草上の露と消えて、泉下の鬼とぞなりにける。此日如何なる日ぞや。應永廿四年正月十日、持仲・滿隆・禪秀が一家、速に滅亡して、持氏日來の蟄懷、忽ちに開き給ふ。勝敗其地を代へ、榮枯其所を改めたり。世の變化こそ量り難けれ。

十三　岩松治部大輔被誅戮

同十七日、左馬頭持氏鎌倉に歸り入りて、淨知寺に宿し給ふ。上杉安房守憲基、管領職に還任し、佐竹左馬助義憲に、軍功の賞行はれ、評定の頭人とせられしかば、武功といひ權威といひ、由々しくぞ見えたる。梶原美作守入道奉行として、御所の傾廢を修理し、同四月廿八日御移徙あり。此の日憲基執事職を辭して、豆州三島に引籠る。斯る所に岩松治部大輔又反逆を企て、禪秀與力の殘黨を招き集め、五百餘騎にて、入間川の邊に出張し、在々を放火し、兵粮を掠め取る。舞木宮内丞は、始め禪秀に一味せしことを悔み、如何にもして鎌倉殿の御勘當を、許され奉らばやと思ひける折節、此由を聞付け、別府・玉井・南部・中村が一族に觸れ廻らし、此度岩松を退治し、勳功を顯し、左馬頭殿御欝憤を散じ奉り、本領安堵せずば、以來に於ては、悔ゆとも甲斐あるまじ。早く出でて、忠戰をいたさるべしと申しければ、人に隱れ世を恐るゝ輩、屈竟の事なりと思ひて、我も〳〵と馳せ集り、其勢八百餘騎、舞木宮内丞を大將

として、同五月廿九日、入間川に出向ひしかば、例の大逸りなる岩松治部大輔、我が武勇の鋒先は、日來に見知るべきものを、舞木が軍立恐るゝに足らず。唯一揉みに蹴散らさんとて、五百餘騎を同時に打入れ川を渡し、鬨を作りて攻懸る。舞木は鬨の聲をも合せず、態と敵を渡させ、川端二町計を隔てゝ陣を備へ、敵半渡しけるを見濟し、どつと喚いて懸けたりければ、岩松が五百餘騎、立つ足もなく捲り亂れ、南北に散り分れ、或は川に追陷められ、馬人共に流るゝもあり、或は鞭に鐙を合せて、逃げ行くもあり、右往左往に亂れ立ちて、軍の事は思ひも寄らず、我れ先にと落行き、命を求むるより外の心なし。折節此頃降續きたる五月雨に水嵩增り、而も濁りて流れしかば、瀨枕に馳せ懸り、押流されて死するもあり、敵の一人も討取らず、矢の一筋をも射違へず、犬死するもの數を知らず。舞木勝に乘つて、懸れや〳〵と下知しければ、八百餘騎備を亂し、鬨を作つて追つて懸る。岩松は主從八騎、遙の川上を渡さんと、淺瀨を尋ね求むる所に、中村彌五郎時員、郎等二十五騎にて追つて懸り、其處を渡さんとし給ふは、岩松治部大輔殿と見るは僻目か。正なくも敵に後を見せ給ふ

ものかなと、言葉を懸けられ、岩松から〳〵と打笑ひ、一軍の大將たる者の、軍に利なくして、死するは易く生くることは難し。命を惜みて落行くにはあらず。時の運を侍つべきが爲なりとて、猶靜に打ちて行くを、中村が郎從舟木與次が放つ矢に、岩松が乘りたる馬の太腹を、箆深(のぶか)に射させ、馬は頻に跳ね上れば、鐙を越して下り立ち、今は遁るべからずと思ひ定め、八騎の郎等を左右に立て、三尺九寸の太刀を拔き、眞額に振翳して飛んで懸る。中村小長刀にてあひしらふ。八騎と二十五騎と打合ひ切結ぶ。鍔元より火を出し、切先より血を流して戰ふ。其間に岩松は、中村が家子由井藤十郎が打つて懸るを、弱腰かけて車切に切つて落し、其馬に打乘り、獅子象のごとく忿撃し、當る所を幸に、打落し切殪しければ、岩松が勢五騎討たれ、中村が兵十三騎討たれたり。舞木宮内丞遙に見て、手勢百餘騎にて馳せ來り、岩松を中に取籠めたりければ、主從四騎、四角八方に切つて廻り、手負死人廿四人に及びしかば、舞木いふやう、只四人の敵を、此大勢にて取籠め、切合ひ戰ふ故にこそ、人數も損ずれ。押並べて引組み、折重なつて生捕にせよと下知しければ、岩松聞付けて、敵に

組まれじと、馬の足を一所にためず、馳せ通り切抜け、千變萬化して時を移す。中村が郎等山本市之丞といふもの、岩松の馬を諸膝薙ぎて、落つる所を、隙間なく組みたりけるを、物の數ともせず、山本をかい攫んで、下切にせし所を、舞木が兵共馳せ集り、手取り足取り生捕りしかば、三騎の郎等も、深手あまた負うて、皆敵に組まれ、刺違へて死にけり。軍散じて岩松を、鎌倉に參らせたり。左馬頭殿仰せけるは、武勇力量勝れたるものなれば、助け置くべしと雖、日頃己が武力に慢じて、諸將に無禮の振舞をいたし、猶此後は亂を起すべきものなりとて、閏五月十三日、龍の口に引出され、誅せられけり。

鎌倉公方九代記　巻六

持氏軍記中

一　上杉安房守憲基病死

上杉憲基病死

同廿四日、安房守憲基鎌倉に歸參し、同晦日に管領職に還任す。これは左馬頭殿、萬事の政道を我意に任せられしかば、憲基屢諫言しけれども、承引し給ふことなし。是に依つて暫く職を止めて、三島に籠居せられしを、持氏樣々怠狀ありけるに、安房守さすが忠勤を忘れずして、再び歸りて、國政を勤められしかば、愈威勢高く關東に輝きける所に、同じき秋の頃より、負薪の憂に依つて、起臥(おきふし)惱み給ひ、湯藥鍼灸の治療怠なしと雖、天年の終るには、耆扁が術も驗を失ひ、翌年正月四日、終に無常の雲を分けて、法性の空に歸られたり。道號は無悔、法名は海印と稱す。持氏大に歎き給ひ、

自ら法華經を轉讀し、南無幽靈頓生佛果と、回向し給ふぞ忝き。さこそ九泉の苔の下にても、懇に之をうけて、歡喜の眉を開きぬらんと、近習の人々、隨喜の涙を流されけり。

二　上總國の本一揆退治

同廿六年正月八日、憲基の嫡男憲實を安房守に任じて、管領職に補せらる。爰に上總國の本一揆の者共、左馬頭殿の御勘氣を蒙り、本領を沒收せられ、様々訴へ申すと雖、先年禪秀に與せし張本なりとて、御免なかりしかば、一族黨類怨を含み、去年五月の末に、反逆を起しければ、一色左近將監に、持氏の旗を給はり、討手の大將として發向す。本一揆未だ城郭をも定めず、兵粮をも用意せざりければ、叶ひ難く思ひて、皆ちり〴〵に跡を晦して、山野に隱れたり。今年正月の中頃より又蜂起して、三百餘人集り與し、近鄕の地頭代官を夜討にし、米穀を掠め取りて、小坂城に立籠ると、鎌倉に告げ來りしかば、木戸内匠助を大將として、一千餘騎を遣し、三月三日の早天

に、城の四方を取卷き攻められけるに、山上堅固の城なれば、容易く上り難く、軍兵倦みて思ひける所に、大將木戶內匠助竊に謀を廻らし、城中一方を固めたる寺西喜平次に內通し、寄手を引入るべき企ある由、隱れなく沙汰しければ、城兵互に疑うて、心を置合ひしかば、始終一味して、此城を守り難く思ひて、同六月六日、本一揆の大將榛谷小太郞重氏、降人になつて出でたりければ、諸軍ちり〴〵になつて落失せけり。重氏は鎌倉に召され、本領安堵せさせらるべきに、由井の濱にて誅せられたり。降るを殺さずとこそいふに、政道の苛き故に、重氏誅せらる。非常の振舞、行末賴もしからずと、諸人唇を飜す。重氏が末子小太郞は、竊に上州の山中に隱れたり。同廿八年九月上旬に、甲州武田の一族、鎌倉を反く由、實否を聞召さん爲に、吉見伊豫守に五百餘騎を添へて向けられ、其のこと實ならば、攻干して歸るべき由仰付けられ、卽ち馳せ向ひければ、武田左馬助信長出合ひ對面して、全くこれなき旨陳じ申すに由つて、伊豫守鎌倉に歸陣す。此月十二日、若宮八幡の中の鳥居を慶讃す。同十一月十二日に、圓覺寺炎上す。

三　佐竹入道常元父子自害附上杉憲秋三島に攻下る

同廿九年十月十三日、佐竹上總入道常元は、左馬頭持氏の命に反き、己が館に歸り、謀叛を起さんと企てけるを、管領憲實聞付けて、上杉淸方が長男淡路守房實は甥なり。之を討手の大將として、二百餘騎を差添へ、佐竹が館に向けらる。上總入道父子家子郎等僅に十三人、防ぎ戰ふと雖、小勢にて叶はず、比企が谷の法華堂にて戰ひ、刺違へて死にけるこそ痛はしけれ。後に聞けば、さしたる罪科もなかりしを、左馬頭近習に、佐竹入道を惡む者ありて、惡く讒し申しけるを、持氏之を信じて、斯く亡ぼし給ひけり。年頃忠勤の志、私なかりし人なりけるを、科の實否をも糺されず、卒爾に討手を向けられ、あたら武士を失ひ給ふ。末賴もしからずと、思ひ奉る人も多かりき。此事京都將軍義持公傳へ聞き給ひて、斯る振舞にては、國家久しく治まるべからず。關東必ず亂に近かるべし。内々憤り思召しける所に、上杉宮内大輔憲秋・同舍弟治部少輔憲朝は、禪秀が末子なり。先年雪の下の族滅の日、其場を遁れ出でて京都に

上杉憲秋等兵を起す

上り、將軍家に忍びて居たりしが、心ざま甲斐々々しかりければ、召出されて奉行相勤めたりしに、斯る御氣色の折を得て申入れけるは、左馬頭殿は、父禪秀の爲に、讎敵にておはします。其恨骨髓に徹りて忘れ難く候。恐れ乍ら御許されを蒙り、人數を招きて、彼處に馳せ下り、近邊を擾ひ亂して歸京仕らば、父の入道が、泉下の憤をも休め、我等が恨も散じ申すべしと歎きければ、將軍仰せけるは、鎌倉の政道正しからず。關東の諸國、始終穩なるべからず。されども汝が力を以て、只今鎌倉を亡すことは叶ふべからず。若し此弊に乘りて、諸將或は持氏に反き、汝に力を合せんには、是れ幸なるべし。先づ義持は知らざる由にて、竊に京都を打立つべしと御許容あり。憲秋・憲朝大に喜び、軈て江州に赴き、一族下人を催しければ、同意與力の軍兵一千二百餘騎に及べり。これより駿州沼津・千本の松原・伊豆の三島に攻下りしに、鎌倉より居ゑ置かれし御家人原、此日來あたりを横行し、人を虐げ小目を見せて、腕立しける者共、一支も戰はず、家に火をかけ、妻子を連れて落行くもあり。又は地頭代官といはれ、百姓を徵り取りて榮耀に矜り、飽く迄肥え太り、何心もなくて居たる

小栗滿重兵を擧ぐ

輩は、大軍押懸ると聞きて膽を消し、周章狼狽へて妻子を取除け、資財を持運び、山野に逃げ惑ふ。憲秋・憲朝下知を加へ、村里を放火し、分捕亂暴し、相州に打越え、在在所々に馳せ向ひ、代官御家人原を捕へて、首を切かけしかども、如何なる故にや、鎌倉には空知らぬ體にておはしまし、諸大名も出合はず、又內通の人もなし。此分にては、鎌倉に向はん事も叶ひ難し。時を待つには如くべからず。年來の欝陶、今は此迄なりとて、鎌倉の方に向ひ、勝鬨どつと行ひ、京都にこそ歸り上りける。

四　小栗孫次郎反逆 附 沒落

同卅年五月廿八日、小栗孫次郎滿重退治の爲、左馬頭持氏、三千五百餘騎を率して、下總國結城に發向し給ふ。去年八月に、小栗滿重、所領の事に付きて、左馬頭殿に怨を含み、家人若黨引連れて、下總に逃げ下り、結城の城を取立て、兵粮を籠め、要害を固くし、軍勢を招きければ、近鄉遠所に隱れ居たる岩松が殘黨、其外上總・下野の一揆原、聞傳へに馳せ集り、五六百人に及べり。持氏大に憤り給ひ、管領憲實が舍弟上杉

三郎重方に、一千餘騎を差添へて向けられたり。寄手既に城近く押付け、陣を取りける所に、城の兵、追散らさんと計りて、三百餘人木戸を開きて、打つて出でたりけるを、島崎大炊助が軍勢二百五十騎、馳せ合せて戰ひしが、城兵散々に驅立てられ、後なる城へ引退く。寄手愈勝に乘つて、押包みて城へ驅入らんとす。城中に殘る兵共、同時に打出で、矢種を惜まず散々に射る。寄手百餘人痛手を負ひ、石に打たれて進み兼ねたり。新手を入替へて攻懸れば、城中へぞ引入りける。寄手悉く逆茂木の際まで詰懸け、垣楯かきて居たり。城兵は追籠められて、首をば出ださゞれども、要害嚴しき城なれば、寄手打入るべきやうもなく、塀を隔てゝ垣楯を界ひ、矢軍して日を送る。城中之に氣を屈して、穴に籠りたる鼠の如く、籠の中の鳥に似たり。木戸を固めたる臼井五郎いひけるは、餘りに寄手の詰懸けて物姦しきに、一夜討して膽潰させんとて、志同じき輩を誘ひ、廿七人或夜雨風烈しきに、城中より忍び出で、香河修理亮が陣屋に火をさし、鬨を作りしかば、すはや城中より打つて出でたるはとて、寄手騒ぎ立ち、上を下に返し、馬よ物具よと犇く間に、火の子飛散りて、陣屋々々に

燃え付き、烈しき風に吹しきければ、煙に咽び火に惑ひ、打消さんとし防がんとする程に、敵の多少をも知らず、味方の軍兵をも辨へず、當るを敵として、同士討をぞいたしける。臼井もさすがに小勢なり。さのみに深入して、跡を取切らるゝなとて、陣屋陣屋に積置きたる兵粮少々取りて、靜に城へぞ入りにける。寄手之に懲りて、攻口を寛げ、陣屋を淋しく構へて、用心をぞいたしける。劒にて舷を刻み、兎逃げて株を守るかなと、笑はぬ人はなかりけり。左馬頭持氏聞き給ひ、安からぬ事かな。千騎に足らぬ寄合武者の籠りたるに、城を攻倦み、年月を重ぬる不覺さよ。宇都宮左衞門尉持綱・眞壁新七義成、內々小栗と同意し、桃井下野入道・佐々木隱岐入道、一味與力すと聞ゆ。此等若し後詰をいたさば、由々しき大事たるべし。持氏直に馳せ向ひ、一皷に攻干さんとて、鎌倉を打立ち、城に着くと等しく、同時に鬨を作り、潜き連れて攻上り、城に跳ね入らんとする所を、城兵矢種を惜まず散々に射出し、大木五六を切つて落しければ、寄手の先陣二百餘人、木戸を開き突いて出でつゝ、四角八方に追捲りしかば、むら〳〵に崩れて、大將左馬頭殿の旗本に頽れ懸る。新手八百餘騎ど

つと入變り、二百餘人を中に包み、半時計り戰ふ。城兵殘り少なく討たれて、東を指して落ちて行く。寄手之には目も懸けず、木戸を打破り、逆茂木を打倒して、込懸けしかば、城兵防ぎ兼ねて引入りければ、押續きて攻入り、小屋に火をかけしかば、城兵火に惑ひ、防ぐべきやうもなく、我れ先にと落失せければ、大將小栗孫次郎は、家子竹之丞に、子息小次郎を預けて城を落し、我身は腹搔切つて、煙の中に伏しにけり。討死したる城兵の首、百八十七を切かけ、それより直に宇都宮を退治せんとて赴き給ふ所に、持綱既に逐電す。鹽谷駿河守聞付けて、跡を追うて甲州に至り、難なく持綱を討つて、首級を左馬頭に送り參らせけり。桃井・佐々木は生捕られて誅せらる。八月十六日、左馬頭凱陣あり、野州・總州暫く治まり、物靜になりにけり。

五　京都・鎌倉御合體

さる程に左馬頭持氏は、京都將軍家に、上杉禪秀が子供を抱へ置かれ、關東を嫉み思召す由聞き給ひ、大に憤を含みて、御仲不和になり、京都・鎌倉水火の相尅に及ばん

とす。京都の管領畠山尾張守滿家申されけるは、鎌倉若し背き給はゞ、關東は定めて左馬頭殿に屬すべし。然らば今の世の人の心は、野に棲む小鳥の、粟につき稗につき、彼方此方とさまよふ有様なり。諸國の大名、其中より一味することあらば、由々しき國家の亂となるべし。たゞ無事を作りて、御和睦し給へかしと申されしかば、此儀然るべしとて、同卅一年三月三日、照西堂を鎌倉に下され、兎角申されしかども、持氏更に許容の色なく、五月上旬に歸京し、重ねて九月八日、又關東に下向し、上杉憲秋兄弟が事、向後知行を召放たるべき由、仰遣さる。左馬頭殿之に依つて、和睦の事相整ひ、照西堂上洛の次に、江戸近江守を使者として、京都將軍へ拜禮の儀をいたし給ふ。奥州稻村の御所滿直も、恨を隱し憤を抑へ、十一月十一日、鎌倉に上りて持氏に和睦し、泰安寺に住居し給ひければ、京都・鎌倉一家等しく、いとめでたくぞ侍る。

六　鎌倉所々失火附武田信長降參

同卅二年二月廿九日、極樂寺炎上す。同九月八日の夜、鎌倉の御所回祿す。去年

正月廿五日には、淨妙寺炎上あり。此頃鎌倉の谷々、毎日失火ありて、人の心更に穏ならず。水を酌み資財を取除け、晝夜用心に隙なし。是れ唯事にあらずとて、鎮火の御祈禱あり。後に聞えしは、諸方の盜賊集りて、所々に火をかけ、物を取るとかや。同卅三年六月廿六日、武田左馬助信長、甲州の府に出張す。其勢五百餘騎には過ぎざりけり。去年八月中旬、武田の一族等、鎌倉を反くと聞えしかば、上杉淡路守房實に仰せて、左馬頭殿の幡を給はり、一千餘騎を率して、甲州に赴きしかば、武田山深く引籠りて、跡を晦ましければ、淡路守力及ばず、要害を破却して歸られたり。此頃又人數を集め、要害を構へて出張す。此事鎌倉に聞えしかば、時日を移さず蹴散らせとて、一色刑部少輔を大將として、一千餘騎を差下され、七月上旬に、甲州に發向す。八月朔日武州白旗一揆、六百餘騎にて一色に馳せ加はる。其外近鄕の武士、五騎十騎にて馳せ付きしかば、軍勢雲霞の如く滿ち重なる。之に氣を呑まれて、武田が軍勢共、皆ぬけ〳〵に落失せ、今は家子郎等より外には、賴むべきものもなし。右馬頭信長叶はじと思ひて、旗を卷き弓を伏せて降人になり、一色が陣に來る。刑部

武田信長降る

少輔大に喜び、武田を召連れて鎌倉に歸る。左馬頭卽ち武田が本領相違なく下され、罪過を許し給ひければ、右馬助先非を悔えて從ひ奉り、他念なくぞ見えにける。

七　村上・小笠原確執附巷說に依つて鎌倉騷動

持氏憲實漸く不和

同八年、信濃國の守護小笠原大膳大夫入道と、村上中務大輔と、境目を論じて、確執に及ぶ。互に刃を砺ぎ鏃を磨き、憤を散ぜんとす。村上は年來鎌倉に志を通じ、若し御大事あらば、拔群の忠を盡し參らせんと申しけるを、持氏深く賴み思ふ故にや、桃井左衞門尉に、上州の一揆・武州の新一揆を差添へ、村上に加勢して、信州に赴かしめらる。管領憲實之を聞きて、持氏を諫め申しけるは、信州は京都將軍の御分國なり。小笠原を以て守護人となされ、居ゑ置かれ候上は、村上之に敵對いたすこと、且は將軍家に向ひて、弓を彎くに同じきものなり。之に同意して、鎌倉より加勢を遣されんこと然るべからず。上州は憲實が領國にて候。彼一揆の軍勢を催して陣いたさば、憲實も又村上が二の舞なるべしとて、卽ち國中に相觸れ、上州より軍兵一

人をも出さゞりしかば、持氏安からず思ひ給ひしかども、怒を抑へて其事延引せり。同九年六月に、重ねて小笠原退治の爲に、上杉陸奥守憲直を大將として、武州本一揆の勢を、差向けらるべき沙汰あり。如何なる魔王波旬の所爲にやありけん。今度持氏の仰として、軍勢を催促し給ふこと、全く小笠原退治の爲にあらず。管領憲實を討たんとの結構の由、披露しければ、管領家の被官與力の輩は、老若をいはず、我も我もと鎌倉に馳せ集まる。いひ傳へ聞き傳へ、すはや大事の起りけるぞとて、上を下に持て返し、騷動すること斜ならず。同七日の夜に入りて、持氏竊に憲實が宿所に入り給ひ、努々斯る企はなし。たゞ是れ巷の浮說なり。其事、實ならば、持氏を人質に取りて、如何にも計らはれ候べしと、餘儀もなく陳じ給へば、憲實も更に恨を存ずべき道なし。たゞ讒者の所爲なりと申されしかば、持氏御所に歸り給ふ。軍勢は皆本鄕に歸り散りたり。上杉陸奥守・同嫡子淡路守は、管領の心中計り難しと思ひて、鎌倉を出でて藤澤に退去す。憲實猶未だ心解けず。同七月廿五日、嫡子龜若丸生年七歲なるを、忍びて上州に下向せしめ、世の變を窺はる。此度讒者の張本一色宮

内大輔直兼、鎌倉に怺へ兼ねて、一族郎從を打連れて、三浦を指して引退く。管領憲實の家人大石石見守憲重・長尾左衞門尉景仲は、今度騷動の本人なり。持氏の御氣色未だ歪り給はず。定めて嫉く思召すらん。此兩人は、管領の家を暇申して、鎌倉を退き出で、然るべしと沙汰しけれども、憲實は空知らずして、愈大石・長尾を憐まれしかば、始め沙汰しける人々も、恐れてぞ思ひける。同八月十三日の夜、持氏重ねて管領憲實の宿所に入り來りて、遺恨別心なき由仰出され、執事職、元の如く勤めらるべき旨、頻に仰せ宥めらる。憲實固く辭し申すと雖、再三に及びしかば、力なく領掌し申されけり。然れども武州の守護代に付きて、施行の事ありしかども、管領の判形に及ばず、心底は未だ解けやらずと、諸人口にはいはざれども、危み思はぬものはなし。

八　將軍義持公薨去附義教公任二武將一

京都前將軍從一位內大臣義持公は、去ぬる應永卅年二月に、征夷大將軍の職を辭

足利義量死去

退し、御息義量に讓り參らせ、四月上旬に御飾を落し、世を遁れて、靜に行ひ澄まさんと思召しける所に、同卅二年二月廿七日に、義量公世を早くしたまふ。御年未だ十九歲、道號は鞏山、法名は道基、長德院と稱し奉る。僅に莟める梢の花、綻び出づるをだに待たずして、忽に一朝の嵐に誘はれたまふ。思の外なる御歎きを殘し置かれ、面影のみ世の筺となりにけり。天下の憂愁に極まり、宛ら燈火を打消したる心地ぞする。義持公は、並べて御代を讓らるべき御子だにおはしまさず、御歎きに沈み給ひ、此上は鎌倉左馬頭持氏の嫡子賢王丸を養子として、天下の權政を讓與あるべきかと、內評定ありけれども、管領畠山尾張守滿家を始めて、山名・赤松以下の諸將、此儀然るべしとも思ひ寄る人なし。兎角して月日重なり、義持公御物思ひの積りにや、御病氣に取結び、正長元年正月には、頻に重く惱み給ひて、今ははや此世の賴みも少なうぞおはします。同十七日管領畠山滿家、石淸水に參籠し、丹誠の懃行をいたし申されけるは、抑源家相續の事、今日神慮に任せ奉らん。鎌倉の公方持氏の嫡子賢王丸を迎へて、義持公の御養子と定め、幕府の御世嗣にいたすべきや。又義持

足利義持逝去

公の御舍弟青蓮院の門主義圓僧正を還俗せしめ奉り、柳營の御世嗣にいたすべきやと、宗廟の神德靈儀の應驗を仰ぎ奉る所なりとて、御鬮を取りて頂戴し、三度まで振りけるに、門主を御世嗣にいたすべき御鬮の、三度同じく顯はれけるこそ不思議なれ。下向の後議定して、諸將皆神慮の指す所に、任せ奉らんと一決す。翌日午の刻、義持公既に逝去し給ひけり。同三月十二日に、義圓僧正を還俗せしめ奉り、義宣とぞ號しける。前將軍義持公には、同母の御舍弟なり。始め青蓮院、門主に入りて出家し給ひ、義圓と號し奉り、天台四明の法水を酌みて、自解佛乘の妙理を窺ひ、止觀三諦の敎門を開き、諸法實相の深意に達し、内外二典に通じ、神歌兩道を學し、一山の明師となり給ふべき御身なりければ、君限りなく信敬まし〳〵、大僧正に任じ、准后の宣旨を蒙り、門主の列に入りて、天台座主となり給ひければ、俗性といひ綱位といひ、今還俗し給ひて、天下の權を執り給ふに、何の不足おはしますべき。聽て陣座に宣下あり、小除目行はれ、從五位下に敍し、左馬頭に任ず。今年三十五歲なり。斯波左兵衞督義淳、再び管領に任ぜられ、京都いつしか賑ひ、諸將各喜をなす。

永享元年三月十五日、參議兼左近衞中將に任じ、征夷大將軍に補せられ、御名を義敎と改めらる。權大納言に任じ從三位に敍せらる。御館出仕の輩、奉行頭人の作法、猥がはしきを削り、外樣伺公の族、大名諸將の行跡、ばさらを戒め給ひしかば、自ら正道に復し、皆篤實に歸しければ、禮義行はれ風俗整ひ、淳厚靜謐の世とぞなりにける。

九　京都・鎌倉確執附管領憲實叛二持氏一

將軍義敎公既に世を嗣ぎて、天下の政道を執行ひ給ふに及びて、鎌倉の左馬頭持氏怨を含み、京都に反く心あり。其上基氏逝去の後、彼の遺言に任せて、氏滿・滿兼・持氏、皆京都に上りて元服し、將軍家御諱の一字を給はる事なりしに、持氏の嫡子賢王丸殿元服の沙汰あり。既に京都・鎌倉確執す。將軍家に付きて賴むべきことにもあらず。其外には日本國中に、我家の烏帽子親にすべき人なし。古八幡太郎義家の佳例に任せんとて、鶴が岡の八幡宮に赴き、賢王丸を御寶前に於て加冠せしめ、義久

上杉憲實持氏に反く

と名付け給ひけり。執事上杉憲實深く恐れ奉り、此事將軍家聞召し候はゞ、當家の御爲、行末宜しかるべからず。たゞ枉げて京都に上せ奉り、元服なさるべしと、屢諫言いたしけれども、左馬頭殿更に承引し給はず、却て憲實を疎み給ひしかば、八月十四日安房守は、鎌倉山の內の家を明退きて、上野の白井といふ所に移りしかば、扇が谷上杉治部少輔持定が子上杉修理大夫持朝・同左馬助憲光が次男憲信、其外永井三郎入道・小山田小四郎・那須太郎以下跡を尋ねて、上州にぞ行き加はる。持氏愈怒つて、憲實を誅伐すべき企あり。關東諸國召に應じて參り集ふ。軍勢鎌倉に滿ち滿ちたり。上杉陸奥守憲直・同子息淡路守憲家・一色宮內大輔直兼は、時到りぬと喜び、皆鎌倉に歸參せしかば、左馬頭持氏卽ち一色宮內・同刑部時家を、先手の兩大將として、三千餘騎、上州に差向けられ、同十六日、持氏五千餘騎を率して鎌倉を打立ち、武藏國高安寺に陣取り給ふ。安房守憲實之を聞きて、さては力なし。家の安否、天下の大事爰に在りとて、早馬を立てゝ京都に訴へければ、將軍大に驚き給ひ、奏聞を遂げられ、持氏追討の綸旨を申給はり、御教書に添へて諸國に遣し、鎌倉退

治の爲、不日に軍勢を催し、上杉入道禪秀が次男中務大輔持房に、義敎公の御旗を給はり、小笠原信濃守政康・今川上總介範忠・武田太郎信重・朝倉小太郎敎景等に、諸國の軍勢二萬五千餘騎を差添へて、八月下旬關東に差向けらる。其間に横地・勝間田が一黨、伊豆國の守護代寺尾四郎左衞門尉具重等、一味同心の輩二千餘騎、京都に先立ちて軍忠をいたさんとて、箱根を越えて攻下り、水飮の宿に陣を取る。持氏の家來大森伊豆守此由を聞きて、箱根の別當家に語らひ、七百餘騎にて馳せ向ひ、鬨の聲を上げたりければ、寺尾四郎左衞門尉、敵小勢なりと侮り、鬨を合せて打つて懸る。豫て計りし事なれば、足輕を出して防ぎ、矢少々射させ、暫し挑みて戰ふと見えしが、弓を伏せ旗を卷きて引退く。寺尾勝に乘つて、進めや者共と下知して、追うて懸る。大森伊豆守、寄手を思ふ圖に引入れ、殺所に待ちうけて返し、拔連れて切立てければ、寺尾・横地が軍兵進まんとすれば、坂中嶮しく足立かたくじけなり。退かんとすれば、敵頻に攻め付くる。進退度を失ひたる馬人、いやが上に重なり、谷底にまつれ落ちて、己が太刀長刀に自ら貫かれ、死するもの數を知らず、横地且又討

持氏敗軍

たれて、大森深手負ひたり。たまく遁るゝ者共、疵を蒙らぬはなし。物具・太刀・刀を棄てゝ、命ばかりを助かり、這々逃げて歸りし有様は、見苦しき負をぞしたりける。京勢大軍にて攻下ると聞えしかば、左馬頭持氏、さらば大森に力を合せて、防ぐべきなりとて、上杉陸奥守憲直を大將として、宍戸備前守・海老名上野介・二階堂が一族、安房國里見が軍兵等、都合三千餘騎を遣されたり。九月廿七日、相州の早川尻にして、永井三郎入道・小山田小四郎以下一千餘騎にて、後より押寄せけるに仰天して、備を立直さんと犇く間に、鬨をどつと作りて、魚鱗になつて突いて懸る。宍戸・海老名駈立てられて、大將上杉憲直が備の中に逃げ込みしかば、軍兵共散々に落ちて行く。憲直が家人肥田勘解由左衛門・蒲田彌次郎・足達・萩窪以下、防ぎ兼ねて討死し、殘る兵共は、四角八方に分れて、上杉利を失ひ、鎌倉に逃げ歸りける。持氏安からず思ひ給ふと雖、傾く運の習として、謀も圖に當らず、向ふ所に勝利なし。持氏卽ち高安寺の御陣を、相州海老名の道場にぞ移されける。

千葉胤直持氏に反く

十　千葉介胤直心替附三浦介時高退二鎌倉一

千葉介胤直は、左馬頭殿に附從ひ、忠義を存ずること、今に於て改變なし。而も多勢の大名なりければ、誠に肱股の勇士、爪牙の謀臣、一方の守ともなるべかりし人なりと、諸人各賴もしき事に思ひける所に、忽に心替して、京都の寄手に屬しけるこそうたてけれ。其故を尋ぬるに、同廿九日の夜、胤直竊に持氏の御陣に參り、諫め申しけるやう、抑此亂逆の起は、君、讒人の毒言を信じ、管領憲實を惡み出で給ひしより、輕々しく軍を起し、國家の責勞を顧みず、實義の忠臣を疑ひ、賞は少なく罰は強く、仁慈を忘れて猛威を逞しくし、政道を我意に任せ、人望に背き給ふこと、此年來に及びて重疊し給へり。君願はくは今より御心を改め、憲實を召返され、怒を抑へて、彼が憤を宥め給はゞ、軈て和睦あるべし。旁以て國家の長久諸人の喜悅は、何事か之に勝るべき。然らば胤直不肖の身ながら、管領憲實の方に向ひ、如何にも無事を作り候べし。此分にて候はゞ、味方は、日に添へて耗散し、敵は、時を追うて大

軍となり、家運立所に傾敗いたすべきにて候とぞ申されける。持氏仰せけるは、當家譜代の陪臣として、累世恩顧の主君に背き、弓を彎き楯を突く。憲實が結構、既に天理に違ひ、地道に外れたり。剩へ京都に訴へて讒を飾り、持氏が一家を亡さんと企つること、前代未聞の惡人に非ずや。天道神明誠あらば、憲實が首、必ず我が前に來るべし。彼に與力して陣を張り、功名を顯さんとする奴原、是亦賊を救ふ奸盜なり、非を助くる逆黨たり。一々に首を刎ね獄門に曝さんこと、踵を廻らすべからず。又京都より討手の下るといふ。各聞怯して逃落つる輩は、たとひ味方にありとても、足なへ腰ぬけて、軍の用には立たぬものぞや。大軍攻下らば、難所に引うけ追崩さんには、長途に疲れたる上方勢、何の恐るゝ所ならん。然るに胤直、頗る我を諫めて、憲實に怠狀せさせ、弱味を顯はして、世の笑草にせんとや、計られ候らん。當家の運命傾くべしとは、何の目に見えて斯くは宣ふ。是たゞ我が家運を、呪咀し給ふかと覺えて候。他念なき千葉殿にも、只今よりしては心を置き候。邪推ながら敵の毒餌を食み給ひて、我を諫められ候やらんと、傍痛くこそ候へどぞ仰せける。

胤直赤面して御前を立ち、あゝ左馬頭殿には、よく天狗のつきたりけりと呟き乍ら、我陣屋に立返り、いや〳〵斯様の人に與して軍をせんは、風に向ひて埃を拂ひ、柴を抱きて火を消すが如し。身に罹る災とはなるとも、始終更に利あるべからずと思案して、夜に紛れて陣屋を退き、己が館にぞ歸りける。同十月二日、木戸左近大夫將監持季七百餘騎にて、相州八幡林に陣を取る。上方の大將上杉持庵は、同國高麗寺に着陣す。鎌倉中騷動して、京勢只今攻入るぞやと、僧俗男女、上を下に持て返し、財寶雜物を、西に運び東に隱し、南北に走り惑ひ、女童の泣叫ぶ聲、巷に滿ち小路に渡り、物音も聞分かず。三浦介時高は、今度左馬頭殿出陣の留守を承り、御所の警固を嚴しく勤めて居たりしが、忽に心を飜し、一族若黨殘りなく召連れ、夜に紛れて三浦に歸りける程に、御所中におはします公達を始め參らせ、女房達之を聞きて、何と思ひ分けたる方もなく、一所にさし集ひ忍び聲に泣く、秋の虫の賴む草葉も裏枯れて、弱り果てたる心の中、譬へん方もなかりけり。

十一　鎌倉兵火

同十月四日、三浦介落失せたりと聞えしかば、一色宮内大輔直兼・同刑部少輔時宗に屬せし軍兵三千餘騎、いつの間にか落失せけん、兩人が家子郎從、僅に七十餘騎にぞなりにける。此小勢にては叶ふべからずとて、持氏の御陣に走せ參る。持氏聞き給ひ、よし〳〵斯る憶病者は、味方に在りて足纏ひなり。落ちたるこそよけれとは宣へども、烈しき秋の夕嵐に、木葉は絶えず散落ちて、梢も枝も疎なる、哀れぞ爰に知られける。陣中殊更寂び返り、透通りて淺ましく、心細くは思はれけれども、今は返らぬ世の中の、其行末こそ悲しけれ。同十七日の微明に、三浦介時高、五百餘騎にて鎌倉に押入りつゝ、大倉・犬懸の近邊に火をかけたり。上杉憲實は、一千二百餘騎にて、上州白井を打立ちて、同十九日分倍に着陣す。十一月朔日、三浦介時高・二階堂の一族、其外上杉修理大夫持朝が被官山口市之丞等を語らひ、七百餘騎になりて、大藏の御所に押寄せたり。近習の輩簗田河内守・同舍弟出羽守・名塚右衞門尉・河津

三郎・一色侍從・佐野彌五郎を始めて、門を開きて切つて出で、散々に戰ふ。山口市之丞は、簗田河内守に渡り合うて、甲の鉢を打落され、大童になりて戰ひしが、眞額を打割られ、仰様(のけざま)に倒れ死す。三浦介が家人水澤兵次は、聞ゆる大力の健者(したゝかもの)なりしが、五尺一寸の太刀を拔いて、門より内に駈入り、散々に切つて廻る。其切先に向ふものは、諸膝を薙がれ、甲の鉢を打碎かれ、面を向くべきやうもなき所に、御曹子義久の、憐れみ飼ひ給ひける猿のありけるが、主君の大事を悲み奉り、御座の邊(あたり)に蹲り、涙を流して泣き居たりしが、表に走り出でつゝ、さしも猛威を振ふ兵次が肩に上り、兩眼を搔出してぞ逃げにける。畜生なれども敵を知りて、斯く振舞ひける奇特さよ。兵次は太刀を棄てゝ、覺えず兩眼を抱へける所を、河津三郎走り寄つて、内甲に切先を入れ、首を打落したり。防ぐ兵は僅に二十餘人、攻むる勢は七百餘騎、新手を入變へて攻め戰ひしかば、さすが小勢叶はずして、皆悉く討死す。稻村滿貞・御曹子義久は、報國寺に落行き給ひしが、敵滿ち〳〵て追討ちければ、今は此迄なりとて、腹搔切つて伏し給ふ。軍兵亂れ入りて御所に火をかけ、雲霞(くもかすみ)と燒き上げたり。

吹迷ふ風に從ひ、焔四方に飛び散り、小路々々に燃えかゝり、同時に燒け上りしかば、煙に咽び焔に迷うて、老たる人幼き人、子供女童の泣き叫ぶ聲、上は非相の巓にも聞えつべく、燒け崩れ燃え倒るゝ響は、下、風輪の底までも徹りやすらんと夥し。人馬に踏殺され、猛火に燒け爛れて、死するもの數を知らず。一業所感の因果とはいひ乍ら、哀れなる有樣なり。

十二　長尾入道謀ニ持氏一附持氏生害

左馬頭持氏此由を聞き給ひ、海老名の御陣を打立ち、鎌倉に歸り給ふ。爰に上杉憲實が家老長尾入道芳傳、八百餘騎にて、鎌倉に赴く所に、葛原の邊にて出向ひたり。持氏、味方の陣を見給へば、今迄は身に變り命に變らんと契約して、附從ひたる軍兵共、何地(いつち)ともなく落失せて、一千餘騎と見えしが、二百騎にも足らず。左馬頭殿力を落し給ひて、一色持家を使として、芳傳が陣へ仰遣されけるは、今日上杉憲直・一色直兼が讒に依つて、管領憲實憤を含み軍を起す。持氏一旦之に向つて兵を催す

持氏生捕らる

と雖、今は此迄なり。此上は如何にも國家の政道の事、憲實が心に任すべし。速に軍を退け屯を解きて、鎌倉に歸參あるべしと、宣ひ遣されたり。持家急ぎ行向ひて、具に語りければ、芳傳伴りて申返しけるは、憲實、更に君に向ひ奉り、野心を挾みて、此軍を起すにては候はず。左馬頭殿、御輕々しく讒者の言葉を信じて、憲實を討たんとの御企おはします由承り、其難を免れん爲に、暫く軍兵を集め置きたる計りにて候。君の御心解けさせ給ふ上は、更に恨を存ずることなく候、さも思召直され候には、何の苦しき事か候べき。君恐れ乍ら、芳傳が陣中に御入候べし。憲直もこれへ參られ、御對面を遂げられなば、別の仔細も候まじきにて候と申返しければ、持氏大に喜び給ひ、何の評定にも及ばず、近習の輩唯十餘人を召連れ、芳傳が陣中に入り給ふ。御運の末こそ悲しけれ。窮鳥入レ懷獵者不レ殺とこそいふに、長尾入道聽て近習の輩を、手の郎從に一人づゝ預け、物具・太刀・刀を奪ひ取り、生捕の者の如くに縛(いましめ)め、持氏をば籠輿に乘せ參らせて、次の日金澤の稱名寺へ入れ奉る。同十一月五日、持氏即ち稱名寺に於て御出家し給ひ、長春院殿と號し奉りける。一間なる所に

押籠め參らせ、嚴しく番を居ゑ、湯水をだに、心の儘に奉らず。近習の人々は、芳傳に誑られぬることの口惜しさよ。迚も遁れぬ命を以て、討死すべかりけるものを。左馬頭殿御智慮淺ましくて、敵の虜となり給ひける口惜しさよと、頭を搔きて後悔すれども甲斐なし。管領憲實が代官に、大石源左衞門尉憲儀・上杉修理大夫持朝・千葉介胤直を大將として、軍兵二千餘騎、葛原に押出でつゝ、上杉陸奥守憲直・同子息憲家・同舍弟小五郎持茂・一色宮内直兼父子・淺羽下野守某が、二百餘騎にて控へたる所へ、押詰めて鬨を作る。直兼・憲直は、今や左馬頭殿と管領と、和睦の御事整ひ給ふ。御左右遲しと心を許して待居たる所に、思ひも寄らず、鬨の聲を上げて押懸る。扨は僞にてありけり。出抜かれたることの口惜しさよとて、馬の足を一面に立並べ、敵に懸り合せんとすれば、兵皆散々になりて逃げ崩れ、直家・憲直父子郎從僅に廿八騎ぞ殘りける。今は力なし。手痛く戰うて、討死するより外のことなしと思ひ定め、廿八騎一手になつて、二千餘騎が其中に駈入り、追捲り打靡け、七八度駈合ひて、後に駈拔けたりければ、十七騎討たれて、殘る人々、いづれも深手負ひけれ

ば、今は此迄なり。猶人手に懸るなとて、思ひ〳〵に自害してこそ死にけれ。同十一日、左馬頭殿を永安寺に移し奉り、大石源左衞門尉御前に參りて、御自害を勸め奉る。持氏殿は、若しやと賴み思召しけることも、只あらましの夢になりて、今を限りに極まりしかば、一筋に思ひ定め、心靜に法華經の信解品を誦じ給ひ、念佛十返ばかり唱へて、腹一文字に搔切り給ふ。憲儀御首を給はれば、近習の輩木戶伊豆守入道・冷泉民部少輔・小笠原山城守・平子因幡守・印東伊豆守入道・武田因幡守・賀島駿河守・曾我越中守・設樂遠江守・沼田丹後守・木內伊勢守入道・神崎周防守・中村壹岐守以上十三人、一同に腹を切りにけり。海老名尾張入道は、六浦引越の道場に入りて自害し、同子息上總介は、扇が谷の海藏寺に籠りて自害せり。二階堂信濃守は、相模の御陣より逐電す。若宮の社僧阿闍梨尊仲は、今度讒者の同類なりければ、災の我身に來らんことを恐れて、上州を指して落行きける所を、軍兵共に搦め捕られ、京都に引上せられ、七條河原にて斬られたり。運の窮達、時の否泰は、天理なりと雖、而も人事の好惡に因ることとなり。左馬頭持氏、年來非常の御振舞、既に天理に背き

持氏自殺

て、鎌倉忽に殁落せし、其有樣こそ悲しけれ。

十三　管領憲實辭職附一色伊豫守逐電

上杉兵庫頭淸方は、故民部大輔房方の四男として、安房守憲實の弟なり。今度の亂逆に、憲實利運を得しかども、本意にあらざる結構なれば、世にある甲斐なきものと、淺ましき事に思はれ、管領職を辭し、剃髮染衣の姿となり、長棟庵主と號して、同年の冬十一月廿日に、鎌倉を立退きて、藤澤に引籠る。子息は未だ幼少なりければ、成長せん時迄、其名代として、越後へ飛脚を立て、淸方を招き、鎌倉の管領職をぞ預けられける。爰に一色伊豫守は、其頃鎌倉を逐電し、相州の今泉といふ所に、要害を構へて引籠りけるを、長尾出雲守憲景・太田備中守資光聞付けて、五百餘騎にて馳せ向ひしに、伊豫守叶はじとや思ひけん、又落失せて行方なし。舞木駿河守持廣は、一色が同類たる由、訴人ありければ、同十二年正月廿三日に、長尾入道芳傳が宿所へ罔り寄せ、是非なく捕へて刺殺す。舞木が與力赤井若狹守此由を見て、心得

たりとて、袴の裾を高く取り、四尺二寸の太刀を拔いて、切合ひける程に、七八人は討たれ、手を負ふものも多かりしを、大勢入替りて、終に赤井を討取りたり。

鎌倉公方九代記　卷七

持氏軍記下

一　結城七郎揚二義兵一附高階城軍

結城氏朝兵を擧ぐ

管領兵庫頭淸方鎌倉を治め、關東の諸侍皆歸伏し、政道の事は、京都將軍の命を守り、漸く靜ならんとして、人々安堵の思をいたす所に、鎌倉歿落の折節、持氏の御息次男春王殿三男安王殿は、鎌倉を遁れ出で、下野の日光山に落隱れおはしましけるを、結城七郎氏朝は、重代の主君なれば、見棄て參らせ難くして、竊に城中へ迎へ入れ奉り、家人一族集り、要害を構へ、壘を深くして立籠る。上野・下野の間に、新田・田中・佐野・高階の輩、結城に心を合せて、足利郡高橋の鄕に壘を構へ、切所(せつしよ)を前に當て、道を切塞ぎ、兵を招き集めて、近隣を脅し、地頭代官等が家に押詰め、追失ひ攻

干して、兵粮を奪ひ取る。上州の守護代大石石見守憲重、安からぬ事に思ひ、國中の軍兵を催促すれども、世の安否を見屆け難く、時を窺うて、一人も從ひ來らず。石見守、さればこそ、兎角に付きて延引せば、大事に及ぶべし。敵に勢の附かぬ中に、早く退治せずば惡かりなんと思ひ、手勢僅に百四五十騎を引率して、軍立しければ、近鄕の武士少々馳せ加はり、七百餘騎になりて、同年三月十九日、高橋の城に押寄せたり。佐野・高階以下の輩、いかゞ思ひけん、其夜の內に皆悉く落失せて、國府の美濃守兄弟郞從、唯廿餘人ぞ殘りける。美濃守少しも怯れたる色なく、舍弟孫四郞にいひけるは、味方の與力賴もしげなく、敵の旗に神を失ひ、義を棄てゝ落行きける奴原、たとひ城中に怺へたりとも、何の用にか立つべき。我等只今降人になりて出でたりとも、あるか無きかの身になり、傍人の光彩に向ひ、面を恥辱の泥に俯れ、生前の安堵を望みて、憤を犬羊の尾に呑まんよりは、命を君の爲に棄てなば、ながらん後までも、勇みは子孫の心を喜ばしめ、名は野徑の尸を淸むべし。されば此小勢を以て、敵の大軍を引受け、戰を決せんとする事は、鼷鼠の巨石を動さんとし、蚍蜉

の太山を崩さんとするが如し。然れども義を守りて命を輕くするは、勇士の名を惜む所なり。快く討死して、譽を後代に殘せやとて、中々思切つてぞ待かけたる。寄手愈〻重なりて、既に三千餘騎になりたりければ、大將石見守、前後の軍兵に手配りして、陣をも取鎮めず、直に押懸けて鬨を作る。城中には、小勢を敵に知らせず、今討死する迄も、侮られじと思ひければ、態と鬨の聲をも合せず、靜まり返つて居たりしに、寄手は城中に謀ある故にこそ、鬨をも合せず音もせず。いかさま樣體を見よとて、攻め懸らず、其日は徒に暮れにけり。油幕を引廻し虎落を結はせて、篝火所々に焚かせ、軍兵共は甲を枕にして、明くる空をぞ待ちにける。美濃守、いざや一夜討して、最後の慰みにせんとて、廿餘人の兵、木戸を開きて忍び出で、寄手の後に廻り、油幕に火をかけて鬨を作る。寢耳の紛れに、大勢の聲かと聞驚き、すはや敵の後詰したるぞ。後を見よとて、上を下に返す間に、城兵廿餘人は一手になつて、表へ馳せ抜けて、狽狼へ出づる寄手の兵五十騎計を薙ぎ伏せて、しづ〳〵と引上げたり。これ程に手輕く引取るべしとは、思ひも寄らず、後詰にてはなきぞ、夜討した

り。一人も殘さず討止めよとて、此處彼處にて同士討して、死する者も多かりけり。夜既に明けゝれば、城の三方より潛き連れて攻懸る。城中も矢種を惜まず散々に射ければ、之に射白まされて、進み兼ねてぞ見えたりける。寄手の中に、上總國の住人豐田八郎とて、猶才覺なるものありて申しけるは、城の有樣極めて小勢なりと覺え候。其故は、射出す矢叫の音、いとゞ微に聞え候。四方同時に攻懸らば、唯一息に揉崩し候はん。如何なる事に、怯神の附きて躊躇ひ給ふといひければ、諸軍之に心付きて、えいつ聲を出して攻懸れば、城中今は防ぐに力なく、門を開きて打つで出で、大勢の中に駈入り、短兵急に交へ、追捲り追退け、半時計り戰うて、さつと駈拔けたりければ、城には敵の入替りて、火を放ちて燒上ぐる。廿餘人の兵、深手薄手負はぬものもなかりけり。斯る所に丹・小玉黨の者共、百四五十騎にて駈寄せたり。廿餘騎の兵、百戰の命を限りに、一擧に討死せんと志すことなれば、少しも疑議せず、大勢の中に走せ入り、駈破りては裏へ通り、取て返しては喚いて駈け、蛛手輪違に七八度がほど當りて、勢力疲れければ、組んで落ち刺違へ、皆悉く討死して、軍は

既に果てにけり。

二　成田城退去

上杉憲實再び鎌倉に入る

同四月六日、京都將軍家の仰に依つて、安房守憲實入道長棟、伊豆國を立ちて、再び鎌倉の山の內の第に歸參せらる。去ぬる三月十五日、管領上杉兵庫頭淸方、既に結城追伐の爲、上杉右馬助憲信入道固廳鼻性順・長尾左衞門尉景仲を兩大將として差向けらる。性順は苦林に陣を取り、景仲は入間川原に陣を居ゑて、人數を催す所に、結城に一味する輩、諸方に滿ち〳〵て、往來の道を遮り、軍役の便を塞ぐ由聞えければ、管領淸方・上杉修理大夫持朝軍を起し、馬を出されて鎌倉を打立ち、所々に催促して勢を集めらる。三浦介時高は、鎌倉警護の爲とて、百餘騎にて馳せ來る。京都將軍家より、故禪秀入道が子息上杉中務少輔持房に、美濃・尾張の軍勢二千餘騎を差添へて、五月朔日鎌倉に下着し、春王・安王追討の御敎書を、東國に施行せらる。長棟禪門は、持房と同じく鎌倉を立ちて、同十一日、武州の神奈川に陣を居ゑらる。

爰に一色伊豫守は、去ぬる正月に鎌倉を逐電して、武州の成田が館に隱れ居られしが、北一揆の者共を相語らひ、七月朔日の夜、竊に利根川を渡り、須賀土佐入道が館に夜討し、家に火をかけ、鬨を作りて打入りけり。思ひも寄らぬ俄事に、家子郎從騷ぎ立ちて、太刀・長刀の鞘を外し、出向ひて防ぎけれども、叶はずして、須賀入道を始めて、一人も殘らず討たれたり。上杉性順・長尾景仲此由を聞きて、同三日成田が館に押寄せたり。近鄉の溢れ者共、一色に同心して出で戰ふ。性順・景仲無勢にして、引き色になりければ、一色、勝に乘つて、打つて出でて戰ふ。散々に駈出でしに、寄手、蜘蛛の子を散らすが如く、四方に逃げ崩れたり。荒川を追越して備を亂し、村岡河原に打出でたり。景仲大音上げて、味方の軍兵を勇めけるは、此軍に打負けて、誰にか面を合せ、何をか手柄の侍といふべき。踏止まりて討死し、名を子孫に讓れやと下知して、性順が軍兵と一手になりて、押返し相戰ふ。備亂れし一色が軍兵、ちりぢりむらむらに追立てられて、一所に集まることを得ず。或は討たれ、或は落失せければ、伊豫守敗北して、成田が館に引返さんとすれども、敵はや滿ち滿ちて通

り得ず。笠印をかなぐり棄て、敵軍の中を紛れ出で、辛うじて上州を指して落行きけり。上杉修理大夫持朝は、岩付に陣取りて此戰を聞付け、後詰の勢を遣されしに、軍散じければ引返しぬ。安房守入道長棟禪門は、神奈川の陣を拂つて立野に赴き、本唐子といふ所に逗留せらる。勝豐後守は、結城に一味して、郞從七八騎を召連れ、結城が城に籠らんとて、忍びて足利の町屋に宿を取りける所に、上杉持朝の家人松岡彌平兵衞に見出され、遁るべき道なくして、一所に戰うて討たれけり。

三　圍結城附城兵夜討

大森伊豆守は、箱根の別當を相語らひ、近鄕の武士を催し、結城の城に敵押寄せなば、後詰をいたして打散らさんと、用意する由聞えければ、之を抑へん爲にとて、今川上總介に二千餘騎を差添へて、平塚に向けられ、蒲原播磨守に一千五百餘騎を相添へて、國府津の道場に陣を据ゑさせられしかば、前後の敵に抑へられて、大森、さしも手を握り齒嚙をすれども、頭を出すべきやうもなし。同七月廿九日、管領上

杉兵庫頭淸方・同修理大夫持朝、軍勢十萬餘騎を引率して、結城に着陣し、諸將各家家の旗をさゝせ、陣屋々々を取固め、城の四方を打圍み、稻麻竹葦の如くなり。禪秀入道の四男上杉治部少輔敎朝は、持氏退治の爲、將軍義敎公の御旗を給はり、京都を立ちて、北陸道より發向せし處に、鎌倉既に沒落しければ、奥州を指して赴き、殘黨を攻平らげ、諸軍勢を催促し、三萬餘騎を引具して結城に着陣し、管領に對面して、軍の手配(やくばり)、合戰の評定をぞ遂げられける。總大將管領淸方は、大手に向はれ、副將軍上杉持朝は、搦手に向はる。城の北には、京勢上杉治部少輔敎朝を大將として、宇都宮新右馬頭・土岐刑部少輔・小田讃岐守・北條駿河守以下の諸將、碁の子を打ちたる如く、いやが上に控へたり。南の方には、岩松三河守・小山小四郎・武田大膳大夫入道・同子息刑部少輔・千葉介を始めとして、越後・信濃・武藏の七黨、上總・下總の軍勢、透間もなく陣を取る。其外安房の里見、上州の平一揆、總て軍兵十萬餘騎、城の四方は、錐を立つるの地もなく、各陣をぞ据ゑられける。城中には結城中務大輔・同子息右馬頭・次男駿河守・三男七郎・四男次郎・今川式部丞・木戸左近將監・宇都

宮伊豫守・小山大膳大夫・同子息九郞・桃井刑部大輔・同嫡子修理亮・次男和泉守・三男左京亮・里見修理亮・一宮伊豫六郞・寺岡左近將監・內田信濃守・小笠原但馬守以下の軍兵二萬餘騎、春王・安王兄弟を守護して、小屋を並べて立籠る。此城の有樣、西の方にこそ、大河を抱へて要害堅固なれ、三方は陸に續きたる平城に、岸高く切立て、堀を深く水を湛へ、底に亂株を緊と打ち、大木を懸け石弩を張つて、逆茂木を引廻し、武勇に名を得し兵共、主君の爲に籠りしかば、寄手大軍なりと雖、容易く攻落すべしとも覺えず、空しく數日を送りけり。城中之に機を屈して、慰むこともなく、只徒に、四方の寄手の陣屋々々を、見渡すより外の事はなし。簗田六郞は、聞ゆる大力の勇者なるが、平田兵部少輔に語りけるは、京・鎌倉の軍勢、關八州の諸將、今此城に押寄せ乍ら、何の仕出したる事もなく、陣屋に起臥し月日を送る。いざ一夜討して目を覺させ、我等の撓みたる機を慰めて、引立てんといふ。平田聞きて、我もよく存ずるなり。さらば人々を語らへとて、上杉・高橋・糟谷・水谷・高田・藤本の輩、劣らぬ武勇の兵七十餘騎、頃は十月廿八日、北時雨降りみ降らずみ、黑雲被ひて風に從ひ、

空定めなく暗かりしに、木戸を開き逆茂木を除けて、上杉治部少輔教朝が陣に忍び入りて、胴の火を立てゝ陣屋に挾み、鬨をどつと作れば、寢おびれたる者共、膽を潰し度に迷ひ、馬離れ騷ぎ立ちて、太刀よ物具よと犇く間に、七十餘人の兵共走り散つて、切倒し打伏せければ、折節嵐吹き出でて、燒上る焰四方に飛分れ、懸並べたる陣屋共に燃え付きしかば、之を打消さんとする程に、搦手の陣々、上を下へ持て返し、敵とも味方とも見分けたる方もなく、打合ひ攫み合ひて、手負ひ討たるゝもの數を知らず。馬・物具を棄てゝ、落ち逃ぐるを敵かと思ひ、引返して同士討するも多かりけり。七十餘人の輩は、合言葉を以て一所に集り、徐々と城中に取上ぐれば、夜既に横雲棚曳き、東よりして明白む。教朝の陣中に、其夜討たるゝもの二百六十餘人、其外手負は數知らず。皆同士討して死にたりければ、中々恥がましくぞ聞えける。

上杉教朝無念の事に思ひ、翌日午の刻計りに、三千五百餘騎、城近く押詰めて、鬨を作り攻懸る。城中には、塚原彌五郎・宮田新介・鹽田・早沼以下の精兵八十餘人、鏃を揃へて射出しければ、込みかけたる寄手の先陣二百餘騎、或は馬より射落されて、矢

庭に死するもあり、或は小手の端、草摺の間を射させて、立竦むものもあり、怺へ兼ねて、南を指してなだれ懸る。二陣續いて押寄せ、楯を一面に突並べ、堀際近く詰懸くる。城の內より木戶を開き、寺岡左近・桃井刑部・名塚・大島の者共二百餘騎打つて出で、入亂れ揉合ひて、火を散らして戰ふ。追靡け駈立てられ、七八度が程戰うて、兩方さつと別れたり。三陣入變り、新手五百餘騎、銜を並べて馳せ懸る。城兵既に疲れければ、引上げんとする所に、寄手楯を覆して、續いて乘入らんとす。城中走木を出して突落し、石弩を切つて放ち、其間に城兵を靜に引入れ、橋を引きて防ぎければ、寄手又若干討たれ、時刻押移り、日既に西山に傾きしかば、本陣に引返す。城强くして攻め難ければ、諸軍更に寄せ懸るべしともせず、只夜討の用心して、陣を固く守り居たり。

四　千葉介軍評定附山內氏義出レ城

管領上杉淸方は、城の大手十町を隔てゝ、棧敷塚とて、小高き所に陣を居ゑておは

しけるが、太田駿河守を以て、寄手の諸將に觸れ遣し、一所に會合して、軍の評定まちまちなり。變る手段なく、空しく月日を送り、兵粮のみ費したらんには、京都の聞えも言甲斐なく、面々の恥にて候はずや。此程の城一つに、關八州の軍勢、京・鎌倉の諸將達集り攻むれども、落ちずなんどと沙汰あらば、後代迄も口惜しかるべし。如何計らひ給ふぞと、面々の意見をぞ伺はれける。諸將とり〴〵に評議する中に、千葉介胤直、進み出でて申されけるは、實に此城の有樣、今の構、謀あるに似たりと雖、將の智は長ぜるにあらず。されば劒閣は嶢しと雖、之を賴むものは跪き、洞庭は深しと雖、之に負くものは北ぐといへり。是れ正に根を深くして蔕を固くし、人を愛して、國を治むる道を知らざる故なり。故左馬頭殿御行跡、人望に背き給ひ、自ら滅亡を招き給ふこそ、諸將疎み諸侍怨みて、獨身一夫の囚となり、御尸を路徑の草村に晒し、威名を死後の辱に辱しめられたまふ。其御子息として、結城氏朝が義を以て、守護し奉ると雖、恩顧少き軍士等、一旦附從うて立籠るとも、始終更に賴み難し。夫れ淫するときんば、色を以て傾け、貪る者をば、財を以て招くといへり。氏朝が貪

弟山内兵部大輔氏義は、大欲無道の愚人なりと雖、心剛にして力量あり。一方の固として、氏朝、彼を頼み思ふこと肱股の如し。いかにもして之を招き、御味方に屬せしめば、城中定めて力を落し、互に疑ひ危み出でて、一味することあるべからず。人疑則北、力分則弱といへり。此時四方の寄手同時に攻上らば、一時の間に破れ候べしとぞ申されける。管領淸方申されけるは、味方を全くして、敵を治むるは上策なり。人數を損じ力攻にせば、此城は一時に落すべしと雖、是れ大將の本意にあらず。千葉殿の御議に任せ、計略を廻らし候べし。さて兵部大輔には、誰か通路いたさるべきと尋ねらるゝに、岩松三河守、某年頃、氏義に別心なく睦び候ひしが、今以て其交の情をば、忘るまじきにて候。忍びのもの一人を給はりて、謀り見んと申されけり。管領大に喜び給ひて、其頃世に隱れなき忍びの上手、相模國足下郡に住み慣れし、風間小太郞といふものをぞ遣されける。岩松陣屋に歸りて文書き認め、風間に心を入れて、城中にぞ遣しける。三日過ぎて後、氏義が返狀を取りて歸り參りぬ。兄七郞が一跡、相違なく安堵せしめ給はゞ、御味方に參るべき由書きたりけり。翌日の

夜半ばかりに、氏義竊に城を落ちて、岩松が陣に來る。三河守之を召連れ、大將兵庫頭の本陣に行きければ、降人になりて出でたるものに、對面すべきに及ばず。此城落居の時節迄は、岩松に預け置かるゝなりとて、ひたつら囚人の如くにして押籠めて、嚴しく番をぞ居ゑられける。兵部大輔氏義は、斯る事と知るならば、城中にして討死すべかりけるものを、謀られける事の口惜さよと、後悔すれども甲斐ぞなき。

五　結城・寄手軍の事

城中には、兵部大輔氏義、降人になりて出でたりければ、七郎氏朝を始めて、諸侍皆力を落し、誰とても、賴み難きは人の心なり。一方の固めと賴みて、而も大將の弟なれば、たとひ如何なる事ありとも、主君を棄て兄を見放し、恩を忘れ義を背き、今更敵に降ること、是れ武士の道にあらず、人倫の掟に違ふ。日本一の不道者かなと、上下爪彈して惡み誹る。兄の七郎も、よし〳〵兵部大輔がなければ、軍はせられまじきか。一旦の命を惜み、譜弟の恩を忘れ、弟を失ひ名を汚す不覺人、天道之を守り給は

んや。とても行末久しかるまじと、躍り上りて怒れども其詮なし。今迄は親しく交を結び、情を深くせし輩、いつしか互に心を置き疑を起し、其夜の中に、城を落ち失せたるもの過半に及べり。されども三族に逃れざる一家の輩、譜第恩顧の侍猶一萬餘騎、よしや臆病神の附きたる者共は、軍の爲に足纏とはなれども、物の用には立たぬぞかし。落失せたるは、あるに優れり。此に殘り止まる兵は、義心鐵石の如く、忠烈筋骨に徹せし者共なり。敵攻かゝらば、華やかなる軍して、快く討死すべしと勇み誇りて、中々怯れたる色はなし。四方の寄手十萬餘騎、一同に鬨を作り、潛き連れて攻かゝる。城中より、矢種を惜まず散々に射ければ、寄手の軍兵色めき立ちて、互に人を楯となし、其影に隱れんとす。城中之を見澄して、切先を並べて打つて出でたりければ、先陣の兵七百餘騎、立足もなく引退く。二陣の新手入替り、駈け亂さんとすれば、追捲り、打散らさんとすれば、一所に備へて相戰ひ、手負を助けて、靜に城にぞ引入りける。宇都宮新左馬頭・紀淸兩黨の者共八百餘騎、押續きて攻懸り、逆茂木を引き除け、堀におつぴたり、切岸の上に登らんとす。城中豫て用意したる石弩大

木を、一同に切つて放つ。寄手の軍兵、甲の鉢を打碎かれ、手足を打折られ、堀一つは、死人にて埋みたり。宇都宮も右の腕を打折られて、這々攻口を引退く。土岐刑部少輔・小田讃岐守、一千二百餘騎にて入變り、切岸の下まで攻付けて、手負を引除け、馬を射させじと、楯の羽を突並べて、喚いて懸る所を、木戸左近將監・桃井刑部大輔・小笠原但馬守四百餘騎、鏃を揃へて切つて出でつゝ、兩方入亂れて攻め戰ふ。旗の手空に閃きて、龍蛇の影すさまじく、鬨の聲地に響きて、雷霆の音影し。魚鱗に懸り鶴翼に開き、前後左右に駈け廻り、打つもあり打たるゝもあり、東西に開き南北に別れ、追捲し返し合せ、七八度揉合ひければ、馬蹄を浸す血は、滾々として洪河の流るるが如く、死骸を積みたる地は、累々として屠所の肉に異ならず。寄手二百餘騎討たれたりければ、城兵も八十餘騎に討取られ、深手薄手を負ひたるもの、兩軍いづれも變らねども、防ぐ兵は、弦を引かば、續いて攻入られぬと危み、寄手は、いふ甲斐なく引きて、敵味方に笑はれじと、互に刃を砺ぎ、力を限りに戰ひしが、小田讃岐守味方を下知して、振仰ぐ所を、矢倉より射出しける流矢一筋、甲の眞額より、眉間の腦を

碎きて、篦深に射込みたりければ、馬より落ちて死に入りたり。之を助けんと犇く間に、寄手氣を落し勢疲れて、むら〳〵になつて引退く。桃井・小笠原も、軍はこれに限らじと、退く敵を追棄てゝ城に入り、木戸を閉てければ、新手の軍勢も、さすがに續きて攻懸らず。漸く其日も暮れかゝり、雲間の景色うづまきて、雪霙降り出でければ、陰雲烈しく膚に徹り、凍え果てたる軍兵共、陣々焚火に當り、佗しき夜半を明し兼ね、紅葉はなけれども、あたゝめ酒に醉伏し、着帛はなけれども、手足を縮めて寒を防ぐ。今夜若し城中より、一同に打つて出でなば、凍え極る寄手の軍勢、手屆まぬ藥はなし。寒氣に迫りて心撓み、勢分疲れて醉ひ伏したりければ、弓を引き太刀を拔きて立合ふ迄もなく、亂れ立ちて逃げ崩し、力をも入れずして、敵陣を打破るべかりけるを、運の傾く悲さは、謀才空しく胸臆に崩れ、勝利徒に心頭に包まれ、さしも能き圖を外しける、結城が智慮こそうたてけれ。既に金鷄三度唱へて、雪より白む山の端に、横雲漸く棚曳き、ほの〴〵と明くる東雲に、四方の梢は殘りなく、時ならねども花咲きて、皆白妙に見え渡る。これにぞ心は慰めける。

六　東下野守父子流罪

東下野守益之入道素明は、和歌の道に心を寄せ、京都に伺候して、常に之を弄び、柳營また此道を好み給ひしかば、磯城島の德義に返り、難波津の古風を仰ぎ、人皆柿本の遺愛を慕ふのみならず、世擧りて幕府の數寄に從ひけり。去ぬる應永廿九年十二月、將軍家の與行に依つて、飛鳥井大納言雅世卿・今川入道了俊・常光院堯仁、其外堯孝以下十三人を選びて、各十一題の和歌を詠ぜしめ、題毎に一首を詠ましむ。勸修寺大納言の第にして淸書あり、明魏耕雲これを批點せしに、益之其選に預り、秀歌仕りて世に名を顯せり。子息常緣も、下野守に任せられ、同じく歌道の祕訣を傳へ、富の小川の淸き流を酌んで、飛鳥山の高き跡を踏み、春の花、秋の紅葉、更行く空の月を慕ひ、弱り果てたる虫の音を憐れみ、心を傷ましめ思を述べし所に、如何なる故にや、鎌倉に心を通はし、京都を窺ふ由風聞あり。實否は未だ決せざれども、折節に附けて穩便ならずして、益之入道は、周防に流され、子息常緣は、暫く出仕を止め、門を

閉ぢ番を居ゑて守らせらる。京都の手は、何となく物騷しく、巷說とりどりなりければ、人の心も安堵せず、危み思ふばかりなり。

七　謀城中の返忠　附葛西八郎討死

年爰に暮れて、立返る春にもなりしかば、軒端の梅、雪間に綻び、谷の鶯、聲珍らかに、霞棚曳き、山々浮立ち、空の景色までも、いとゞ緩やかなれども、世の中は物騷しく、東國まだ靜ならず。是に依つて永享の年號を、嘉吉と改元せらる。結城が城强くして、所々に內通のもの多し。若し同時に亂れ立ちなば、由々しき國家の大事なり。速に城を攻干し、靜治の忠勤をいたさるべしと、關東討手の諸將達に、御使を下さる。諸將皆大に畏りて、軍評定をぞいたされける。下總國の住人岩木五郎といふもの、結城に志ありて城に籠りしが、年頃の妾を、忍新七とて、莫逆の友のありけるに、預け置きたり。其身は城中にあり乍ら、此女房の行方、如何になりけるやらんと、戀ひ悲しむ心の堪へ難く、人知れぬ淚の露、乾く隙もなし。新七も又軍に驅られて、寄

手千葉介が陣に屬してありけるが、竊に岩木に內通し、返忠のことを催し、合圖を定めて、此由大將の本陣に申入れたりければ、神妙なりと感悅あり。斯くて四月六日卯の刻に、四方の寄手十萬餘騎、同時に押詰め、箙を叩きて鬨の聲を揚ぐれば、城中も矢間を開きて、鬨を合せたり。天地震吼し山河動搖して、雲渦卷き雷轟き、旗の手太虛を彩り、刃の光、赫日に映ず。城中數ヶ所の櫓・出塀、矢間の內より、雨の降る如く射出しける矢に、一つも浮矢なく、楯の外、旗の下に射伏せられて、半死半生になりたるもの、數を知らず。寄手色めきて、互に人を楯になさんとする程に、先手の二千餘騎怺へ兼ねて、むら／＼になつて引退く。二陣の三千五百餘騎、續いて堀の前に潛き寄せ、埋草を以て堀に投げ、燒草を積みて櫓を落さんとす。城中より石弓を放ち、大木を切落すに、切岸の下に着きたる二千餘騎、堀の底に捲り落され、己が持ちたる太刀・長刀に貫かれ、手負疵を蒙り、いやが上に重なり伏して、進退更に自在ならず。城中之を見澄して、七百餘騎打つて出でつゝ、魚鱗虎韜の陣、氷刃閃電の光、須臾に變化して八方に相當れば、尸骸は草根に横り、汗血は馬蹄を染めたり。僅の

勢に切立てられ、散々になつて引退く。武田大膳大夫・同刑部少輔・武藏の一揆三千餘騎、新手を以て入替り、城兵を眞中に押包み、一人も洩らさず打止めんと、鶴翼になりて攻懸る。城兵小山大膳大夫・同子息九郎・桃井和泉守・同嫡子左京亮以下の七百餘騎、魚鱗に備へて駈け通り、後へ拔けて取つて返し、突落し切伏せ、勇猛邊を拂つて打つて廻るに、寄手の軍兵駈立てられて、手負討たるゝもの數を知らず。攻倦みて見えたる所に、武藏國小玉黨の中より、葛西八郎と名乘つて、黑糸縅の鎧に、同じ色の甲の緒をしめ、四尺餘りの大太刀を拔いて、眞先に進み、射向の袖を搖合せ、躍り懸り〳〵打つて廻るに、城兵七人は目の前に討たれ、廿八人は深手を負ひたり。之に辟易して、城に引上らんとす。寄手機に乘りて鬨を作りかけ、續いて込懸る。城の兵同時に木戶を開き、切岸の上に降下つて、鏃を揃へて散々に射る。葛西八郎が、勇み進みたる鎧の弦走より、總角付の板まで、箆深にぐさと射込みたりければ、目昏れ心消えて、太刀を倒に突き、立竦みてぞ死にゝける。其外の軍勢七十餘騎、矢庭に射伏せられ、大石に當りて打居ゑられ、疵を蒙り手を負ひたるものは、數も知らず。

れ城兵も五十餘騎は討たれ、殘る者共、痛手薄手負ひながら、靜に城に引入りて、木戸を下しければ、寄手は皆逆茂木の際まで攻付けて、垣楯かきてぞ居たりける。

八　結城殁落附氏朝以下討死

結城七郎氏朝は、旣に累代主君の恩を忘れず、武門佳名の義を勵まし、此城に立籠り、大事を思立つ所に、志を通はして、助ともなるべき人々をば聞出して、皆退治せられ、同胞金骨の固とも賴みける小山は、二心を存して敵に屬し、今は後詰の方人もなし。内通の贔屓も絶えたり。これ程に運の利かぬ時なれば、如何に思ふとも叶ふべからず。されば勝利を求むる時にこそ、運をも考へ身をも全うして、功を施さんとは計るべけれ。詮方なき微運の我等、城中にありて月日を重ね、籠鳥の雲を戀ふる思を焦し、轍魚の水を求むる志を費すとも、いかばかりの事かあるべき。今更降を乞うても、猶賴む蔭なき世に立紛れ、傍の人に指をさゝれんこと、是亦恥の上の不覺たるべし。只命を限りに戰ひ、弓矢の名を專にし、義に依つて討死するより外の事あ

るべからずと、思ひ極めて候。面々はいかゞ思ひ給ふぞ。若し忠義を棄てゝ心を變じ、恩顧を忘れて主を見離さん輩は、疾々此城を落ちて敵に屬し、御身を立ておはしませ。氏朝、露ばかりも恨に存ずること、あるまじきにて候とぞ申されける。內田信濃守申されけるは、管領憲實已下の一族、權威を公義の下に藉りて、鎌倉の世を、反逆の中に奪はんと企て、恩を荷うて恩を忘れ、道を踏んで道に背く、大惡無慙の甚しきこと、天理神明の冥眦に外れ、世間人品の指頭に懸る。然れども運命開け難く、我等此防戰に苦しむことは、時の至らざる故なれば力なし。今更心を變じて、敵に屬する程ならば、始より此城に籠らぬものにてこそあらめ。たとひ敵兵は日に添へて重なり、味方は小勢にして疲れたりと雖、何ぞ惡びれ、漫に怯ぢて機を落すべき。軍に死せずとも、終に保たぬ我人の命を、同じくは主君の爲に參らせ、怨を泉下に報ずべし。敵寄せ來らば、下り向うて戰ひ、防ぐに叶はずば、討死する迄なり。若し又通れつべくば、一方を打破りて引退き、謀を以て時を待つべし。此人々の中に候か、二の足を踏む人あらんと申さるゝに、諸將いづれも同音に、內田殿の仰の如く、一筋に

皆思ひ定めて候ぞ。心安く討死し給へと、一味同心に申合せたり。さる程に四月十六日卯の刻に、寄手又潛き連れて、同時に切岸の下に押詰められたりけれども、岸高ければ、馬の鼻を突かせて上り兼ねたるを、後より續く軍勢共、先なる兵の楯の棱を踏まへ、甲の端を足溜にして、城戸・逆茂木を切破り、討たるゝをもいはず、手負をも顧みず、乘越え〳〵城に込入りたり。城中にも、石を投げ大木を落し懸け、鑓・長刀を以て切倒し突落す。斯る所に、豫て合圖を定めたることなれば、岩木五郎が所爲にや、俄に火燃え出でて、雲煙と燃え上る。こはそも如何なる事ぞと、いふ程こそありけれ。猛火四方に燃え渡る。城中の軍兵、火に惑ひ煙に咽び、防ぐべき力もなく、落行くものは亂れ合ひて、切伏せられ打倒され、前後を辨ふる方もなし。結城七郎は、春王・安王殿の御前に畏り、涙を流して申しけるは、氏朝數代の恩を蒙り、義を忝うし、忠を專として、年月此城中に抱へ奉り、御運再び開かせ給ふべき其計策を廻らし、數萬の敵を引受け、數度の軍に利ありと雖、方々より敵はや攻入りて、城中に充ち滿ち、味方に返忠（かへりちう）のもの出來て、火をかけ燒上り候上は、矢庭に思ふとも叶ふべから

ず。いかにもして敵陣を忍び出で、越後國へ落下らせ給はゞ、御行末を見屆け奉るべき人の候はん。氏朝に於ては、敵に向ひて討死仕り、黄泉の下に憤を報じ候べし。今生の御名殘、今を限りにて候とて、兄弟の若君を、女房の姿に出立たせ、輿に乘せ奉り、搦手の木戸より落し參らせたりけるに、寄手の諸軍、皆誠の女ぞと心得、道を明けて通しける所に、後陣に控へたる長尾因幡守見咎め奉り、聽て生捕り參らせけり。無慙といふも愚なり。結城七郎此由聞きて、口惜しきことかな。多年の忠義一時に空しく、氷を鑄りて勞を重ねし、我等が果こそ淺ましけれ。此上はいざ打つて出で、命を限りに戰ひ死して、修羅の巷に恨を報せんとて、大將結城七郎氏朝・同伯父中務大輔・同左馬頭・同駿河守・子息七郎・次男今川式部丞・木戸左近將監・宇都宮・小山・桃井・寺岡・小笠原の諸將を先として、家子郎從等、二心なき金石の勇士四百餘騎、大手の木戸より、一手になりて打つて出る。寄手之に立合はんと、鶴翼に備へて押纒ふ。城兵は元より思ひ切つて、討死と志す上は、敵を嫌はず、當るを幸に馳合ひ馳合ひ、八方に追靡け、四塚の固めを打破り、雁行に連り虎韜に集り、馬疲るれば、離

馬に乘換へ、太刀打折るれば、棄てたる太刀を取換へて、敵を切つて落すこと二百餘騎、陣を打破ること五度なり。三軍に作る鬨の聲、兩陣に叫ぶ戰の音、天を響かし地を動かし、前後に當り左右に支へ、義を重くし命を輕くして、或は引組んで勝負をするもあり、或は打違つて死するもあり。其猛卒の機を見るに、一足も引退くべき色はなく、駈合ひ入交り、散々に攻戰ふ。寄手怺へずして、むら〳〵になる所を、手先を捲つて追退け、さつと引退きて見たりければ、寺岡・小山は討たれて、小笠原但馬守は痛手負ひたり。猶人手には懸らじとや思ひけん、小藪の中に分入りて、腹切つて死したりけり。郎從家子四十六人討たれたり。殘る兵共、馬を一所に立籠めて、暫く息をぞ繼ぎにける。寄手の方に、土岐刑部少輔・北條駿河守二千餘騎、しづ〳〵と押懸り、如何に人々、命惜しくば助け參らせん。甲を脫ぎて降人になり給へと、聲々に呼はる。結城七郞聞きも敢ず、弓馬の家に生れたるものは、名こそ惜しけれ、命をば惜まぬものを、今更降人になる程ならば、始より世を諂うて、先祖の面を地下に恥かしむべし。義を棄て命を棄て、恩報せんと思ふ志、金鐵よりも堅き我等ぞ。いふ所眞

か虚事か、戰うて手並を見給へとて、四百餘騎どつと喚いて駈けたりければ、寄手の三千餘騎、僅の勢に駈立てられ、一溜りも怺へず、引退きけるを、言葉にも似合はぬ人かな。汚し返せと恥しめて、追立て〳〵打つて進む。土岐刑部は深手を負うて引兼ねたるを、軍兵踏止まり、暫く防ぎて、押包みて引いて行く。上杉修理大夫持朝六千餘騎、馬の頭を雁行に連ね、旗の足を龍粧に進め、横合にしづ〳〵と駈けたり。勇み誇りたる結城が軍兵、少しも怯まず、十字に合せて八字に破り、東西に靡き南北に分れ、萬卒に面を進め、一擧に死を爭ひ、互に討つ討たれつ、切先に血を注ぎ、鍔元より火を出し、打靡け駈散らし、半時ばかり戰うて、表に駈拔けて見れば、結城中務大輔父子を始めて、百餘騎は討たれ、其外の者共、或は痛手を負うて生捕られ、或は叶はずして駈立てられ、心ならず落ちて行き、殘る兵唯五十騎になりたり。此迄も氏朝は手も負はず、ふしなはめの鎧は、太刀懸草摺の横縫、皆突切られて、威毛ばかり續きたり。甲は鉦を切落され、星も少々削られ、備前長刀の鎬下りに、菖蒲の形なるを、峯は鰯のやうに切られ、刃は鋸の如くにぞ折れたりける。今一軍して、快く自害をせ

結城氏朝自盡

んといへば、仔細にや及ぶといふまゝに、五十三騎を前後左右に立て、大勢の中に駈入りつゝ、四武の衝陣堅きを碎き、百戰の勇力變に應じ、いづれも劣らぬ勇士なれば、肌膚撓まず眼瞼まじろかず、猛氣八方を拂へば、さしも小勢なりとは雖、敵の三軍敢て之に當り難し。たゞ射竦めて討取れやとて、雨の降る如くに射ける矢に、結城駿河守、唐胴をくさめ通に射拔かれ、小膝を突いてどうと伏したり。寄手の中より寺尾走り懸り、押へて首をぞ掻きにける。桃井刑部大輔は、敵五六騎切落し、のりたる太刀を押直す所に、乘りたる馬の太腹草脇に、六筋まで矢を射立てしかば、馬は小膝を折りて伏したり。我身は數度の軍に爲疲れ、鐙を越して下立たんとするに、股竦みて働かず。力及ばず鎧の上帶解き、腰の刀を拔いて自害したり。宇都宮伊豫守は、敵十方より、鏃を揃へて射ける矢に、馬の平首草脇、篦深に射られ、我身も弓手の腕、右の膝に、四所まで射させ、馬は乾にどうと伏し、乘手は朱になつて下立ちたり。之を討たんと馳せ寄る敵の、諸膝薙いで跳ね落させ、押へて首を掻く所を、十七八騎折り重なり、甲の天邊を引仰け、首を取つて差上げたり。五十三騎の兵、所々に皆討たれ

て、結城七郎・宇都宮彌五八・里見修理亮たゞ三騎に討なされ、此より敵を駈破りて、落つるとも落つべかりけり。さりながら行末とても道狹く、天に跼り地に蹐して、身の置き所を求め兼ねて、此處彼處の寺院に夜を明し、隱れ歩きて窮困し、溝瀆に倒れて飢死せんには、先亡の與類に、何を面目として、泉下にして見ゆべき、此大軍の中に、只三騎駈入りたりとも、物の數とや思ふべき。然れども義に曝すべき尸を、九原の苔路に埋む迄は、敵を討つて慰まんとて、三騎銜を並べて一文字に駈入り、此處に交り彼處に顯れ、火を散らして切つて廻る。聚散離合し隱顯相忽たる有樣、須臾に變化して閃電の如し。前にあるかとすれば、倏爾として後に馳せ、味方かと思へば、屹として敵なり。十方に分身して萬卒に相當り、僅に三騎なれども、寄手の陣中に滿ち〳〵たる心地し、討てども止まらず、射れども當らず　只陣中騷ぎて、東西南北に走せ合ひ、備を亂して持扱ひ、手にも溜らぬ水底の、月を取らんとするに似たり。京勢の中より、大荒布の鎧着て、鹿毛なる馬に打乘り、四尺五寸の太刀を拔き設けたる武者一騎駈出で、播磨國の住人印南平太貞近と名乘りて、宇都宮に渡り合ふ。彌

五八之を弓手に相うけ、甲の鉢を、菱縫の板まで破付けたりければ、平太は氣色にも似ず、二つになつて失せにけり。馬も尻居に打据ゑられ、小膝を折つて伏したり。跡に續く軍兵十五六騎、此勢に膽を潰し、這々と引返す。三騎の勇士、今を限りの軍なれば、手を負ひども顧みず、矢に當ればかなぐり棄て、塵埃を蹴立て汗血をしたでて、楚の項羽が漢の三將を靡かし、夏の魯陽が、日を三舍に招き返しける戰も、これには過ぎじとぞ見えたりける。既に夕陽西に傾き、東の山頭を照す頃になりて、三騎共に切疵・突疵・痛手・薄手、あまた所負ひければ、勢疲れ力撓み、神昏みて覺えしかば、今は此迄なり。生を變へて所を改め、修羅場の戰を期すべきなりとて、同音に念佛し、三人一所に自害してこそ死にけれ。城中總て死するもの一萬餘人、寄手の討たるゝもの、二萬三千餘人なり。近年諸國の合戰にも、此程の人數の討たれしことはなし。只城兵一味して、二心なかりし所なり。結城は謀才の將にあらずと雖、仁義の道を嗜みける、情を感ずる故なるべし。軍既に散じければ、管領淸方郎ら首實檢し、悉く斬梟けさせ、勝鬨を執行ひ、翌日總州にぞ赴かれける。

九　古河城退治

野田右馬允・矢部大炊助は、結城に一味して軍勢を集め、古河の城に立籠り旗を上ぐる。近邊の者共、志あるは同心いたし、志なきは、山野に逃げ隱るゝ間、村里の民屋を追捕して、兵粮の爲に運び取る。結城の寄手一萬餘騎、直に總州に押寄する。此由古河の城に聞えしかば、野田右馬允は叶はじと思ひて、郎從を引連れて、夜に紛れて落失せたり。馳付けたる集り勢、皆ぬけ〳〵に逃去りて、今は矢部大炊助一族郎從、唯八十餘人ぞ殘りける。これ程の人數にて籠りたればとて、寄手十萬餘騎を以て攻干さんには、一人づつ捕へて髮の毛を拔くとも、手に足らぬ事なりと思ひ侮り、城に寄すると等しく、堀に浸り塀に上る。城の兵少々防ぐ體に見せて、詰の城に引上ぐる。塀の上に數千束の萱柴を積上げて置きたりしが、一同に火燃え出でて燒け上るを、押詰めたる寄手の軍兵八百餘騎、進まんとすれば、猛火盛に燃え懸る。退かんとすれば、後より込み懸る。進退心ならず、堀の底に崩れ落ち、太刀・長刀に貫れ、手足を

燒き爛かされ、半死半生になりたるもの數を知らず。火旣に燃え盡しければ、二陣三千五百餘騎、手負を踏み越え、同時に塀を乘越しければ、塀の內に二重堀を搆へ、竹を割りて、所々に簀子をかき、席筵を敷き渡し、其上に白沙を蒔きて、堀には竹を殺ぎて緊と立てたり。思ひも寄らず塀を跳ね越え、引倒して込入りしかば、簀子折れ崩れて、數千の軍勢馬人共に落入りて、竹に貫れ壓に打たれ、疵を蒙るもの數を知らず。堀の岸に並べ置きたる大石共に取付けば、轉ぶやうに操りたりければ、此に取付きて引落し、頭を打碎かれ、足手を打折られ、いやが上に重なり伏す。三陣四陣の寄手、之をも構はず踏越え乘越え、詰の城に懸りけるを、八十餘騎の城兵、皆步立になりて、木戶を開きて打つて出る。分內は狹し、馬の懸引自在ならず、先手計は打合ひけれども、後の勢は見物してぞ居たりける。暫し戰へば、寄手、新手を入變へんとする間に、詰の城に引籠り、木戶を下したりければ、先に手懲して續きても攻懸らず、互に見合ひて躊躇ふ程に、豫て詰の城より、後の山へ拔穴を搆へ、一人も殘らず落失せたり。寄手一度に攻懸り、木戶を打破り、我れ先にと込入りければ、內には一人も軍兵

なし。こは如何にと呆れて、穴を見出しければども、追付きて入るべきやうもなく、ただ討たれたる者共は、犬死したるに同じくして、何の仕出したる功にもならで、軍は茲に果てにけり。大將大炊助は、日を經て後に、野田讃岐守に行合ひて、討たれけるこそ殘多けれ。

十　春王・安王殿兄弟被ㇾ誅

軍散じて諸軍各凱陣す。近國の諸將達は、此より暇給はりて、己が館に引いて歸る。春王・安王兄弟の若者をば、長尾因幡守が陣中に生捕りて、鎌倉に伴ひ、管領上杉淸方に渡し參らせけるを、同五月十日あまり、長尾に預けて路地を守護し、小笠原信濃守政康を差添へて、京都にぞ上せ奉りける。怪しげなる籠輿に乘せ參らせ、宗徒の兵二百餘騎、前後左右を打圍み、腰越・肩瀨を打過ぎて、相模川の夕霧に、曇るか空の月影も、盈れば虧くる世の習ひ、身の上にこそ知られけれ。寄せては返る波の音、聞くも物憂き大磯の、宿より續く酒匂川、舟より上れば中々に、あけて口惜しき浦島が、

箱根の山の三島なる、三枚橋や名にしおふ、思ひに沈む沼津の里。世を浮島が原を過ぎて、美濃國赤坂に着きしかば、宿を求めて入れ奉る。兄弟の若君は、露まどろみ給ふ事なく、長尾因幡守を御前に召され、春王殿仰せられけるやう、結城が城にして、生捕られし日の廻り來て、明日は十六日と覺ゆるぞ。我等が爲に討死せし結城の一族、其外の諸軍士等が、其命日になりたれば、念佛申して弔はんと思ふなり。幼き御心にも、召されて西に打向ひ、安王殿と諸共に、夜もすがら竊に念佛し給ふ。御手水有難き志を、苔路に埋れし亡魂共、さこそは忝しと思ふらん。安王殿宣ひけるは、今宵は月の夜すがら、先亡の餘類を弔ひ候。我等も必ず殺されなん。又誰人か跡を弔ひ候べきと宣へば、春王殿聞き給ひ、我等ほど果報薄きものは、世にあらじと思ふなり。年にも足らずして父母に後れ、孤となるのみならず、剰へ敵の手に生捕られ、京都迄引上せられ、何の日の何時か切られ參らせ、我等が命日となるべき。尸は土中に埋れ、魂は來世に行きて、戀しき父母に對面して、修羅の軍に怨を報ぜん。何か心細からん。別れし親に遭ひ奉るべきことを、一筋に喜び給へと、互に語り慰み給ふ。

之を承る武士共、皆涙にぞ咽びける。明くれば五月十六日、赤坂を打立ちて、青野が原に着き給ふ。斯る所に、京都將軍家より飛脚到來して、二人の若君を、都、まで入れ奉るべからず。路次にて誅し參らせ、御首級ばかりを、京着あるべしと囁きたり。さらばとて、濃州垂井の道場金蓮寺に、御輿を舁入れ奉り、上人を呼び出し、御臨終の戒師に賴みければ、上人立出でて、若君達を見奉り、御前に跪きて申されけるは、此ひじりは、其上藤澤の道場にありて、左馬頭殿の御恩を蒙り、其御情の忘れ難さに、毎日燒香念佛して、御跡を弔ひ奉る。今又御公達の、これへ入らせ給ふ事は、誠に深き御緣なるべし。今ははや御最後近く候。思召切らせ給ひ、後生の事を念じて、成佛を期し給ふべし。又仰せらるべき事あらば、承つて、京都へも言上して、猶御跡をば、此ひじりが隨分弔ひて參らせんと、涙と共に申せば、春王殿も安王殿も、少しも臆したる色もなく、父左馬頭殿に對面の儕にて候由、懷うこそ覺え候へ。毎日御回向に預る條、我等迄も嬉しう候。今夜切られ候はゞ、父尊靈と一つに、蓮の臺に上らん。上御弔の回向を賴み奉るとて、兄弟の守袋を上人に奉り、御布施に擬せられたり。

春王安王殺さる

人泣々受取りて、念佛を勸め參らする。長尾が郎從柿崎小次郎・西郡藤次、御後に廻ると見えしが、兄弟の御首は、軈て前にぞ落ちにける。空しき骸に薪を積みて煙となし、御首級をば、京都に上せけるを、又垂井に差下され、道場の内に埋みて、一堆の塚の主となし、上人毎日念佛して、深く弔ひ奉る。春王殿は十三歳、安王殿は十一歳、莟める花の開きもせで、烈しき風に落ちぬらんも、此例なるべし。哀れなりし事共なり。

鎌倉公方九代記 卷八

成氏軍記

一　赤松滿祐弑(ニ)將軍義教公(一)附赤松滅亡

其上(そのかみ)故尊氏公の御時、赤松次郎則村入道圓心は、播州より起つて味方に屬し、嫡子左衞門尉範資・次男次郎左衞門尉貞範・三男律師則祐、甚だ忠勤あり。中にも則祐が戰功勝れて比類なし。尊氏公卽ち攝津・因幡・備前・播磨・美作五ヶ國を以て、赤松兄弟三人に給はる。貞範が子顯則・其子伊豆守貞村、總領脈(すぢ)として家門を相續す。則祐が子義則・其子左京大夫滿祐、相繼いで播州を領知す。爰に貞範には孫にて、越前守顯則が第七の末子、越後守持貞は、將軍義持公の御愛童たりしを、元服させて三ヶ國を給はり、寵に誇つて諸大名に不禮をいたし、門族に不義を盡す。諸大名も惡み疎

み、左京大夫滿祐も大に憤を銜み、一味同心に持貞が不禮を戒め、追却すべき旨、訴へ申事、度々に及ぶと雖、將軍家終に御裁許なし、此張本は、滿祐なりと風聞す。持貞遺恨しければ、滿祐將軍家を怨み奉り、我家に火をかけて、播州に馳下る。將軍家卽ち細川持元・山名滿凞を討手として、差下さるべき評定あり。諸大名一同に滿祐が方人して、持貞が無禮不義の由訴へしかば、將軍力及ばず、持貞に死を給はり、滿祐は許されて上洛いたし、京都に伺候す。持貞が領知を、滿祐が支配に任せられしかば、是より威勢高く諸人の上に輝き、雅意に任する事多しと雖、上下皆恐れ憚りて、兎角申す人もなし。義持公薨じ給ひ、義敎公世を嗣ぎ給ふ。滿祐愈奢り出で、將軍家に對して、無禮の振舞重疊せり。義敎公目覺しく思召し、竊に管領細川持元と相謀り、彼が威勢を減さんが爲に、滿祐が所領備前・播磨・美作を分けて、顯則が孫赤松伊豆守貞村を取立てんとし給ふ。滿祐父子聞付けて、深く怨を銜み乍ら色にも出さず、野心を挾み謀計を廻らし、將軍義敎公を我館へなし奉り、御遊あるべき由を望み申すに依つて、嘉吉元年六月廿四日、赤松が館へ入御あつて、猿樂を御覽ぜらる。日暮れて酒

赤松滿祐義敎を弑す

宴始まり、數獻に及ぶ所に、滿祐が厩の馬放つに、數多の馬共喰合ひ跳合うて、騷しき事いふばかりなし。これを鎭めんとて、門をはたと鎖しける時、豫てより隱し置きたる兵共、同時に起り出で、滿祐は後の屛風の影より走り出で、義敎公を刺殺し奉る。座中驚き周章て、いづれを敵味方とも思ひ分けず、向ふものを相手にして、打合ひ切合ひて、手負死するもの多し。滿祐・敎祐父子は一族郎從を引具して、其夜播州に落入りぬ。義敎公の御息義勝公、生年八歲になり給ふを守立て、主君と仰ぎ奉り、管領細川右京大夫持之、及び大内持世心を合せて、細川讚岐守持常・赤松伊豆守貞村・武田大膳大夫信賢を大手の大將として、山名右衞門督持豐入道宗全・同修理大夫敎淸・同相模守敎之を搦手の大將として播州に遣し、白幡城を攻めしむ。九月十日に、

滿祐自殺

城終に落ちて滿祐は自害し、子息敎祐は逐電せり。卽ち勸賞行はれて、播州をば山名入道に給はり、美作をば修理大夫に下され、備前國をば相模守に給はり、赤松滿祐が家門、玆に於て滅亡す。

二　左兵衞督成氏爲二鎌倉公方一

嘉吉三年七月廿一日、將軍義勝公、馬より落ちて早世し給ふ。御舍弟義政公、八歲にして家督を嗣ぎ給ふ。爰に故左馬頭持氏の末子永壽王殿は、鎌倉滅亡の時、御乳母に抱かれ、御所を紛れ出でて、信州の山中に落着きたり。郡の安養寺の住僧は、乳母の兄なりければ、甲斐々々しく取隱し、大井越前守扶光は、譜第の御家人なり。之に語りて諸共に心を合せ、深く忍びて養育し、軈て元服させ奉りて、成氏とぞ號しける。結城七郎氏朝が末子は、氏朝が甥に結城喜四郎氏家といふもの、一族歿落の時、此小兒を抱きて城中を紛れ出でつゝ、常陸國筑波に落行き、所緣に付きて育てける。既に十四歲になりしかば、元服させて、結城四郞成朝と名乘らせ、時運を待ちて居たりし所に、近年京都將軍家の興替、諸國の逆浪に依つて、關東の有樣穩ならず。然る所に鎌倉管領上杉安房守入道長棟の子息右京亮憲忠は、父と同じく剃髮して、伊豆の御山に閑居し、世を遁れておはせしを、上杉の執事長尾左衞門尉昌賢、呼び出して

上杉憲忠管領となる

足利成氏を鎌倉公方となす

管領とす。持氏の末子成氏、信州におはしますと聞きて、長尾昌賢、東國の諸將に相談して、鎌倉に入れ參らせ、關八州の公方と仰ぎ奉り、禁中の天氣を伺ひ、左兵衞督に任じ、正四位下に敍せられ、鎌倉の御所再び榮え、群俗其德風に歸すること、霜を開きて春臺に上るが如く、彼法政を窺ふこと、田を耘りて時雨を待つに似たり。舊勞恩顧の餘類は、世を憚り人に忍びて、ある甲斐もなかしに、枯木再び枝榮え、根重ねて芽を生ず。これに時を得て病雀花を食ひ、飛騰の翅を搏ち、轍魚雨をうけて、喩喁の吻を潤さんと、喜び思ふもの少なからず。

三　成氏公被ㇾ誅二上杉憲忠一

左兵衞督成氏は、威勢益東域に振ひ、榮名愈八州に輝き、靡かぬ草木もなかりしに、思ひ企て給ふことありて、國家衰敗の本となりけるうたてさよ。享德三年十二月、結城四郎成朝を近く召して、竊に仰せられけるは、倩其昔を思ふに、管領憲實は、故左馬頭殿の讎敵なり。當家運傾きて、父母兄弟悉く殺され、成氏たゞ一人、不思議に

生殘り、再び父の跡を嗣ぐこと、是れ天道神明の、當家を棄て給はぬ所なり。されば父母の仇には、共に天を戴かず。兄弟の仇には、共に國を同じうせずといへり。さしも父母兄弟の怨敵を、眼前に徘徊させ、朝夕に對顔す。其憤、胸に塞り、此恨、肝に銘す。今の管領右京亮憲忠は、憲實が嫡子なり。子として親の敵を討たば、敵の子も又敵ならずや。汝が一族も、皆憲實が爲に屠られ、忠義の下に怨を殘す。いざや憲忠を討つて怨恨を散ぜん。さこそ先亡の輩も、九原の苔の下に、嬉しと思はざるべき。且うは孝養ともなるべし。汝はいかゞ思ふと宣へば、成朝畏りて申しけるは、君の御爲にも敵なり、我等の爲にも敵なり。親の敵を目の前に見ながら、怨を心府に隱し、憤を胸臆に貯へて年月を送らば、天下の諸侍、言葉には出さずとも、淺ましき臆病者の、言甲斐なき有様かなと、思はぬ人は候まじ。親の敵を討たつせば、世の人、道理を感歎して、皆共に歸伏すべく候。上杉が一族、たとひ怨み申すとも、東國の諸將、更に非道不義の御企とは存ずべからず。皆御味方に參りて退治いたさば、不日に鎭まり候はんこと、掌の內なるべし。何の危み恐るゝこと候べき。早思召立ち給へと申勸め

ければ、左兵衛督殿、兎角の思案にも及ばず、同廿七日、管領右京亮憲忠を、鎌倉の西御門に召寄せ、結城彦四郎氏家・同四郎成朝、其外近習の侍十餘人、緊々と取込めて、難なく憲忠を討つたりけり。長尾昌賢大に驚き、こは何事ぞ。世の人の、定めて昌賢が不覺とや思ふべき。本の公方の胤を立てしは、弓矢の冥加を存ずるが故なり。今の管領の職を繼がせしは、家門の舊勳を捨てざらんが爲なり。一旦の憤恨を以て、永代の門眉を削り落し給ふ。成氏の御果報の拙なさよとて、爪彈をしてぞ歎きける。上杉の一族、色を立てゝ、鎌倉を立退き、人數を催して成氏と相挑み、關東此故に亂れて、上下足を空になし手を握つて、安き心もなかりけり。

成氏、憲忠を殺す

四　成氏公被レ誅ニ上杉憲秋・顯房一附成氏鎌倉歿落

既に年明けて、康正元年正月にもなりしかば、古きを送つて新なるを迎へ、春立つ霞を酌みて、千世のためしに引くといふ、松の緑に壽を準へ、めでたかるべき折柄なるに、鎌倉の有樣は、何となく物騒しく、人の心、互に疑ふ計にて、上部には色代すれど

上杉憲秋自殺

上杉顯房自殺

も、下には鏃を磨きけり。上杉禪秀が三男宮内大輔憲秋は、身の上に來る禍ぞと思ひければ、夜に紛れて、武州の池鑑といふ所に立退きしを、差添へて向けられける。憲秋此由を聞きて、迚も免れぬもの故に、愍に軍して生捕られ、憂目の恥に及ばんよりはとて、自害してこそ亡せにけれ。上杉持朝が嫡子彈正少弼顯房は、夜瀬といふ所に落行きけるを、同廿四日、結城成朝、大勢にて押寄すると聞えしかば、郎從共は殘りなく落失せて、只一族小山田三郎定頼が子息八郎藤朝ばかり殘り居たり。斯くて寄手の兵共、鬨の聲を作りて込入りけるを、顯房・藤朝拔連れて打つて出でつゝ、門より外へ追出し、深手あまた所負ひたりしかば、二人ながら內に引入りて、家に火をかけ、刺違へてぞ死にける。其外の輩、いかさま世の中靜なるべからずと、心々になりて見えし所に、上杉の家臣長尾昌賢等相議して、憲忠が舍弟兵部少輔房顯を取立てゝ主君と定め、之を大將として、軍兵を集めける所に、關東諸國の兵士等、或は成氏に屬し、或は房顯に應じて、日每合戰絕ゆることなし。長尾昌賢一族相謀りて、京都に訴へ申しければ、將軍家より奏聞を遂げられ、成氏追討の綸旨に、御旗を添へて下

成氏古河に奔る

し給ふ。是に依つて諸將諸侍悉く屬せしかば、成氏終に打負けて、鎌倉を落ちて、野州古河城に立籠り給ふ。上杉兵部少輔房顯、之より鎌倉に居住して、關東の管領となり、長尾昌賢執權として、治世の謀を廻らしける。

五　天變地妖

山名宗全細川勝元確執

京都には山名右衞門佐持豐入道宗全と、細川右京大夫勝元確執す。諸國の大名思ひ思ひに與力して騷動す。關東とやかく亂れて、天下一同に騷ぎ合ひ、四方の諸國に、軍の止む隙なし。是に依つて康正三年に及び、長祿と改元あり。同五月に大雨降り續き、諸郡洪水の災を憂ふ。商羊の庭に舞ふか、畢方の空に翔けるか。いかさま唯事にあらずといひける所に、同十日猿澤の池血になりて、朱を湛へしかば、底の鱗は、悉く死して浮上る。これをこそ希代の珍事かなと沙汰したるに、同じき七月廿一日、吉田の社鳴動すること夥し。天下大なる御愼なりとて、陰陽の博士、勘文を捧げて奏聞す。卽ち諸寺諸山に仰せて御祈禱あり。年を越えて、打續き災變樣々なりけ

れば、上下手を握り、今や國家の大變出來らんと、思はぬ人はなかりけり。

六　伊豆國堀越御所政知 附 上杉教朝自害

堀越の御所

寛正二年の春、關東愈亂れ立ちて、軍兵四方に馳せ違ひ、合戰更に止む時なし。故將軍義敎公の四男政知と申すは、本は出家して北山におはしまし、香嚴院とて學知深かりしを還俗せしめ、關東退治の爲に差下し、左兵衞督に任せられ、將軍の御敎書を給はり、伊豆國北條に下向あり。堀越の御所と申して、諸國の成敗をぞ行はせらる。

上杉教朝自殺

上杉禪秀が末子伊豫守敎朝執事となり、成氏追討の祕計をいたす所に、此頃京田舍まで疫癘行はれ、家々に惱み伏し、死するもの數を知らず。尸骸道路に充ち重なり、觸穢になりて、神社の扉は閉ぢ塞がれり。伊豫守敎朝此疫に取結び、身心を惱悶し、大熱狂亂し、自ら刀を拔きて、腹掻切つて死したりけり。政知大に歎き給へども其甲斐なし。政知には御子息茶々丸殿とて、後には成就院と申して、父子の御威勢近國に輝きけり。

太田道灌上洛

七　太田持資築江戸城

同六年三月に、太田道灌上洛して、將軍義政公に始めて對面いたしけり。去ぬる康正二年の頃は、未だ入道せず。太田備中守持資とて、上杉定正の家老として、父の入道道眞と共に、家を治め道を行ひ、諸將を懷かしめて、政法素直なり。然るに備中守持資、武州江戸の城を築く。誠に繁昌堅固の地境なり。萬里和尙此城を見て、古詩を引きて點を改め、之を賞めたる詩に曰く、

窻含西嶺千秋雪　門繫東吳萬里舟

此城一度は、大に榮え賑はふべき名地なりとぞ申されける。資長〔持資カ〕既に入道して、今は道灌とぞ號しける。始めて京都に上洛いたし、將軍家に申入れつゝ、關東靜謐の事を言上す。天下同時に騷動して、一日も安からず、如何にも宜しく計略を廻らし、東國靜治ならしめば、大なる忠義なるべき由、御氣色を蒙り、御暇給はり、江戸の城にぞ歸りける。

上杉房顯病死

八　成氏與二上杉房顯一對陣　附　房顯病死

文正元年正月に、左兵衞督成氏の軍兵八千餘騎にて、武州五十子（いかつこ）といふ所に押出でたり。管領上杉兵部少輔房顯、一萬餘騎にて馳せ向ひ、兩陣互に屯して、足輕を出して攻合ひつゝ、さしたる軍はなかりける所に、房顯俄に病出し、二月十二日、年未だ卅二歳、陣中に於て逝去あり。唐土（もろこし）の古、蜀の諸葛孔明と、魏の將軍司馬仲達と、五丈原といふ所に對陣す。孔明既に病起り、陣中にして死したりければ、諸軍力を失ひけん。今房顯の陣中も、大に歎き恐れて、軍を引きて鎌倉にぞ歸りける。此時若し後より追詰めなば、鎌倉勢は、殘り少なに討取るべかりしを、たゞ引返すを能き事にして、軍兵を引入れたりしは、成氏方の諸將諸侍に、智謀なしとや申すべき。あさましかりける事共なり。

九　兩上杉成二管領一　附　關東靜治

連年打續きて天變・地妖・疫癘・飢饉行はれ、諸國恐れを抱き、萬民憂に沈み、魂を消し足を空になし、安き心もなかりけり。或は親子別れて行方を知らず、恩愛の悲み、徒に胸を焦し、或は夫婦離れて跡を失ひ、偕老の契、空しく心を傷ましむ。昨日まで顏を隱して通路に袖を廣げ、食を乞ひし女房も、今日は倒れ死すもあり。今朝まで容(かたち)窶れて門前に佇み、資(たから)を求めし老母の、夕には假し吟(のへよによ)ふもあり。見るに付け聞くに付けて、哀れなること限りなし。是に依つて文正を改めて、應仁元年とぞ號しける。天地災孽の起る事、必らずしも年號の咎にもあらず。一業所感の因果到來なりと、是非なく月日を重ねける所に、京都には、山名・細川愈水火の如くにして、雙方に引分れ、西國・北陸所々に、軍更に止む時なし。關東は猶靜ならず、管領房顯逝去の後、諸將諸侍其心一方ならず、世の勝敗を疑ひけり。上杉家の老臣長尾左衛門尉昌賢、謀を以て諸將を語らひ、管領房顯の嫡子、十四歳にして越後國におはせしを招き上せ、上杉民部大輔顯定と號して、上州平井の城を築きて、成氏と相戰ふ。顯定既に鎌倉に入りて、山の內に居住せらる。上杉修理大夫持朝が末子修理大夫定正は、享

兩上杉

上杉憲實死去

足利成氏敗軍

德年中より、扇が谷に居住せらる。山の内と扇が谷と兩管領となし、成氏の御子息政氏を左兵衛督に任じて、鎌倉の公方として、政道を執行はれしかば、諸將諸侍歸伏して、關東暫く靜なり。上杉安房守憲實入道長棟庵主は、持氏滅亡し給ひし後、伊豆國に赴き、それより西國行脚して周防國に止り、同二年三月六日に逝去せらる。

十　成氏與二上杉顯定一合戰敗北附和睦

文明三年の春、成氏又軍兵を催して、山内管領上杉顯定と戰ふ。成氏叶はずして敗北し、古河城にも堪り得ず、千葉陸奥守康胤を頼みて、常州千葉城にぞ籠られける。諸方の軍勢を招くと雖、一人も馳付くものなし。同じき五年十二月廿四日、上杉彈正少弼顯房が嫡男修理大夫政眞は、常州に隱れ居たりけるを、成氏聞出し給ひて、夜討にして殺されたり。上杉の一族愈恨を銜み憤りて、成氏を疎み參らすること芥の如し。千葉康胤に扶持せられ、日を重ね月を送り、年去り年來れども、心を寄する軍兵なし。今は只管潦倒の身となり、微なる御有様、口惜しうこそおぼしけれ。豐島の一

成氏顯定和睦

揆二百餘人、成氏に心を寄せ、扇が谷に叛きしかば、定正の老臣太田備中守入道道灌、人數三千餘騎にて武州に發向し、豐島を討つて遺類なし。同十年五月五日、相州平塚の城に立籠る大森伊豆守退治の爲、道灌馳せ向ひ、一日の中に攻め落す。大森は城を逃れて、箱根の奥に遁れ隱れたり。同年七月に、長尾昌賢樣々申して、成氏と顯定と和睦の儀を整へ、今年成氏四十二歳、同十七日に、再び古河の御所に歸り給ふ。關宿の城をば、成氏の舊臣簗田中務大輔に預けらる。御所の有樣、流石に綺麗に住みなされしも、舊主座を去つて久しくなりぬれば、見しにも荒れ果てゝ、八重葎門を閉ぢ、荻吹荒む軒端の風、苔洩り兼ぬる板間の月、物毎に憂を催し、悲み添ふる空の景色、冴え返りたる計にて、大名小名も參り集ふ事もなく、今更本意を失ふ心地して、勇める色はなかりけり。

十一　太田道灌築二鵠臺(からのだい)ノ城一

同十一年七月に、下總國臼井の城に一揆起り、管領定正に楯を突き、近隣を掠め、遠

境を脅すと聞えしかば、太田道灌三千餘騎を率して、押寄せたりけれども、城强くして、容易く落ち難く見えしかば、鵠臺に向城を構へ、謀を廻らし、城中に返忠(かへりちう)のものありといはせければ、諸兵それより疑出でて、ぬけ〳〵に落失せたり。僅に廿四人になりて、城の内寂び返りたるを見澄して、寄手三千餘騎、同じき十五日の未明に、どつと懸りて攻上りければ、城中廿四人の者共は、思ふ程戰うて討死す。城に火をかけ、勝鬨を作りて、引いて歸りける。

十二　兩上杉家確執 附長尾左衞門尉父子屬二山内顯定一

扇谷の管領上杉修理大夫定正の家老長尾將監入道に、二人の子息あり。兄は左衞門尉、弟は尾張守と申して、父の蔭より成出でて、威勢高く輝きたり。左衞門尉が嫡子をば、四郎右衞門尉景春と名づく。後に入道して伊玄と號す。尾張守が嫡子をば、修理助と名づく。此者幼少より容儀美しく、心ざま賢ければ、定正限りなく寵

兩上杉確執

愛し、憐愍淺からざりしかば、後に奢心つきて、傍輩にも無禮をいたし、剰へ長尾左衞門尉父子を追退けんと思ふ心つきて、折々は主君に讒し申しけるを、左衞門尉父子聞付けて、言語道斷の振舞かな。家に取つては庶子の末なり。君の寵に矜りて、我意に任する振舞だに、國家政道の邪魔なり。況や一門の中に於て、此惡心を企つる條、其儀ならば、思ひ知らする事のあらんずるものをと、遺恨頻に起りしかば、何とはなしに雙方快からず。太田道灌卽ち定正に向ひて、竊に諫言しけるやう、長尾左衞門尉父子が爲體、いかさまにも大事を思立つと見えて候。其起は、尾張守父子に、遺恨を挾むより始まりて、終には君の御爲、國家の災となり候べし。涓々の時に防がざれば、滔々の時を如何といひ、災をば、微萌の時に防ぐと申す事の候。早く長尾父子を追伐し給ふか。然らずば尾張守父子近習を退け、以後に於て、いかにも御計策を廻らし給ふべきかと申しけれども、定正更に聞入れ給はず。又中言するものありて、長尾父子に呫きけるは、太田道灌己れ一人世にあらんとや、修理大夫殿へ、長尾殿を讒言せられ候ぞや、心得給へといひければ、左衞門尉父子之を聞きて、安

からぬ事かな。尾張守父子には側められ、太田には讒せられて、我家何に依つてか立つべき。此者共に一味して、我を亡さんと計り給ふ、定正の御心こそ遺恨なれ。此上はいかにも思立ちて、彼等にも鹽をつけ、主君修理大夫殿にも、思ひ知らせ奉らんとて、色に出して罵り怒る。長尾が家の子に、三戸駿河守・多田備中守・上田兵庫助、頻に諫め申しけるは、抑昔より、主君に向ひて弓を彎き楯を突くものをば、天道に外れ地理に違ひ、人望に背く惡人なりと申傳へ候ぞ。末代迄も名こそ惜しけれ。たゞ身を退きて、幾度も御歎きを以て、私なき仔細を仰開かれ候へかし。然らば管領も、などか聞召入れ給はざらんと、再三諫め申しけれども、景春更に用ひず。人の命は明くるも知らず、仔細を陳ずる間に、若し空しく死なば、鬱憤徒に尸に積みて、共に土中に埋れ、未來永々の妄念となるべし。唯討死して本望とすべし。若し其間に、定正より討手を給はる程ならば、忽に後を取り、諸方流浪の身となり、一夜の宿をも借す人なく、路徑に倒れて、死するより外の事あるべからず。人に先をせられんよりは、人に先立ちて、運を計るに如く事なしとて、大石一類・長尾一族、其勢四千餘騎を引率し

武州五十子(いかつこ)まで押出でつゝ、陣を取つて控へたり。扇谷には、折節人數はなかりけり。僅に五百餘騎、此小勢にては、中々戰ふに叶ふべからずとて、同國鉢形の城に立籠り、要害巖しかりければ、長尾父子、續きても押寄する事なく、山內顯定の手に屬したり。定正卽ち顯定の方へ、使を以て申されけるは、長尾父子旣に反逆を企て、譜第の主君に向ひて弓を彎く者なり。斯る惡逆無道のものに、與し給はんこと然るべからず。天下反逆の者の爲に、見懲(みこり)にせんと申入れられたり。顯定は、如何なる事とも存じ寄らず、顯定を賴みて入來り候ものなり。窮鳥懷に入るときんば、獵師も殺さずとこそ承り候へ。如何に仰せ候とも、賴むと申して來候者をば、えこそ追出し候事は仕るまじきにて候と申返して、猶人數を差添へて、長尾父子をば守護させられける。

十三　太田道灌被レ誅

修理大夫定正は、修理大夫持朝の四男なり。子息一人もおはしまさず。是に依つて舍兄朝昌の嫡男朝良を養子として、家督を讓る。山內民部大輔顯定は、前代より以

來、上杉家の棟梁として、彼の旗下に諸國屬しければ、只今人數を催さるゝとも、廿萬餘騎はこれあるべし。定正も扇谷にあり乍ら、猶山内の下知を守りて、露ばかりも反く心のなかりし所に、顯定忽ち扇谷を見放ち、長尾父子を立て入れ給ふ事、あるべき道とも覺えずとて、定正方の輩は、爪彈をして恨むれども甲斐なし。此事の起りは、太田道灌が所爲なりとて、山内方よりは、太田を惡み給ふこと斜ならず。道灌は智謀武勇のものなる故に、扇谷の、今日迄も滅亡せざるは、此者の謀に依つてなり。楚に范增あるが如しと、諸人等しく思ひけるを、顯定斯樣に惡み給へば、道灌大に怒つて、山内を反き奉り、いかにもして顯定を亡さばやと、骨髓に徹りて思ひ入りたり。定正此事を聞き給ひ、大に驚き、屢諫め給へども聞入れず。

太田道灌江戸川越兩城に據る

されば太田道灌多年の粉骨、徒に地に落ちて、國家災害の張本といはれ、口惜しき事に思ひて反逆を企て、江戸・川越の兩城を固め、壁を高くし、壘を深くして人數を籠め、兵粮・薪・馬の糠藁に至る迄、乏しき所なく積入れたりければ、たとひ何萬騎にて攻むるとも、容易く落つべしとは見えざりけり。顯定、年々、いかにもして扇谷を亡さばやと思はれしかど

も、道灌があらん程は叶ふべからず。此度ぞよき時節なると内談して、定正の方へ使を以て仰せけるは、兩家元來遺恨なしと雖、一旦の義を守る所なり。若し鷸蚌の弊(つひえ)に乘るものあらば、是れ却て兩家の滅亡を招くにあらずや。此事の根元其張本を退治して、國家の憂を息せんと存ず。此儀御承引なきに於ては、顯定甲を截き、軍門に命を落すとも、力なしとぞ申越されける。定正使者に對面あり、何の遠慮評定にも及ばず、仰の通り承りぬ。關東の諸國靜治なることは、兩家相守りて、太平の政道をいたすが故なり。今若し鉾楯に及ばゞ、諸侍雙方に別れ、軍鬪所々に起出で、必ず一方は滅亡すべし。唇缺けて齒さむしとは、此事なるべし。他國よりして世を窺ひ、亂を起して弊(つひえ)を討たば、上杉の家忽に亡び、先祖の恥辱となるべき條、互に察して存ずる所なり。然らば此張本を誅して、兩家私なき旨を、散じ候べしとぞ申返されける。是より兩上杉、內證の確執打解けて、顯定重ねて竊に申遣されけるは、太田道灌は、是れ自他の邪魔なり。早く計りて討ち給へ。此方には長尾父子を誅して、騷動を鎭め候べしと申されしかば、定正何の分別もなく、長尾を討つて出され候はゞ、太

太田道灌討たる

田をば誅し申すべし。此上は互に遺恨候まじとて、文明十八年七月廿六日、相州糟谷の城に押寄せ、難なく道灌をぞ誅せられける。若し討洩らす事もやとて、顯定は五百餘騎にて、高見原まで出でられしかども、夫迄もなく討取りて、山内にぞ遣されける。行路難、山にしもあらず、水にしもあらず。唯人情反覆の間にありと、白居易が書きたりし筆の跡、さこそと思合はするに、定正智慮なく、此謀に乘せられけん、あさましといふも愚なり。

十四　兩上杉相州菅谷原對陣附同國眞卷原軍

さる程に江戸・川越の兩城には、軍兵數多入れ置きたりしに、定正既に太田道灌を誅戮し給ふと聞きて、賴もしからぬ有樣かな。さしも忠功智謀の名臣を、咎なくして殺さるゝこと、魔魅の掌握に陷りて、運命傾く徵なるべし。拙き君の手に屬して、非常の死をいたさんよりはとて、皆悉く城を明けて、山内にぞ屬しける。定正の嫡子朝良が執事曾我兵庫頭をば、河越の城主とし、子息豊後守をば、江戸の城にぞ据ゑら

れける。道灌が家來齋藤加賀守は、軍法の故實ありて、武道の正理を知るものなりとて、定正遂に召出して、團扇を預けて、軍奉行となし給ふ。兎角して月日は重なれども、山内よりは、絶えて再び音信もなく、長尾を誅せらるべき沙汰も聞えず。修理大夫謀られたりと思ひて、大に欝憤を挾み、愈兩上杉確執の色を立て、軍兵を招き鏃を磨きければ、或は定正の智慮短きを見限りて、山内に屬するもあり、或は顯定の所行情なしとて、扇谷に屬するもあり、兩上杉立分れ、敵味方刃を爭ふ。同年十一月三日、兩上杉の大將、相州菅谷原に對陣す。長享二年の春、武州松山に出張し、只小攻合ばかりにて、兩陣相引に退き歸る。延徳元年二月五日、山内顯定子息憲房兩將として、一千餘騎を率して、相州の眞卷原に出張す。扇谷定正、二百餘騎にて走せ向はる。軍は勢の多少によらず、たゞ謀の得否にありといふ事は、後漢の光武の侮りし所、敵に味方を見合はすれば、當るべきにあらずと雖、定正少しも機を呑まれず、少とも見繕ふ所もなく、相懸りにむざと攻めて、一矢射違ふ程こそありけれ。皆弓矢をば棄てて打物になりて、眞黑にぞ懸りたりけん心怯して、

進むべく見えて進まず。定正の兵共之に機を得て、えいや聲を出して、手痛く切捲りしかば、顕定の一千餘騎怺へずして、終に崩れて敗北す。定正もさすがに小勢なりければ、追棄てゝ引返し、討取る所の首七十餘を切懸けて、扇谷にぞ歸られける。

十五　長尾景春歸ニ參扇谷殿ー附菅谷原合戰

同六月十八日、顕定・憲房父子二千餘騎を率して、相州の菅谷原に出張せられしかば、關東の諸勢、多く屬して雲霞の如し。定正此由聞き給ひ、七百餘騎にて子息五郎朝良と諸共に、軍を備へて馳せ向はる。古河の御所公方政氏は、修理大夫定正に心を合せて、五百餘騎にて御出馬あり。日來長尾四郎左衞門尉景春入道伊玄は、公方政氏公へ召されて、樣々仰含められ、強く諫を加へ給ふ。景春入道、理に屈して申入れけるは、山内殿（扇谷殿カ）に對して、一箇の恨を存ずる事なし。太田入道が所行の惡さに、斯くは思ひ立ちて候。道灌既に誅せられて候上は、又何をか怨を殘し候はん。但今此亂逆に及び、兩上杉互角の合戰、終には一方、亡びずといふこと候まじ。入道は譜第

として、扇谷の家臣なり。目の前に主君を亡して、某何の思出か候べき。いかやうにも歸參の儀をば、上意に任せ奉る由申しければ、政氏即ち定正に仰入れられ、勘氣を許され、扇谷にぞ歸りける。此度菅谷原に打出でしかば、山内方には、既に殺さるべき景春が、民部大輔殿に命を助け置かれ、恩を忘れて定正に歸參せしこそ、淺ましけれといふものもあり、又理を辨へざる輩は、いや〳〵武士の命は、義に依つて輕きこと、鵝毛の如しといへり。顯定は、一旦の命を救はれし所なり。扇谷は重代厚恩の主君なり。一旦恨を晴れたる上は、義と忠との重きこと、太山に過ぎたりと、志を感ずる人もありけり。さる程に兩陣互に鬨を作り、一矢射違ふかと見えし所に、五郎朝良の二百餘騎、長尾新五郎・同修理亮か百七十騎と寄せ合せ、少時戰ふ所に、朝良立足もなく追立てられて引退く。顯定・憲房父子横合に懸りて、引退く朝良を討止めんとす。定正之を見て、左右の軍兵に下知して、朝良討たすな者共とて、どつと喚いて打つて懸る。顯定の兵共、駈崩されて引退く。長尾入道が二百五十騎、藤田三郎が三百餘騎と駈合ひて、火花を散らして攻め戰ふ。藤田、痛手を負ひて引退きしか

ば、軍兵亂れて、木葉の如くちり〴〵になる。長尾機に乘つて、采を上げ味方を進め、懸れや〳〵と下知しければ、顯定の謀崩れて、我れ先にと引いて行く。汚し返せといへども只引に引きければ、顯定父子、力なく押立てられて退き給ふ。勝に乘つて退懸けしかども、日既に暮れければ、長追なせそと引返し、定正卽ち政氏公に色代して、古河の御所に送り入れ奉り、扇谷にぞ歸られける。

十六　古河公方與二力扇谷一附武州高見原軍

同じき年十一月三日、上杉修理大夫定正、古河公方政氏公、二千餘騎を率して、武州高見原に出張あり。上杉民部大輔顯定此由を聞きて、三千餘騎にて打立ち、兩陣の間二町を隔てゝ、足輕を出して攻合ひつゝ、漸々に攻寄せ、雙方拔き連れて入り亂れ、さん〴〵に攻め戰ふ。天地を響かす鬨の聲、山河に滿つる矢叫の音、旗の手交へては、錦を晒すかと疑ひ、刃の光日に映じて、尾花の末より猶繁し。顯定の兵に臼井彦七といふもの、洗革の大鎧に、五枚甲の緒をしめ、四尺餘りの太刀を打振り、四方八

面に切つて廻る。此切先に當るもの、或は馬の諸膝薙がれ、落つる所を首を取り、或は甲の眞額を二つに打割られ、尻居になりて死するもあり。此勢に辟易して、定正の軍兵、しどろになりて開き靡く。長尾入道が家の子に、淺間小次郎といふものが放つ矢に、臼井彦七が內甲を篦深に射させ、目昏れ心消えて、太刀を杖に突き、立竦みたる所を、定正・長尾入道下知して、新手を入替へ急に戰ふ。顯定の軍兵、後より崩れて敗北す。大將顯定も、旣に危く見えし所に、田子・山本の者共、命を棄てゝ返し合せ、討死しける其間に、辛き虎口を遁れて、山內にぞ引返しける。

十七　堀越御所政知逝去 附 伊勢新九郎討取堀越

足利政知逝去

同じき三年四月五日、堀越の御所左兵衞督政知逝去し給ふ。春秋五十七歲。勝幢院殿とぞ號しける。去ぬる明應の末の年に、御子息茶々丸家督を嗣ぎ、伊豆國堀越の御所とて近境諸國の武士、恐れ從ひける所に、其家臣外山豐前守・秋山藏人兩人を、近習の者の讒を信じて、誅戮し給ひしかば、伊豆國中大に騷動して、御所の上下亂れ立

ちたり。爰に伊勢新九郎長氏は、後に北條早雲と號す。始め京都に在りて、浪牢の身たりしが、思立ちて都を出てづゝ、駿河國に下り、今川五郎氏親を頼み、漸々經上りて、氏親の縁者となり、高國寺邊を知行して、郎從三百餘人を扶持して、百姓を憐愍し、諸侍に情深かりしかば、心を寄するもの少なからず。此頃東國亂れて靜ならず、關東の公方は、野州古河御所にまし〳〵、兩上杉は確執し、上野・相模の館に居住し、諸將諸侍皆此下知に從ひ、悉く馳せ集りて、日毎に戰止むことなし。伊豆國中の軍兵も、彼の催促に應じて、東國の武士は一人も是なし。北條堀越の御所は、いつしか寂び返りて、下部童のみ集り居て、物の用に立つべき侍は、一人もなかりしかば、伊勢新九郎此由を聞澄し、人數五百ばかりを引率し、俄に押寄せ鬨を作る。堀越の御所には、思ひ寄らぬ事にてはあり、防ぎ戰ふ迄もなく、上を下へ返しける其間に、軍兵亂れ入つて、屋形に火をかけ燒き立てしかば、有合ひける若黨郎從ども、煙に咽びて駈出づるを、打伏せ薙伏せ切倒す。之に立合はんとするものは一人もなく、我先にと怯ぢふためく。關戸播磨守一人踏み止まり、茶々丸をば、大森山へ落し參らせ、我

茶々丸自害

身は思ふやうに防ぎ戰ひ、深手負ひて討死す。茶々丸殿は、敵、後より追詰めければ、叶はじと思ひて、山本の寺に駈入りて、自害して伏し給ふ。是より新九郎長氏、伊豆國を領知し、韮山の城に居住す。國中の侍三津の山本・江梨の鈴木・田子の山本・女羅の村田・佐藤・梅原・雲見・高橋・上村を始めとして、皆旗下に屬せしかば、各本領に安堵せしむ。其上新九郎、京都を出でて駿州に下りし時、其友達荒木兵庫頭・田目權兵衞・山中才四郎・荒川又次郎・大道寺太郎・有竹兵衞尉・伊勢新九郎以上七人、同道して下りしに、新九郎武略智謀あるを以て、勢に乘つて大將となり、同道の六人を家老となし、伊勢の稱號を改め、北條と名乘ること、武運の時を得たる所、威勢八方に輝き、關八州を手に入れんと、晝夜に祕計を廻らしける。

十八　上杉修理大夫定正逝去

上杉定正死去

明應二年十月五日、上杉修理大輔定正、生年五十二歲、一朝の嵐と共に、命葉忽に落ち散りたり。兩上杉未だ靜治ならず、關東愈亂れ立ちて、其弊を憂ふもの、諸國峙ち

て、互に軍に取結ぶ。今既に一方の大將逝去あり、棟梁挫けて柱礎傾き、綱維絶えて綱目窄るなりとは、斯る例なるべし。行末如何ならんと、諸軍歎き悲めり。されども子息五郎朝良相嗣ぎて、武威を逞しくし、敵を靡す器量ありて、江戸・川越の兩城を守護し、猶顯定と相挑み、撓みたる色はなかりけり。

十九　三浦陸奥守時高滅亡

爰に相州新井の城主三浦陸奥守時高は、三浦大介義明が後胤として、兩國に居住す。然るに時高一人の子なし。是に依つて上杉治部少輔高救の次男を養子とし、三浦の家督を讓るべきに定まりし所に、思ひかけず實子誕生せしかば、時高いつしか心變じて、養子の太郎義同を追出すべき企あり。家の老臣共、屢諫むれども用ひず。様様辛く當りしかは、義同身を置くに叶はずして、髻を切つて出家になり、三浦を忍び出でて、相州諏訪原の惣世寺に引籠り、道寸と名を付け、行ひ澄して居たりけり。時高は愈萬事を雅意に任せ、家を治むる道に違ひ、此小兒を寵愛して、世間の法を破り

三浦時高討たる

ければ、三浦の一族、疎み果てゝ中絶す。家人若黨譜弟の者共、時高を背きて義同を慕ひ、惣世寺へ馳せ集る。又義同が實の母は、相州小田原の城主大森式部少輔實頼が女なりければ、彼の一族門葉一味して、同三年九月廿三日の夜、義同を大將として二百餘人、新井城へ押寄せ、鬨を作りて込み入りたり。大森筑前守與力して、一番に押懸け、築地を破りて打つて入りつゝ、時高をば討取りたり。梅澤の住人中村式部少輔切つて出でつゝ、散々に防ぎ戰ひて、討死しける其間に、女房幼き子を抱きて、後の門より落失せたり。家に火をかけ燒崩して、義同多年の憤を散じ、三浦の跡を奪ひ取りて、めでたく榮えて居住しけり。

二十　伊勢新九郎乘取小田原城

夫れ人世の否泰は一枯一榮、たとへば權衡の錘(おもり)の如し。低昂更に定むべからず。運に乘る時は、青雲の上にも翔り、時を失ふときんば、深淵の底にも沈む。一朝の喜び一夕の悲み、其有様、たゞ夢とやせん現とやいはん。相州小田原城主大森式部少輔實

頼は、去年九月に、三浦義同に加勢して、時高を討たせて其跡を奪ひ、己が孫に世を持たしめ、限りなく喜び給ふ所に、同じき四年の春、我居城を打落され、浪々逐電の身となり果てたり。 實頼年來扇谷の定正に屬して、顯定に楯を突き、定正病死し給ひて、子息朝良に相從ひ、城の要害を嚴しくして、其近境には、手を指す者もなかりし所に、伊勢新九郎長氏親みをなし、さま〴〵心底を語り顯し、此上には我館に敵寄せ來らば、後詰し給へ。 敵若し此城を押詰めなば、長氏後詰をいたすべし。 向後水魚の交をいたし、一族の思をなすべしと、誓言して語らひしかば、實頼入道眞と心得、他念なく入魂しけり。 新九郎此間に、山内顯定に内通し、朝良方を打亡すべき契約して、軍兵を入るゝに、道狹からぬ手行を廻らし、謀を企みける、心の中こそ恐しけれ。 同じき二月十六日、猪狩に事寄せて、軍兵五百餘騎程の者に出立たせ、箱根の山を打越え、物具緊々と固めて、小田原の城に取懸け、鬨を作りて攻入りけり。 俄の事にてはあり、折節人數は城中に少し。 下部・女房・幼き子供は、鬨の聲に膽を消し、周章慌忙き伏轉びて逃げ落つる。 實頼入道は、唯呆れたる體にて、茫然としたる計にて、思

ひ分けたる事もなし。家の子松本次郎、後の門より落し參らせ、我身は表に走り出でて、込入る敵を、門より外へ押返す。同國の住人成田市之丞、甲斐々々しく物具固め、打つて出でつゝ、新九郎が先陣多目玄蕃允が同心に、粟田六郎といふものを討取り、松本次郎とたゞ二人、進み來る寄手に躍り懸り〳〵、散々に戰ひ、切死にこそしたりけれ。城既に落ちければ、勝鬨をどつと行ひ、新九郎長氏、事故なく城を乘取る。當國の住人松田左衞門尉賴重といふもの、一番に馳せ來りて、新九郎に屬せしかば、國中皆手に入りて、猛威之より盛なり。

早雲、小田原城を奪ふ

廿一　左兵衞督成氏逝去

伊豆・相模の間には、伊勢新九郎長氏といふ者起り出でて、狼の如くに貪り、蠶の如くに食ひて、北條・小田原の兩城を攻取り、猛威を振ふと聞えしかば、古河の公方には、安き心もおはしまさず。兩上杉は互に爭ひ、四方騷ぎて八方亂れ、軍吏に絕ゆることなし。猶此上には、如何なる事か出來るべきと、人の心皆薄氷を踏んで、國の危

足利成氏逝去

きこと、深淵に臨むが如し。周の世衰へて七雄起り、漢の代傾きて三國峙ち、互に二を亡して、一に合せんとせし、戰國の時に異ならず。然る所に左兵衛督成氏公、例ならず心地煩ひおはします。諸國亂世の折柄なれば、捗々しき醫師だにもなし。年頃欝陶の積りにや、漸々に氣色衰へ、今ははや、此世の頼みもなくなり給ひ、御子息政氏を枕許に召されて、成氏、昨日迄も運命終に開けなば、錦を着て故郷に歸り、鎌倉に安堵して、其上の事共をも、語り出さん節をこそ、心のあらましに、身を慰めてありつるを、今は甲斐なき夢となり、司命の鬼錄に名を記さん。我れ空しく成行くとも、祕計を廻らし敵を打從へ、再び鎌倉に還住し、關八州を手に屬せば、中々無雙の孝行なるべし。泉下の思出、何事の弔か、これに勝る事あらんとて、苦しげなる息の下より、念佛十遍ばかり唱へ給ひ、其儘絳切れ給ひにけり。今年明應六年九月三十日。御歳六十四歲なり。哀れむべし季秋の暮、虛穹に落つる雁の聲、雲行く風に吹送り、物すさまじき空の景色、いとゞ憂を催しけり。事しげき世に任せて、葬送の營みも、式の如くに勤められ、山本近き野邊の叢に、一堆の塚の主となし奉りけり。哀れなるかな、

生きては蝸牛雙角の間に爭ひ、瞋恨の炎に肝膽を爛らし、悲しきかな、死しては螻蟻片豸の垤に埋もれ、醑陶の苔に、身體を腐しける事を。たゞ其標として、一樹の松の梢に、はしたなき嵐の訪るゝ計なり。

鎌倉公方九代記 巻九

政氏軍記

一 北條早雲感二靈夢一附三島明神緣起

左兵衞督政氏公は、成氏公の嫡男として、古河の御所におはしまし、又管領と共に、國家の靜治を心にかけ、晝夜朝暮に粉骨を盡し、氷を抱き膽を嘗めて、祕計を廻らし給ふと雖、傾きかけたる家運の有樣、今更本に復すべしとも見えざりけり。然るに伊勢新九郎長氏、既に布衣白屋の下より起りて、智謀祕計を廻らし、堀越の御所を討取り奉り、其威漸く駿豆兩國に振ひ、諸侍既に歸伏して、近隣に恐るゝ敵なし。北條に在城して、伊勢の稱號を改め、時政草業の嘉例を追ひて、平氏昌榮の大功を遂げんことを思ひ、これより北條氏成と名乘り、子息氏綱成長ありてより、出家して早雲と號

し、通號を宗瑞庵主とぞ稱しける。或時家老の輩を集めて、軍法の手段を談ぜらる事、數刻に及びて後、物語せられけるは、昔は源平兩家、相並びて朝廷を守衞し、國を治め世を鎭めて、其高下なかりしこと、牛角の如く鳥翼に似たり。保元・平治の頃に至つて、源家衰敗し平氏繁昌す。治承・養和の年に及びて源家起り、嘉永・元曆に平家亡びたり。三代の後に、平氏世を取りて、北條九代、旣に天下の權を恣にし、相模入道宗鑑が時に、足利高氏世を奪うて源家を起し、天下を掌に治めて、京鎌倉の兩公方を以て、國家の政道をいたさるゝ所に、時世移りて、鎌倉の持氏より以來、東國の公方はあるに甲斐なし。堀越殿も亦、源氏の末として亡び給ふ。源家の餘類皆牢浪して、滅亡すべき時到來す。陰退き陽進むの理、古今定まれる道なり。今の管領上杉兩家は、是れ藤原氏の族なり。國家を治むるに相應せず。爰に我家門は、是れ平氏なり。源家衰廢に及びて、必ず世を保つべき時到りぬ。いかにもして兩上杉を亡し、國家を手に屬せんと思ふはいかにと、申されしかば、荒木・山中・大道寺以下の人々一同に、此儀尤然るべしとぞ申されける。さらば三島の大明神に參籠あつて、信心

不二の懇祈をなし給へ。天運の時到り、神力の德を借し、我等忠戰の功を顯さば、などか御本意を遂げ給はざらん。疾々思召立ち給へと、勸め申しければ、早雲大に喜悅して、七日の參籠をぞ催されける。抑三島大明神と申すは、人王第七代孝靈天皇の御廟として、伊豫國越智郡より、此伊豆國賀茂郡に跡を垂れ給ふ。本地は大通智勝如來なり。是に依つて伊豫國河野の門族は、彼氏人にて越智を姓とし、大通の通の字を、諱に取り給へり。津の國島下郡三島の賀茂社も、彼御神と御一體の御事なり。東域の衆生濟度の爲、一葉の舟に召され、此所に移り顯れおはします。早雲深く此御神に歸依して、心中の所願を祈られしかば、神慮誠に納受の御眦をや廻らし給ひけん、滿ずる夜、明應二年正月二日の寅の刻計に、新に靈夢を蒙り給ふ。たとへば大なる野原に大杉二本あり。一つの鼠走せ來り、其根を咬み食へば、二本の杉は地に倒る。鼠は忽ち虎に化して居ると見て、夢は卽ち覺めにけり。早雲自ら夢合せし給はく、關東は兩上杉の分國なり。二本の杉は、兩上杉なるべし。我は是れ子の年にて、永享四年に誕生せり。正に兩上杉を亡し、東國に威を振ひ、治世の主となるべ

き瑞夢なりと喜び、神馬・太刀・鎧其外種々の寶物を捧げ、下向の後は、愈只管に上杉退治の謀を廻らし、民を撫で兵を懷け、軍道の營より外、他事なしとかや。

二　武州立河原軍

北條入道早雲愈武威逞くして、祕計を廻らされければ、近國他境の諸將諸侍等志を通じ、忠を存ずるもの少なからず。小田原城主大森式部少輔實頼は、扇谷の管領に屬して、下知を守る所に、早雲之を攻取りしかば、管領定正大に怒つて分國の勢を催し、攻討つべき由聞えけり。早雲謀を以て、扇谷殿に和睦を乞ひ、武藏國住人諏訪右馬助を使者として、御旗下となりて、下知に從ふべき旨、再三申遣されしかば、定正之を眞と思ひ、小田原の城を取返すべき義勢もなし。斯くて定正逝去し給ひ、子息五郎朝良、家督を繼ぎ給ひけり。山内の管領上杉顯定、此の愁傷の弊に乘り、扇谷五郎朝良を攻干さんとて、軍兵を催されしかば、駿州今川氏輝は、扇谷殿に緣者なれば、人數を遣して加勢せらる。北條早雲は旗下にて、杉田左衞門賴重に、八十騎の兵を

差添へ、扇谷に加勢あり。さる程に扇谷の五郎朝良大將軍として、武州立河原に出張せらる。山内管領顯定入道可淳・同子息定憲、東八州の軍兵を率して、永正元年九月廿七日、立河原に押出でつゝ、兩陣互に鬨の聲を揚げ、矢軍するかとぞ見えし。敵味方むずと詰寄せ、追靡け打傾け、火花を散らして攻合ひ、日頃面を見知り名を聞きし輩、兩陣同じく名乘りて入亂れ、恥を思ひ義を守り、命を限りに戰ひければ、手負死人は算を亂して、いやが上に重なり伏したり。されども一日戰ひ暮して、未だ勝負はなかりけり。酉の下刻に及びて、兩陣さつと引上げ、互に人馬を休め、夜既に明けゝれば、又出合ひて攻め戰ふ。山の內方旗の手亂れて、動もすれば駈立てられて、引色に見えし所に、越後の軍勢馳せ來り、顯定の陣に屬し、新手に入變りて駈立てしかば、朝良の軍兵、開き靡きて落ちて行く。朝良終に敗北して、河越の城に引籠り給へば、落散りたる軍兵共、跡を尋ねて追々に走せ來る。大將朝良、暫く梅酸の渴をぞ休められける。山內顯定は、いざや、これより直に河越の城に押懸け、朝良を攻干さんとて、同十月三日、顯定・定憲兩大將として、越後の上杉民部大輔房能・長尾爲景、東

國越州の軍勢を盡し、河越の城に取懸け、十重二十重に圍みて、夜晝となく、息をも繼がせず攻めければ、城中にも、義を守り節を立つる兵共、身命をも顧みず防ぎ戰ふと雖、寄手、新手を入替へ〳〵、討たるゝをもいはず、切らるゝをも物ともせず、潛き連れて攻め登りければ、敵味方の手負死人、更に其數を知らず。城中の兵、今ははや防ぎ兼ねて、退屈してこそ覺えけれ。城代曾我兵庫頭出向ひて、樣々侘狀をいたし、和睦の義を整へければ、顯定・定憲此上はとて、圍を解きて上州に歸り給へば、朝良は、江戶の城にぞ引籠られける。

三　長尾爲景逆心

同四年の夏の頃より、公方左兵衞督政氏と御息高基と、父子の間不和になりて、雙方鏃を磨き刃を硎ぎ、相分れて確執し給ふ。是れ唯事にあらず、いかやうにも公方御自滅の時到れりと、心ある人は、手を握り眉を顰めて歎き合へり。斯る所に同六年の春、越後の上杉房能、佞人の讒を信じ、其家老長尾六郞爲景を、討取るべき支度あり。

上杉房能戰死

爲景聞つけて、忽に逆心を起し、人數を集めて軍を催し、却て房能を襲ひけり。房能大に怒つて軍兵を整へ、既に合戰に及びける所に、如何にしたりけん房能の軍兵共、即時に落失せて、僅に家子郎從五六十騎になりしかば、此にては叶ふべからずとて、民部大輔房能、越中を指して落ち給ひしを、長尾爲景跡を慕うて、雨溝といふ所にて追詰めたり。家子郎從返し合せて戰ひ、終に皆討死し、上杉房能も討たれ給ふ。爲景それより凱陣し、諸將諸侍を催けて、國中の成敗をぞ執行ひける。山内の管領顯定は、此由を聞き給ひ、安からぬ事かな。我弟の分國を家臣の爲に討取られ、正しき讎敵を其儘置きては、家門の爲、腹心の痼疾となるべし。速に退治して、且うは先亡の憤を休め、且うは國家の靜治をいたすべしとて、子息五郎憲房を大將として、上州の軍勢八千餘騎を率して、同七月廿八日、越後國に打越え、長尾が館にぞ押寄せらる。六郎爲景折節勢こそなかりけれ。要害あさまにして、防ぐべきやうもなく、一戰に利を失ひ、家子郎從數多討たれ、我身は寄手の中を切拔け、終夜難所を越えて、越中國西濱といふ所に落行きたり。顯定入道父子、思の外に安々と敵を打落し、館に火を

かけて燒拂ひ、猶國中の政道をぞ行はれける。

四　上杉顯定入道討死

民部大輔顯定入道可淳・同子息憲房は、年を越えて在國し、制法强く行ひ、今度長尾爲景に一味して、房能を討つたる輩を、尋ね搜し召出し、或は所帶を沒收して、郡内を追放し、或は捕へて頭を刎ねられしかば、國中遠近の諸侍、其身を隱し兼ね、妻女を引連れて、或は山深く分入り、或は他國に逃げ行きける程に、國郡騷ぎ立ちて、上下手足を空になして、安き心もなかりけり。高梨攝津守も、上杉房能に恨むる事ありて、長尾六郎に一味して、房能を討つたりける張本なり。いかにもして生捕り、首を切掛け、宿意を遂せんと計らはれける。高梨聞きて愈憤りて、國中に隱れ居たる餘黨を語らひ、七百餘騎同意して、椎屋の城に立籠り、近隣を放火し、兵粮を奪ひ取りて、壁を固くし壘を深くして、寄せ來る敵を待かけたり。顯定入道可淳・同子息憲房、之を攻亡さんとて、國中の人數を招かるゝと雖、長尾同意の刑罰を强く行はれ、其一族親

上杉顯定戰死

類共、所縁につきて恨深くして、一人も參らざりければ、力及ばず、手勢計を引率して、同七年六月十二日、椎屋の城に押寄せ、逆茂木を引除け、攻め入らんとせしかば、城中の兵二百餘騎、木戸を開きて打つて出でつゝ、短兵急に取拉がんと、四角八方に駈立てしかば、寄手怺へずして崩れ立ち、我れ先にと落行きければ、顯定入道父子の旗本開き靡き、終に打負けて、妻色の庄に引退き、猶上州の軍勢を待ちて、重ねて退治すべしと評議せらるゝ所に、長尾・高梨、城を拂つて打出でければ、近邊の勇士馳せ加はり、一千二百餘騎になつて、押懸くると聞えしかば、顯定入道僅に八百餘騎、長森原へ出向うて、長尾六郎が五百餘騎、立足もなく追崩し、備を立直さんとする所に、高梨が七百餘騎、横合に討つて懸り、新手を以て切立てしかば、上杉の軍兵散々に討なされ、裏より崩れて落行きけれ。　高梨、勝に乘つて眞先に進み、大將の旗本に討つて懸る。　顯定入道長刀を取延べ、高梨に向ひ給ふ。　攝津守馬より飛下りて、顯定に引組み、軈て首をぞ掻きにける。　切先に貫き差上げて、顯定入道を、高梨討取りたりと呼はりければ、上杉の軍兵は力を落して、四方に散り亂れて、思ひ〳〵に落ちて行く。

長尾が勢は勇み懸り、逃ぐるを追詰め突伏せ切倒し、勝鬨を作りて追立てしが、日既に暮れければ、皆馳せ歸り、陣を整へ備を固め、靜に引きて本城にぞ入りにける。彼の顯定は、上杉中興の管領として、生年十四歲、始めて上州に來り給ひ、久しく武將の職に居て、威を萬人の上に輝し給ふと雖、運命の盡くる所、忽に高梨が手に懸り、暗暗と討たれて、亡鄉無賴の鬼となり、尸を曠野の草根に委して、恨を千歲の苔の下に、殘し給ふぞ痛はしき。今年五十七歲。法名は可淳大居士とぞ號しける。

五　長尾景春入道反逆

上杉入道顯定討たれ給ひて後、長尾六郎爲景が威勢大にして、國中の軍勢、雲霞の如く馳せ付きしかば、此勢に乘じて、五郎憲房を討つべき用意あり、憲房の軍勢共は、臆病神の附きたりけん、皆ぬけ〳〵に落行きければ越後の在國叶はずして、竊に上州に歸りて、白井の城にぞ籠られける。上杉家の老臣長尾左衞門尉景春入道伊玄は、忠功比類なき股肱の良士と、賴み思はれける所に、長尾六郎爲景に一味して、逆心を

長尾爲景上杉に背く

企て、山内殿を取除きければ、親屬の家子三戸駿河守・太田備中守諫言しけるやう、昔より以來、譜代恩顧の主に向ひて、楯を穿き弓を引きしもの、一人として運の盡きざることなし。然るに今忽に逆心を企て給ふこと、偏に家運の傾く端なるべし。ただ思召止り給へといひけれども　伊玄入道、此諫言を用ひずして軍兵を催し、沼田の庄に陣を張りて、上杉家を攻干すべき謀をぞいたしける。之をだに難義と思ふ所に、小田原城主北條新九郎入道早雲、駿豆兩國に跨りて相州を凌ぎ、長尾六郎に一味して、相模國住吉の城を取立て、弊(つひえ)を窺うて出張せしかば、上杉治部少輔入道建芳・被官上田藏人入道、既に早雲が下知に從ひ、軍勢を集めて、武州神奈川に押出でつゝ、權現山を城郭として、謀叛の色を立てたりけり。東西狼逆し南北蜂起して、敵となり味方となり、互に峙ちて亂れたる有樣は、戰國の七雄起り立ちて、權を爭ひける古も、斯くやとぞ覺えたり。山内・上杉の人々は、更に驚く色もなくて、あら事々しや、何程の事かあるべき。敵の軍勢多しといふとも、味方十人に、一人あてに及ぶべからず。たとひ大義の謀をなすといふとも、螢燿の光は、太陽の明に當り難し。精衞が

巨海を埋まんとし、蟷螂が隆車を遮るに、同じかるべきものなりとて、靜に手分をして、伊玄入道が沼田の陣をだに追崩さば、小田原北越の敵は恐るゝに足らず。自ら亡ぶべしとて、管領憲房は、白井の城に在り乍ら、人數を出して沼田を抑へさせ、治部少輔入道建芳を、神奈川にぞ遣されける。建芳入道、手勢を率して打立らければ、管領よりの加勢として、成田下總守・澁江孫次郎・藤田虎壽丸・大石源左衞門・長尾孫太郎が名代矢野安藝入道・長尾但馬守が名代成田中務丞、其外武州の南一揆を狩催し、軍勢都合二萬餘騎、永正七年七月十一日、神奈川權現山の城に押寄せたり。彼山の爲體、四方嶮岨にして切岸高く、南は洋海漫々として、雲の浪煙の波、天に連りて邊なく、北は深田の底を知らず、馬の足、更に立つべからず。西の方には、小山の續きたる其間を堀切つて、本覺寺の地藏堂をば根城に搆へ、越後・駿河の加勢を以て固めさせ、東の大手には、大將藏人入道が軍勢、甲の緒をしめ、弓の弦首濕し、矢束解きて待懸けたり。寄手二萬餘騎、稻麻竹葦の如く、城の三方を取圍み、鬨の聲を上げければ、城中にも鬨を合せたり。天地震動し、山鳴り海湧きて煙塵起り、晴天忽に霧闇し。

寄手の先陣成田下總守が五百餘騎漕き上り、逆茂木を引破る。神奈川の住人間宮彦四郎と名乘つて、黑糸縅の鎧に、四目結の笠印を濱風に吹翳し、五尺餘りの大太刀を拔き持ち、木戸を開きて切つて出でつゝ、人馬をいはず、當るを幸に薙倒し打落す。寄手の大勢、之を眞中に取籠め、討取つて高名せんと駈寄する。間宮、更に物ともせず、射向の袖を差翳し、四方に打拂ひ、一面に追捲り、其勇猛の勢、獅子象の如くなりければ、成田が五百餘騎、間宮一人に切立てられ、むら／＼になつて引退く。二陣に續きて、駈寄する寄手の三百餘騎、息をも繼がせず戰ひしかば、喜四郎既に危く見えければ、城中の兵共、間宮を討たすなと聲々に呼はつて、二百餘騎突いて出でつゝ、追つ捲つ半時ばかり戰ふ。寄手の三陣入替り、手痛く攻付けしかば、城の兵、戰ひ疲れて引上ぐる。寄手勝に乘つて、城に押入らんとす。城中の軍勢共、木戸を下して引籠る。寄手の中に、武州稻毛の住人田島新五郎といふもの、鎌槍を以て木戸の繩を切解く。城中之を見て、大石を投げ出すに、田島が甲の鉢を打割られ、目昏き轉び落ちたりければ、後に續く兵共、皆一同に引退く。後陣に控へたる武州南一揆の者共五

百餘騎、入變りて押懸る。搦手の大將藤田虎壽丸、八百餘騎にて、たゞ一揉に攻落さんと、喚き叫んで詰懸くるに、北越小田原の加勢三百餘人、山の上より寄手を見下し、拳に引付け、散々に射ければ、面に進む兵廿八騎、矢庭に射倒されて亡せにけり。寄手少し白みて、足並しどろになる所を、得たりやと打つて出でたり。寄手入替り、堀切を堺うて、矢軍に時を移す。七月十一日の午の刻より、同じき十九日の晩景に至る迄、夜晝九日攻戰ふ。寄手は新手を入替へ〳〵、人馬の息を繼がせて押懸る。城中は、小勢なれども要害能ければ、容易く破られず。されども三方の敵を防ぎ、小屋に燃え付く火矢を打消すに、兵粮食ふべき隙もなし。終には城の後の要害に賴みたる本覺寺山を、藤田に攻取られしかば、叶はじとや思ひけん、十九日の夜半ばかり、城に火をかけ、其煙に紛れて、大將上田入道を始めて、軍勢悉く行方知らず落失せたり。管領憲房大に喜び、木村式部少輔入道を以て使者として、京都の將軍へ訴へ申し、長尾六郎追伐の儀をぞ計られける。

六　三浦道寸討死附新井城歿落并怨靈

三浦介義同は、去ぬる明應三年九月に、義父時高を討つて、新井の城を乘取り受領して、陸奥守に補せられ、從四位下に任ぜらる。入道して道寸と號す。子息荒次郎は、彈正少弼に補せられ、義意と號して、上總國の守護眞里谷三河守が聟となし、隣交の盟約を厚うして、新井の城に仕居ゑ、道寸は相州岡崎の城に居住し、管領の命に從ひ、幕下に屬し、相州の中郡を知行して、威勢近邊に雙びなく、光彩門戶になつ。相武兩國の武士來り從ふ。彼の岡崎の城は、昔右大將賴朝卿の御時に、三浦大介義明が弟岡崎惡四郎義實が居城として、三浦の一族、數代持續けし所なれば、要害思ふが儘に支度して、墻壁高く壘壍深ければ、たとひ數萬の軍兵ありとも、容易く攻寄り難き名城なり。然るに北條新九郎入道早雲、既に小田原の城を打取り、大庭の城を攻め落すと雖も、岡崎の城は、猶管領に屬して守りしかば、いかにもして岡崎を手に入れ、相州一國を平均に取鎭めばやと思ひ立ちて、永正九年八月十三日、伊豆・相模の勢を催

北條早雲岡崎城を攻む

し、岡崎の城に押寄せたり。城中強く防ぎ堅く守つて、寄手を討つこと數知らず。早雲謀を以つて攻むれば、城中手段を變へて防ぎ戰ふ。敵味方の鬨の聲に、太山も崩れて海に入り、廣原も湧きて峰に續くかと覺えけり。寄手の方より、大道寺太郎・荒川又四郎を先として、土肥の富永三郎左衞門・田子の山本太郎左衞門・妻良の村田市之助以下の軍兵、力を竭して攻めたりしかば、城中より佐保田豐後守・大林越後守を初として二百餘騎、木戸を開きて切て出づる。寄手の大勢之を押包みて、一人も餘さず討取らんとす。城兵少しも機を呑まれず、四方八面に當つて、追靡け打開き、一以て千に配り、精氣既に白虹を貫き、勇猛又秋霜よりも烈し。兩陣互に振ひ打つて、風の廻るが如く、焰の渦卷くに相似たり、されども運の傾く所、孫呉李衞が術策も其甲斐なく、一二の木戸を攻破られ、寄手いやが上に攻めかけしかば、城兵心ばかりは進めども、散々に追込まれ、頭をも差出すべき力もなし。今は叶ふべからず。一先づ此城を落ちて、重ねて軍兵を催し、欝陶を散ずべしとて、大將道寸入道を先として、佐保田・大森以下の兵、搦手より落ちて、同國住吉の城にぞ籠りける。早雲押續き

三浦義同敗軍

て住吉の城に取懸け、日夜攻めたりければ、爰をも落されて、鎌倉を指して引きけるを、旗を進め貝太皷を鳴らし、鬨を作りて追懸けしが、秋谷の大崩にて、踏止まりて支へたり。此道は、高山崩れて海に入り、片岸の細道、一騎打にして、高低平ならずと雖、小勝ち誇りたる北條方の大軍、岸崖ともいはず、峯に登り海に浸りて追懸けしかば、小坪・秋谷・長坂・黒石・佐原山の難所をも攻崩されて、道寸叶はずして父子一所になり、雑兵併せて二千餘騎、三浦・新井の城に立籠る。此城の有様、周圍卅餘町を垣こめ、東一方ばかりこそ、僅に陸地に續きけれ。三方は入海の島城にて、白浪岸を洗ひ、峯高き羊腸の山坂、鳥ならでは翔り難く、巖峙ちたる雁齒の嶮しき、獸と雖、通ふに疲れぬべし。たとひ百萬騎の勢を以て向ふとも、力攻めにはなし難し。千駄櫓と號して、大なる岩穴あり、常に米穀千駄を積み入れて、兵粮の備とす。されども城の大將道寸、至剛智謀ありと雖、度々の合戰に人數悉く討たれ、勢力撓みたりければ、さして仕出したる謀もなく、城を固く守るを能きにして、後詰の援兵を、頼むより外の事なし。城の要害嚴しければ、容易く攻寄する事叶はず。北條早雲は向城を取りて、三

上杉朝興敗軍

年迄ぞ攻めにける。城中今は四方の通路を取切られ、兵粮既に盡きたりければ、中中難義に及びけり。江戸の城主上杉修理大夫朝興は、五郎朝良の兄民部少輔朝寧の子なり。朝良之を養子として、扇谷殿の名跡を繼がしむ。然るに三浦は、上杉家の忠臣として、此迄も心を變ぜず、北條家と爭ふこと數年なり。今既に久しく寄手に苦しめらる、急ぎ人數を出して後詰いたし、北條早雲を追拂ひ、陸奥守入道に力を附くべしとて、五千餘騎を率して、相州の中郡に、旗を靡かし押出でらる。早雲此由を聞きて、人に先んずる則ば利ありとて、七千餘騎を以て、城の押に殘し置き、八千餘騎を率して中郡に押寄せ、朝興の軍兵と手合し、兩陣相懸りに入亂れ、卯の刻より未の刻まで、入替へ〳〵攻め戰ふ。鬨の聲天に響き、矢叫の音地に滿ちて、百千の雷空に轟き、切先より火を散らして、數萬の激電雲に映ず。朝興の軍兵若干討たれしかば、終に切崩されて敗北し、右往左往に落ちて行く。北條方勝鬨を作りて追懸け、突伏せ切伏せけれども顧みず、我れ先にと引立て、一返しも返さず、這々江戸の城に逃げ歸る。新井の城には、兵糧盡き果て、後詰の援兵をこそ頼みけるに、上杉打負けて

引退くと聞えしかば、城中力を落して仰天す。北條早雲、既に後詰の勢を追拂ひ、後に恐るべき敵はなし。新井の城を揉み落さんに、今は心安しとて、數萬の寄手を押懸けて、息をも繼がせず攻めける程に、逆茂木一重は引破りたり。大森越後守・佐保田河内守は、大手を固めて防ぎけるが、大將道寸入道の前に來りて申しけるは、敵既に後詰の軍に打勝つて、勢愈强くなり、同勢いやが上に折重なり、城に押懸け、息をも繼がせず揉立て候。味方の軍兵共、忠節無二に働き、命を棄てゝ防ぎ戰ひ、寄手を討つこと數知らず。矢に中り石弓に打たれ、手負死人重なり伏すと雖、敵更に物ともせず、新手を入替へ〳〵攻懸り候へば、味方の兵、精力疲れ矢種盡きて、兵糧既に乏しくなり候へば、此の城を持ち遂ぐること叶ふべからず。然らば忍びやかに城を落ちて、上總の方に赴き、荒次郎殿の舅なれば、眞里谷殿を御賴みあつて、重ねて軍勢を催し、此城を取返し候はん謀を廻らし給へ。二年の内をば、過すべからず候とぞ申しける。道寸申されけるやうは、あたらしき儀なれども、當家は三浦大介義明、其上右大將家に忠勤を盡して、討死せしより以來、源家累代の重臣として、此所の主となり、

一門の大名諸國の受領九十三人、門葉百司既に五百餘人、扶桑一門の間に、誰かは輕しめ思はん。然る所に中古元弘の亂世に、三浦介時繼入道、卽ち相模二郎時行に與して反逆を企て、尾州の熱田にて生捕られ、六條河原に於て誅せらる。其子高繼は、高倉の惠源禪門に與して、討たれしより以來、門族衰へ威勢磷ぎけれども、猶相州の内には肩を並ぶる人なし。父時高不義の振舞して、公方持氏を亡し奉り、其功に矜り、漸く大名となりしかども、我を追出し給ひけるを、我甚だ憤りて、人數を催して追落し、此城を奪ひ取る。父は公方を亡し、罰に依つて亡され、我は父を討ちし罰に依つて、天命爰に盡き果て、負けまじかりける軍に、度々利を失ふ。運の傾く身を以て、たとひ落ち行きたればとて、何程の命を保つべき。因果歷然の所に理を忘れ、人手に懸りて犬死せんより、命を限りに戰うて、弓矢の義を專にし、死を善道に快くせんと思ふ。運の通塞も軍の吉凶も、今はいふべき所にあらず。若し又落行きて、命を助からんと思ふ人は、只今皆落行き給へ。我れ更に恨と思ふべからずと申されしかば、大森・佐保田も、此上は力及ばず、諸共に討死仕るべし。今迄忠戰を專にせし輩、

誰か一人も、先途を見棄てゝ落行く者の候べき。さらば最後の暇乞に御盃を給はり、冥土黄泉の出立をいたし、修羅の巷の契約すべしとて、三浦前陸奥守從四位下平朝臣義同入道道寸・同子息荒次郎彈正少弼從五位下義意・家臣大森越後守・佐保田河内守・同子息喜四郎・三須三河守以下百餘人、終夜酒宴して、憂世の名殘を惜まれけり。道寸入道盃を控へられしに、河内守拍子を取りて、君が世は千代に八千代にと謠ひしかば、荒次郎扇を取りて、

君か代は千代に八千代によしやたゝ現の中の夢のたはふれ

と押返して舞ひける。實にも哀れを催しける一曲の心かなと、互に面を見合せて、皆涙をぞ流しける。又いつの世に立返り、相見んことを辨へねば、思切るとはいひ乍ら、今を限りの舞の袖。猛き心の底までも、さこそと思ひ遣られたり。道寸申されけるやう、君臣の禮儀年來の忠功は、此迄にてこそ候へ。此上は何か隔のあるべきとて、思ひ差し思ひ取りに、舞うつ謠うつ、各數盃を傾けしに、夜既にしら〳〵と明渡る、東雲の空の景色ぞ物凄き。寄手はや木戸逆茂木を引退け、えいや〳〵と押入

りたり。城中の兵一同に立上り、大手の門を押開き、切先を揃へて切て出づる。此勢に、寄手の先陣五百餘騎、はら〳〵と引退き、或は馬を馳倒し、或は太刀長刀を取落し、急合ひ込合ふ所へ、百餘騎の者共、一面になつて突いて懸り、十文字に切捲り、巴の字に追崩せば、討たるゝもの百廿騎、疵を蒙るもの數知らず。寄手の一陣二陣は、木葉の如く散亂れたり。北條早雲之を見て、新手を入替へて突いて懸る。城中の兵は、思切つたる最後の軍になりしかば、身命をも顧るべき。七百餘騎の眞中へ、魚鱗になつて切入りつゝ、蜘蛛手に駈立て、八方に打立てしかば、さしも勢ひ懸る北條家の兵共、面も更に向ひ難し。道寸入道團扇を取りて、前後左右を進退せし所に、寄手の中より唐糸縅の鎧に、三枚甲を猪首に着なし、長刀を搔込み、神谷雅樂頭知重と名乘つて、一文字に駈寄せ、道寸と押並べ、馬上より引組みて落ちたり。道寸は聞ゆる大力なれば、物ともせず、優しの意や、我手に懸りて、黃泉の先駈せよとて、綿上攫んで中に引下げ、鞍の前輪に押付け、首捩切りて棄てられたり。子息荒次郎義意は、父の力を繼ぎけるにや、猶勝れたる大力、世には八十五人が力ありと聞傳ふ。身

三浦義同戰死

の丈七尺五寸、髭黒く筋太し。眼倒(さかさま)に裂け、其心剛強なり。厚さ二分に鍛うたる鐵(くろがね)の鎧、龍頭の甲を着、太く逞しき月毛の馬に、白覆輪の鞍置きて打乘り、家に傳はる五尺八寸の正宗の大太刀を拔き、大音あげて、寄手の中へ喚いて駈入り、此處に追詰め彼處に攻寄せ、敵を選ばず馳せ廻り、拂切、横手切、袈裟掛、胴切、唐竹割に、薙落し打放せば、此勢に辟易し、寄手怺へず二町ばかり引退く。敵味方の手負死人、原上に塚を築き、軍下に陵(をか)をなす。城兵半(なかば)討死し、半疵を蒙り、同じ枕に伏したりけり。道寸入道は、常に好みし和歌の道、此時にだに踏違はず、

うつものも討たるゝものも土器(かはらけ)よ碎けて後はもとの塊(つちくれ)

といふ一首の辭世を詠み殘して、腹一文字に掻切りたり。荒次郎は其御介錯仕り、思ふ程弔軍し、軈て追付き申さんとて、父が首を打落し、靜に戸を取收め、只一人步(かち)立(だち)になり一丈二尺の白樫の棒を八角に削り、筋鐵を渡し、末二尺餘りに疣を植ゑ、提げて門外に搖ぎ出でたり。其有樣は、怒れる眼に血を拔入れ、髭は兩方に分れ、生年廿一歳、さしも健(すこやか)なる骨柄、羅刹鬼王の荒立ちたるに異ならず。いかに寄手の人々、

三浦義意戰死

城中には皆自害して、只我一人殘つたり。馳せ寄りて討取り、取込にして生捕り、名を後代に上げ給へ。まさなくも臆して見ゆる輩かなと呼はる聲、天地に渡り地に響きて、寄手の軍勢覺えず村立ちて、進む兵なかりしかば、荒次郎呵々と打笑ひ、いでいで後代の物語に、最後の軍して見せんとて、さいばうを打振つて、大勢群りたる中に走り入り、四角八方に追詰め〳〵、或は甲の頭上を打てば、碎けて胴へにえ入りて、死するもあり、或は横手に當れば、中天に千切れて飛ぶもあり、一拂ひに五人十人打拉がれ、馬人共に尻居に打据ゑられ、死するもの三百餘人に及びしかば、大軍亂れて、蜘蛛の子を散らす如く、開き別れ逃げ惑うて、峯に登り海に浸り、馬の足をぞ立て兼ね、邊に近付く者はなし。たゞ遠矢に射竦めよとて、雨の降る如くに、矢先を揃へて射けれども、裏缺く矢のあらざれば、荒次郎は手も負はず、靜に木戸に立返り、向ふ敵のあらざれば、此迄とや思ひけん、自ら首掻落し、立ち乍ら踏開つてぞ死にける。昔漢楚の戰に、項羽の運命傾き、烏江の軍に敗北し、軍兵悉く亡びて、項羽たゞ一騎になり、向ふ敵のなかりしかば、自ら首掻落して、呂馬童に與へられし、勇猛無類

の例(ためし)にも、劣らぬ最後の有様なり。されども荒次郎が首は猶死せず、血眼を見開き、髭は針金の如くに立ちて牙を喰締(くひしば)り、睨み詰めたる裝(よそほひ)、一目見たるものは忽に惱亂し、病み出さずといふ事なし。蜀の關羽が討たれて、其首更に死せざりけん。今の義意が猛き念慮ぞ恐しき。是に依つて北條家、有驗の貴僧に仰せて、大供養を遂げられけり。三年の後迄も、まだ其首死せざりしを、駿州久能の總世寺の禪僧、彼の首の傍に一夜座禪して、一首の歌をぞ詠じける。

うつゝとも夢とも知らぬ一眠り浮世の隙をあけぼのゝ空

と詠みて回向せられしかば、此首忽に眼塞り肉爛れて、髑首(しらかうべ)となつたるこそ不思議なれ。異朝には眉間尺が首の死せずして、楚王を殺しけん。本朝には相馬の將門が首、三年迄死せざりけるが、

將門はこめかみよりぞ切られける俵藤太がはかりごとにて

といふ秀句によりて、眼を閉ぢ肉消えたりとかや。新井の城邊百餘間は、今も田畠を作らず草をも刈らず。牛馬其境に入りて草を食(に)めば、立所に死すとなり。菫の花

咲く時は、旗の手の亂るゝに似て、茅の穗の靡く光は、劍の刃の磨けるが如し。落城は是れ永正十五年七月十一日なり。道寸父子譜第の家人、一時に滅亡して餘類なし。屍は長城の岩屋に滿ち、血は巨港の岸に溢る。今に至る迄每年七月十一日には、新井の古跡に黑雲被ひ、丑寅の方より稻光輝き雷鳴り、亡靈荒れて往來の人の現に見え、常にも月曇り雨暗き夜は、叫喚求食の聲ありて、野人村老の魂を消すとかや。恐しなんどいふも愚なり。

七　北條早雲築二御崎城一附鳴弦の說

さる程に北條入道早雲は、三浦新井の城を乘取り、勢益盛にして、軍兵の馳せ付くこと、風に並寄る浮草の如し。伊豆の御崎に城を取立て、三浦道寸が軍勢落失せて、此處彼處に隱れ居たるを召出し、扶助を加へて寄騎とし、横井越前守を大將とし、小林平左衞門を始めとして與力三十人・手勢八十騎・三浦與十騎・雜兵二百人を差添へ、御崎の城に籠置き、房州の敵里見が出張をぞ抑へられける。彼の横井は、本は尾州の住

人なり。弓矢修行の爲め東國に赴き、北條に足を止め、數度の軍功を顯しければ、漸漸經上りて、横井新介を越前守になされ、一方の大將を承る。强弓の精兵、弓繼早にして目當を外さず、故實名譽の勇士なり。入道早雲の嫡子左京大夫氏綱、彼の越前守に、鳴絃の傳受おはしけり。此喜びとして、白糸絨の鎧に、行光の太刀一振を取添へてぞ給はりけり。時に於ての面目、武藝鍛錬の德用なりと、羨しくぞ見えにける。横井物語り申しけるは、昔唐土楚の莊王、狩に出で給ひしに、白猿一つ梢にあり。人の射る矢を中に取りて折捨て、徊旋跳躍する有様、神變を得たるが如し。楚王之を養由に仰せて射さしめ給ふ。養由卽ち弓取直し、弦引しければ、白猿之を見て大に恐れ、樹を抱きて泣叫び、手足をも働き得ず、終に地に落ちて死にけり。天下の人、養由が弓に奇特あることを知れりとかや。又古魏王の御前に於て、諸臣集會せし所に、寒夜の霜さやかにして、月の光物凄き折節、雁の渡る聲の聞えしを、更盈といふ名臣申しけるやう、我れ此雁を射落し侍らんとて、弓を取りて弦を鳴らしければ、雲中に羽打つて飛ぶ雁、忽に地に落ちたり。其後日本には、神代の時より傳はりし鳴弦

神祕あり。鹿島明神夢想の告に依つて、源賴義其嫡子八幡太郎義家朝臣に傳はり、寬治年中に、堀川院御惱ましましけるを、義家殿上に伺候して、鳴弦の術を行はれしかば、聞く人身の毛よだち、御物怪怠らせ給ひけり。其後は漸く武威ひすろぎ、信心既に薄くなりて、奇特も更に顯れ難し。源三位賴政の鵺を射たりしも、廣有が怪鳥を射たりしも、矢を放ちたりと聞えしは、弓法に暗き人の申すことなり。神道の祕奥鳴弦の奇特は、今の世にも、などか退轉いたすべき。たゞ信力の厚薄にありと、思召し給へとぞ語りける。

八　山內管領補職 附 北條早雲逝去

古河公方政氏の舍弟四郎殿と申して、上杉家に狹められ、幽居閑靜の體にておはしけるを、上杉顯定の遺言に依つて、山內の管領となし奉り、治世の謀を廻らすべしとて呼び出し、取立て參らせ、上杉顯定の御養子と稱し、民部大輔顯實と號し、管領の職を嗣ぎて、武州鉢形の城に居ゑ置き參らせけり。後の年に及びて、憲實の嫡孫上

杉五郎憲房は、實には僧周淸が子なりと聞ゆ。顯定入道これを養子として、山內管領職を繼がしめたり。後に兵庫頭に補せられ、斯く計らひて、國家の靜謐を存ずと雖、時運の節正しからざる故にや、天下國家四夷八埏、同時に亂れ立ち、互に峙ち兵を集め、隣境を犯し邊邑を脅し、蠶の如くに食ひ、鯨の如くに呑みて、勢逞しく機に乘つて、世を覆さんことを計り、强きは弱きを從へ、大なるは小なるを取拉ぎ、萬民の膽を消し、百姓魂を冷す。斯る所に永正十六年八月十五日、北條早雲、伊豆韮山の城にして逝去せらる。去年既に八十八歲、此迄も猶眼に霞なく、耳も定に齒牙も損せず、たゞ白髮たる計にして、神精の正しき事、さながら壯年の時に替らず、誠に果報人かなと皆感じ合へり。當國修禪寺に葬送し、一片の煙と燒上げ、遺言の旨に任せ、小田原の湯本に墳墓を築き、金湯山と號し、洛陽紫野大德寺の長老を請じて佛事を營み、早雲寺殿天岳宗瑞大禪定門と稱す。昨日までは、相豆兩州の太守となり、弓箭の威名を東國に振ひ、今日は、忽に白骨を黃壤に埋もれ、一掬の卵塔に神魂を澄しむ。人世誰か此苦を免るべき。高きも卑きも、終に黃泉下に歸るべし。誠に果敢

なき生涯なり。

鎌倉公方九代記 巻十

高基軍記

一 公方政氏・高基父子確執 附 氏綱聟二晴氏一

古河の公方左馬頭高基は、政氏の嫡子にて、御家督の事は、誰か爭ひ申すべき。關東公方の正統なりと雖、時運の變災に依つて、亂世の逆浪鎭まり難く、國々の諸侍、互に峙ち起りて、彼に與し之を亡し、軍兵別れ陣伍を連ね、諸所に出向ひ押向うて、合戰更に止む時なし。剩へ公方政氏・高基御父子の中快からず。此頃驥尾に附き鳳翼を攀ぢて、大功を樹てんとの望を懸くる輩、此方彼方に與力して、色を立て旗を靡かし、親子兄弟の慈孝を忘れ、門族朋友の盟契を棄て、口には忠義を唱ふと雖、心は我執重欲の貪を本とし、謀計策略して他の眉睫を摘み、佞諂奢侈にして、人の膽を攫む。是

に依つて諸將諸侍、晝夜更に寧き心なし。此間北條早雲逝去せられしかば、分國の事いかゞあらんと、危む人ありけれども、嫡子新九郎氏綱、豫て早雲在生の時より、小田原の城に居住し給へば、其上に相變らず義士を愛し、孝悌を本とし、豪傑忠烈の道を好まれければ、諸軍勢の歸伏する事、風に偃す草の如し。況や譜第舊好の輩、益忠勤の節を勵ましければ、權威も日頃に優りけり。然るに氏綱に、最愛の姫君おはします。養はれて深窻の中に冊かれ、情の色深くして、心ざま優にやさし。未だ見ずと雖、容顏美麗の譽は世に隱れなし。左馬頭殿聞及び給ひて、今是れ北條家は、燃え出づる春の若草の如く、日を追ひて榮え、諸人之に思付きて從ひ靡き、威勢旣に東國に蔓りて、凌宵花の立登るが如くなれば、いかにもして緣を結び、力を合せて鬱懷を開かばやと思ひ、北條家に御使を立てられ、氏綱の息女を、御家督晴氏の御臺になし參らすべき由、仰遣はされしかば、氏綱御返事申されけるやうは、當家の先祖、旣に王氏を出でて年久しく、代變り德衰へて、僅に匹夫武臣たり。無官無位の凡下として、公方高貴の君を聟に取り奉らんこと、其恐れ少なからず候。平に御免されを蒙るべ

しと、辭退申されしかども、重ねて仰入れられけるは、昔伊豫の入道賴義は、奥州下向の時、上野介直方が聟になり給ひ、八幡太郎以下の公達誕生あり。源家愈盛なるに至り、右大將賴朝卿は、伊豆の北條に流人たりし砌、時政が聟になりて、子孫榮え侍り、それより北條九代、天下の權を執りける例、是れ偏に吉例なり。兎角につけて、御宮仕に參らせらるべし。然らば北條家を以て、公方の御後見に思召し、諸共に力を相助け、國家を治め給ふべき由、細々と仰遣はさる。氏綱も又公方の威勢に募りて、大功を樹つるに、心安くせんが爲に、卽ち御請を申されたり。軈て御迎を立てられ、御輿入ありければ、公方北條兩家の御喜び、更に其限りなし。

二　北條氏綱走湯山參詣

伊豆・相模兩國は、北條家の掌握に落ちて、漸く治まりぬ。其上管領の御分國なりしかども、早雲父子の武威を以て打取り給ひ、管領家は日に從つて衰弱せしかば、諸侍皆北條に一味して、強きに歸して時世に任す。其頃左京大夫氏綱、伊豆の御山に參

詣あり、家老諸大將面々皆相從ふ。其樣甚だ嚴重なり。當山の別當僧般若院の賴慶阿闍梨、路次まで出迎ひ、旣に登山あり、寶殿に於て懇祈丹誠の幣帛を捧げ、相殿にておはします雷(いかづち)の宮にも參られたり。神感定めて納受し給ふらん。祝部は祝詞の聲を上げ、禰宜は神樂の音を調ふ。嚴の玉垣神寂びて、しみやかなる裝、自ら信心をぞ催しける。其後別當僧を召されて、緣起を尋ねられしに、賴慶畏りて、抑當社權現は、往古は地神第二代瓊々杵速日尊にておはします。彼の垂跡の御時は、高麗國よりして天の鳥船にめされ、雲路を翔り萬里を凌ぎ、相洲中郡の山中に天下らせ給ふ。此故に其山を高麗寺と號しけり。爰に佛在世の時、天竺靈鷲山の巽に當る山頂に、五百人の仙人ありて、金剛摩尼の法を修す。如來の滅後に及びて、思ひ〳〵の化益をいたす。播州印南の法花山に、空鉢仙人の來りし頃、今此御山にも知道仙人とて、虛空を翔り神通に乘じて來りつゝ、大日經を持誦せられしより以來、靈驗あらたなる事、擧げて數ふべからず。其後弘法大師此山に參籠ありて、深祕の靈法を修し給ひ、神威の慈光を仰ぎ給ふ。信心祈誓の妙業は、三世の事に通達し、行時如法の修道は、四

曼の理を證得す。猶今に至る迄、眞言上乘の密法當山に流宣して、法門の光明らけし。右大將賴朝卿、御旗を上げらるゝ始、先づ當社に御祈願あり。世を治め給ひて、愈信敬淺からず。年毎の奉幣怠りなく、又御自筆の願書あり、或は曾我祐成・同時致が弓矢太刀も、此山にあり。尊氏將軍の御願として、御劍を籠め給ひしも、當山の什物なり。其外樣々の靈寶其數ありとて、寶藏を開きて拜ませ奉る。下向の序に、眞鶴が先、鵐(しとゝ)が岩屋を一見し給ふ。昔賴朝卿、石橋山の戰に打負けて、暫く籠り給ひ、終に運命を、天下に開きおはしましける所なり。浦人を召されて、鮑を取らせて、酒宴し給ふこと數刻なり。それより一葉の舟にめされ、棹の歌聲々に謳うて、小田原に漕ぎ歸り給ふ所に、白魚一つ船中に入りたり。異朝には、周の武王孟津を渡り給ふに、白魚躍つて舟に入りたり。本朝の古は、平の淸盛の舟に、白魚飛入りけりとかや。例證旁めでたき瑞相なりとて、軍神に祀りて、其胙を諸將に給はり、夜に入りぬれば、前後の舟に篝を焚き連れて、早川の浦にぞ歸られける。

淺草觀音緣起

三　淺草觀音堂草創

大永二年の秋九月、北條左京大夫氏綱の許より、富永三郎左衞門尉を使者として、古河公方左馬頭高基へ、重陽の祝儀を申入れらる。富永、路次の便に、淺草の觀音堂に參詣す。其日殊更御緣日とて、諸人群集せり。此頃辨才天堂の邊より、錢の湧き出づるとて、老若男女集り、其錢を拾ひ取る。寺僧等制すれども用ひず。富永下向して、此事を言上す。氏綱を始め參らせ、奇異の思をいたす所に、達乘院の長老參られたり。氏綱此事を語られしに、長老申されけるは、淺草寺と申すは、人王卅四代推古天皇の御宇に草創あり。本尊は聖觀音、關東最初の伽藍、靈驗無雙の勝境なり。古武州豐島郡宮戸川は、今の淺草川の本名なり。漁舟の泊、殺生の所として浦々續き、巨口細鱗しなぐ\交る。土師氏の支胤漁家に落ちて、此河邊に住みけり。檜熊・濱成・行成とて、兄弟三人網を携へ、七浦を廻りけるに、生身の觀音薩埵、網に懸りて、水中より上らせ給ふ。家擧つて大に驚き、小宮を作り安置す。家富み榮えて漁を止め、新

に觀音堂を建て、子孫既に三所の護法を勸請す。それより以來、賴みを懸くる輩は、二世の悉地を滿足し、歩みを運ぶ輩は、三等の業障を消滅し給ふ。妙驗は、新月の眼に滿つるよりも速に、玄應は疾風の身に觸るゝよりも著し。又辨才天と申すは、本地法身の大士、深位の應化なり。八臂具足の尊容は、大觀世音の總體、八正道分の現形たり。三光天子と顯れては、回向を萬部に輝かし、八大龍王となりては、恩波を四方に注ぎ給ふ。福德才智の妙理を施し、武勇敬愛の加護を布きて、利を遍くおはします。然るに今の世は、國家亂逆の最中にて、人民窮困の時節なれば、大慈大悲の御誓、福聚無量にして、富祐の澤を以て、利益を顯はす所なるべし。既に大辨才天は觀音の變作、卅二將の隨一なれば、當家擁護の本尊なり。殊更に御信仰有べしとぞ申されける。是に依つて城北の堀の內へ、榎島の辨才天を勸請し、當城の鎭守と崇め、武運の榮久をぞ祈られける。今辨才天の宮これなり。

四　武藏野合戰

北條氏綱上杉朝興對陣

大永四年正月十三日、上杉の家老太田源六郎同舍弟源三郎反逆を起し、小田原に通じて相圖を定めたりければ、北條氏綱時刻を移さず、豆相兩國の軍勢一萬五千餘騎を引率して、武藏野の城にぞ押寄せたり。城主上杉修理大夫朝興、此由を聞きて、居ながら敵を待たば、武略なきに似たりとて、八千餘騎にて、品川迄押出でらる。小田原の先陣田目六郎と、上杉家の先手曾我新四郎と、品川の先、高繩の原にて寄合ひたり。田目六郎更に見繕ふこともなく、鬨の聲を上ぐると等しく、拔連れて打つて懸る。曾我新四郎相懸りに押詰め、汗馬東西に馳せ違ひ、旌旗南北に開き別れ、魚鱗になり鶴翼に圍み、互に命を惜まず、七八度まで揉合ひければ、田目が陣打散らされて、四角八方に亂れたり。上杉朝興勝に乘りて、一人も餘さじと、備を亂して追うて懸る。氏綱の二陣大道寺八郎兵衞後れ馳に來りて、箕の手に備へて押懸る。上杉の軍兵等、足並亂れたりければ、之に立合ふ迄もなく、瓦の如く解け土の如く崩れ、城中指して引返す。氏綱逃ぐるを追うて、懸れ〳〵と下知せらる。上杉勢は、後より切らるゝをもいはず、射らるゝをも顧みず、我れ先にと城中に逃げ籠る。氏綱續いて押寄せ、

切岸の下に附きて、木戸を引破らんとす。城中力を竭して防ぎ戰ふ。總軍の罵り叫ぶ聲、山河動搖し海水湧發して、乾坤覆るが如し。石に打たれ矢に當り、寄手二百餘騎、死生の間に吟ひ伏すと雖、新手を替へて攻めければ、城中厭みて退屈す。大將朝興怺へ兼ねて、其夜の內に、同國川越の城にぞ落ち籠られける。夜明けゝれば、氏綱仰せけるは、敵はや夜の內に、落失せたりと覺ゆるぞ。追懸けて打止めよとて、板橋邊まで人數を遣し、落行く兵を追討にこそせられけれ。其後氏綱城に打入りて、敵の首共實檢し、一木原に旗を打立て、作法の如く勝鬨執行ひけり。當國の住人毛呂太郎・岡本將監を始として、味方に屬し、愈多勢になり、猛威を遠近に振ひ、忍岡の城には、遠山四郎左衞門を籠置きて、小田原に歸陣ある。

五　管領上杉憲房逝去

上州におはしける管領上杉五郎憲房は、此由聞きて、急ぎ鉢形の城に來り、朝興いひ甲斐なく、忍岡城を北條方に取られし事を、口惜しく思ひ憤り、不日に分國の人數を

上杉憲房死去

出し、忍岡城を取返し、城代遠山を討つべしとて、既に用意ありける所に、俄に重病に取結び、醫療さま〴〵術を盡し、針灸とり〴〵手を代へ、諸社の祈禱、諸寺の祈願ありしかども、其驗なく、同五年四月十六日、終に儚く亡せ給ふ。此人は上杉家に於て、智慮才辯殊に勝れ、心操謀略最も逞しく、武勇にして仁慈深し。諸士其恩澤に浴し、忠義彼の陰德に報いんことを存ぜしかば、我運再び開かるべき管領なりと、賴もしく思ひける所に、命業忽に一朝の露に誘はれ、顏柳速に九夏の日に枯れ給ひければ、相從ふ兵共、機を失ひ力を落し、五更に油盡きて、破窻の雨に向ふ燈の如く、中流に舟を損じて、一壺の浪に漂ふらんも、斯くやと覺えて心細し。此事敵に聞えては、力益募るべきなりとて、竊に葬禮を出し、隱し憂へて、聲を呑み淚を包む。偖もあるべき事ならずとて、京都將軍家に申請うて、古河の公方高基の次男三郞殿を養子として、憲廣と號し奉り、先亡憲房の實子憲政幼稚なれば、成人のほど、山內の管領を預け參らせ、長尾・白倉・大石・小幡以下の長臣相謀り、關東の成敗を司り、諸家の支配をいたしければ、後は知らず、國の內暫く無爲にぞ治まりけり。

六　小弓御所義明創業

小弓の御所

其頃源右兵衞佐義明朝臣と聞えしは、古河の公方政氏の次男として、左馬頭高基には御舍弟なり。先年御父政氏と不和の御事ありて、奥州に落下り、牢浪の身となり、微なる御住居にぞおはしける。爰に上總國の守護代武田豐三・眞里谷三河守と同國の侍に、原次郎友幸といふもの、上總〔下總カ〕の小弓といふ所に在城し、所領の堺目を論じて、合戰度々に及べり。原次郎は下總の守護千葉介が家來なれば、千葉より加勢して、武田每度後を取りしかば、豐三安からず思ひければ、己が力ばかりにては、始終本意を達し難く思ひて、義明を呼び奉り、大將に取立て、軍兵を催しけり。義明既に押立ちて、累代武將の家名を輝し、而も其心飽迄不敵にして、骨太く力強く、早業打物の達者、當世無雙の英雄なり。上總・下總・房州の堺までも、管領を反さし輩、一人も殘らず馳せ集り、其勢近國に被ひしかば、三ヶ年の間に原次郎打負けて、小弓の城を落されて、闕退きしかば、義明入變り給ひてより、小弓の御所と申して、尊敬

することと公方の如くなり。原が家子高城越前守父子を討取り、同名下野守を追落し、上總・下總兩國を手に入れて、終に原次郎をも打殺されしかば、近國の武士、我も我もと群り歸して附從ふ。義明は、本より血氣の勇者なりければ、味方の大勢に心奢り、東八ヶ國を討取り、古河の公方を追放し、鎌倉に御所を立て、關東の公方になるべき事は、案の內なりと思ひし志、はや色に出でて仄かれければ、血氣の大逸なる若武者共、皆同意して、然るべき由勸め申しけり。古河の御所には、此事を聞き給ひ、大に憤り思召し、北條氏綱も、古河殿には舅なりければ、內々口惜しく存ぜられしかども、大敵の上杉と挑み戰ふ最中なれば、小を爭うて大を捨つるは智慮なしとて、暫く怒を抑へ、小弓殿には無事を作り、雙方使者の往來、折節の送物あり。是れ暫時の智謀なりと知らず、小弓殿の方には、武威に恐れて從ふものと思ひ侮り、鏃を磨き刃を硎ぎ、弊を窺ひ時を待ちける、心の程こそ愚なれ。

七　里見義弘鎌倉發向狼藉

安房國の守護里見左馬頭義弘は、淸和源氏廿二代の後胤、上野國里見の住人左馬助義豐と聞えしもの、房州に牢浪して、安西三郎が家に立入りけり。房州は其上右大將頼朝卿の時、安西・金鞠・丸・東條の四家一國を保ちて、鎌倉殿に從ひける所に、時世移りて運命傾き、四家の大將互に威を爭ひ、四分別心して弓矢を取り、戰更に止む時なし。彼の里見は武道故實の勇士、智略名譽の良將なり。安西が軍中、一方の大將となり、戰へば勝ち討てば取り、向ふ所利あらずといふことなし。金鞠太郎・丸源五・東條四郎三家の大將を討亡し、房州一國は、安西三郎一人の領地とす。里見義豐が大功、比類なかりしかば、權威高く武勇輝きたり。安西之を目覺しく思ひ、いかにもして里見を討ち、心安く國を治めんと計りければ、義豐其色を悟り、館を取退きて、反逆を企つるに、亡びたる三家の郎等馳せ加はり、大軍になりて、安西を攻めしかば、安西三郎叶はずして討死す。里見義豐、一國を手に入れて掌に治め、稻村といふ所に新城を築き、仁慈を以て士を勞り民を撫で、禮讓を以て則を正しく德を修め、忠義の道を致へ、孝悌の誠を示しければ、諸將皆淳風篤實の化に歸したり。稻村殿と號して居

城とし、上總の國司丸谷上總介を討つて國を奪ひ、兩國の主となり、家門榮えて、威勢に誇りし所に、子息左馬頭義弘の世に至りて、小弓の義明の下知に從ひ、同六年十二月十五日、兵船數百餘艘に取乘り、鎌倉に押渡り、佛閣を破却して佛物を奪ひ、神社を放火して神寶を掠め、剩へ源家宗廟の鶴ヶ岡の八幡宮に亂入して、寶藏を打破り、狼藉なる事いふばかりなし。北條氏綱聞き給ひて驚き、こは如何なる東夷なりといふとも、此程の惡事をば、よもすべきにあらず。殊更小弓も里見も源氏の末にて、八幡宮の氏人なり。然るを神明をも恐れず、佛陀をも憚からず、非道濫行をいたす事、前代未聞の重逆なり。印度の弗沙密多、我朝の弓削・守屋に同じといひつべし。放逸無慙の奴原、一々に搦め捕り、後代の懲めにせよと下知せられしかば、豆相兩國の若武者共、我れ先にと打立ち、鎌倉に馳せ向ひ、其勢七千餘騎、四方より取廻して攻めけるに、里見方の軍勢は、亂暴分捕の爲め、諸方に散り別れて、一所に打寄すべきやうもなく、神罰や當りけん、一方の大將里見左近大夫、馬より落ちて討たれたり。其外人數多く討取られ、立足もなく逃げ落つる。里見義弘叶はずして、舟に取乘つて

里見義弘敗軍

引退く。軍兵共は周章慌き、我も〳〵と込乘りて、舟を踏返して、死するもの數知らず。小田原勢は、豫てより繋ぎ置きたる船に乘り泛べ、追懸けたり。兩陣渡中に帆をついて、舷を叩き鬨を作り、潮を追ひ風に從ひ、押合ひ〳〵攻戰ふ。房州の先陣、一人も殘らず討たれて、義弘小勢になり、領國に漕ぎ歸る。

上杉朝興
北條氏康
對陣

八　武藏府中軍の事

享祿三年六月、上杉修理大夫朝興は、川越の城におはしけるが、小田原の北條氏綱を亡し、先年の恥辱を雪むべしとて、難波田彈正・上田藏人以下宗徒の兵五百餘騎を牽して、武藏の府中に出陣せらる。北條氏綱之を聞きて、あら事々しや。僅の小勢を以て我を退治せんとの企、何程の事かあるべき。螺貝を以て淵を掻き、針鋒を以て山を劈かんとするが如くならん。押懸けて蹴散らせとて、嫡子新九郎氏康今年十六歲、初陣ながら大將として、乳母子に志水小太郎を始めて、同じ程なる若武者勝り二百餘騎、物慣れたる武功の兵百餘騎、旗の手を靡かし、武藏の府中・玉川の端・小澤原と

朝興敗軍

いふ所に押寄せたり。兩陣鬨の聲三度作りて、一箭射違ふるとぞ見えし、太山の崩るるが如く、拔連れて切つて懸る。頃は六月十二日、炎暑宛ら甑に蒸さるゝに似て、耐へ難く暑き日に、草木も搖がず風絶えたり。軍兵汗水になり、喚き叫んで攻戰ふ。北條方は小勢にて、大將も若けれども、老功の侍大將、旣に氏綱の仰に依つて、懸る時は一同に駈け、引く時も靜に引きて、聚散變に應じ、進退度に當りしかば、不覺を取るもの一人もなく、互に味方を助けて、隊伍更に猥ならず。上杉方は多勢なれども、軍兵志我々にして、駈くるも引くも、しどろなりければ、切崩され追崩され、手負死人宛ら陵をなし、終日戰ひ疲れて、晩景に及びて、上杉勢散々に懸負け、夜に入りければ、大將修理大夫朝興を始めて、陣を拂つて引返す。小田原勢は、旣に落行くとは知り乍ら、小勢なれば追懸けず。氏康初陣に敵を追返し、物始めよしと喜び、勝鬨を行ひ、手負を助けて、小田原に馬をぞ入れられける。

九　小田原外郎事實

相州小田原の政道私なく、徳を修め民を憐れみ、仁義禮讓能く勤め能く愼み、近國淳ゐること、頗る古風の儀に從へり。是に依つて近國他郷の人民、其惠に懷き、其澤を慕ひ、住家を望み家を移し、津々浦々の町人・職人・商賣の輩群り集り、唐の日本の國々の土產、山海の珍物、風流の翫物、琴碁書畫の類迄も、色を盡して事缺くはなし。東は一色より、西は板橋の邊に至り、其間一里餘りに、七座の棚を飾り、日每に市を立て、交易賣買の利潤を望む者、老若男女の往來は、四條五條の橋にも過ぎぬべし。小泉兵太夫町奉行を承り、理非を分明にして、姦直を糺擧せしかば、制法を守り正道を破らず。此故に人の歎もなく盗の憂もなし。民の竈豐に賑ひ、農作其時を失はず。古鎌倉の全盛なりしも、此程はよもあらじと、耳目を驚かす計なり。其中に京都より、外郎といふ人來りて、程々の藥を出し商ふ。壷公の術を知るにもあらず、韓伯が賢を學ぶにもあらず、昔鎌倉の執權北條泰時の世に、建長寺の開山大覺禪師來朝の折節、員外郎の官職の者、冠を掛けて世を辭し、禪師に付きて本朝に渡り、藥を貼ぎて京都に住みつきける、其子孫とぞ聞えし。中にも透頂香とて、仙家の靈方あり。

長生不死の神藥なりとて、小田原に持下り、氏綱に進上しけり。風味あらたにして、口中を爽にし、胃熱の臭氣を除き、頭痛を治し睡眠を覺し、其外効能とり〲なり。氏綱持囃し給ひ、小田原に居住せよとて、明神の前に家作りして給はりぬ。先祖の官名を藥の名に呼んで、透頂香とはいはず、直に小田原外郎と號して、關東往來の人は、買求めて用ひ來り、今も其隱れなし。

足利政氏逝去

十　政氏逝去附上杉憲政管領幷高基遠行

同四年七月に、古河公方政氏不例の氣ましします。日を重ねて愈心地惱ませ給ひ、同十八日の夜に入りて、終に逝去し給ふ。竊に葬禮の事營み、甘棠院殿と號し奉り、佛事作善、式の如く勤められけり、同九月二日、上杉四郎憲政旣に憲廣に代りて、山内の管領となり、國家の政理を執行はる。此頃打續きて京都東國靜ならず、天災地妖様々なり。人民百姓は、妻子を携へて住家を移し、武士は甲冑を枕として、安き心なし。公家の衰微斜ならず、上衰へ下苦みて、飢疾刀の三災此時に起れり。さればに

足利高基死去

や天文三年の春より夏に至る迄、天下疫癘夥しく流行して、死するもの戸を重ね、所所葬送を營み、家々に泣悲しむ聲、四隣互に斯の如し。此驗に取加へて、左馬頭高基重病に取結び、身心を惱して快からず。漸々に弱り行き給ひ、華陀耆士が醫術も驗なく、君臣佐使の方藥も詮を失ひ、今を限りと見え給へば、軍功舊老の輩、手足を空になし、汗を握り胸を焦せども甲斐ぞなき。天文四年十月八日に、緈切れさせ給ひけり。鼎湖の雲渦卷いて、天邊の日に副へ、覇陵の風飜り、夢裏の花を散らすとかや。寂葬送を營みて、墳墓數尺の草根に埋み奉り、白楊一株の枝葉を垂れて、其標とす。潛寥たる空山の中、鳥啼いて憂を助け、雨注ぎて涙を添ふ。哀れなりし事共なり。潛光院殿とぞ號しける。

鎌倉公方九代記 卷十一

晴氏軍記

一 上杉修理大夫朝興病死

左兵衞督晴氏は、高基公の御息として、公方の家督を嗣ぎ、古河の城におはしまし、北條氏綱の息女を、北の政所とし給へば、小田原家の諸將も、いつしか親しく敬屈の禮を重くし、東國の諸士小山・佐竹・宇都宮・那須・長沼・結城・小田以下は、元より公方の御下知に從ひ、心を背かぬ人々なれば、愈勢ひ勇みをなし、啓運の祕計を廻らしける。斯る所に天文六年三月下旬の頃より、扇谷の管領上杉修理大夫朝興入道匠作、重病に取伏し、種々の治療を盡し、樣々湯藥を勸め參らせしかども、更に其驗なし。今は此世の賴みも少なう見え給ひしが、子息朝定・舍弟左近朝成、其外三田・荻谷

以下の老臣を、御寢所に召されて仰せられけるは、我れ愁に管領の職に居て、德薄く智短くして、國家を治むるに權威輕く、而も利を取ることなし。是れ生々の恥辱、世世の怨念たり。我れ如何にもして軍功を顯し、氏綱を討つて會稽の恥を雪め、年來の欝陶を散じ、譜第舊勞の輩、忠義武功の兵に、勸賞を心のまゝに行ひ、安堵の地に樂ませんとこそ思ひしに、定業必死の病を受け、命既に盡きなんとす。我息絶えなば、竊に山下の土に埋み、佛事作善をも營むべからず。されば秦の穆公が三良を埋み、始皇の寶玉を從へしも、是れ我心に羨む事ならず。只黃壤の下にして妄念となるべきは、敵を亡して宿望を達し、國家を治めんと思ふ計なりと宣へば、各同音に申しけるは、君たとひ百年を早くして、幽冥の境に趣き給ふとも、御息五郎殿・御舍弟左近大夫殿おはしまし、我等斯く存へて候。其外譜第の舊臣等、其勳功を棄てゝ、敵に降らんと思ふ者は候まじ。世の危を見て、愈命を輕んせん兵共、數多これあり。立居起臥にも、忠戰を心に懸けずといふこと候はず。皆義心堅固なること、金石の如くにして、變ずる道はなく候。追付け打立つて、北條家を誅罰し、御心を安め奉るべ

し。さのみに味氣なく思召し煩ひ給ふべからず。百度敗績すとも、一度勝ちて大利を得るは軍道の習、漢楚七十餘度の戰、毎度楚王打勝ちしも、烏江一日の利に乘つて、漢王天下を取り給へり。是れ能き例（ためし）にて候者をと申したりければ、扨は快し。愈諸軍を賴むぞやとて、卽ち絶入り給ひけり。天文六年四月廿日、死出の田長（たをさ）の聲に誘はれ、山立花の名殘を止め、獨り赴く冥途の旅、恨は朽ちぬ魂神の、修羅の巷に浮かれ給ふらんと、心の內こそ痛はしけれ。敵は聞きて喜び、味方は竊に悲めり。憂喜等しからず、糾へる繩の如し。哀樂時を換へたり。喜ぶも歎くも、世は定めなき夢の內、蝸牛の爭、石火の光、高きも賤しきも、終には逝きて止まる人はなし。

上杉朝興死去

二　武州河越城歿落附上杉左近大夫朝成被生捕

上杉五郎朝定、今年未だ十三歲、管領の家督をうけ、幼稚ながらも、心は剛におはしけり。父朝興の遺言に任せ、竊に葬送を取收め、佛事作善にも及ばず、軍兵を催し、武州の神大寺といふ所に、深き要害を取立てゝ、城郭とし、氏綱を退治せんとぞ計られ

上杉朝定北條氏綱對陣

ける。氏綱聞きて、此者共は毎度手痛く當られ、氣を失ひつけたり。況や此頃朝興に離れ、力を落したればさぞあるらん。臆病神の付きたる者なり。早く押寄せて打散らさんとて、同七月十一日、井浪・橋本・多目・荒川を足輕大將とし、松田・志水・朝倉を軍奉行に定め、其勢七千餘騎を引率し、武藏野の北の方、川越の城五十餘町を隔て丶、三木といふ所に出向ふ。上杉五郎朝定は、伯父左近大夫朝成を大將とし、曾我丹波守を軍監として、武藏・上野の兵、二千餘騎をぞ遣しける。兩陣互に聲を上げたりけれども、北條方態と相圖の時刻を待ちて、未だ懸らず。上杉方の軍兵等勇氣に乘つて、射手を面に進ませ、雨の降る如くに矢を放つ。北條方の先陣井浪・橋本の五百餘騎、楯を一面に突並べ、どつと喚いて懸りしかば、上杉方の先手二百餘騎、魚鱗に備へて打つて懸る。敵味方の人馬の音、天地を動搖し、兩陣の旗の手入亂れ、四方に別れ四維に合うて、馳違ひ追廻し、半時ばかり戰ひしに、北條方の軍兵、散々に駈亂され、討たる丶もの八十餘人、其外手負馬に離れ、ばら／＼と亂れたり。北條方の二陣、靜に太鼓を打つて新手に入變り、備を固くして、押詰めたりければ、上杉方

の兵勝誇りて、たゞ一揉みに切崩さんと、突いて懸りしかども、足並しどろにして、堅陣劈き難く、人馬の勢立所に疲れ、東を指して開き靡きしかば、多田・荒川之を見て鬨の聲を作り、えいや〳〵と押懸れば、曾我丹波守、采を取つて味方を勇め、引くな引くなと下知しけれども、運の傾く故にや、上杉方の兵共、心怯れ勢撓みて引立てたり。上杉家の郎等古市小太郎といふもの、口惜しき事かな。只今落つる程ならば、何しに此先手には向ひけるぞ。命惜むにぞ、敵に後を見するなり。討死と志さば、何の恐るゝ事あらんとて、三尺五寸の太刀を打振り、只一騎返し合せ、鎧の射向の袖を翳し、躍り懸り〳〵、鍔元に血を滴て、切先に火を出し、進む敵四人は目の前に打伏せ、十七八人に手を負はせしかば、跡に續く北條方の兵共、少し臼みてぞ見えにける。大將上杉朝成之に力を得て、古市討たすな者共とて、三百餘騎を一手になし、備を直して懸けられしかば、北條方の軍勢亂れて、嵐に木葉の散る如く引退く。三陣遠山豐前守、四百餘騎にて入變り、矢先を揃へて散々に射る。上杉方色めき立ちて、馬の足を駈け亂す。遠山心得たりと拔連れ、鶴翼に開き、喚いて懸る。上杉朝定

上杉朝成擒らる

之を見て、魚鱗になつて押懸り、手先を捲つて中を破らんとするに、敵敢て破れず。敵又虎韜に集つて碎かんとすれば、上杉方雁行に連なつて相當る。二度合ひて三度別れたるに、上杉方若干討たれて、終に崩れて引返す。北條方勝に乘つて、北ぐるを追ふこと甚だ急なり。大將左近大夫朝成は、敵の大勢に取込められしを、打破り蹴散らして、一騎落行く所に、黑革縅の鎧に、三枚甲の緒を締め、葦毛の馬に厚總かけて、乘りたる武者一騎、相模國の住人平岩隼人正重吉と申すものなり。あやなくも敵に後を見せ給ふものかな。御大將と見奉るは僻目か。引返し給へと名乘り懸けて追うて來る。朝成駒引返し、隼人正と馬上より組んで落ちたり。朝成之を物ともせず、押伏せて首を掻かんと、腰の刀を搜れば、運の盡きぬる悲しさは、何處(いづく)にて拔けたりけん、鞘ばかり殘りけり。其間に、下よりえいやと跳ね返す。敵の大勢馳せ付けて、手取り足取り朝成を、生捕りけるぞ無念なる。郎等共は、此處彼處に押隔てられ、殘り少なに討死す。其外の軍兵は、我れ先にと、川越の城に逃げ込みしかども、小田原勢雲霞の如く重なり、續いて城に押寄すると聞えたり。大將五郎朝定は未

だ幼稚なり。軍勢共は氣を失ひ心怯れして、只忙然と呆れたる計にて、繋げる犬の柱を廻るが如く、變る手段の評議にも及ばず、周章彷徨ふより外のことなし。

三　松山城軍附難波田彈正和歌の事

さる程に北條氏綱は、猶川越の城を追落し、朝定を退治せんとて、先陣後陣を揃へ、旗を靡かし太鼓を打つて、勇み進みて押寄する。抑此城は、其上太田持資入道が父道眞が築きたる所、これぞ武藏國入間郡みよし野の里とかや。昔在五中將の、東の方に下りし時、みよし野の田面の雁と詠ぜしは、此所の事ぞかし。年頃久しく住み續けて、作り磨きし城郭なり。要害も、さすが淺間にもあらざりければ、始終は叶はずとも、軍兵心を合せて防ぎ戰はゞ、などか敵をも苦しめざらん。然るに此度の軍に敗北して、兵多く討たれ、伯父朝成は生捕られ、殘る者共は臆病神に附かれて、手足萎え前後を亡じて、天を翔ける鳥の、鷲の趾に懸り、地を走る獸の、獅子の齒嚙に遭ふが如し。此にては中々敵を防ぎて、運を開く事叶ふべからず。一先づ城を開退き。

北條氏綱松山城を攻む

て、重ねて軍勢の氣を直し、本意を達し給へとて、搦手の木戸を開き、大將朝定を始め、諸軍勢女房達に至る迄、我れ先にと走り出でつゝ、此處より北の方廿餘里に當つて、松山の城を指して落行きたり。城主難波田彈正、甲斐々々しく引入れ參らせ、四方の要害を嚴しくし、所々に堀切落し穴を拵へ、而も兵糧澤山に積置き、馬の糠藁に至る迄、事缺かず見えしかば、他日〔多日カ〕窮困の軍勢共、たゞ翰鳥の繳を出で、轍魚の水を得たるが如く、暫く心をぞ安めける。小田原勢は、川越の城を攻むるには、いかさま手痛き戰なるべしと、倦み思ひける所に、案の外に開退きしかば、皆萬歲を唱へて、喜び勇むこと限りなし。大將上杉朝定の跡を慕うて、追々に走せ來る軍兵、既に大勢になりしかば、城主難波田、此輩を先として勢を催し、川越に押懸けて、城を取返すべき用意をぞいたしける。北條氏綱之を聞きて、さらば逆寄に松山に押懸け、打干すべしとて、同十八日、大軍を率して寄せ懸くる。難波田父子、木戸を開き切つて出でつゝ、小田原勢を一擧の中に追散らさんとす。兩陣鬨を作り、入亂れて打合ひけり。汗馬の馳せ違ふ音、太刀の鍔音、空に充ち地に響く。弓手に相つけ右手に

押懸け、或は引組み落重なり、首を取るもあり取らるゝもあり。小田原方の勢は、此處を退かば、日來の勳功空しからんことを思ひ、上杉方は、年月の恥辱を雪がんと、互に心を勵まし機を進め、義を太山よりも重くし、命を鴻毛よりも輕くして戰ひければ、血は馬蹄に蹴懸けられて、紅葉に灑ぐ雨の如く、尸は野徑に橫りて、尺寸の地も餘さず。追靡け駈立てられ、揉合ひける所に、小田原の先陣百餘騎討たれて、颯と引取る。上杉方勝に乘つて追懸けたり。小田原方の二陣入變り、魚鱗に備へて、靜に押懸けたりければ、勢ひ懸る上杉勢之に突崩され、亂れ合ひて引返す。難波田下知して、引くなといへども、耳にも聞入れず、城中へ逃込みければ、北條氏綱采を上げて、同勢鬨を作り、遁すな、討取れ者共とて、追立て〳〵攻付けしに、討たるゝをも顧みず、手負をも助けず、只引に引きければ、難波田も力なく引立てられ、城を指して落行きける所に、北條方の侍大將山中主膳追懸けて、斯くこそ聞えける。

　　あしからじよかれとてこそ戰はめなど難波田の崩れ行くらん

といひかけしに、彈正聞きもあへず、駒いさゝか引返して、

君をおきてあたし心をわれ持たばすゑの松山波も越えなん

といひ捨てゝ、松山の城にぞ入りにける。主君朝定を城中に殘し置き、難波田討死せば、松山は、敵の寄せ來る波も越えなん。武勇の忠臣、戰に臨みて死するは易く、生くるは難し。命を全うする事は、後を保つが爲ぞかし。古今集の歌を採りて、心を變へて返しとす。當意卽妙の理、忙しき軍の中に、優しかりける意なり。昔賴義、敕をうけて陸奥國に下り、阿部の貞任を攻められし時、貞任打負けて、衣の館を落ちて行くを、賴義追詰めて詠みかけゝる。

衣の館はほころびにけり

と聞えしかば、貞任駒引返して、

年を經し糸のみだれの古しさに

と附けたりけり。猛き武士の心をも慰むるは、和歌の道とはいひ乍ら、昔も今も、斯る戰場の中にして、思ひ忘れぬ好の道、文武に達せし名士なり。さる程に北條氏綱は、又此度の軍にも打勝ち、續きて松山城を攻むべしと思はれけれども、軍兵旣に疲

れしかば、此に限るべからす。重ねて押寄せ攻取るべしとて、敵を追入れしを勝にして、町屋近邊を燒拂ひ、勝鬨を行ひ引取りて、川越の城にぞ入り給ひける。

四　小弓御所右兵衞佐義明討死附下總國鵠臺の始

小弓の御所源右兵衞佐義明は、威勢益强大になり給ひ、軍兵日に添つて集り從ひしかば、いかにもして關東を悉く打靡け、公方家を攻干して、國家を掌に中に握り、榮名を天下に輝かし、權威を諸將の上に、恣にせばやと思ひ給へる志、晝夜更に止む時なくおはしましければ、古河の公方晴氏大に憤り給ひ、是れ偏に國郡の蠧害、本所の痼病なり。其儘打置きなば、由々しき後の大事なるべし。尾を繫ぎて愁を待つに等しきものならん。早く音信の通路を切り、速に退治の祕計を廻らさんには如かじとて、北條氏綱に賴むべき由仰遣さる。氏綱も內々は、小弓の威勢强く成行かば、後は必ず我が爲め六かしからんことを思ひて、御請をぞ申されける。軈て分國の軍勢を催し、小弓發向の用意をぞせられける。間宮豐前守・池田民部少輔・椎津隼人正。

太田以下の人々申しけるは、右兵衛佐殿は、近代無雙の名將なり。公方の御家督を持ち給ふべきは、此人にておはします。之を取立てゝ御所とし、鎌倉に居ゑ給ひ、當家其執權となり、互に相守り給はんには、關東不日に平らぎ、國家の基たるべし。愁に手を出して、千に一も、味方後（おくれ）を取り給ふに於ては、數年の勳功忽に消えて、不日の衰弊にや及び候はん。前に讎敵の兩上杉あり。之に加へて小弓を攻められんには、三方に敵をうけて、一方終に保ち難かるべきか。只先づ和平を繕ひ、上杉を攻干して大功を遂げ給ひ、其後兎も角も計り給へかしとぞ申しける。氏綱仰せけるは、義明を名大將と思ひ、勇猛の人と存ぜらるゝ事、餘義なしと雖、倩彼の行跡を見聞くに、仁慈禮讓の則に暗く、道德忠恕の行なし。自ら力量の逞しきを頼み、又早業の得たるに慢じ、太刀打馬上の働は人に勝れて、其心は甚だ奢り、謀計も短く、智慮至つて薄し。片側破りの猪武者、たゞ强味を以て、無理の軍を好み給ふ。是れ一夫の勇にして、良將の器にあらず。一旦血氣の兵共恐れ従うて、時の威勢あるに似たりと雖、終に始終を頼み難し。今此運に乘じて、狼牙蠆尾の毒をあて來らば、我が時運の妨

氏綱氏康足利義明を攻む

なるべし。早く先立つて打亡さんは、家門の爲、謀略の最たるべしとて、天文七年十月四日、氏綱・氏康父子を大將として、先陣は、松田・志水・狩野・笠原、三陣は遠山・多目・荒川・山中・根來を先として、軍兵都合二萬餘騎、小田原を立つて江戸の城に着陣す。小弓義明此由を聞き給ひ、子息御曹司・舍弟基頼を大將として、里見義弘を副將とし、兩總房州三ヶ國の軍兵一萬餘騎を率して、下總國鵠臺に出張し、市川を前に當て、陣を取つてぞ待ちかけたり。爰を鵠臺と名付くる事は、昔人皇十二代景行天皇の御宇に、日本武尊東夷を征伐して歸陣の時、此市川に懸りて、折節水嵩增りて、淵瀨を知らず、渡し兼ねさせ給ふ所に、鵠といふ鳥一つ飛び來りて、河の瀨踏をして、此陵に上りつゝ、羽を垂れて尊に向ひ奉る。尊大きに感じ給ひて、今より後、此所を汝に與へんと宣命ありしより、鵠の捿家となりける故に、鵠臺とは名づけたり。近國無雙の名地として、去ぬる文明十七年七月十五日、上杉の家臣太田道灌が、臼井の城を攻めし時に、始めて取立てたる向城と聞えたり。大將氏綱・氏康既に諸將を召して、軍評定ある所に、或は敵此の要害に陣を取り、大勢にして而も案內者共なれば、此方よ

り懸らば惡しかりなん。敵の懸るを待うけて、打圍みて攻むべしと申すもあり。或は小弓殿、諸國に加勢を召されんに、皆御請をいたさば、中々大事たるべし。後詰のなき間に、早く押渡りて討つべしと、評議兩篇に分れて決せず。根來金石齋進み出でて申けるは、此度の戰、兎ても角ても味方の勝利疑なく覺え候。其故は、小弓殿の振舞、更に自身の武勇に慢じて、威勢强大なるを賴み、日時方角虛實旺相を選ばず、天理を反くこと、是れ良將のせざる所なり。次に公方を討つて、國家の權を奪はんとする無禮不義の結構、是れ天道の惡む所なり。眞里谷入道恕閑は、義明に他念なき忠功の者なり。然るに讒者の言葉を信じて、御勘當を蒙り、咎なき由を歎き申すと雖、許容なし。恨に沈んで死(みまか)り、怨靈となつて、小弓の御所に形を顯し、之に會ふ人は、病出でて惱亂すと聞えて候。此外非常のこと數々なり。天道に背き地理に違ひ、人望に疎んぜらる。滅亡の時到れり。たとひ要害の地に陣を取り、勇猛の勢ありとも、運命の盡きぬる所には、咸陽は一火に原となり、項羽は一戰に利を失へり。然らば軍は弊(つひえ)に乘るに如かず、明日此方より押懸らんに、一定味方の勝利なるべし。

猶豫の評定然るべからずと申しければ、大將氏綱大に喜び、銀劍一振、黑の馬に白鞍置きて給はり、明日の軍に先駈して、敵を亡し名を揚げよとぞ仰せられける。時に取つての面目なり。軍は明くる五日の辰の刻と觸れられ、先陣は、微明に川を渡すべしと相圖を定め、宵より竊に川原に忍び寄つて、堤の下にぞ控へたり。夜既に明け渡り、遠方の人の袖、見ゆる程にもなりしかば、小田原の先陣七百餘騎、川端に打望みけるが、此川さして大河にはあらねども、打續く北時雨に、水少し增り滾りて、落つる瀨枕に、案內者を待つかと見えたる所に、小弓方の先陣椎津・村上・堀江・鹿島以下の諸將、使を以て、大將右兵衞佐殿へ申入れけるは、寄手の陣を見渡し候に、其勢雲霞の如くなり。味方の小勢を以て、對揚の軍をいたさんことは叶ふべからず。古より以來、川を隔てたる陣多けれども、渡して勝たずといふ事なし。されば敵未だ渡らぬ先に、急ぎ大將の御旗を移され、河中にして雌雄を決するか。然らずば、御味方を引取るやうに敵に見せて、敵追懸りて渡さんに、半渡り候はん時、どつと返して、敵の先陣を、河へ追はめ候べし。是れ極めたる勝を取るの術なるべく候とぞ申しける。

大將義明大に笑つて仰せけるは、合戰の間、一足も進む時は鼠も虎たり。一足も退くに至つては、虎却て鼠に類す。僞り逃ぐれば、後には眞逃になるなり。是れ敵の爲、利を與ふる端ぞかし。合戰の勝敗、更に勢の多少に據るべからず、兵の剛臆にあり。氏綱が武勇軍立、いふに足らざる所なり。川を渡させ、ぢり〱と誘き寄せ、我身に氏綱を討取るべしと、事もなげに宣ひけり。村上・堀江の大將、此程に謀の拙き大將とは知らざりけり。我々とても、勝つべき軍とも覺えねば、一筋に思切つて討死せんと吼き、備を立てゝ、敵の渡すを待ち居たるは、嗚呼がましくぞ見えにける。寄手の軍勢一同に打入り、人馬に流を堰上げて、のさ〱とぞ渡しける。椎津隼人・鹿島・郡司以下の二百餘騎、喚いてさつと駈入り、亂れ合ひ散別れ、北へ捲り西へ靡け、馬の足を休めず、えいや聲を出して、半時ばかり戰ふ。互に引くなと氣を勵まし、爰を先途と攻合ひしかども、敵はさすがに大勢なり。新手を入變へて爰に圍み、二陣を進めて彼處に取込め、揉立てしかば、勢盡き氣を屈して、椎津は小手の外、草摺の邊三所突かれ、村上は左の面骨を右の鼻まで、切先深に切付けられて引退く。里見

左馬頭義弘・逸見山城守以下、强弓の精兵を四百餘騎、矢先を揃へて散々に射たりければ、小田原方より六百餘騎の精兵を出して、矢種を盡して射させたり。兩陣の射る矢、空に集りては、夏野に群る蜻蛉の如く、地に落つる有樣は、時雨に交る霙に似たり。鬨の聲、矢叫の音、山河に響き雲間に渡り、夥しとも愚なり。小弓の御曹司と御舍弟基賴、百七十騎を前後左右に立て、旗を進め楯を翳し、喚いて切つて懸り給ふ。北條氏綱之を見て、爰に深入するは、世の常の葉武者にあらず。よき大將と覺ゆるぞ。入立てゝ討取れやと下知せらる。伊東・朝倉・桑原・石卷の者共、兩方より挾み立て、眞中に取込め、火を散らして攻めければ、御曹司の召されたる馬の平首二太刀切られ、頻に跳ね上れば、下立ちて戰ふ所に、腋下・內甲・吹返の外れ二ヶ所突かれて、力撓み氣疲れて討たれ給へば、百七十騎の兵共、同じ枕に討死す。基賴は猶此迄も手も負はず、小長刀を以て敵を打拂ひ、後へ駈拔けて見給へば、御曹司は討たれて、御首は、敵の切先に貫かれて差上げたり。殘る兵も、皆討たれたりと覺えて、一人も打合ふものなく、基賴を目に蒐けて進みければ、何の爲にか、命を惜しみ身を

顧みん。志ある兵は、駈寄つて首を取れと呼はり、又取つて返し、大將の中へ打つて入り、駈廻り交り合ひ、彼處に顯れ此處に隱れ、須臾に變化して前後を破り、三軍に分身して萬卒に當る。其勢に蹴立てられ、小田原の大軍開き別れ、馬の足を立兼ねたり。只矢衾を作りて射落せとて、十方より差詰めて、散々に射ければ、馬の三づ草脇に、篦深に立ちたる矢を痛みて、乾にどうと伏しければ、基賴下立ちて、打合ひ薙伏せ、敵十三人を討取り、廿四人に手を負はせ、我身も薄手數多負ひければ、氣疲れ力衰へたり。山本兵庫助走せ寄つて引組み、上を下へ轉び合ひけるが、基賴終に組伏せられ、山本首を取つて、切先に貫き立上る。逸見入道は、義明の旗本に參りて申しけるは、味方の軍兵、數を盡して討死仕り候。其上先手の大將の、御馬印の見えず候。若し敵陣の中を割つて、裏へ駈通り給ひたるか。然らずば一定御討死かと覺えて候。いかさまにも味方の旗色惡しく、負軍になりて候。先づ御引取候て、重ねて兵を催し、今日の欝陶を散じ給へといひければ、大將義明大に怒つて宣ひけるは、味方の軍兵共、臆病故にぞ軍に負けつらめ。いで〳〵義明先駈して、强勢武勇の程を

顯し、汝等に見せんとて、赤地の錦の垂直に、桐の胴の裾金物打つたる唐綾縅の鎧着て、來國行の三尺三寸ありける面影といふ太刀に、二尺七寸の赤銅作りの重代の太刀を佩き添へ、龍頭の甲の緒を締め、法城寺の大長刀を、莖短かに掻込み、鬼月毛といふ名馬の太く逞しきに、御紋の梨地の鞍置かせ、紅の大總かけて打乘り、佐々木少府次郎以下の馬廻り廿四騎を揃へて駈出でらるゝ。彼の鬼月毛は、奥州の葛西殿より、六郡一の名馬なりとて、去年の秋參らせられしが、一の戸立の早馬、牛漢跳陵の逸物、進退自在にして手綱に從ふ。義明は元より究竟鍛錬、其妙を得給へる乘手にて、眞先駈けて敵陣に馳入り給へば、鐙の端にて蹴倒し乘倒され、突落し切落され、之を大將と見知りたりければ、前後左右より取籠め、我れ討取らんと攻寄せけれども、馬強くして踏み轉し、打物達者にして切拂へば、手負死人重なり伏して、面を向ふものはなし。義明は、本より武勇の勝れたるを頼みて、軍立大逸に、逃ぐる敵を追立て追立て、味方の兵も續かずして、駈隔りて、討たるゝと雖更に知らず。たゞ一人馳廻り、我身一人の軍をのみ、手柄と思へる計なり。小田原勢の中より、黑革の胴丸に鏈

足利義明戰死

錏(しころ)の甲を着し、四尺餘りの太刀を拔いて眞額に振翳し、安藤太郎と名乘つて、義明を目蒐けて打つて懸る。右兵衞佐殿は、あら物々しやとて、弓手の方に相つけ、開打(ひらきうち)に丁と打てば、甲の錏鍵をかけず首打落し、餘る太刀にて、左より懸る敵を、拂切(はらひきり)に三人まで薙伏せらる。其刀に胸を冷し、敵四方に逃げ散りたり。義明は小高き岡に打寄せて、暫く息を繼ぎ、續く味方を待ち給ふ。里見義弘以下の諸將は、大將の行方を見失ひ、深く駈入りて、北條氏綱の旗本に駈合せて、散々に戰ひ、僅に五十餘騎に討なされ、山際の道に懸り、筋違(すぢかひ)に落ちて行く。小田原勢の中に、關八州無雙の强弓と聞えし横井新介、今は越前守になされ、三浦の城代に居ゑ置かれしが、此度の軍に里見が勢と戰ひ、手の者共多く討たれ、安からず思ひし所に、大將義明を見參らせ、竊に馬より下りて、笠印を引隱し、畔を傳うて忍び寄りつゝ、三人張に十三束、忘るゝばかり引絞りてひようと放つ。義明の勢ひ懸りて控へられし鎧の旃檀の板をかけず射通し、矢先三寸計白みて出でたりければ、さしもの猛將なれども、此矢一筋に弱り給ひ、目昏れ心消えしかば、馬より飛下り太刀を杖に突き、立竦みてぞ死に給ふ。

横井卽ち靭を叩き聲を揚げて、敵の大將右兵衞佐殿をば越前守射止めたりやと呼はりければ、義明の馬廻聞付けて、三騎馳せ來り、橫井を討取らんと切つて懸る。橫井が同心小林平六左衞門馳せ來り、馬より飛下り、向ふ敵一騎、諸膝薙いで切り居ゑ、二人を追散らしける。其間に松田彌三郎一文字に驅寄せ、義明の首を取る。佐々木四郎・逸見八郎・佐野藤三・町野十郎以下の馬廻、深く攻入りて戰ひしが、大將討たれ給ふと聞きて、今は誰が爲に命をも惜むべき。大將の御死骸を枕とし、自害するより外の事あらじと驅寄する所に、逸見入道は、右の腕を打裂かれ、草摺に立つ所の矢、少々折かけて馳せ來り、如何に面々、爰にて自害し給はゞ、小弓の御所に殘し置き參らせし若君達を、誰かは隱し申さん。敢なく敵に生捕られ、憂目を見給はんこと、口惜しかるべく存ぜられずや。此度命を全うし、若君達を守立て、時節を待つ謀を廻らし、先君の恨を報じ奉られ候へと、强く諫めてぞ小弓に返しける。軈て御寶物共取認め、御殿に火をかけ、若君達の御供申して、泣々房州へぞ落行きける。逸見山城守入道は、大將義明の死骸の邊に立歸り、此は小弓の御所の侍逸見山城守入道な

り。主君の御供申さん爲、今爰に控へたり。我と思はん人々は、首取つて高名にせよとぞ呼はりける。小田原勢山中修理亮、郎等十七八騎にて打つて懸り、入道を討取りけり。彼の義明は、兩總州に威を振ひ、諸人蛇蝎の毒を恐れ、萬民狐狼の害を歎きしに、忽に亡びて、其跡永く斷絶す。氏綱武功の至れる所なりとて、諸將諸士之を恐れて、皆其幕下に從ひけり。

五　鶴岡八幡宮修造

小弓の御所は大家といひ、義明は剛强の猛將なり。たとひ軍に打勝つといふとも、年月を重ね人數を損じ、手痛き合戰幾度にも及ばんと、小田原勢倦(あぐ)みて思ひ煩ひける所に、案の外なる勝軍して、一時に小弓を打亡しける事、是れ偏に氏綱の智謀人に勝れ、武勇他に異なる故なりとは申し乍ら、豫てより、佛神の冥利を賴み、樣々の立願とりどりの祈念、心も言葉も及ばれず。既に本意を遂げらるゝ事、諸神諸佛の擁護に依るものなり。且うは其願を果さんが爲、且うは子孫の武運をも祈らんが爲

に、鶴岡の八幡宮を造營せらる。去ぬる年、安房の里見義弘、兵船數十艘にて鎌倉に押渡り、神社佛閣に打入りて、神物佛物を犯し、民屋を追捕し、資財を奪ひける事、甚だ法に過ぎたり。靈神怒をなすときんば、災害岐に滿つといへり。果して其罪一人に歸して、大將義明滅亡し給ふ。運の盡とはいひ乍ら、神罰當りける故とぞ、人皆唇を返して沙汰しける。殊更其折柄、源家宗廟の鶴ヶ岡を破却し、八幡宮の寶藏を開き、種々の神寶、數を盡して犯し取りたり。古今未聞の狼藉、前代無類の惡行なり。社僧は路を晦まして逃亡し、祝部は身を隱して蟄居す。是に依つて神樂の音は、峯の松風に讓り、燈明の光を、曉の皎月に借り、白幣帛は御橋に廢れ、朱の玉垣は倒れて、宮殿荒に續き、幽庭露繁く、自ら詣で來る人も稀なり。北條氏綱、深く神慮の威德を忝うして、此の荒廢の危傾を歎き、鶴岡八幡宮を修造せらる。本宮・神宮寺・若宮・辨才天の社、白旗明神、鐘樓・總門・廻廊・瑞籬・石橋を始めて、金銀を鏤め珠玉を飾り、檐牙の構、善盡し美盡し、成風の功作、數月の經營、既に事なつて願望を遂げらる。綺麗嚴淨の裝、頗る往初に越えたりと雖、人民の煩、國家の費を省き給へば、

神感誠に納受の御眦をや廻らし給ひけん、事故なく成就して、北條家の武威、日を追うて盛なり。

六　北條氏綱逝去

天文十年夏の頃より、北條左京大夫氏綱は、不豫のことおはしけり。醫王善逝の誓約も、祈るに其驗なく、華陀蒼公が靈藥も、施すに功を失ひ、次第々々に重くなつて、同七月十九日、終に閻浮白日の下を辭して、冥路黄泉の巷に赴きたまふ。一族門葉の愁歎、譜第臣妾の悲傷、誠に理に過ぎたり。湯本の早雲寺に葬送して、夜來數片の煙に化し、靈骨を拾うて、墳墓一丘の主となし、遺言に依つて畫像に寫す。其さま俗體顏相にして、白衣の上に掛羅を懸け、物すさまじく書きたり。春松院殿快翁活公居士とぞ號しける。中陰七々の作善、日別三時の勤行、聲更に絶えず。果の日に當つて。諸宗の僧を請じて、一日頓寫に、一千部の法華經を供養し、氏康自筆の願文に、青蘚露滋墳墓地、丹楓霜漂塔臺邊、秋風萬箇曳愁、光陰數旬添悲とぞ書かれける。

導師懸河の辯を吐きて、數刻深法の理を述べられしかば、一門舊臣は申すに及ばず、簾中の女房達に至る迄、歡喜の涙を流し、袖を濕らさぬ人はなし。

七　北條氏康鶴岡八幡大鳥居造立供養

北條左京大夫氏康は、亡父氏綱の喪に居て、愁歎の色深く、微に引籠り、國家の仕置を止められしかば、小田原の中、何となく潜りて、物の音を上ぐる人もなし。諸方の敵、此の弊に乘つて、謀り窺ふ事もやあるべきと、家老の舊臣譜代の郎從は、手を握り胸を苦しめけれども、年頃の威風益仰ぎ、城内の諸士一味して、固く守り嚴しく治めしかば、敢て騷しき事もなし。かくて繫がぬ光陰なれば、月日重なり年も改まり、氏康既に評定場へ立出で給へば、家中の上下喜ぶこと限なし。先考氏綱、鶴岡八幡宮を修造し、宮社樓殿よりして門墻廻廊に至る迄、嚴淨華麗を盡して、作り磨かれしかども、猶未だ遺願あり。是に依つて愈武運の榮を祈り、彼の遺言をも果さんが爲に、鶴岡八幡宮の大鳥居を、由井の濱に造立せらる。天文十一年四月十二日に落慶し、

先例に任せ、舊記に依つて、供養の儀式を執行はる。鎌倉の僧侶に仰せて、一七日の中、千返陀羅尼を滿せられ、供養の日に至つては、南部の七大寺、高野・根來の大衆、北嶺・園城寺・槇尾の僧を請じ下され、鎌倉には五山の禪侶、雪下の院家衆、極樂寺・稱名寺律僧を集めて、一切經をぞ轉讀せられける。般々たる梵音は、本地三身の聽に達し、玲々たる鈴の聲は、垂迹五能の化を助くらんと覺えて、見聞の緇素、隨喜の袖をぞ絞りける。金銀の幣帛・太刀・長刀・神馬等に至る迄、種々の寶物、數を盡して進せらる。僧衆の布施には、金襴・唐綾の袈裟・緞子・紋紗の座具・練絹・生絹・布帛等、其程々に隨ひて、金銀錢に至る迄、山の如く積上げ、配り渡し給ひけり。近代比類なき大善根の營、靈神感應し給ひけん、斯る亂逆の世の中に、事故なく大法會を遂げられ、多年の願望一時に達せりと、氏康喜悅の眉を開き、小田原に下向せられけり。

八　北條左衞門黃八幡旗附公方晴氏管領一味

駿州長久保の城は、今川家の領知なりけるを、北條氏綱犯し取りて、人數を籠め置き

上杉憲政北條氏綱對陣

たり。國司今川刑部大輔氏親大に憤り、關東山內管領上杉兵部大輔憲政と一味して、駿河勢旣に長久保の城を圍みて取ると聞えしかば、北條左京大夫氏康大に驚き、小田原に有合ふ軍勢を、長久保の城に遣して、加勢すべき評定をいたさるゝ所に、兩上杉より人數を出し、長久保の寄手に力を合せ、後詰の爲に遣さる。先づ武州川越の城を攻落すべしとて、東八ヶ國の勢を催す。都合八萬餘騎、天文十四年九月廿六日軍立し、上杉憲政は砂窪といふ所に旗を樹てられ、先勢旣に進みて、川越の城に取懸け、稻麻の如く圍みたり。城の大將は北條左衞門大夫綱成、其始は久島左衞門と號せし人なり。駿豆甲相の國境、每度の合戰に手柄を顯し、小を以て大に勝ち、危を踏んで急を伐ち、萬死を出でて一生を保ち、無二の忠義を以て北條家に仕へ、一方の大將として、舊功の勞臣なり。是に依つて久島の名字を改め、直に北條の稱號を給はり、左衞門大夫になされ、後には上總介にぞ補せられける。黃染の練絹を四方にして、八幡の二字を書きて指物とし、軍の時は、旌を上げて眞先に進み、味方を勇めては、勝だぞ〳〵といふ人なり。諸軍聲を合せては、勝つたり〳〵といふ儘に、果して敵

に切勝つて、度々の高名比類なく、世の人、之を黄八幡とぞ名付けたり。聞ゆる大剛の兵、豆相兩國の勢、僅に三千餘騎にて城に籠り、寄手八萬餘騎を引受け、晝夜朝暮に防ぎ戰へども、只寄手のみ損じて、城は更に氣を撓めず。其頃古河の公方左兵衛督晴氏は、北條氏康には、妹壻にて御緣者なり。上杉憲政は、譜代舊臣の家なりければ、雙方偏頗の御志あるべき事ならねば、たゞ無事の御扱を催さるゝ所に、憲政より使者を參らせ、此度管領家に御力を合され、川越に御旗を出し、氏康を御退治あらば、公方を再び鎌倉に居ゑ奉り、上杉元の如く管領を以て、主君と仰ぎ奉らば、枯れたる樹再び榮え、曝せる尸重ねて宍づき、其上靜治の風に歸り、家運淳德の地に開け候はん。自他の嘉幸、何事か之に如かんとぞ言上せられける。氏康又使を以て申入れられしは、上杉如何に言上すとも、更に御承引あるべからず。氏康唯今何れの科あつてか、當家を御退治なさるべきや。其上此度の合戰は、味方勝ち候とも、敵方勝ち候とも、皆公方の御家人として、御下知を受くる事にて候へば、一方贔屓の御加勢は、謂なき御沙汰なるべき由、細々と言上せらる。晴氏聞き給ひて、上杉御合力の事は、

なかるべきとぞ定まりける。氏康大に喜び、軈て後詰の勢を出して、憲政を追落さんと評定あり。難波田彈正入道・小野因幡守兩人、竊に古河殿に參りて訴へ申しけるは、此度北條氏康言上申さるゝに付きて、管領上杉に御合力あるべき由御許容候事、甚以て然るべからず候。抑公方管領の補職は、前代尊氏將軍より以來、代々君臣の禮義正しくして、永々魚水の忠德を守り、關東八州に棟梁として、諸將諸士頭を傾け、國家政道の則に從ひ候所に、長春院殿持氏公の御時に、公方管領旣に君臣の道を失ひ、關東の諸國亂逆して、萬民安堵の思なく、胸を冷し魂を消すこと年久し。適〻天運回復して、君臣今御合體に及び、管領漸く祕計を廻らし、公方を守立て參らせん爲に、關東靜治の大義を以て、旗を揚げられ候上は、早く御動座を促がし、上杉に御加勢あるべく候。北條氏康は御緣者なれば、御不便に思召す事、誠に餘義なくは存候へ共、祖父新九郎入道早雲より、北條家今三代に至り、豆相武州の間を討取り、國郡を手に屬すと雖、何れの地をか、公方へ奉りし所の候や。己が威勢の募るに任せて、終には公方を滅し管領を亡し、關八州を治めんと謀り候事、世以て諸人の知る所な

り、國家の蟊賊政治の蠧害は、北條家にて候。此度彼を御退治ありて世を保たせ給ひ、多年舊勢の御家人等にも、安堵の忠賞行はれ、泰山の安きに樂ましめ給へと、頻に申入れたりければ、公方晴氏、實にもと思ひ給ひて、上杉合力の議定ありて、軍勢を催されける。

九　川越城氏康後詰附久島辨千代忠義并公方管領敗軍

さる程に古河の公方晴氏は、北條氏康使節の約を變じて、上杉憲政に一味の志を立てられ、關東分國の軍勢を率して、同十月廿七日、川越に馬を出され、城中兵糧運送の通路を塞ぎ、年を越えて在陣し給ひければ、城中に糧乏しく、旣に飢に臨まんとす。とても死すべき我等が命を、速に城より打て出で、華やかなる軍して、名を後代に止むべしと、思切つたる兵共なれば、少しも怯れたる色はなし。城の大將左衛門大夫は、軍勢を勇めていふやう、今暫く待ち給へ。氏康は是れ智慮謀略の名將なり。

いかさま近き程には、城を救ふの手立あるべしとて、攻寄る敵をぞ防ぎける。氏康は手を跪いて、左衞門大夫が攻落されざる間に、急ぎ後詰の援兵を以て、上杉を追落さんと謀られしかども、敵は八萬餘騎、之に味方を較ぶれば、巨海の一滴九牛が一毛なり。世の常の軍しては、打散らすこと難かるべし。此祕計を待たず、城中悚へ兼ねて、打つて出なば詮なし。愈堅固に守りて後詰を待つべしと、城中に知らせたく思へども、通路容易からず。如何せんと案じ煩ひける所に、左衞門大夫が舍弟久島辨千代とて、生年十七歲なりけるが、容儀美麗にして情の色深く、而も武勇の意、兄にも劣るまじければ、氏康限なく愛憐し給ひ、側近く召仕ひて、祕藏のものに思はれしが、進み出でゝ申しけるは、此事城中へ知らせざらんは、由々しき御大事なり。さればとて如何なる人も、大軍の中、左右なくは通り給はじ。某御許されを蒙り馳せ向ひ、如何にも敵陣を謀り、城に馳入りて、告げ知らせ候べし。若し餘人を遣され、敵の爲に生捕られ、ありの儘に白狀する事もや候べき。辨千代に於ては、たとひ身を醢にし骨を粉に碎るゝとも、敵に向ひて語りはいたすまじと申請けて、只一騎、敵の陣中

を靜に打つて通りしに、忠義の誠を感じて、軍神摩利支天の、擁護をやなし給ひけん、見咎るもの一人もなかりけり。斯くて大手の門前に、一散駈けて馳せ付けたり。寄手は驚き立ちて、それといひけれども、打止むべき隙もなし。城兵木村平藏といふもの、柵際にありしが、能く見知りてあれば、辨千代殿にてはおはしけり。あな冥加强くも危き所を免れて、此迄來り給ふものかなとて、急ぎ門に引入れたり。龍の髭を撫で、虎の尾を踏んで咬はれざるよりも、猶危しとは此事なるべし。舍兄左衞門大夫に對面して、大將氏康の謀を、細々と申しければ、左衞門大夫を始として、伊豆・相模の兵共、請雨の場に雲渦卷き、闇夜の道に燈を見付けたる心地して、機を直し力を得て、喜び勇むこと斜ならず。氏康は小田原・長久保・三浦の城に、五百騎三百騎を分け遣し、駈廻りの手勢、僅に八千餘騎には過ぎず。先づ武州砂窪に打出で、寄手の陣を見渡せば、公方管領兩旗の軍勢、沓の子を打ちたる如く、山河萬里に充ち滿ちて、夥しともいふ計なし。然れども氏康は、大敵を見て恐れず、小敵を見て侮らずといふ、世祖光武の心を、我物に得たる猛將なれば、之を事ともせず、味方の諸軍に向ひて

申されけるやう、合戰の勝負は、勢の多少に依らず、兵の志を一にする所にあり、憲政柔弱の大將として、近年數度の軍に、氏康が太刀風を、さぞ身に泌みて覺ゆらん。運は天に在り、命は義に依つて輕し。我れ一擧の謀を以て、此大軍を追散さらんこと掌の內に在りとて、諏訪左馬助を召されて、公方晴氏へ使節を以て申入れられけるは、川越籠城の者共、兵糧盡き果て勢力撓み、今旣に飢に臨み候。願はくは御愍を垂れて、命ばかりを助け給はゞ、城を開退き、領地を進上いたすべし。氏康永々御旗本に屬して御下知を守り、忠節を勵まし候はんと、再三歎き申されしかども、晴氏公は、中中許容の色も見え給はず。汝が參らせずとも、明日は旣に城を攻干し、領地をば御支配あるべし。豆相兩國の軍勢三千人、立籠ると聞召す。一々に首を切かけなば、氏康定めし小田原にも怺へ難かるべし。若し一人も助け置きなば、後の災たるべければ、只皆討取つて、終には氏康をも退治すべきなりと仰せられたり。氏康又上杉方の諸將中に、常陸國の住人小田刑部少輔政治が陣代、菅谷隱岐守といふものを賴みて、憲政へ申越されけるは、城の大將北條左衞門大夫が命をだに助け給はゞ、川越を

ば開け渡し、上杉・北條の兩家、卽ち無事の盟約をなし、諸共に公方を守立て候べし。氏康これ迄發向せしこと、更に軍の爲にあらず。味方の無勢、爭か公方管領兩旗の大勢に敵對すべき。唯枉げて御許されを蒙らんとぞ、樣々に詫言せられけり。菅谷此由披露す。上杉勢之を聞きて、さればこそ、氏康が叶ひ難きに弱りて、怠狀をいたすぞや。耳にも聞入るべからず。明日は攻干して川越を取返し、其勢に小田原を攻破り、太平一統の世となるべきなりとて、つやつや返事にも及ばず。此往來にとかうせし間、軍もなくて日既に暮れたり。氏康思の儘に敵を謀り、夜に入りければ、笠原越前守を敵陣に遣し、忍を付けて、事の體を伺はせければ、上杉家の軍勢共、打解けたる有樣、陣屋々々の用心も不沙汰にして、帶紐を解き甲を枕にし、高鼾かくもあり。氏康は定めて明日明後日には、小田原へ逃げてぞ行くべき。川越を攻干して後、續いて小田原をも乘取るべしと、物語するものもあり。合戰を心に懸ける兵は、少なう見えて候とぞ申しける。時は天文十五年四月廿日の夜、まだ宵過ぐる程、月もやうやう山の端に、出でてなりし空の景色、曇りていとゞ定かならず。小田原勢、態

と松明を持たせず、紙を切りて胴肩衣に作り、鎧の上に懸けさせ、合言葉を定め、重き指物馬鎧を懸くべからず。敵の首をば打捨にして、取ること勿れ。あるかとせば後に馳せ廻り、八方に變化して、一所に寄るなと下知し給ひ、子の刻計に移りしかば、時分はよきぞ打立てやとて、砂窪の陣に、どつと喚いて駈入りたり。管領方には、氏康を侮りて、思も寄らず油斷して、寢耳に水の入りたる如くに周章ふためき、太刀よ長刀よと犇く間に、小田原勢、四方八面に切つて廻る。前後左右に駈散らし、打伏せ薙倒しければ、立ちも上らで、討たるゝ者數知らず。陣中上を下に返して、或は小手をさして、鎧を着る暇なく、或は鎧一縮して、甲を着る隙なく、大童になつて懸合せ、馬離れ人騷ぎ、何れを敵とも見分くる事なく、同士討をするも多かりけり。大將氏康を始め大道寺・印浪・荒川・諏訪・橋本以下の兵、鑓を投入れ〳〵、十文字に駈破り、巴の字に追廻し、天地轟き山河動き、千變萬化して十方に分身す。此處に鬨を作り彼處に馳合ひ、喚き叫びて一處に溜らず。其勢充ち滿ちて、幾千萬騎ありとも知り難し。管領上杉憲政の旗下崩れ立ちければ、難波田彈正左衞門入道・同子息隼人佐・小野因

上杉憲政敗軍

足利晴氏敗軍

幡守・本間近江守・倉賀野三河守を始として、究竟の侍廿餘人、同じ枕に討死す。憲政叶はじと東を指して落ち給へば、小田原勝に乘つて、追懸け〳〵討取りけるに、たゞ我れ先にと逃げ落つれども、一人も返し合する兵はなし。多目周防守は氏康の陣中にありて、退螺を吹立てしかば、諸軍勢皆返し、一所にぞ集りける。周防守申しけるは、今夜の軍、不思議に味方の勝利を得給ひたり。敵の八萬餘騎に味方の八千餘騎、僅に十分が一を以て追落すこと、古今其例少なし。敵若し大返しに取つて返さば、味方の小勢、而も疲れて難義に及ぶべし。夜既に曉なり。明けなば、松山の城に入りて、今日の疲を休息すべしとて、四方を馳せ廻り、士卒の機を勵ます所に、川越の城代北條左衞門大夫、城兵三千餘騎、一同に切つて出でつゝ、公方晴氏の陣を追散らせば、一陣破れて殘黨全からず、一支も支へず、右往左往に亂れ傾きて落ちて行きければ、上杉譜代の家臣大石源左衞門・藤田右衞門佐以下の輩、悉く旗を卷き甲を脫いで、氏康に降參す。氏康愈大軍になつて、龍の青雲に翔り、虎の深林に踦るが如くなり。氏康は左衞門大夫に對面して、今度川越の籠城に於て、一心の智謀に依つて、剛

敵を退治する事、軍功無雙の働なりとて、忠戰の苦勞を感謝せらる。夜既に明けゝれば、討取る所の首三千餘を切かけ、勝鬨を行ひて、松山の城に入りて、暫く息をぞ繼がれける。

十　公方晴氏與二北條一手切附管領憲政行跡

北條左京大夫氏康は、一擧の智謀に大軍を追退け、武威愈雲漢に輝き、權勢益國邑に滿ちて、靡かぬ草木もなかりけり。今度の軍、不慮の天運に依つて勝利を得たり。是れ偏に佛神の光德にあらずば、爭か此大功を遂ぐべきや。古河公方晴氏、忽ち一家の好を棄てゝ、百世の約を變じ、憲政に與力して、氏康を退治せんとし給ふ。是れ更に武道篤實の行跡にあらず。凡鄙庸婦の曲情たり。斯る不覺の人に引合ひて下知を待たば、却て災害の本なるべし。親族の緣を斷ち、從類の手切をいたさんには、中々安かるべしとて、一通の狀を認め、輕部豐前守を使として、古河の公方へ遣されけり。古河殿には、思の外なる敗績に、人數多く失ひ、後度の災を案じ煩ひ給ふの

やならず、北條家に對して面目もなき有樣、中々御返事にも及ばず、打潛りたる御氣色、淺ましき迄にぞ見えにける。上杉憲政は、立足もなく敗北して、上州に歸りて、平井の城へ入り給ひけれ共、勢磷ぎ德薄くなつて、近國の諸將諸士、今迄附從ひし輩、皆心を變じて、小田原に內通する者多かりけり。されども太田美濃守は、猶岩突の城に居て、江戶・川越に人數を懸け、競合の軍止む時なし。其外忍の成田下總守・新田・長尾・由良・深谷・安中・山上・和田・倉賀野・長野信濃守以下の大名、數千騎の軍兵を集めて、上杉の下知に從ひ、一度も心を變ぜざりければ、度々の軍に打負け乍らも、國をば終に取られずして、堅固に保ちたる故にこそ、流石に上杉家を、俄に押倒すことも叶はず。此時憲政猶も身の不義を顧みて、德を修め道を行はれなば、家運又立直す事もあるべきに、幼稚の時、父管領憲房に後れ、我儘に成人して、假にも民の憂を知らず、かけても人の嘲を顧みず、大に奢を極め、甚だ美を好み、色に淫し酒に耽り、國家の政道は夢にも聞入れ給はず。譜代の老臣大石・小幡・長尾・白倉の四家老をば、遠く退けて隔てられ、被官の郎從には、目に見ながら愛もなく、言葉をだにか

けられず。菅野大膳・上原兵庫とて、佞奸邪欲の者出頭して、政務を己が儘に行ひ、諛うて賂を入るゝをば、憲政に能くいひなし、功なきに高知を與へ、忠なきに大祿を授け、又若し忠功ある者は、諛ふ事なきを以て、憲政に取成せず。勸賞なければ恨を含み、總じて人を知る才もなく、心を計る智もなし。是に依つて上杉の家風衰廢に及び、強きは弱きを貪り、小なるは大に押され、國中に黨を立つるもの、主を欺き掟を破り、雅意に任せて下知を守らず。度々の戰に向ふ時も、我れ一大事と思ふは稀にして、忠を忘れ義を失して、每度汚き後を取ると雖、之を恥とも思ふことなし。憲政一人の不義より起りて、國家の上下斯の如し。上杉家の滅亡近きにあるべしと、心ある人は、胸を抑へ眉を顰めて歎き合へり。

十一　笛吹峠軍附長野信濃守意見

管領上杉の家風日を追うて衰へ、諸士皆義を失ひ恥を忘れ、世間の褒貶、他人の好惡、人の噂を取沙汰して、菅野・上原に諛ひ、功もなく忠もなくして、たゞ立身を望み

ける程に、何をか氣に入りて、能き者なりといはれまほしく思ひける折節、甲州浪人のいひはやらかすを聞きて評定しけるやう、甲州の大膳大夫晴信は、去ぬる春三月に、信州戸石の合戰に、村上義淸に打負け、股肱の侍甘利備前守・横田彦十郎以下一千餘騎は討死し、其外手負三千餘人に及べり。甲府は、之に機(しほ)を付けて、他國より押懸けられんことを恐れて、安き心もなし。板垣・飯富・山田には人數を添へて、木曾・小笠原・村上の抑として、餘所に遣し置きたり。郡内の小山田左兵衞・栗原左衞門・典廐穴山の輩あれども、此等は武勇智謀の働は、露ばかりもなき者共なり。又此頃大將晴信は、重病に伏して存命不定なり。武田一家は手を握り固唾を呑みて、案じ煩ふ時節なれば、强敵を討つには、其弊(つひえ)に乘るに如かずといふは、今此時なり。當家人數を出され、信州佐久郡より、甲州へ働き入りて、武田を打干し、御手に屬せらるれば、上杉家の威光大に輝き、北條家恐をなして、首をも出し候まじと申しければ、物にも覺えぬ若き人々は、是れ天の武田を亡す時至れり。此弊に乘つて攻め取らば、何の手痛き事かあらん。管領家早く思召立ち給へかし。我等忠勤の働して、難なく討

取り參らすべしとぞ同じける。上野國箕輪の城主長野信濃守申しけるは、各遊興の餘り、筋なき事を企み出して、仰せらるゝものかな。此頃上杉家の弓矢衰へ、國家の政道正理に惑ひ、奸曲邪欲の輩時を得て、文武賢明の人は德を失し、上に奢を極め下に費(つひえ)を辨へず。是に依つて北條氏康に脅され、城地を掠め取らるゝと雖、忠戰の功ある人は、勸賞にも及ばず、弱兵と雖、諛ふものは恩顧に募る。義士、内に怨み、賊寇、外に窺ふは、國家衰廢の根なりといへり。今若し北條氏康勢ひ懸り、不意に來りたらん時は、手を拱きて憤を報じ、弱兵は、足を跳にして逃落つべし。薄氷を踏んで、龍の髭を撫づるに似、雷霆を戴きて、刃の上を渡る時節なれば、各自國の用心をこそ、心にも懸けらるべけれ。故なき他國に手を指して軍を起し、若し不覺の後(おくれ)を取り候はば、悔ゆとも返るべからず。彼の戸石合戰に臆病を構へ、晴信に追放せられ、當國へ浪人せし者共、腰拔拂ひに會うたる恥をば隱して、甲州を惡しくいひなす言葉を信じて、無用の企然るべからず。長野に於ては、此事の同心、えこそ致すまじきにて候とて、座を立退きしかば、菅野・上原いと不興して、長野が例の垣破(かきやぶり)に、人を計らぬ

振舞かなと申しければ、小菅新之丞と申すもの、末座にありしが、菅野・上原に諛ひ、氣を取る爲にや申しけん、長野は物事遠慮過ぎて、此頃老耄せられし故にぞ、敵の爲に怯神の付きたりと覺え候。一向御心に懸けらるべからずといひけるを、憲政物越に聞き給ひ、障子を開き立出で、よし〳〵長野がなければ、軍のならぬにもあらず。一味同意の輩ばかり甲州に働き、忠戰の功を顯し、信濃守が口を減らせとて、倉停六郎秀景を大將とし、上田又二郎・三田五郎左衞門、此等を宗徒の兵として、小石・白口井・深谷・前橋・新田・松枝・和田・沼田・安中・中根・白倉都合十八組二萬餘騎、家々の旗を指し、思ひ〳〵の馬物具、綺羅を磨きて出立ち、天文十五年十月上旬に、信州上野の境なる、笛吹峠に押寄せたり。甲州方には、去ぬる九月の初つ方より、晴信瘧病に冒され、今に落ちざりければ、家中潛みてありける所に、眞田彈正飛脚を以て注進す。相木・葦田早馬を立てゝ告げ來る。甲府の地下町人原、色を失ひ騷ぎ立ちて、資財雜具を取除け妻子を落し、周章ふためくこと限なし。武田晴信少しも驚く色なく、靜に手分をぞせられける。諏訪郡の番手には、典廐穴山に、旗本の足輕大將四頭

上杉憲政武田晴信を攻む

を添へて差遣はし、笛吹峠へは、板垣信形を大將として、郡内小山田左兵衞佐・栗原左衞門尉・日向大和守・小宮山丹後守・尾會・勝沼・逸見・南部・相木・葦田を差添へ、十月四日甲府を立ちて、同じき六日の巳の刻に、笛吹峠に押懸る。關東勢五千餘騎は、峠の此方に陣を取り、殘る軍兵は、坂の彼方に差間へて、備を立てんと犇く所へ、大將板垣眞先に進み、鬨をどつと作りければ、寄手も鬨を合せたり。武田方足輕を出し、散々に射させて、弱々と引取りしかば、大逸なる關東勢、拔連れて坂を下りに打つて懸る。板垣が二百餘騎、一同に喚いて懸くれば、乘亂され切崩され、峠の上に切上げんと、しどろになり、後なる味方を引付けて、新手に入變らんとすれども、隙をもあらせず、追倒し切伏せ突立て、手に〳〵首を取る。關東勢一萬五千餘騎、押合ひ込合ひ、我れ先にと、峠の彼方へ引取らんと、周章騷ぐ計にて、敵に向うて打合はんとする者なし。關東勢の中より、深谷内匠といふもの、小櫻を黃に返したる鎧に、水色の四方絹に、大文字書きたる指物差し、大長刀を搔込み、引立つる味方に向ひ、汚き面々の有樣かな。あれ程の小勢に捲り立てられ、逃るといふ事やある。返せや返

せやと呼はりけれども、軍勢耳にも聞入れず、ひた引に引上ぐる。深谷たゞ一騎踏み止まり、惡き奴原かな。いで己等が目に物見せんとて、長刀の柄を取延べ、十七八人薙伏せければ、深谷一人に防がれて、甲州方少し白みて見えしかども、引返す味方もなければ、今は此迄ぞとて、しづ〳〵と引上ぐる。板垣態と太鼓を靜めて追つて上る。關東勢は、引くともなく逃ぐるともなく峠を打越し、麓の後陣に一つになりて、備を立直したりければ、板垣さすがに小勢なれば、敵を追棄てゝ引返し、打取る所の首一千二百の書立を以て、午の下刻に勝鬨を執行ひ、陣を固めて、人馬の息をぞ休めける。

十二　武田晴信笛吹峠後度の軍

武田大膳大夫晴信は、板垣小勢にして大軍に向ひしかば、たとひ味方勝利を取るとも、始終頼み難かるべし。上杉家の弱兵等、當國に取懸くること、我を侮る故なれば、生けて故郷に返すならば、我鋒先を鈍しとや思はん。病氣はさもあらばあれ、馳

向ひて手痛く當り、重ねて當國へ頭を差出さすまじとて、十月五日の辰の刻に甲府を打立ちて、笛吹峠に差向はる。相從ふ輩は、旗本には馬場民部・淺利式部・內藤修理・秋山伯耆守・原加賀守・諸角豐後守、足輕大將には、原美濃守・小幡山城守・安島三右衞門・曾禰七郞右衞門・山本勘介、其外近習外樣都合四千五百餘騎、明る六日の未の刻ばかりに、輕井澤にぞ着かれける。上杉方の軍兵は、板垣に打負けしかども、大軍といひ、名を知られたる者共、長野信濃守が言葉にも恥ぢよかし。あれ程の小勢に追立てられ、敗北して國に歸り、人々に笑はれん其の面目をば、何處にて雪くべき。いかにもして板垣信形が首を取つて、國の土產とすべきなりとて、猶二の合戰を待ち、一萬五千餘騎打込みにして、峠の此方にぞ備へたり。飯富兵部・小山田備中・眞田彈正は、居城を出でて馳せ來り、板垣が陣に加はる。晴信既に向はれしかば、存知の外の幸かなと、諸軍機を得て、勇み喜ぶこと限なし。其の日の未の下刻に及びて、人數を押詰め、敵味方鬨の聲を合せ、板垣・飯富・眞田・小山田、勢に乘つて打つて懸る。關東勢少しも見繕はず、駈合せて攻め戰ふ。打合ひ切合ひ喚き叫ぶ有樣、

憲政敗軍

龍蛇雲を卷き、虎豹林を出づるが如し。武田方無二無三に突懸り、打てども拂へども物ともせず、手負死人を乘越え〳〵攻上る。上杉方辟易し、引色になりて見えければ、板垣眞先に進み、旄を上げて味方を勇め、懸れ〳〵と下知する所に、上杉方の兵白倉五郎左衞門といふものが放つ矢に、板垣が馬の太腹、箆深に射させ、馬は頻に跳ね上りしかば、信形下立ちたり。關東方の武者七騎、隙間もなく馳寄する。板垣太刀を拔いて切拂ふ。既に危く見えけるを、眞田彈正馳せ來り、二人を薙伏せ三人に手を負はせ、猶進む敵を突倒し、抑へて首を取つたりけり。眞田討たすな續けやとて、六十餘騎突いて懸れば、上杉方百騎計り、新手を變へて亂れ合ひ、散々に戰ふ。武田勢は、常の內平に熟せし故、進退節に當り神氣撓まず、死を以て恐れず、一以て千に當る。猛威宛ら秋の霜よりも凄じく、强勢又疾雷の激するが如くなり。關東方の軍兵、暫は怺へて挑みけるが、終に崩れて引上ぐる。武田勢勝に乘つて、鬨の聲を作りかけ、峠を上りに攻付けしかば、上杉方人雪崩をつきて、我れ先にと落ちて行く。未の刻より申酉の終まで、三時ばかりの軍に、關東勢四千三百餘人討たれたり。武田晴

信勝関行ひ、輕井澤に野陣を張りて、三日逗留して、同十日、甲府に凱陣せられけり。

十三　長尾伊立入道智慮附菅野・上原奢侈

上杉勢は散々に打負け、馬に離れ物具棄て、這々平井の城に落歸る。見苦しかりける有樣なり。斯くても命生きて歸りしは、面目なしといひ乍ら、せめて暫く引籠り、世の嘲を忍び、人の笑を、空知らず顏にてもあれかし。討たれたる者共が、老いたる親妻子從類、家々に歎き悲み泣叫ぶ聲、耳に充てり。或は寺に行きて、泣々孝養作善を營み、或は其妻、世を離れて尼になり、亡父の菩提を訪ふもあり。又は逃げ歸り、人に笑はれて、恥かしさの餘りに、心に起らぬ遁世して、他國を指して行くもあり。淺ましかりける事共なり。平井の城中は、殊の外寂び返り、地下百姓に至る迄、此後は如何なふ事か出來らんと、足を爪立て手を握り、恐をなし膽を焦す。是も偏に菅野大膳・上原兵庫が、無用の事を申勸め參らせ、憲政の智惠淺くおはします故に、大なる後を取り、國弊え民疲れて、破れを招く端となりける事よと、貴賤唇を返し、老若

爪彈して沙汰しけり。長尾伊豆入道は、山内家老の中に、殊更武略智謀の重臣なり。一年北條家、武威盛に成立つ初、倩案じ窺ふに、上杉腹心の蠧賊となるべきは、北條家に過ぎたるはなし。後に必ず大なる憂を抱くべし。爝火消さずば、炎々を如何といふ事あり。早く御馬を出され退治あるべしと、度々諫め申されしに、菅野・上原之を聞きて、長尾入道には、如何なる畏神が附きてか、北條家を恐れられ候やらん。あれ程のものを亡さんは、虎の兎を搏つよりも易かりなん。たゞ味方の大身衆に、恩顧を忝くし給ふこそ、國家靜治の計らひにては候へとて、人を取立て、知行を分け與へ、武にもあらず文にもあらず、忠功もなきもの、俄に大身に經上り、舊老故實の侍は、外樣になりて荒めらる。長尾入道、猶も北條家を恐れ思ふこと骨に徹り、本間近江守・井俣左近大夫とて、才智利根の侍兩人に心を入れて、管領の御勘當を蒙りたりと披露し、北條家に行きて大道寺を賴み、氏康に奉公する事四年にして、上杉家に歸り、入道に語りけるは、北條氏康の行跡、仁道篤實にして、奢を戒め費を省き、民を撫で士を惠み、罪科あるをも宥め免し、理を明かにして罰を輕くし、忠義ある者には、

上杉家の勢威衰ふ

時日を移さず勸賞し給ふ。廉直利融にして禮讓猥ならず、奉行頭人に奸曲なく、上下一味して、たゞ魚水の如し。是に依つて上杉家の大身中身、百人の内九十人は、北條家の風儀を慕ひ、內通音信して心を寄せ候と、殘る所なく告げ知らせければ、長尾入道深く思ひ遠く謀り、上杉の家風、立直さんとせられける所に、菅野・上原嘲笑五ヶ條を書きて、憲政に諫言し、長尾入道老耄して、國政に非道多しといひ習はし、本間・井俣奸曲にして、君を誹り他を侮り、北條を賞めて上杉を落しむ。柱を食む蠹害、影を射る含沙なりとて、本間を外樣に突出し、井俣をば鴆毒を以て殺し、當家の大身に、無實の讒を構へし天罰當りて、頓死せりと披露す。北條家に內通せし人々は、菅野・上原に賂を入れ、遊女を進め酒宴に長じ、今日は十炷香の會、明日は茶湯の席とて、日每に會合し、古今の奇物を集め、水陸の珍饈を盡し、亂舞遊興を事とし、金銀を蒔散らすこと砂子の如し。其費愈重疊にして、其貪慾繁多なり。百姓を虐げ萬民を徵り、賦歛苛役の繁き上に、諸方手使ひの軍役を取りければ、國家衰へ勢力疲れ、非據の爭論得失の邪正、訴へ來るもの門に充つれども、出でて裁斷せず。喧嘩盜賊、國郡

に流行して上下相背き、家風さだち猥にして騷しけれども、憲政はたゞ惘々として、奥深く籠り居て、萬事皆兩出頭の支配に任せ、家老の諫をも聞入れられず。諸士武道の法を忘れ、郞從忠義の信を失ふ。此故に川越の軍に臆病起りて、汚き負をいたし、後代迄の恥を招き、剩へ構はぬ武田の分國に手を指し、毛を吹いて疵を求め、垢を洗うて痕を顯し、大なる後を取りて、多くの人數を討取られ、是より上杉家、いとど武威を落しけん、勢を奪はれて、鷲鳥の羽翮を殺がれ、猛獸の爪牙を挫かれたるが如し。國の危きこと旦夕に迫りて、傾敗の近きこと、風前の朽宅に似たり。

十四　上杉憲政行ニ越後一附管領讓ニ長尾景虎一

北條左京大夫氏康は、川越の軍に打勝つてより以來、愈猛威を遠近に振ひ、益功名を海陸に施す。是に依つて上杉家の輩、其鋒先を恐れ、成田・由良・白倉以下の諸將は、小田原に音信を通じ、筑波左衛門・野村兵衛、其外譜代舊臣の郞從等は、身に變り命に代り、忠義を存せし者共なりしが、忽に心を變じて、上杉の下知を用ひず。今は僅

に三族一家の好に懸り、重恩同脈の情に預りしもの、百騎計ぞ志を違へずして、憲政には從ひける。中にも上州に長野信濃守、武州に太田美濃守入道三樂は、忠義といひ武勇といひ、計策に長じて、一人當千といはれしかども、此軍勢を以て小田原を退治せんことは、叶ふべくも見えざりけり。若し又差置きなば、氏康押懸けて、上州迄も攻め來らんこと、三年を過ぐべからず。如何すべきと評定まち／＼なり。斯る所に、如何なる天魔の所爲にや、北條氏康大軍を起して、平井の城に押寄すると言出しければ、國中の地下人百姓等、すはや大事に及ぶぞとて、周章ふためき騷ぎ立ちて、家々之資財を取隱し雜具を持運び、妻子を伴れて、山深く逃行きければ、門々閉して家々之しく、住む人稀にして、老鼠白日に躍り、阡陌往還の道路は、妖狐黃昏にさすらふ。此有樣にて大軍を引うけなば、中々片時も防ぎ戰ふ力なし。箕輪の城にや立籠るべき、太田を賴みてや待つべきと、評議更に一決せず。曾我兵庫助進み出でて申しけるは、長野・太田は、忠義無二の重臣なれば、城中に引入れ來らん事は、爭か否とは申すべき。さり乍ら只今人數少なく候へば、敵の大勢を待うけて、防戰いたすべき力

憲政、長尾景虎に賴る

はなく候。越後の長尾景虎は、是れ六郎爲景が嫡男として、上杉譜代の家臣なりと雖、爲景不義の逆心を起し、管領民部大輔房能を討ちしより以來は、上杉家の讎敵たりと雖、爲景既に卒去せし上は、子息景虎を、別義を以て御免なされ、稱號を給はりて上杉を讓らるれば、定めて忠義をいたさんか。彼の景虎は、剛強武勇の名士、智謀英雄の良將なり。北越東關の境に於ては、軍道權威の鋒先を振ひ、南楚西海の間に跨つて、戰功拔群の名を施せり。信州の村上義淸は、武田晴信に追落されて國を奪はれ、越後に行きて景虎を賴みしかば、景虎甲斐々々しく賴まれ、武田と出合ひて、度々の軍に及ぶ所に、晴信毎度後を取りたること、世に其隱れなし。斯る名譽の勇士なり。是に上杉の稱號を讓り下されなば、いかにも仰に從ひ、祕計を廻らし敵を退治し、當家の鬱陶、一時に解散し給ふべしとぞ申しける。管領憲政大に甘心し、思慮分別にも及ばず、取るものも取敢ずして、越後にぞ赴かれける。簗田中務大輔を以て案内せらる。景虎は、本より名聞を好む人なりければ、限りなく喜び、自ら迎へて城中に入れ參らせ、禮節を重くし、忠義を守る意いと賴もしげにぞ見えにける。

憲政仰せけるは、天下國家大に亂れ、逆徒勢ひ起り互に峙ち、遠境近里、不義を以て表とし、亂賊時を得て互に爭ひ、親疎內外無道にして、身の程を知らず。中にも小田原の北條家は、布衣卑賤の地より出で、靑雲高貴の家を犯し、蠶の如く食ひ鯨の如く呑んで、世を覆し人を殺す。憲政苟も管領の職に居て、此暴逆を退治せんとするに、勢微にして力足らず、時運傾き兵氣撓みて、終に氏康が爲に追落され、恥を忘れて當國に賴み來れり。先考爲景は、聊か不義ありと雖、旣に卒す。景虎は未だ若年なりと雖、武勇謀才は又世に隱れなし。然らば憲政不肖の身ながら、上杉の稱號を讓り、家譜の系圖を渡すべし。早く北條・武田亂賊の首魁を退治し、永く關東八州諸士の管領を相續せられ、憲政は上州一國を保ちて隱居すべし。其外の國郡は、景虎の支配たるべしとぞ仰せ渡されける。景虎畏つて申されけるやう、近年北條・武田の賊徒、氣に乘り勢を得て、狗の如く貪り、鼠の如く侵し、近國郡邑を攻取ること、漸く蔓りて、與黨旣に大勢になり候。剩へ公方を追掠め管領を打落し、恣に猛惡を振ひ、逞しき無道を行ふ。管領之を退治せんとして、却て敗績し給ふ事は、全く武略の拙き故に

あらず。唯運命の傾く所、是非なく候。景虎今尫弱の身として、上杉の稱號を給はり、管領の武職に補せらる。家の面目、何事か之に如かん。日頃の宿望茲に足りぬ。いかにも祕計を廻らし敵を亡し、御本意を遂げさせ參らすべしと、事もなげに申されける。今年天文廿年、景虎未だ廿二歲、武勇の勢、出づる日の如く輝き、名將の譽、蕾む花の如く萌しければ、末頼もしくぞ覺えける。先づ暫く是にて御心をも慰められ、窮困を寛げさせ給へとて、樣々勧り奉られける。

十五　憲政息渡二氏康一附妻鹿田一族磔井神尾父子癩病

管領憲政の嫡男御曹司龍若殿は、今年十三歲になり給ふ。容貌世に勝れ、心ざま賢しくて、人を惠み給ふ思深ければ、家中の上下、皆懷き親しみ參らせて、頼もしき事に喜び奉りし所に、父憲政打棄てゝ、越後に落行き給ひければ、平井の城に止り給ふべき力もなく、御局の一族計を召連れ、在鄕百姓の家に立忍びて、侘しき伏屋の御住

居、心細くぞおぼしける。日來はさしも寵愛深く、荒き風にもあて參らせじと育てられしを、憲政いかなれば、世の諺に、子捨つる藪はあれど、身捨つる林はなしとかや。我身を逃れて命を繼がんとて、軍の恐しさに、子を忘れて落ちられたる、不慈とやいはん臆病とやいはんと、諸人爪彈をして笑ひ合へり。彼の御局は、京方の人とは聞えしかども、俗姓もなき鍛冶番匠の娘、容貌美しく押立よしとて呼下し、其一族親類といふもの、皆さしもなき職人商人原悉く召寄せ、五百貫七百貫の所領を給はり、作り名字をして俄に侍になり、御曹司方の衆といはれ、權高く勢強くして、管領譜代の家臣には、無禮緩怠を振舞ひ、邪欲佞奸にして財寶に飽き、奢侈驕佚にして榮耀に耽り、今此大事に臨みて、手萎え足戰き、是非の辨もなく、只敵の恐しさ命の惜しさに、忽に主君を忘れ、恩德を棄てゝ身の難を遁れ、敵に降らんと思ふ心の附きける事こそ淺ましけれ。御局の子妻鹿田新介・二男長三郎・三男三郎介・伯父に久里采女正・其子與右衛門・御局共に六人、其外親族廿餘人一所に集り、額を鳩めて內談しけるは、此世の中の有樣、敵は諸方峙ち起りて、日に從ひて强り、味方は一偶に迫り傾きて、

月を追うて衰ふ。主君憲政、既に其叶ふまじきを知り給ひて、國を離れ子を棄て丶、越後に落行き給ふ。譜代の舊臣恩顧の郎從は、皆散々(ちりぢり)になりて逃げ隱れ、長野・太田は忠義を守ると雖、我身にだに持扱ふ時節なれば、これとても頼み難し。いつの時にか、家運再び開かるべしとも覺えず。我等徒に集り居て、敵若し若君の御在家を聞付け、軍兵を差向けなば、皆一同に生捕られ、刃の上に頭を刎ねられ、叢の中に尸を曝し、憂目を見んこと遠かるまじ。いざや御曹司を連れて北條氏康に渡し、我等は降人になりて出づべし。さる程ならば、北條家の爲め忠節なる者といはれて、所領をも給はらば、身の難を免るのみならず、一生を心安く過すべきなり、昔は昔今は今、忠義といふも時にこそよれ。恩ある人を主君とせよとて、御曹司龍若殿を連れ參らせ、小田原に赴き北條に渡して、降人にぞ出でたりける。氏康仰せけるは、敵將の子をば、胎内を捜しても、其種を絶つは武の習、痛はしけれども是非なし。妻鹿田一類の奴原は、餘人に代りて忠義を存じ、叶はぬ迄も深く隱し、時を窺ひ謀を求め、再び家運を開かるべしと、神佛にかけても祈るべきに、それ迄こそなからめ、正

しき養ひ君を敵に渡し、降人になりて世にあらんとする、無道大逆の奴原、頗る人倫の行跡にあらず。唐土の豫讓は、形を變じて舊君の恩を報じ、程嬰は、我子を殺して、幼主の命に代りたりける。斯る例もあるぞかしとて、涙を流して大に惡み怒られたり。御曹司龍若殿をば、笠原能登守受取りて、荷鞍置きたる馬に打乘せ、中間二人に口曳かせ、白晝に小田原に入れ參らせければ、之を見聞く輩、袖を絞らぬはなかりけり。翌日早朝に、神尾治部右衞門に仰せて、御首を討たせらる。幾程なく神尾癩病を患へ、手足の指悉く落ちて、聲涸れ肉爛れ、痛み疼ぎ、吠死こそしたりけれ。其子又癩病になり、家絡に亡びしは、管領上杉の罰當りけりと、皆人不思議の思をなす。石卷隼人正に仰せて、御局を始として悉く搦取り、後代の見懲しの爲め、一色の松原に引出し、磔にこそ梟けられける。氏康今年卅八歲、旣に管領上杉を追拂ひ、武略の功名、翼なくして高く上り、猛將の威德、足なくして遠く聞えしかば、自國他國の諸將士民、手を束ね膝を屈めずといふものなし。況や上杉家にありつる輩、生甲斐もなき一命を繼がんとて、所緣に屬して降人になり、門外に地を拂ひ、馬前に塵を望み

ても、我が年頃の咎を補ひ、今奉公の忠を勵まさんと思ひたる心根、淺ましき中にも、哀れなりし事共なり。

北條氏康今川義元對陣

十六　北條・今川兩家確執附北條・武田茢屋川軍
并原美濃守心操并北條・武田・今川三家和睦

同廿三年の春、小田原北條氏康と、駿州今川義元と確執あり。其起りを尋ぬるに、織田信長尾州に草業し、勝幡(しようはた)といふ所に在城して、國中を打従ひ、武威を遠近に振ひ給ふ。諸侍歸伏して機に乘り、軍勢馳せ付きて忠を盡す。淸洲の城を築きて要害を構へ、今川の領地三州吉良の城に取懸け、附城を拵へて攻めさせらる。義元大に怒つて、四萬餘騎を率して馳せ向はる。信長聞き給ひ、北條に內通し給ふ。氏康三萬餘騎を遣し、同二月中旬に、駿州に發向せらる。先陣は松田尾張守・北條常陸守・笠原能登守。二陣は志水・大道寺を始として、下方の庄に打入りて、吉原・柏原に陣を取る。今川義元は信長に對陣して、軍する最中なりければ、小田原勢に馳向ふべき暇

武田晴信北條氏康對陣

なし。甲州武田晴信は、義元の小舅なるを以て、賴み遣しけり。晴信聽て一萬五千餘騎を率して、富士の大宮筋に押出で、梶間といふ所に陣を取り、小山田彌三郎・馬場民部を先手とし、足輕を出して、小田原勢を襲ひければ、北條方も足輕を以て、兩陣矢軍をして日を重ぬ。氏康は、武田晴信向はれたりと聞きて、同二月廿六日、嫡子氏政を先として小田原を打立ち、駿州天香久山に旗を立て、牲(いけにへ)の川端に人數を備へらる。武田方は、梶間より茹屋川の邊に軍勢を進め、鬨を作り矢を射合ひ、茹屋川を攻越し、追渡し戰ひける所に、小田原の先手三百餘騎、喚いて馳寄する中に、大橋山城守一番槍を入れたり。桑原平内一番槍を合せ、打合ひ突合ひ、火花を散らす其間に、同じ程なる若武者六騎、馬より下りて、細道の畔(くろ)を傳ひ、小塚の上に控へたり。武田方より小幡山城入道が嫡子又兵衛尉、生年廿一歳と名乘り、只一騎進み出で、敵近く乘寄せ、馬より下立ち槍押取り、六人の敵と突合ひ、三人をば突殺し、殘る三人は、手を負うて引退く。馬場民部・小幡入道四百餘騎、どつと突いて懸りしに、北條家の先手三百餘騎、蜘蛛の子を散らす如く、むら／＼と引返す。其中に原美濃守といふも

のは、元は下總國千葉介が家人、父は能登守平友胤とて、武勇の侍なりしが、小弓の御所軍の頃浪人して、甲州武田信虎に仕へて、度々高名して討死す。其子は、猶父に勝れて大剛なりければ、信虎烏帽子親となり、虎胤と名付けらる。近年故ありて北條家に來り、剛强名譽の働をいたし、此度の軍には、先手の物見となり、紺糸の鎧に半月の指物さし、甲の眞向に、原美濃守虎胤と書きたる立物して、猪頸に着なし、鹿毛の馬に黑鞍置きて打乘り、小幡に言葉をかけ、小山田が備に乘懸くる。小山田彌三郎が備の內より、關東浪人に、近藤右馬丞と名乘つて馳懸る。原美濃守きつと見て、優しの意やとて、太刀を拔き、峯打に近藤が甲の錣の外頸の骨を續けて、三打四打しければ、馬よりどうと落つる所を、後より續く小田原勢、折重つて首を取らんとす。原美濃守、それは甲州にて目を懸けたる者にて候。許してたべとて引取りたり。太田源六は、聞ゆる大力の剛の者にて、大荒目の鎧に、三枚甲の緒を締め、樫の木棒を搔込み、白月毛の馬に乘りて駈廻り、いかに美濃守殿、これ見給へとて、武田勢の先驅の武者七八騎、馬の上より打落し薙倒し、猛威を顯しければ、甲州方辟易して引退く。源

六が乘りたる馬に、矢を射立てられ、歩立になり、原美濃守と打連れて、しづ〳〵に引返す。其日の軍に、北條方二百卅餘人討たれしかば、甲州方にも、二百餘騎討たれ、日旣に暮れければ、兩陣相引にさつと別れ、明後日は、必ず有無の勝負を決すべしと定めける所に、瀨古の善德寺・府中の臨濟寺、兩寺の長老は兄弟にて、今川の一門なり。雙方來り扱をかけ、近國敵對の合戰は、遠境弊に乘るの本なり。蟷螂、蟬を窺へば、鳥雀、蟷螂を窺ふの恐なきにあらず。無用の我執を止めて、向後和睦し給へとて、聽て一家族の約をなし、氏康の嫡男氏政を晴信の聟とし、義元の長子氏眞を、氏康の聟に緣を組み、三大將一所に盟會し、互に相救ふべき約を固くす。後は知らず、めでたき歸陣とぞ聞えける。それより祝儀の使者三方に往來して、賑々しくこそ見えにけれ。

武田北條今川三家和睦

十七　公方晴氏逆心附御息元服

諸國の兵亂年を重ねて、郡鄕の將士威を爭ひ、鬪諍堅固の時節を追うて、彼を討ち此

を從へんと、互に劒を硎ぎ鏃を磨きて、合戰更に止む時なし。いかなる一業所感にや。斯る亂國に生れ合ひて、膽を消し魂を碎くらん。地下百姓は恐れ惑ひて、賣買耕作の時を失ひ、生き乍ら鬼道飢饉の苦をうけ、武將兵待は義を守り、忠戰勝利の謀を求めて、死せざる先に、阿修羅控軍の奴となりぬらんと、憂へ歎きの餘りに、如何なる海の果山の奥にも、身の隱所を求めばやと思へども、何處も同じ憂世なれば、心を止むる所もなし。すん〔古河カ〕の公方晴氏は、川越敗績の後は、權威殊の外に衰へて、軍兵四方に別れ、今は僅に譜第舊恩の輩、累世憐愍の郎從きもたには、附從ふ者なし。流石に北條氏康の爲、親しくおはしませば、一旦の不義を宥め參らせ、時々の祝儀を勸め、如何にも慇懃の使者を以て、音信を通ぜらるゝ所に、晴氏又逆心を起し給ひ、先亡の餘類を集め、所々の餘黨を招きて謀叛を起し、北條を攻むべき企あり。氏康聞付けて、大に怒つて申されけるは、今の公方の御計らひとして、氏康を亡し給はんことは、蟷螂の力を振ひて大樹を動かし、蚯蚓の口を延べて、頑石を咬むが如し。誠におほけなき御結構ぞかし。同じくは光を包み威を隱し、溪泉の流に思を涼し

め、松風の響に心を澄し、生涯を碁山の雲に伴ひ、浮世を禪座の床に遁れ給ひてこそ、微なりとも、公方の跡は相續あるべけれ。無用の事に、名跡を失ひ給ふものかな。さり乍ら若し鳳翼を攀ぢ驥尾に付きて、宿望を達せんとする者ありて、一味與力を致さば、由々しき大事なり。時刻を移さず押寄せ、攻破りて召取り參らせ、辛く當りて殺し奉れとて、松田尾張守を大將として、七千餘騎を差添へ、同十月四日、古河の城に押寄せ、三方を取卷き、潛き連れて攻懸る。城中には、只今敵の寄せ來るべしとは思も寄らず、要害淺間にして、堀切逆茂木の用意もなし。一色・二階堂・簗田・沼田以下、木戸を開きて切つて出でつゝ、防ぎ戰ふと雖、小田原の大軍に猛氣碎かれ、軍勢後より落失せければ、終に攻落され、寄手城中に込入りて、公方晴氏父子を生捕り、怪しげなる籠輿に乘せ奉りて、小田原にぞ歸りける。相州波多野といふ所に押籠めて、嚴しく番を居ゑられけり。それとはなけれども、一向流人の有樣にて、昔を思ひ今を託ぶる心の中の悲しさ、袂は涙に朽し給ふ。晴氏樣々怠狀し給ひしかば、氏康も我が妹聟として、其腹に若君誕生し給ふ、彼是打棄て難く、晴氏をば隱居させ參らせ、

北條氏康足利晴氏を攻む

足利晴氏父子虜せらる

弘治二年の春、御息を公方になし奉り、京都將軍の仰に依つて元服あり、左馬頭に補せられ、義氏と號して、葛西谷に移し奉りければ、北條方の諸將諸士等、拜禮伺候の裝、神妙にこそ聞えけれ。

十八　里見・北條三浦合戰

同年三月上旬、房州里見左馬頭義弘、兵船八十餘艘を催し、相州三浦に押渡り、城箇島に陣を取り、枝舟を下して陸に攻上らんとす。北條方三浦番手の舟奉行梶原備前守・富永三郎左衞門・遠山丹波守等、出向うて相戰ふ。里見が家人東條源七とて、大力の兵、唐綾縅の鎧着て、堅木のさいばうを以て眞前に進み、馬人をいはず、當るを幸に打伏せ薙倒し、縱横無碍に駈廻る。北條方は、源七一人に打立てられ、引色に見えし所に、遠山丹波守が郎等赤江藤五郎といふ者、四尺八寸の太刀を拔いて、東條に渡り合ひ、打開き受流し、込懸け突退け、追廻し立廻り、暫し戰ふ所に、如何したりけん東條が持つたるさいばう半より切折られ、叶はじとや思ひけん、打棄てゝ逃げたり

しかば、北條方色を直し、鬨を作りて討つて懸る。房州勢駈亂され、舟に乘りて漕戻す。小田原方之を見て、繋ぎ置きたる味方の舟共、纜解きて乘浮べ、猶逃さじと攻戰ふ。機を追風に任せければ、敵船は自ら引きて行き、味方は追うて懸りけり。よしや討死して、海魚が腹に葬らるゝとも、逃げて嘲をば殘さじものをと、押浮め漕止め、熊手を以て引寄せ〳〵、敵味方互に舟に乘り、或は首を取るもあり取らるゝもあり、或は引組みて海に轉び入るもあり、喚き叫ぶ聲、沖に充ち汀に響きて、龍宮世界も崩るらんと夥し。北條方の侍に苦林平內とて、坂東無雙の相撲の手垂、力量も人に勝れ、心も剛なる兵、東條源七に寄せ合せ、兎角あひしらうて海に突落さんとす。東條は、元より水練の達者なりければ、苦林を捕へて、海底にして勝負をせんと思ひ、舟の中を、彼方此方へ立合ひ打廻らし、終に苦林を捕へてむずと引寄せ、仰様にがばと跳ね落ちたり。敵味方目を澄して見る所に、暫くあつて東條源七、薄手二ヶ所負ひ乍ら、苦林が首を取りて浮び出でたり。里見方舟差寄せて引上げたり。斯くて夜に入りしかば、風立ち波上り、房州方の舟をば沖中に吹送れば、小田原勢は陸に漕付け、疲

をぞ休めける。

十九　上杉景虎髮剃附上州沼田出張迫合

扨又越後國長尾景虎は、上杉憲政の讓をうけ、管領職に補せられ、長尾の姓を改め、上杉の稱號を名乘り、去ぬる天文廿一年三月二日に入道して、法名謙信とぞ號しける。今又上杉憲政の爲には、北條氏康に敵して兵を出し、謀を廻らし武を勵まし、晝夜に安き暇なし。武州岩槻の城主太田美濃守資正入道三樂は、持資入道道灌が末葉として、管領股肱の忠臣なり。景虎入道謙信に一味して、猶宿望を達せんことを希ふ。此頃北條家に降參せし、上杉譜代の諸將諸侍に觸れ遣しけるやう、今度上杉名譽の良將出來給ひ、佳運開くべき時到れり。早く味方に馳せ歸りて下知に隨ひ、忠節を勵まさるべしと申送りければ、成田中務以下の輩、景虎に屬するもの少なからず。是に依つて謙信愈權威强く武備輝き、同じき弘治二年十月上旬、七千餘騎を率して、上州沼田に出張せらる。北條氏康此由を聞きて、一萬餘騎にて出向ひ、旌旗飜して

は天を覆ひ、鯨波上りては地を動かすと雖、兩陣の間に切所ありて、容易く合戰なり難く、徒に日を重ねて、たゞ兵糧を費すのみなり。されども先手の役として、雙方歩立のもの五人十人、境目に出向うて矢軍をいたし、後には騎馬の兵馳せ加はりて、二三百も集り、入亂れて戰ひ暮すこと日毎にあり。北條方に岡山彌五郎といふもの、金の馬簾の指物さし、月毛の駒に乘りて駈出す。押續きて銀の御幣をさし、黑の馬に乘りたる武者、木下源藏と名乘りて出でたり。兩人いづれも若武者にて、眞先に進み、敵味方の目を驚かす。手柄を振ひ、雨の降る如く射懸け打懸くる鐵砲を、物とも思はぬ景色にて、日毎の競合に首を取る。謙信方の兵共之を見て、死生知らずの痴者かな。餘りに廣言を吐くが惡きに、打殺して鹽をつけよやとて、矢衾を作り射出し、釣瓶放に打立てしかば、岡山彌五郎胸板を鐵砲に打貫かれ、一言ともいはず殪れ死す。箙を叩き鬨を作りて、それに懲りよとぞ笑ひける。北條方の勝武者に、千葉勘兵衛といふもの、口惜しき事かな。いで己等が息の根干さんとて、槍提げて走り出づ。景虎の軍兵に、荒生與市といふもの、馬に乘りて駈廻る所を、突落して首を取

り、これ見よや人々、今は笑もせざるかとて、味方の陣に引入りたり。木下源藏は、敵を目蒐けてたゞ一騎馳せ廻り、越後勢新潟助五郎といふものに、馳合うて打合ひけるが、引組んで上を下へ轉びけるを、新潟終に組伏せられて、首をぞ取られける。越後勢我も〳〵と馳來り、源藏を取籠め討取つたり。毎日の競合に、兩陣の手負死人、五百餘人に及びしかども、雌雄を決する程の軍はなし。同じき十三日、謙信は陣を拂ひて、越後に歸り給へば、次の日北條氏康は、小田原に歸陣あり。同十二月十五日、公方義氏を取立て參らせ、下總國關宿の城にぞ移し參らせける。

二十　公方義氏鶴岡社參

永祿元年四月上旬、關東の公方左馬頭義氏朝臣、今年既に十八歲、御家督をうけて政治を行ひ給ふ。愈啓運祈願の爲、且は補職の拜賀の爲、鎌倉鶴岡の八幡宮に御參詣あり。公方義氏は綱代の輿に召され、供奉の人々、其出立華やかなり。此公方、北條氏綱には孫にて、氏康の爲には、甥にておはしまし、殊更北條家より取立て參らせし事

なれば、此度御社參の儀式迄も、皆氏康より取囃し奉り、路次の警固行列の軌格猥ならず。大道寺孫九郎を奉行とし、北條左衞門大夫・多目周防守・下方彈正・遠山丹波守以下の人々、家來被官の郎從共には、小具足を着て辻固めをせさせ、八百五十餘人、道の兩方に並み居て、用心嚴しく非常を警む。關宿の城主簗田中務大輔は御劒を持ち、一色刑部少輔は御沓の役を承り、吉良左兵衞佐は御傘を仕る。其外譜代の御家人等、我も〳〵と供奉して、小結の扈從布衣の侍、數を盡し美麗を調へ、二行に連りて、御輿の前後左右に渡り、騎馬の武士三百人、打込にして後より通る。道の雙方には棧敷を打ち、幕を張り簾を懸け、貴賤上下群集し、足を爪立て肩を抑へて見物す。公方は鳥居の下にて、御輿より下り給ひ、歩行して拜殿に上り、御寳前に差懸りて跪き、禮拜祈念の有樣、いとゞ幽長にして、なべての人には變り給ひ、流石に由ありてぞ覺えたる。寳劒一振・卷物一箱・黃金百兩・神馬二疋、鞍置きてぞ引かれける。社僧は眞讀の仁王般若經を轉じ、祝部は中臣の太祝言を申す。五人の神樂男、八人の八乙女、袖を返し拍子を調へ、鈴の聲颯々として、鼓の音鼕々たり。香煙四方に薫じ、御

燈内外輝き、神明納受の御眦を廻らし給ふらんと、尊かりし事共なり。御下向道に及びて、事故なく喜の眉を開き、關宿の城を立ちて、古河の故城に入り給ふ。

廿一　上州甕尻合戰

北條・武田・今川の三家、内縁親しくなりて盟會し、互に援兵後詰の約をなして、上杉家を退治せんとす。然るに上杉譜代の輩、武州岩槻の城には、太田美濃守入道三樂、軍勢を集めて立籠り、上州箕輪の城には、長野信濃守、壁を高くし壘を深くして居住し、本より大身なりければ、兵糧矢種不足ならず、要害嚴しく守るのみならず、後に越後の謙信に一味して、上杉忠節の道を忘れず。其外諸方に散在して、憲政の運命開くべき時を待ちて、北條・武田に從はざる輩少なからず。武田大膳大夫晴信入道信玄と、北條左京大夫氏康と、使節を以て約を定め、氏康は太田を攻干し、信玄は長野を討亡さんとて、信玄の嫡子太郎御曹司義信を大將として、飯富兵部・同三郎兵衞・甘利左衞門・馬場民部を先手とし、内藤修理・原隼人佐・諸角豐後・小宮山丹後を

後陣とし、都合一萬三千餘騎、同年四月下旬、上州甕尻に押出でらる。北武藏・西上野の諸將等參會して、評定いたしけるは、目前に寄懸る敵を見ながら、默して引込み居たらんは、首を延べて刃に觸れ、胸を上げて矢を受くるの笑となるべし。其上武田・北條此頃諸方の壘に押懸け、攻取り討取ること限なし。我等小身無勢にして、大軍を防ぐに至つて、五指交るぐ彈かんよりは、一擧に如かず。千人其心を同うするときんば、千人の力を全くすべし。萬人其心別なる則ば、是れ一人の力なしといへり。面々城に籠りて別々に防がんより、一味一所になりて防戰いたさば、何ぞ敵を追退けざらんやとて、諸將十頭二萬餘騎、長野信濃守を大將として押懸けたり。兩陣鬪を作り、矢軍少しするやうにて、互に駒を進め、兵を勵まし入亂れ、新手を入替へ馳違うて、追捲り切返し、打合ひ突合ひ、首を取るもあり取らるゝもあり、手負を引退け、いづれに隙ありとも見えざりけり。總大將長野信濃守、采を取つて味方を勇め、進退弛張、其機變に應ずと雖、諸將我々に手配して、長野が下知に從はず。たゞ軍勢のみ疲れて、手負討たるゝもの多けれども、武田方には、さのみ人數の損ずる色なし。長

野に馳付きたる集勢、後に控へて、いや〳〵此軍、捗々しかるべからず。枝葉の場に、嗚呼の武篇して犬死せんよりは、後を待つに如くはなしとて、裏より崩れて引きけるを、先手は之をも知らず、命限りに戰ひしに、すはや味方に野心のものこそあれと言出し連れて、皆備を亂し、主を離れ親を棄て、手負をも助けず、ちり〳〵になつて引きければ、武田方勝鬨を作り、追付け〳〵討取り切倒す。さのみ長追なせそとて、追棄てゝぞ歸りける。是より直に箕輪の城に押寄せ、長野を打干さんと評議せらるる所に、同じき廿五日、越後の上杉謙信、大軍を以て川中島に出でらるゝと聞えしかば、武田信玄父子、さらばとて馳せ向ひ、五月の末まで對陣し、謙信引取りて退かれしかば、信玄も歸陣あり。

廿二　上杉入道謙信小田原發向附鶴岡參詣

越後の上杉入道謙信は、去年の冬十月下旬より、上州平井の城にありて軍兵を差遣し、北條孫次郎が守護せし沼田の城を追落し、前橋の館を攻取り、其他所々城主降參

上杉謙信小田原を攻む

のもの多し。皆人質を取りて、前橋の城中に入置かる。同じき三年三月上旬に、上杉入道謙信東八ヶ國の軍勢を催し、長尾・白倉・大石・小幡を始として、諸將七十六人其勢九萬六千餘騎、謙信譜代の侍一萬七千餘騎、都合十一萬三千餘騎、思ひ〳〵の出立、家々の旗さゝせ、先陣は太田美濃守入道三樂三千五百餘騎、二陣は總大將景虎入道謙信、其外の諸軍側備・後備・奇兵・控軍、前後左右をゆり合せ、相州小田原に押寄する。先陣既に大磯小磯に着きしかば、二陣總大將は、十八町を隔てゝ、高麗寺山の麓山下に旗を樹て、藤澤・田村・大上・八幡の邊迄も、軍兵雲霞の如く、鎧の袖を重ね甲の星を輝して、陣々を取敷きたり。上杉入道謙信の武威、出づる日の如くにして、關東はいふに及ばず、奥北陸七ヶ國迄も隱れなく、剛強智謀の名大將といはれ、附隨ふ諸將皆武略あり、士卒いづれも逞兵なり。此大軍を以て向はれんには、たとひ如何なる敵なりとも、亡びずといふ事あるべからずと、いはぬ人こそなかりけれ。北條家より、武田入道信玄に加勢を乞はれしかば、足輕大將初鹿源五郎・勘定奉行靑沼助兵衞に、二百餘騎を添へて差遣し、小田原の城に籠められ、信玄竊に飯富・甘利以

下を召して語られけるやう、景虎入道弓矢剛強の働は、生得の武篇にして、金山鐵壁をも物とも思はず。されども一刻の雌雄を謀りて、後度の手立なし。北條家容易く攻干さるまじ。或は氏康の爲め、吉事の强味となるべし。上杉譜代の諸將等、一旦景虎に歸伏すとも、景虎短慮にして人を懷くる道なく、我身の旁を外に顯し、仁を內に行ふ心なし。制道手荒くあてがうて、恨をうくる事少なからず。幾程なく諸將皆疎み離れ、氏康に從ふより外の事あるべからずとぞいはれける。さる程に上杉景虎、軍勢を進めて小田原に押詰め、蓮沼まで亂入りて、鬨の聲を上げたり。城中同じく鬨を合せければ、寄手の先陣太田美濃守入道、三千五百餘騎を三手に分け、楯を突寄せ突寄せ攻懸る。城中より鐵砲五十餘挺を一同に打出す。鳴響く音は雷霆の渡るが如く、火の迸る勢は、螢光の飛ぶに似たり。面に進む兵三十餘人、ばらばらと打倒され、矢庭に死にければ、寄手色めき立ちて、楯の影に隱れんとする所を、屈究の强弓百餘人、差詰め引詰め射ける程に、手負死人多く出來ければ、先手怺へずして、二陣に入變らんとすれども叶はず、むらむらになりて引退く。されども城中、切つても出で

ず。寄手續いて押懸けず。總大將謙信は、白布を以て首を包み、朱采配を取り、月毛の馬に金覆輪の鞍置かせ、關東勢、沓の子を打ちたる如く、いやが上に集ひたる中を乘分け〳〵、諸手に下知せらる。其有樣物荒く、人を、生きたる虫とも思はざる風情なり。關東の諸侍舌を振ひ、景虎剛强の働はさる事なれども、下知の振舞きやうこつなり。夫れ若し相違の事あらば、覿面に切殺すべき狼心あり。大將は幃幄の中に在りて方略を施し、軍勢を指揮すべし。諸卒の役者と同じく、自身の働き輕々しき何事ぞ。此大將、行末いかゞと思ひ疎みけり。宇佐美駿河守此有樣を見て、景虎に諫言しけるやう、關東の諸侍等、初對面の輩にて、心も知らぬ者共なり。如何なる野心を、挾み候らんも存せねば、少しは心を置き給へ。手荒き宛行(あてがひ)然るべうも候はず。凡そ征伐の法合戰の事は、士卒の身にありと雖、雌雄は大將による事にて候。周武は木主を作り、漢高は義帝を立てらる。今以て大將を立て給ひて、軍を起し給はゞ、利あるべき事にて候ものをとぞ申しける。景虎聞き給ひ、憲政は柔弱愚闇の人なれば、若し逆心をや起されん。然らば舊狎の諸侍、憲政に從ひて景虎を棄つべし。是

れ由々しき大事なり。總大將に賴み難し。古河の公方は北條方なり。たゞ京都より、然るべき貴族を一人申下し、關東の公方に取立つべしとて、不日に使節を以て、近衞殿の二男を呼取りて、陣中に迎へ奉り、公方と崇め、諸軍に觸れて拜禮を遂げさせ、公方鎌倉安產の例によるべしとて、拜賀の爲に、鶴岡の八幡宮に御參詣の事をぞ催されける。昔の公方の召されたる古き小八葉の車の、轅の剝げたるを求め出し、持氏の御時、竹若といふ高名の牛飼が子に、松が枝といふ童を尋ねてぞ、御車をぞ仕らせける。景虎は、濱表の鳥居の下にて馬より下立ち、上杉の家臣大石・小幡・長尾・白倉を傍近く召連れらる。宇佐美・柿崎以下譜代の家人等は、猶其邊を固めたり。殊更小幡三河守は、上州鷹巢の城主なり。器量諸人に勝れたれば、景虎これに太刀を持たしめ、關八州の諸將諸士、各位に從ひて列を定め、前後左右に扈從せらる。公方御車を下らせ給ひ、御寶前に參向あり。管領景虎は其後に跪き、暫く拜禮歸依の丹誠をいたさる。諸侍庭上に座して、頭を傾け掌を合せ、渇仰肝に銘し懇祈信を起す。神德感じて靈驗應じ、納受空しからずとぞ覺えたり。管領景虎の武威權勢高大なる

こと、西海の事は知らず、當時中國以東三十三ヶ國に、肩を雙ぶる人なし。年齢未だ壯盛にして、越後の國と東上州を從へ持ち、長尾代々の武門を繼ぎ、老功舊奉の家臣、或は百騎二百騎の大將三十餘人あり。關東今掌に從ひ、管領職に補せられ、十萬餘騎の大將となり給ふ。三年の間には、日本國を治めらるべきこと疑なし。天晴果報めでたき大將かなと、思はぬ人はなかりけり。斯くて下向道に至り、公方の御車、鳥居の外に軋らかし出でたり。道の兩方には、諸侍並み居て垣の如し。各頭を地に附けたる其中に、忍の成田下總守長安といふもの、大將景虎の由々しき威勢を感じて、首を少し上げて、景虎を見参らせしに、景虎之をきつと見咎め、なめげなる振舞かな。武將管領の行過ぐる所には作法あるべし。物にも覺えぬ成田が頭の高さよと、大に怒つて、持ちたる扇にて、成田が顏を丁々と、續けて二つぞ打たれける。長安は、口惜しき事かな。小身乍らも、我既に五百騎の大將として、一千餘騎の侍を引廻す者ぞや。それに斯く恥見せけるこそ遺恨なれ。とても行末頼もしからずとて、景虎に暇乞はず、手勢を引連れて、忍の館へぞ歸りける。之を見聞ける關東の諸將、皆景虎を

恨みて、ぬけ〴〵に陣を拂ひ、我が館々に歸りける。景虎之を止めんとするに、却て手勢だに騷ぎ立ちて、落支度しければ、城中之を見透して、一萬五千餘騎、木戸を開きて突いて出でたり。越後勢切崩されて、東を指して落ちて行く。景虎は追懸る敵に返し合せ、駈破り追靡け打伏せ、蜘蛛手輪違に、七八度當られしかば、北條方も若干討たれ引返す。景虎辛うじて上州平井の城に入り給ふ。さて斯くぞ詠まれける。

味方にも敵にも早く成田殿ながやす刀切れもはなれず

とは申されしかども、味方一萬七千餘騎、或は討たれ或は手負ひて、殘り少なになりて、五月上旬越後に歸陣あり。公方は平井の城に捨てられ、參候する武士一人も見えず。關東の諸侍、氏康に降參すと聞えければ、斯くては一日も留まるべき樣なしとて、忍びて京都に上り給ふ。南柯郢午睡の夢忽に覺め、今谷陽春の花速に散り、一朝の間に變易する、浮世の有樣こそ定めなけれ。

廿三　上杉景虎上洛附京都將軍賜二諱字一

相州甘繩の城には、北條上總介綱成が嫡男左衞門大夫氏繁を籠置かれしを、上杉景虎小田原を引掃ひて歸られける刻、押懸けて攻められしかども、堅固にして落ちざりければ、又ほぐして圍を解き、前橋の城に、成田が人質として、末子若王丸に、家臣豐島美作守を相添へて置きたりけり。之を打殺さんとて、軍士を遣しければ、早疾く聞付けて、豐島は城中を忍び出で、忍の館に逃げ歸り、若王丸も城をば遁れ出しかども、豐島に後れ、利根川の流に溺れ、死にけるこそ無慙なれ。景虎旣に越後に歸り、心に思はれけるは、我今上杉管領の職をうけ乍ら、未だ京都將軍家に對面を遂げず、拜禮の式を勤めざれば、徒に私を構へて、管領職を奪ふに似たり。先づ上洛參勤して、首尾を全くせんとて、同五月下旬京都に上り、公方將軍義輝公に參候せらる。色々の捧物、夥しくぞ見えける。將軍家仰出されけるは、長尾三郎景虎は、智謀英雄の名士、器量强健の勇將なりと聞召す。越國武門の關轄、東州靜治の柱礎となり、今速に賊徒を退け、早く國家を平にして、宜しく忠義の道を守るべきなりとて、上杉管領の職を繼がしめ、剰へ將軍御諱義輝の一字を下され、輝虎になされ、網代の輿、文の裏

上杉謙信上洛

書まで許し給ひ、朱柄の傘御免あり。家の面目、身の嘉慶、何事か之に如くべき。景虎喜悦の眉を開き、軈て下國あり、上杉輝虎と、名乘られけるこそ由々しけれ。

廿四　織田信長討ニ取今川義元一

駿州今川義元は、駿遠三の三ヶ國を保ち、子息氏眞生立ちて、愈大家となるべき所に、家風堆高く歌道遊興に長じて、軍旅の志撓み行くこそ危けれ。尾州織田信長、今川の旗下を反きて、淸洲の城を築き、國境に砦を構へ、美濃・近江の間に働き、勢州を手に入れんとして、晝夜を捨てず謀り給ふ。義元安からず思ひ、信長を討干し、京都に旗を立て、天下を我手に屬せん事を望み、尾州智多郡を打隨へ、猛威漸く國中に被ひしかば、信長は膽を嘗め氷を握り、鳴海の近邊丹家の城には、水野帶刀・山口海老丞・柘植玄蕃允を籠置かる。丸根の城には佐久間大學、鷲津の砦には、飯尾近江守・同舍弟隱岐守・織田玄蕃頭をぞ籠められける。鳴海・中村の兩城には、山口左馬助父子を入置かれし所に、俄に心變りして、駿河勢を引入れ、大高・沓懸の兩城を調略し

て、敵の手に屬せしかば、近き邊は皆義元に心を通じて、尾州を背くもの多し。義元は四萬五千餘騎を率して、永祿三年五月十七日、尾州愛智郡沓懸に押出でらる。丸根の城代佐久間大學頭、早馬を立てゝ清洲に告ぐる。信長大に驚き、此軍、待つて戰はゞ利あるべからず。逆寄にして討つに如かずとて、織田造酒丞・岩室長門守・長谷川橋介・佐脇藤八・山口飛騨守・加藤彌三郎・川尻與四郎・簗田出羽守・佐々內藏助、僅に十騎計にて、同廿日の未明に、清洲の城を打立ち給ふ。旅屋口にては、雜兵三千餘騎にぞなりにける。佐々隼人正・千秋四郎・岩室長門守以下七十餘騎は、早義元の先手に寄合ひて討死す。信長少しも怯れたる色なく、敵の後の山際に押廻し、忍びて義元の本陣に懸り、鬨を作りて馳入り給ふ。林佐渡守・毛利新介・森三左衞門・中條小市・遠山甚太郎・同河內守・織田造酒丞・簗田出羽守續いて進む。敵は小勢にして、而も初度の軍に打負け、此迄はよも寄せじと思ひ侮り、たゞ味方の謀叛人が、喧嘩をいたす騷ぎかと、いふ程こそあれ、同士討して切合ひける。服部平太突入りて名乘る。義元心得たりとて、打物拔いて、服部が膝の口したゝかに薙伏せらる。毛利新

今川義元戰死

足利晴氏逝去

介隙間なく駈入りて、義元を突伏せて、首を取りて差上げたり。陣中は思も寄らぬ謀に、大將討たれ給ひたりと呼ばはりければ、諸軍上を下へ持て返し崩れ立ちて、我れ先にと落行きけり。信長朶を取りて、討てや者共とて、追詰め〳〵討ち給へども、返し合するものはなし。さのみ長追すべからずとて、諸軍各引返し、討取る所の首二千五百卅二。軈て勝鬨執行ひ給ふ。それより信長猛威夥しくなり、鬼神の如く恐をなし、諸將諸侍皆降參して、從ひ靡くこと、順風に草の偃す如くなり。

廿五　晴氏逝去附氏康隱居

同五月廿五日、左兵衛督晴氏、關宿の城にして逝去し給ふ。去年の暮より、聊か不例の氣まし〳〵ければ、醫療さま〴〵手を盡し、祈願色々信を凝らし、小田原にても、國府津の護摩堂に於て、百座の護摩を修せられしかども、更に驗もおはしまさず、終に隱れさせ給ひけり。永仙院系山道統とぞ號し奉る。御臺所の御歎き、殊更にぞおはしける。孝養懇に營み、御菩提を深く弔ひ參らせ、一蓮托生の御祈淺からぬ志、せめて

の事の餘りに、四十九日の御中陰果の日に至りて、御飾を下して、世を浮草の定なき事を思ひ知りて、佛道に立入らせ給ふぞ難有けれ。同じき六月下旬、北條氏康隱居して、萬松院とぞ號しける。男子七人女子六人迄おはしけるを、程々につけて仕居ゑらる。嫡子氏政は、家督をうけて國政を行はる。次男由井源藏は、武州瀧山の城主となり、後に陸奥寺氏照とぞ名付けたり。三男助五郎、後には美濃守氏明と號して、取分き氏康に孝行深き譽あり。四男新三郎は安房守氏邦とて、手跡に名を得て隱れなし。五男新四郎は。後に左衞門佐長能とて、馬上に鍛錬の妙を得たり。六男竹王殿は、後に右衞門佐氏堯とて、鐵砲能く打ち得て、町間に目當を外さず。七男三郎をば、越後の輝虎養子として、後に上杉景虎とぞ號しける。長女は高林院とて、早く寡となり、尼になりて世を厭ふ。次に蒔田殿と申すは、吉良某の妻となる。次に常陸殿は、北條常陸守の內室とす。次に早川殿は、今川氏眞の御前になる。次に尾崎殿、これは武田勝賴の妻となり、甲州にて生害あり。後は知らず、當時北條家の有樣、月を重ね日を添へて榮え行くこと、嫩草の春陽に向ひ、猛虎の數子を育てしが如

く、勢既に東關に滿ちて、名を八州に輝かし、諸將頭を傾け、諸侍志を寄せ、靡かぬ草木もなかりけり。

鎌倉公方九代記　卷十二

義氏軍記

一　武州松山城軍并竹束仕寄

右兵衞佐義氏は、晴氏の嫡子として、公方の家督を嗣ぎ給ふ。北條氏康守立てければ、父晴氏他界し給へども、北條方の諸將參仕の人々は、變る事なく重んじ奉り、拜趨の禮怠りなし。爰に太田美濃守資正入道三樂は、北條氏康の爲に奪はれて、武州岩槻の居城を開退き(あけの)しより以來(このかた)、晝夜に心を盡し、旦暮に枕を碎き、上杉輝虎に心を合せて、上田又次郎が籠りたる武州松山の城を攻取りて、管領憲政の末子上杉新藏人憲勝を籠置きけり。輝虎仰せけるは、北條家又此城に取懸りて、攻むることあるべし。強く防ぎて相待つべし。安房の里見と、輝虎一味して後詰せんと、固く約束せられた

り。太田は中武藏江戸の城に歸り、輝虎は越後に引取り給ひける所に、北條・武田の兩家一味して、松山に押寄せたり。永祿五年二月廿八日、武田晴信入道信玄・子息太郎義信父子二萬餘騎、甲府を打立ち、餘地・南木に懸りて押寄せらる丶。北條氏康・氏政父子三萬五千餘騎、兩軍都合五萬五千餘騎松山の城に取懸け、十重二十重に圍みて、鬨の聲を上げたりけれども、城中には靜まり返つて、態と鬨をも合せず。寄手の先陣五千餘騎、潛き連れて攻懸る。城には鳴を靜めて、近々と攻寄せさせ、鐵砲二百餘挺を、一同に打出す。其音夥しく、迅雷の激するが如く、晴天に煙渦卷き、山河霧深し。寄手將棊倒をするが如く、矢庭に死するもの百七十人、其外手足を打損せられ、轉び倒れ痲痺れ目昏き、立上ること叶はねば、手負を取退けんと犇く所へ、玉藥を込換へ〳〵打出すに、楯も鎧も耐らねば、寄手色めき立ちたる所を、强弓の精兵共、差詰め引詰め散々に射けるに、空矢更になく、時の間に、四百餘人ぞ射倒されける。斯くては中々、急に攻干す事叶ふべからずとて、先づ攻口を引退き、變る方便を評定せらる。此松山の城は、上田左衛門尉取立てしより、難波田彈正父子久しく持固め、

要害殊に嶮難なり。兵糧乏しからず、水の手自在にして、而も上州に名を得たる兵共の籠りたりければ、毎度寄手打退けられ、射白まされ、手負死人多く出來けり。氏康仰せけるは、斯樣の山城は、金鑿を入れて、要害を掘崩すに如くはなしとて、諸方の金鑿を呼び集めて掘らせける。城には豫てより、城中に渠を切通し、大なる壺を伏せて置きければ、掘入りて潛る所を聞付け、水を堰流し、土を崩して、金鑿多く打殺されしかば、叶はずして逃げ出づる。北條左衞門大夫手段を設け、火矢を拵へ、松明を用意して、押懸けて攻寄する。城中より鐵砲を打出すこと、雨の如くなりしかば、射らるゝもの數を知らず。終に總曲輪を攻破り、火をかけて燒拂ふ。されども城兵は少しも怯まず、火矢を打消すに暇なし。武田の陣中甘利左衞門が同心に、米倉丹後といふもの申しけるは、一年信州苅屋原の城を攻められし時、竹束を用意して鐵砲を防ぎ、城を攻落し候。彼の竹束を以て仕寄を付けて、攻めらるべしといひければ、近鄉の竹藪を切集め、竹束を作りて寄懸くる。諸軍之を見て、竹束を作りて、突寄せ突寄せ攻懸くれば、城中より鐵砲を打出す事、嵐に交る玉霰の、戸板に當る音よりも

猶ほ繁かりけり。日向大和守が嫡子藤九郎は、被官の郎従六十餘人を連れて、城中の水の手を取切るべしとて、竹束の外に出たりしが、一人も殘らず打倒されて死にければ、信玄大に憤り、只一刻に攻干せやとて、息をも繼がせず攻寄せけり。城中今は玉藥も打盡し、勢力撓みしかば、命計を助けらるれば、城を開き渡すべしと降をいひければ、降るものは殺さずといへり。城を渡され候はゞ、命をば助け申さんとて、軍を止めて一方を寛げらる。城兵我れ先にと走り出でて、思ひ〳〵に落行きければ、大將上杉憲勝も、譜代十餘人を召連れて、厩橋の城にぞ落着かれける。北條氏康勝鬨を行ひ、本の如く上田又次郎入道闇礫齋を城代として、小田原に歸陣ありければ、武田信玄も、甲府に歸りて休息あり。

二　輝虎斬二憲勝二子一附山根城歿落

同三月六日、上杉輝虎入道謙信は、里見左馬頭義弘の子息義高・太田美濃守入道、都合一萬五千餘騎、松山の城後詰の爲に發向せらるゝ所に、城は早開退きしかば、輝虎大

に怒つて仰せけるやう、憲勝といふ不覺人に、城を預け置きたるこそ越度(おつど)なれ。後詰の約をも待ちつれず、臆病神に振ひ落され、謙信に手を失はせたることの口惜さよ。太田入道が所爲にぞあるらんと、躍り上り〳〵、三樂を討つべき氣色なりければ、太田申すやう、城中には、人數兵糧玉藥まで潤澤にして、矢種乏しからず。薪糠藁に至る迄も、事缺き候物はなし。憲勝不覺の弱將にて、後詰をも待ち給はず、開渡されしことは力及ばず候。されども某、憲勝の子息二人を止めて人質に取り、別心なき旨をば、極め置きて候とて、城中に籠入れたりし諸事の書立に、人質を添へて出しければ、謙信猶も腹を据ゑ兼ね、二人の子の頭髮を、左の手に一つに掴んで、下斬(さげぎり)にしてぞ棄てられける。扨此人數を引廻し、何のする業もなく歸らんは殘多し。近き邊に、北條方の要害はなきかと尋ねられしに、太田入道申すやう、是より下道卅餘里に當つて、山根の城とて候。北條方より、忍の成田長安が弟小田助三郎を城代として、籠置きて候といふ。謙信聞き給ひ、其間には刀根川二本木の渡とて、大河のある由、急ぎ舟橋を架けさすべし。成田が弟ならば、これも樣(やう)あるものぞ。男女老少をいは

上杉謙信山根城を陷る

ず、一人も殘さず撫斬にすべきなり。長尾彈正入道謙忠・太田入道兩人、山根の案內者たるべしと仰せければ、太田は畏り候と請合ひける所に、謙忠いかゞ思ひけん、俄に心地例ならずとて出でざりけり。上杉謙信、八千餘騎にて打立ちつゝ、二本木を渡して、舟橋の綱を切放させ、城の四方を取卷き、潛き連れて攻懸け、息をも繼がせず一日一夜に攻落し、城中に亂れ入りて、大將小田助三郎はいふに及ばず、城中にありける女童まで、一人も洩らさず撫斬にして、首級三千百十一を切かけ、廐橋の城に引返し、長尾入道謙忠を召出し、貴殿は謙信が爲め、遠からぬ親族なり。一方の固をも賴むべきとて、此廐橋の城をも預け置きて候。然るに今度、山根の案內者を引外し、病の起り候事、北條・武田に內通して、謙信が生首拔かんとせらるゝ結構と覺え候とて、刀を拔いて謙忠が首打落し、城中の上下男女二千餘人、皆斬殺されしかば、累々たる尸、城內に滿ちて算を亂し、取收むる人もなければ、鳶烏群り狐狼集り、爭ひ吠ゆる聲物すさまじ。青蠅營々として白蛆蠢々たり。世の變といひ乍ら、時の災こそ悲しけれ。北條丹後守に城を預け、輝虎は越後にぞ歸り給ひける。

三　太田源六反逆 附 鵠臺軍 并 正木大膳以下討死

武州江戸の城には、北條の家臣遠山丹波守を籠置かる。太田源六資高は、道灌が嫡子として、扇谷を恨みて北條家に屬し、遠山が與力に附けられ、毎度人目を驚かす、武勇剛强の働をいたすと雖、氏康更に取立てらるゝ色なし。源六が舍弟源三郎・同源四郎共に大力の剛の者なり。三人一所に集りていふやう、我等兄弟武勇の働き、忠戰を勵ますと雖、氏康さして取立てられず。如何にもして恨を報ぜんと思へども、小身なれば力及ばず。いざや同名美濃守三樂に一味して、房州里見に引合ひて、城代遠山を追落し、豐島郡を申給はり、道灌の跡を相續せんと思ふはいかにといひければ、二人の弟共、此儀尤然るべし。斯る大事の企を、左右なく人に洩らさじとて、源六が歸依せし法音寺の番神堂に集り、被官の侍廿一人、諸共に神水を飮みて約を堅くし、太田入道に斯くといひ遣しければ、三樂大に喜び、房州に告越(つげこ)して里見を招く。義弘即ち國中の軍勢、總州の勇士を催し、總州鵠臺へ出張す。斯る所に法音寺の

僧、倩思ひけるは、今の世の有樣、北條家は、出づる日の如く武威を振ひ、上杉家は、秋草の如く運命衰ふ。終に關東の諸國は、北條の手に入るべきこと疑なし。それよ太田源六兄弟、小身の働として、北條家を傾けん事、兎の獅子を窺ひ、鼠の猫に勝たんとするに異ならず。一戰の間に敗績すべし。然らば此内談の起を尋ね、法音寺にして、神水を飲みたりなんどと沙汰あらば、寺の爲め我身の爲め、破却追放遠からず、由由しき大事になるべし。旦那の好は一旦の事なれば、敵に知らせ、我身忠節のものになりて、心安くせばやと思案して、城代遠山丹波守に、竊に此事を語りければ、遠山大に驚き、源六兄弟を逃さじと犇きしに、合圖相違して、夜に紛れて岩槻の城に落行きたり。謀の洩れ易きは、敗を取る基といへり。町人・愚智の僧・下郎の女、此等は臆病にして慾深く、思詰(おもひつめ)なき者なれば、大事の祕計をば、容易く語らぬものとかや。

遠山は、小田原に早馬を立てゝ、告げたりければ、氏康・氏政父子大將として、永祿七年正月七日の早朝に、伊豆・相模・中武藏の軍兵を率して押出でらるゝ。太田美濃守入道は、同名源六兄弟を先にして、我子郎等二千餘騎を率して、里見が陣に馳せ加は

北條氏康
里見義弘
鵠臺對陣

る。遠山丹波守・富永三郎左衛門・高木治部少輔は、小田原勢を待合すべきに及ばずして、はや打立ちて、からめきの川端に、流を隔てゝ對陣す。房州里見の軍勢先手五千餘騎、鵠臺の麓より人數を繰入れて、中段に備へたり。遠山・富永之を見て、敵は退くぞと心得、さしも高き鵠臺を、一刻に押登り、一息繼いで見上ぐれば、態と難所に引うけん爲の支度なり。敵を能き圖に引うけ、房州方正木大膳大夫眞先に駈出でたり。黑川權右衛門・川崎又次郎・太田源六・同源三郎・同源四郎・長南七郎などいふ大力武勇の剛の者、鬨と喚いて、一面に打つて懸る。小田原は敵を笠にうけて、次第次第に負うて上らんとす。房州方敵を見下して、散々に打つて廻る。太田源六は、遠山丹波守を始めて、進む兵六騎、馬上より切つて落す。北條方相州無雙の大力志水馬之丞とて、剛强の兵、栢の棒に筋金入りて打振り、太田源六に寄合ひ、暫し戰ふと見えしが、源六が持ちたる太刀の鍔元より打折られ、叶はじとや思ひけん、貝吹いて逃げたりけるが、餘りに無念の事に思ひ、常に祕藏して持ちたる鐵の棒の、長さ八尺にて、七寸廻なるを提げて、志水を打落さんと、乘廻し〳〵尋ぬれども行合はず。此

上はとて、當るを幸に、向ふ敵の甲の鉢、鎧の胴中、人馬共に尻居に打据ゑ、横手に拂ひ、薙倒し打伏せければ、手負死人いやが上に重なれり。太田下野守は、源六が勇なりけるが、小田原の先手にありて、源六が有様を見て、駒駈寄せて、いかに源六殿、餘りに正なくも謀叛せしものかな。科を悔えて降參し給へ。某命に代へても申直すべし。今日の働、嚴しう見えて候。さり乍ら、人をこそ討ち給ふとも、馬には科なきに、無用の罪造りし給ふものかなと、言葉をかけゝれば、源六呵々と打笑ひ、いしくも宣ふものかな。今は仰に任せて、人ばかり打ち候はん。さらば試みにうけて見給へとて、鐵棒を取延べ丁と打てば、下野守も心得たりとて、太刀にて打受けんとしけれども、大力に打たれて何かは耐るべき。甲は碎け乍ら、首は胴へにえ入りつゝ、前なる深田へ、轉び落ちてぞ死にける。之を始めて富永三郎左衞門・山角四郎左衞門・中條出羽守・河村修理亮以下、屈究の侍百四十騎討死しければ、既に引色になりける所に、北條上總介、黄八幡の旗をさし、横合に切て懸る。里見の先陣新手に駈立てられ、しどろになりて引きければ、二陣入變りて切つて出でたり。大將氏政釆を上げて、

上總討たすな、續けや〳〵とて出で給へば、小田原勢氣を直して、四方八面に切つて廻る。里見方五十餘騎討たれたり。上總介は、木村・堀內・佐枝・横江・間宮以下、主從十四五騎に討なされ、日旣に暮れければ、兩陣相引に退きて、人馬の息をぞ休めける。房州勢は、今日の軍に、北條方のよき侍大將數多討取り、總大將里見義弘父子を始めて、大に勇み喜びて、小田原勢は、定めて鹽をつけ力を落し、手負の看病して、明日は寄せ來るべからずと心を許し、馬の鞍下し鎧脫ぎて、陣屋々々皆酒宴して、休み居たる所に、北條氏政の舍弟由井源三殿の侍に、横江忠兵衞・大橋山城守といふ者、敵陣に忍び入りて、懇に見て歸り、氏政に申しけるは、敵、昨日の戰に打勝ち、諸軍酒宴して喜をなし、小田原勢手懲して、今日はよも寄來るべからずと、油斷し候ぞや。馬の鞍下し鎧を脫ぎて、打解けて見え候。疾く其不意を討てといふ事の候。早く押詰めて、追落し給へとぞ勸めける。氏政尤然るべしとて、明る八日の卯の刻に、父氏康と二手になりて打立ち給ふ。折節空曇り霧深かり〔ければ脫カ〕、四方闇くして、物の色目も見え分ねば、小田原勢近く詰懸くるも知らずして、甲を枕にして、高鼾かきて伏

したるものも多かりけり。氏康・氏政兩軍差懸りて、鬨をどつと作りて切立てしに、只今敵の來らんとは思も寄らず、周章ふためきて起上り、鎧よ太刀よ馬に鞍置けといふ間に、敵はや隙間もなく打つて入りしかば、立合ふ迄もなく、我れ先にと落ちて行く。小田原勢の中に、山角伊豫守といふもの申しけるは、昨日の合戰に、正木大膳と名乘つて、手柄を振ひし兵あり。味方多く討取りたり。今日必ず正木が首は、某取つて見せ奉らんといひけるを、彼の正木は、里見家に名を得し武勇の剛の者なり。心安げに取たり〔いひたりか〕と嘲笑ふ人もありけるが、案の如く山角眞先に進みて、正木に渡り合ひ、首取つてぞ歸りける。正木が子息左近大夫・同平六・同平七・菅野甚五郎・里見民部少輔・同舍弟兵衛尉と、聲々に名乘つて切合ひ突合ひ、一足も引かず討死す。大將義弘は、進む敵三騎切つて落し、五騎に手を負はせ、自身の働き、猛賁が威を振ひ、關羽が怒をなしける所に、馬を射させて下立ち、旣に危く見えしが、安西伊豫守馳せ來り、向ふ敵を打拂ひ、我馬に大將を乘せ、我身は歩にて、上總山へぞ落行きける。義弘の馬に、御紋の鞍を置きながら、射殺されて打倒れ、主君は見え給はね

ば、さては討たれ給ひけり。今は誰が爲に落ちて、故鄕には歸るべきぞ。たゞ討死して、冥途の御伴申さんとて、勝山豊前守・秋元將監・加藤左馬允・長南七郎・鳥井信濃守・同子息惡左衞門・佐貫伊賀守・多賀越後守以下皆引返し、卄餘人一所に集り、敵を討つこと七十四人、勢力疲れければ、思ひ〳〵に討死す。太田美濃守・同名源六兄弟仰甲（のけかぶと）に戰ひなして、薄手少々負ひければ、東西に別れて落ちて行く。其頃の落書に、

鎧ひつゝ賴む弓矢のいはつきて辛き憂目に太田みのはて

とぞ詠みたりける。北條方に討取る所の首、雜兵合せて五千三百二十餘とぞ記したる。今度里見家重代の太刀、大きつかた小きつかたとて、二振ながら失せにけり。味方分捕の太刀刀の中を搜しけれども、終に見えざりけり。氏康殘り多く、無念の事にぞ思はれける。軍散じて太田源六宿所に歸り、妻の女房に向ひ申しけるやう、和主（わぬし）が父下野守殿、某に諫の言葉をかけられしかば、鐵棒にて甲の鉢を打ち參らせしが、痛み給ふらんと語りければ、女房大に驚き、こはいかに、父をば打殺し給ふらん。情なのことやとて、下人を遣して尋ねしに、深田の中に瘞れて、頭は甲と共に打

碎け、胴の中ににえ込みたりしを、泥に塗れ乍ら、葬禮して佛事營み、女房は髮を剃り尼になりて、菩提を深く弔ひける。此女房の建立せし寺とて、武州江戸神田の淨心寺に、尼の木像今にこれあり。

四　日本鐵砲の始

凡そ天地の間、血氣あるもの、牙を含み角を戴き、爪を備へ距を具す。角あるものは突き、牙あるものは咬む。毒あるものは刺し、蹄あるものは蹴る。是れ皆天性のうけたる所、其身を守り怨を防ぐの備なり。人に情あり、心に違ふ則ば怒り怨む。止むを得ざる則ば、互に爭ひ共に戰ふ。強きは弱きを從へ、勇なるは悴せたるを犯す。人に筋骨の堅き爪牙の利なし。此故に金革を以て甲冑を作り、銅鐵を以て刃とす。それより工を細うして、武備の具さま〴〵なり。旌旗は目を敎へ、鐘鼓は耳を敎ふ。敵の近きは劍戟を以て殺し、遠きは弓矢を以て弊す。良將智謀を廻らし、士卒號令を守り、進退其圖に當り、暴逆の賊讎忽に亡ぶ。軍陣の武備、由來すること久し。爰

に此頃酷烈無比の兵具、鐵砲と名付くるものあり。其濫觴を尋ぬるに、異國の夷、西洋紅夷の蠻國より出でて、大明の太祖皇帝洪武年中に、木鷄子國より獻上す。大祖之を用ひて、向ふ所に敵なし。此故に神器と名付け、無敵大將軍と號して、大內の重寶とす。是れ日本にいふ石火矢の類なるべし。其上蜀の諸葛武侯、專ら火器を重くすと雖、孫子は火攻を以て下策とせり。今の鐵砲は又其類異なり。其後佛狼國より出づるものを、佛狼機と名付け、重ねて西洋より工を精うせし物を、西洋砲又は紅夷砲と名付く。猶其術を盡して、三眼鳥銃威遠砲等數十種の物あり。或は火箭火神は、空に飛ばせて敵陣を脅し、或は地雷滾地龍は、土中に埋みて敵を惱す。長短輕重の不同、攻守戰鬪の武備、藥石の斤兩、彈丸の大小、各其方法あり。敵未だ遠く備へたるも、一度放ちて之に當るもの、貫かれ通されて、倒れずといふ事なし。實に軍伍の長技として、此物なくばあるべからず。抑今日本に傳はる事、中古龜山院の御宇文永二年に、大元の老皇帝、兵船七萬餘艘に軍勢を乘せて、筑紫の博多の津に押寄せて、日本を討たんとす。菊池・大伴・松浦黨、出向うて防ぎ戰ふ所に、大元の軍中より、

鐵砲とて、鞠の勢なる銃丸を、一度に二三千投げ出す。其程走る勢は、坂を下す車輪の如く、霹靂する事、閃々たる雷光に異ならず。偏に迅雷の鳴渡るかと覺えしが、日本の軍勢等多く燒殺され、闕櫓に燃えつゝ、火を打消すに暇なかりければ、日本之に辟易したりと聞傳ふ。此時始めて鐵砲といふ物ありと、本朝にも知りたり。正しく日本に傳へしは、永正七年の頃、駿州小田原の山伏玉龍坊の法印賴慶といふもの、和泉の堺にして買求めて、北條氏綱に參らせたり。目當を打たせらるゝに、無類の重寶、破敵の神策なりとて祕藏せらる。西國浪人井上新左衞門といふもの、武田信玄に進上しければ、武田・北條の兩家、之を武備の最長とす。加地大膳・同又作兄弟、是れ西國浪人にて、武田の家に來りて、鐵砲の指南をいたし、根來の杉坊、北條家に來りて敎へたり。和泉の鐵砲鍛冶、我も〳〵と伊豆・駿河・相州・甲州に降り集り、鐵砲あまた張出して賣りけるより、諸國に廣くなりしかども、習ひ熟する人少なかりしに、信州村上の家にも、鐵砲を求め得て、去ぬる上田原の軍に、武田勢を追崩しけるとかや。それより後の合戰には、家々之を打つと雖、さして手垂(てだれ)はなしと聞ゆ。

漸々世に廣く行はれ、武の飛道具の第一として、矢にからくり槍にあやつり、鍛錬日に添ひて精うなれり。武篇をかせぐ兵共、討死多くありといふ。誠に烈しき兵具、之に過ぎたる物はなし。臆したるは、音に恐れて色を失ひ、勇なるは、面に進みて打殺さる。是より策を巧出し、防ぎ止むることになれり。後世又如何なる巧をか仕出さんと覺束なし。

五　小幡尾張守不レ易レ妻附後漢宋弘が事實

上野國の住人長野信濃守業正(なりまさ)は、在原中將業平朝臣の後胤として、上杉家譜代の舊臣、智謀武勇の名將として、久しく當國に居住し、一族門葉あまたあり。和田・岡本・厩橋等皆長野が聟となり、小幡・葦田も門族にて、上州箕輪に在城せり。此城は椿山大明神の山の尾崎を取りて城郭とし、箕手(みのて)に似たればとて、箕輪と名付けたり。上杉家衰敗して、諸將諸侍、皆武田・北條の手に屬せしかども、猶心を變せず忠を爲し、武州に太田美濃守資正入道三樂、上州に長野信濃守ばかりぞ、城を守り壘を深くし、

人數を集めて立籠り、上杉還住の嘉運を願ひ、宿望を達せんとぞ謀りける。甲州武田信玄、箕輪退治の爲め軍勢を出し、既に七年迄攻めらるれども、終に打負けず、堅固に城を持ちければ、武田は今は早・攻倦んでぞ覺えける。同國嶺城には、信濃守が聟小幡尾張守重定、一千餘騎にて立籠る。これは上杉第二の家老として、忠義を存せし者なりしを、相聟同名圖書佐と快からず、折々は長野にもあしざまに讒しければ、長野も之を惡み出でて、去ぬる永祿三年五月に、尾張守を追放しければ、力及ばず、妻子を連れて、甲州に賴み來る。武田晴信入道信玄、此頃上州を心に懸けらるゝ時節なれば、手段の爲にや、信州小日向にて、五千貫の地領を與へ、同九月に、信州上野の境南木に砦を築き、尾張守を入置かる。同六年二月に、武田信玄一萬三千の人數を以て、嶺城に押寄せ、一擧の謀を以て、小幡圖書佐を攻落し、尾張守を還住せしめらる。重定宿望を達して、愈忠義を勵ましけり。或時信玄は、內藤修理・原隼人を遣して、小幡を召して仰せけるは、小幡は上杉家の舊臣の末なり。今既に武田の家に屬して譜代の如し。忠信私なき所、信玄も能く見知り、他に異なる恩顧を施して、其意を

賞せらる。然れば當家伺公の上は、敵人長野信濃守が女を妻とせんこと、家につき身の爲め、其理なきに似たり。早く妻を離別すべし。武田譜代の者の中に、然るべき緣篇のこと、計らせ給ふべしとありしに、尾張守、畏りて返答しけるは、重定誠に上杉譜代のものと雖、憲政の行跡人望に背き、家運傾きて荒亡すれども、知り給はず。重定之を思ひ疎み候所に、越國の輝虎大に惡み、相督圖書佐私欲の謠を構へ、長野と一味して嶺城を追放す。信玄公の恩顧に依つて、本領に還住せり。厚惠更に譬ふるに物なし。重定身を粉にし、骨を碎きても飽足らず。當家の御大事に臨みては、一命を奉らんこと、鴻毛よりも輕く候べし。況や其外の事、いかなる仰なりとも、否とはいかで申すべき。さり乍ら此女は、重定が舊妻として廿七年に及ぶ。子供あまた育て候。一旦嶺城に出し時、父長野に勘當を蒙り、力なく重定に從ひ甲州に來り、艱難困窮の勞を遂げて、漸く本地に安堵いたし候。年頃内外の事に付けて、露ばかりも見限りたる振舞なく、今日迄添ひ來り候。只今離別仕らば、長野には勘當いたして、歸るべき宿もなく、道の邊に倒れて、飢死候べし。此女の恥は、皆小幡が恥にて候へ

ば、枉げて御免を蒙るべく候とぞ申しける。昔後漢の光武帝の妹胡陽公主、新に寡となり給ひけるを、宋弘といふ臣下に嫁せんとして、御前に召して仰せけるは、貴くして交を易へ、富んで妻を代ふることは、人の情なりやと。宋弘申しけるやう、貧賤の交は忘るべからず。糟糠の妻は堂より下さずと。是に依つて其事止みにけり。今の小幡が志も、情あり義ありと信玄深く感じて、尾張守を上總守に轉じ、女をば典厩信繁の子息信元の妻となされ、一家の好(よしみ)をぞ結ばれける。

六　長野信濃守卒去附箕輪城歿落

長野信濃守業正は、上杉憲政、平井の城還住の運を謀り、忠戰の功を勵ますと雖、終に本意を達せず。去ぬる永祿五年十一月の初より老病に攻められ、百計の治療、分毫の奇效なし。子息右京進を召して遺言するやう、我れ此年來身命を顧みず、敵を四方にうけて、怨(あた)を州に退け、君主上杉管領を、再び還住せしめ奉らんと願ひしに、思ふ所は只あらましし事となり、空しく青天白日の下を辭し、既に冥土黃泉の巷にさまよ

ひなん。然れども此憤は、未來際を極めても盡すべからず。我死せば、一聚の塚に築き込め、卒都婆をも立つべからず。佛事をも營むべからず。一人なりとも、敵の首を切懸けて祀るべし。あなかしこ、敵にばし降參すな。運盡きなば、敵に向ひて快く討死せよ。是れ我が爲の孝養なるべし。あら苦しやとて口を開き、大息つきける其熱は焰の如し。眼を見詰め手を握り、齒を喰絞りて死しけるこそ恐しけれ。隔生即忘とは說き給へども、慙念無量劫の報は、轉劇大怨を聞く時は、後世の有樣さこそあらめと、思ひ遣るこそ悲しけれ。武田入道信玄は、安中・松枝の兩城を手に入れられ、此勢に、箕輪の城を攻干さんとて、都合其勢二萬餘騎、同七年二月下旬、追手搦手押詰めて、鬨を作りて一刻に攻上る。城中にははがねを鳴らす剛强の勇士一千餘騎、ただ討死と思ひ切つて、大將も軍勢も、中々驚く景色もなく、寄手を近く引うけ、鐵砲五十挺を一同に打出す。先手卅餘人打殪され、其外手負多く出來たりければ、叶はずして引退く。城中又屈竟の射手八十餘人差顯はれて、散々に射ければ、寄手射白まされて色めく所を、城兵二百餘騎切て出でたり。飯富三郎兵衞が同心に、大熊備前と

名乘りて、眞先に進み、二百餘騎を、木戶の內へ追込みけり。猪子才藏と名乘りて、大熊に續いて攻付けしかば、城より放つ鐵砲に、脇腹を打拔かれ、倒れしかば、城兵五十餘騎、首を取らんと驅寄する。寄手の中より、廣瀨鄕左衞門といふもの馳來り、猪子を引立て立歸る。三科傳右衞門、進む兵を突伏せ、抑へて首を取る。大熊其間に、城兵五人を突伏せ、首を取りたりしに、指物を落して取りに歸る。城兵之を拾うて差上げ、此指物欲しくば、近く來れと呼はる。大熊引返し、大勢の中へ驅入りつゝ、蜘蛛手十文字に突立て、終に指物取返し、其首を取り、味方の陣へぞ歸りける。寄手の二陣城の伊庵は、舍弟忠兵衞を討たせて、安からず思ひければ、五十餘騎、群りたる敵の中に馳入りて、八文字に突破り、輪違に驅廻り追捲りければ、五十騎、木戶の內へ逃入りけるを、首七つまで打取り、槍の柄の撓みたるを、膝に乘せて押直し、突出づる城兵を待ちける有樣、樊噲が怒を欺き、趙雲が膽を拉ぐ、遖れ大剛の兵かなと、敵も味方も感じけり。伊庵討たすな者共とて、同勢鬨を作り、懸太皷の拍子えい聲を合せて攻懸れば、城中より雨の如くに矢を放ち、鐵砲を打出す。寄手物ともせず、木戶

逆茂木を引破り、押入らんとすれば、木戸五六本切落し突退くるに、手負死人いやが上に重なり、木戸口に横れり。鬨の聲矢叫の音に、城中の女童共恐れ悲み、こは如何すべきと、消入るばかりの風情なり。只今討たれたるは、それの夫よ、たれがしの兄は、首を取られたりなんど聞ゆれば、其妻や子供は、聲々に泣叫ぶ。いかに猛く勇める人も、足手も萎ゆる心地して、物も更に辨へず。敵はや城中に込入りければ、さしも二心なき兵共も、思ひ〱に落行きける。義を知り命を輕くする、譜代被官の郎從ばかり、僅に殘り止まる。椿山の方には、四郎勝賴初陣にて向はれ、長野が家老藤井豊後守に組んで、上を下に組合はせしに、原加賀守駈付けて、抑へて藤井を打取りたり。城の大將長野右京進は、生年十九歲、心も剛にありけり。今を限りの死狂に、敵を討つ事十八人、鎧に立つ所の矢をも拔かず、疵の口より流るゝ血に、白糸緘は、朱の血潮に染返し、しづ〱と本城に引入りたり。切拔けて落つるならば、落つべかりける事なれども、いつまで命を存(ながら)へて、賴むべき世とも覺えずとて、持佛堂に向ひて、念佛高らかに唱へて、腹搔切つて伏したり。郎等共、痛手薄手負ひければ、皆此迄

武田信玄箕輪城を陷る

なりとて、思ひ〱に自害して死したりしかば、城は落ちて戦は果てにけり。西上州七郡を、武田の手に入れられ、たま〱殘る諸將等、長野・大戸・和田・五干(かん)・上田・倉金・高山・白倉、悉く降參して、信玄の下知にぞ從ひける。上杉家譜代忠義の輩、絕え果てけるこそあさましけれ。

七　上杉輝虎解臼井圍附池和田城退去

同年九月上旬、越國上杉輝虎八千餘騎を率して、總州臼井が城に取懸けらる。城主原上總介折節無勢なりければ、松田肥後守未だ孫太郎とて、和田の城にありけるが、早馬を立てゝ加勢を乞はれければ、松田八百餘騎にて馳來り、輝虎を防ぎしかば、城を解(ほど)して引返さる。原・松田打つて出でつゝ、跡を追うて喰止めしに、越後勢取合はずして歸りにけり。北條氏政聞付けて、一萬餘騎にて發向せられしかども、軍散じければ、下野國に入りて、陣を居ゑられたり。宇都宮・結城・小山の諸將、其外常陸・下野の士卒等、旗を卷き甲を脫いで、北條家に屬せしかば、人質を取りて、小田原に歸陣

せられし所に、里見義弘が家人多賀藏人、上總國池和田の城にして、兵を集め旗を上げ、近郷を掠めて兵糧を運び取り、諸方の砦を脅すと聞えければ、氏康・氏政父子、一萬五千餘騎を率して攻下り、池和田城を取卷き、一日一夜攻められしに、城中に返忠のものありて、陣屋に火をかけしかば、折節大風吹き廻し、矢倉も木戸も一同に燃え上り、黒煙天に被ひ、猛火地に布きければ、軍兵等すべきやうなく、後の木戸より皆落失せたり。大將多賀藏人も、郎從廿三騎と打連れて、房州に落行きけり。

八　成田氏長追放父長康

忍の成田上總守長康は、武藏國の住人にて、篠黨の旗頭なり。長康が父中務入道宗蓮が時、忍の大極某を討つて、城を築きて居住せしかば、武勇の威風盛に仰ぎ、酒卷・中條・別府以下忍の諸將、皆成田にぞ從ひ附きける。長康が代に至つて、威勢愈高大なり。長尾景虎、既に上杉と稱する刻、一番に屬して下知に從ふ所に、鶴岡の社參の日、景虎に面を打たれ、上杉に怨を含みて、北條に屬しけり。景虎愈怒つて、長康が居

城近く盃尾といふ所に砦を構へ、木戸源齋を籠置き、人數を差添へて、成田と戰ふこと度々に及ぶ。或時成田長康父子、軍兵を率して盃尾に押寄せたり。岩槻の城主太田道譽後詰して、成田を追拂ふ。長康遺恨止む事なく、いかにもして木戸源齋を打殺し、盃尾の砦を踏破り、此恥辱を雪がんと、時節を待ちて隙間を窺ふと雖、更に本意を達せず、長康老後まで隱居せずして年を送る。子息五郎氏長、家臣豐島美作守を呼びていひけるは、我いつ迄か家督をも受けず、年月を重ぬべき。さもあらば悔ゆとも詮あるべからず。然るに父長康の有樣、終には舍弟助三郎に、世を讓らんと思へり。只押して隱居せさせ、家を嗣がばやと思ふなり。いかゞ計らふといひければ、美作守諫め申しけるやう、誠に仰はさる事にて候へ共、何しに助三郎殿へ、御世をば讓らせ給はん。今より愈孝心を以て、時節を待ち給へと申しければ、氏長大に怒り、昔の例はいふにも及ばず、近代武田晴信は、父信虎を追出し、甲州の家督を奪ひ、今は世に名を得し良將といはれて、武威を諸方に輝せり。我も父を追放し、世を取りて名を施さん。無用の諫をいたすものかなとて、同九年八月十五日、月見の爲とて、父

長康は城外の別業に出でて、終夜月を眺め、心を慰めて歸りける所に、城門を閉ぢて入立てず、長康は水道より潜りしかども、流石に父子の中別條もなく、仔細を聞遂げ、扨は我所爲の惡き故ぞとて、家督を讓り髮を剃りて、隱居閑散の道人となりにけり。太田道譽も和睦して、氏長を聟に取り、親しき交をぞいたしける。

九　輝虎入道養子附上杉・北條和睦

同十一年三月、上杉輝虎入道謙信、家老の面々を召集め、軍評定せられける次、直江山城守諫言を奉りて申しけるは、我君年頃村上・上杉兩家に賴まれ給ひ、武田・北條の兩敵に向ひて軍を起し、義兵を進め、歲霜既に卅九歲になり給ふと雖、徒に鷄肋の費に乘り、空しく樓氷の功を積み、身心疲勞し給ふのみにして、別に見えたる色もなく候。是れ全く軍道未練にして、謀策淺拙なる所にあらず。偏に上杉・村上の運命開くまじき故にて候。然らば人の爲め義の爲め武力を疲らし、國の爲め家の爲め兵氣を損じ給ふものか。費ありて利なし。暫く武田・北條の對陣を止め、加賀・越中・佐渡・庄內

の方へ御發向候て、國郡を打鎮め、諸將を招き從へ、時を待ち運に乘じて、世の變を窺ひ給へかしとぞ申しける。謙信も實にもと思ひ給ふ所に、甘糟近江守申しけるは、此儀誠に然るべく候。但此儘差置かれなば、武田・北條兩家の鋒先に、謙信戰ひ倦んで手に餘され、北陸の片邊(かたほとり)、物にも覺えぬ弱敵を打ちて、功を立てんと企てらる。これぞ鳥なき里の蝙蝠よと嘲り笑はゞ、當家弓矢の瑕なるべし。同じくは先づ無事を作りて、秘計を廻らし給ふべきかと申語りければ、柴田・黑川・竹俣以下、一同に此仰然るべう候とて、小田原に使者を遣し申されけるやう、北條家に於て、輝虎更に遺恨なし。たゞ上杉・村上の兩家、賴み來るを以て義兵を擧げ、本領還住の謀をいたす所に、武田信玄に妨げられ、北條氏康之に與し給ふ故に、恨なくして怨(あだ)を結ぶ。輝虎苟も義を守る所に、上杉・村上家運開け難し。其間に加賀・越中・能登三ヶ國の諸侍、隙を窺ひて弊(つひえ)に乘らんとす。彼等を攻め伏せ候はずば、是れ又家門の盜賊たるべし。何ぞ腹心の病疾を忘れて、皮膚の塵垢を厭はんや。北條家若し輝虎に於て、させる遺恨もなく候はゞ、輝虎が怨(あだ)を存して恨を深くせん。然れば輝虎四十歳に及びて、未

上杉謙信氏康の子を養ふ

だ一子を持たず候。氏康は子息數多おはし候。其中に一人を給はり、輝虎が養子とし、北條・上杉兩家水魚の緣を結び、親族の好をなし候ばやとぞ仰遣はされける。氏康家老の人々を召して評定せらる。北條安房守申されけるは、武田・北條一味の交淺からずと雖、信玄狐狼の心ありて、今川に不會し、織田に緣者となり、近きを捨て遠きに與す。當家の爲、終に蠹毒となるべし。幸ひ和を請うて、輝虎親族となり給はゞ、關東を防ぐ人あるべからず。たとひ武田・當家確執すとも、公方管領方人あらば、理運の勝利を取るべき道あり。御思案までもなく、御息の内一人を越後に遣し、御合體を遂げられたらんは、武威長久の基なるべきかと申されしかば、滿座此議に同じ、氏康第七の末子三郎殿を越後に遣し、無事を作られけり。輝虎大に喜び、父子の契約をなし、軈て元服せさせ、上杉三郎景虎と名付け、上杉・北條の兩家、互に音信をぞ通せられける。

十　武田信玄駿州發向附今川氏眞沒落

武田今川兩軍對峙

元祿十二年五月より、武田・今川確執す。其起を尋ぬれば、信玄使を以て、三州の地を所望せられし所に、氏眞過量の返答に及びしかば、信玄大に怒を含み、內々事を左右に寄せて、駿遠三の國郡を、打取るべき宿望あり。究竟の事こそ出來たれ。其儀ならば一家の好を棄てゝ、駿府を追崩し、氏眞に思ひ知らせんものをとて、同十一月六日、三萬五千餘騎を率して發向し、下山通を由井に、八幡坂の左を經て、長坂を打越え、宇都總といふ所に押付けたり。氏眞此由を聞きて、さらば出向ひて蹴散らせとて、庵原左馬進に、二千餘騎を差添へて先手とし、薩埵峠を前に當てゝ、陣を居ゑしむ。岡部忠兵衞・小倉內藏助七千餘騎にて、八幡平を差固め、總大將氏眞は、二萬五千餘騎にて、淸見寺に陣を取る。今川家舊功恩顧の輩、一族家老廿一頭、都合三萬四千餘騎、股肱金鐵の勇士共、今日を大事と出向ひ、甲の星を並べ鎧の袖を重ねて、陣を固めたる軍勢、宛ら雲霞の如くなり。いかさま手痛き合戰あるべしと、固唾を呑んで思ひける所に、武田の先陣の旗の手、微に見ゆるぞと、いふ程こそありけれ、後陣に控へたる今川の家老朝比奈兵衞太夫、陣を拂つて駿府に引入りたり。之を見て、前後に隙

間もなく取續きたる諸軍共、何とは知らず引拂ひ〳〵、皆駿府に歸る。庵原左馬進は、後陣殊の外に群立ちて、引いて歸るは仔細あるべし。八幡平の衆はいかにと、見せに遣しければ、早皆引取りて候といふ。扨は此勢計にては、防戰叶ふまじ。駿府に歸り、諸將と評定せんとて引退く。旗本の軍士色を失ひ、落支度をいたせしかば、大將氏眞も力なく、陣を引きてぞ歸られける。朝比奈は、何地とも知らず駈落す。殘る廿頭の諸將も之を聞きて、互に色を立て別心を起し、一言の評議にも及ばず、途方に昏れて呆れ惑ふ。武田の先手山縣三郎兵衞・馬場美濃守・小山・眞田・小幡・內藤、三千五百餘騎、江尻を打越え、宇和原まで押來る。駿府の地下町人共、こは如何にとて上を下に持返し、資財雜具を東西に運び、老たる親幼き子供の手を引きて、南北に逃げ迷ふ。城中の男女周章狼狽へ、妻子を持扱ひ、落支度に取亂して、軍を心に懸くるものなし。氏眞もたゞ茫然として、思分けたる方もなくおはしける所に、三浦右衞門佐、手震ひ足戰き色を失ひて、氏眞の御前に參り、こは勿體なき御事かな。逃るべき所には退き、謀るべき所には手段を運らし、進退消息其機に應じ、存亡弛張其變に

今川氏眞逃奔

從ふは、良將のする所なり。未だ一圖の謀もなく、忽に敵の虜となり給はんは、自ら棄つると申すものにて候。一先づ城を立退き、砥城の山家へ籠り給ひ、謀を以て軍を進め、時を窺うて、本意を達し給へと諫めて、僅に五十餘騎を召連れ、駿府を落ちて、砥城の山家に趣き給ふ。殿中の女童、皆步跣にて走り出で、其處とも知らず迷ひ行くを、情も知らぬ下部共、此處彼處に亂れ散りて、打倒し押伏せて、衣裝を剝むくり、手に持ちたる物を打落し奪取りければ、喚き叫び泣叫ぶ有樣、哀れといふも餘あり。駿州山西花澤の城代小原肥前守・遠州掛川の城代朝比奈備中守・藤枝・戶久・一色の城代長谷川次郎左衞門、此等は忠節無二の良臣、武勇剛强の兵なり。小原備中守申しけるは、此大事に臨みて、譜代重恩の輩、主君を打棄て敵に內通して、忠義を忘れたること、人皮畜生といふべきなり。此時我等松柏の忠勇を顯し、いざや馳向ひて武田と戰ひ、一命を棄てゝ、主君の恩を報ぜんといふ。朝比奈備中守申しけるやう、名を重くして命を輕くし、忠を專にして恩を報ずるは、勇士の心とすとは雖、味方は小勢にして敵は大軍なり。主君氏眞未だ死し給はず。猥に戰うて犬死せん

よりは、後の謀を思ひ、時の運を待ち給へ。氏眞公をば、先づ懸川の城に入れ奉らば、幸に要害能く兵糧乏しからず、矢種玉藥も潤澤なり。敵たとひ押寄するとも、容易くは攻干さるべからず。其間に北條氏康、よも空目しておはすまじ。旗を出し、後詰し給はゞ、御運は開き給はんものをとて、氏眞を迎へて、懸川の城に入れ參らせ、城中七千餘騎、固く守り奉る。さる程に同十三日の未明に、武田の先手城近く詰懸けたるに、府内寂返つて人更になし。荻原豐前守・坂本武兵衞、小人頭二人を連れて、駿府の館に駈入り、屛風障子に火をかけたり。折節風烈しく吹きて、雲煙と燃え上る。さしも年頃作り磨きし大厦の構、一時に灰燼となり果てけり。姑蘇城一片の煙、咸陽宮三月の火、呉越秦楚の古も、斯くやと覺えてあさましき。次の日、いかなる嗚呼のものがしたりけん、御館の燒跡に、斯くぞ詠みて立てたりける。

　甲斐もなき大僧正の宮賊が欲に駿河のおひたふす見よ

さこそ末代といはんからに、氏眞は信玄の爲、正しき甥にてましませば、弱き所に力を合せ、親しき好を、疎み棄てらるゝ迄こそあらめ。押倒して領所を奪ひ取ること、

狼心無道の結構、子孫の爲、末いかならんと、唇を返し眉を顰むる人も多かりけり。

十一　北條・武田對陣 附 氏康奪二駿州一

斯くて武田入道信玄は、駿府の籠鼻(かごはな)に旗を立て、八幡・沓原(くつのはら)・宇和原・江尻に陣を取り、軍兵皆休息す。今川家の諸將武田に內通して、人質を出すもの少なからず。此勢に乘りて、興津の橫山に城を構へ、穴山梅雪を入置かる。氏眞の家人庵原彌兵衞は、武道稽古の侍なりしが、信玄に降參して、忠を勵まさんと思ふ所に、御前に召して問はれけるやう、小勢を以て立籠り、大軍をうけて、防ぎ易き城地はなきかと尋ね給ふ。庵原申すやう、此邊近く久野山とて候。後は尾長く引きて深山に續き、三方は岩石峙ち、岸高くして谷深く、水の手更に乏しからず。中に一つの細道あり。羊腸を踏みて歴齒を傳ふ。秦の函谷、蜀の劍閣といふとも、此地には勝るべからず候。一夫怒つて關を防がば、三軍の帥も通ること得難き、要害の名地なり。之に一城を築かれ、十人の勇士心を一つにして、弓鐵砲を懸置かんには、たとひ日本を寄せて攻

むるとも、叶ふまじき所なりと、山本勘介申されて候とぞ語りける。信玄大に喜び給ひ、さらば不日に久野の城を構へよとて、繩張地祭をせさせ、土木の功を遂げられ、兵糧馬の糠藁に至る迄、具に點檢し、今福淨閑父子同心四十騎、雜兵三百七十餘人をぞ籠置かれける。同十二年正月中旬、北條氏康父子、五萬餘騎を率して駿州に赴き、武田を追討し、氏眞を見繼がんとて打立ち給ふ。信玄仰せけるは、氏政は信玄が聟なり。女は死しけれども、國王丸は孫にて侍り。爭か信玄を敵とは思ふべき。別心なき仔細を以て、氏眞が不義を斷り見んとて、寺島甫庵とて辨口才幹のものを、小田原に遣されし所に、氏康旣に出陣あり、三島にて行合ひたり。禮を厚くし言葉を垂れて、樣々謝し申しけれども、氏康父子聞入れられず。しやつに物ないはせそとて、甫庵を捕へて首に繩さし、高手小手に括り上げ、三枚橋に引出し、磔にかけて、駿河に打入りつゝ、薩埵山・八幡平・由井・蒲原悉く追却し、薩埵山に陣取りたり。信玄は、山縣三郎兵衞に、一千五百餘騎を差添へて駿府に殘し、山西の手の抑とし、我身は一萬八千の人數を、興津河原・淸見渡に出して、氏康に對陣し、互に挑み戰ふと

雖、中間に殺所ありて、大合戰なり難く、日數をぞ送りける。頃は正月下旬のことなれば、餘寒烈しく、外山の雪未だ白妙にして、濱風いたく吹絞り、士卒凍え指屈(かゞま)りて、堪へ難く覺えしかば、駿府の地下より酒を買求め、信玄一盃を傾け、諸軍上下に給はりぬ。 北條家は山上に陣取り、軍兵寒氣に堪へ兼ね、麓に下りて蹲り居たる所に、武田方醉の紛れ、いざや一夜討して、敵に目を覺させんとて、二千餘騎、竊に薩埵山に登りて見れば、陣屋毎に人夫共の、焚火に當りて眠り居て、諸軍は麓に集り、寒氣を厭ひて縮り伏したり。 武田勢どつと喚いて陣屋を踏破り、立置きたる武具・馬具・鑓・長刀・兵糧迄も取持たせ、輕々と引返す。 北條方の先手は、鬨の聲に驚き、太刀よ弓よと犇く間に、早皆引取りしかば、諸將各此寒さに怠りて、大盜人に會ひたることよと、頭を振りてぞ悔みける。 其後よりは兩陣、五十騎・百騎・三百騎・五百騎出向ひつゝ、日々夜々に競合あり。 跡部大炊助三百餘騎にて押出で、北條方松田尾張守が八百餘騎に懸り合せて、立足もなく追捲られ、二町計逃崩れ、剩へ松田が勢に犇と喰止められ、取て返さんとすれば、備亂れて足並しどろなり。 引退かんとすれば、敵押懸け

て追詰むる。大炊助詮方なく傾き立ちて、一人も殘らず討取らるべく見えければ、馬場美濃守二百餘騎にて馳向ひ、ひた〳〵と折敷き、一面に備へしかば、松田叶はずして引返す。馬場が同心に鵄大貳とて、根來の住人大剛の兵、信玄祕藏のものなりしが、深く働き打合ひける所に、尻方を鐵砲にて打拔かれて倒れしかば、北條方首を取らんと、廿騎計集りたり。同じき同心に金丸彌左衞門、只一人馳寄り、長身の鑓にて七八人突倒し、大貳を引立て、味方の陣にぞ歸りける。甲府に歸り灸治して、大貳は、腰引き乍ら死なずして、後に飯寄勘兵衞と名乘り、長篠にて討たれたり。斯くて九十餘日對陣し、同四月廿八日、信玄終に軍を引きて、甲府に歸陣あり。北條氏康は駿州に入りて、今川譜代の家臣等を招き、小倉内藏助・森川日向守・久野彈正・阿部大藏少輔に人數を加へて、駿府を守らせ・蒲原・大宮・高國寺・戸倉・宍滋・泉頭・長久保・神田屋敷・善徳寺の城共、要害能く構へ、同心を差添へて、譜代の諸將を籠置かれ、氏康父子は小田原に歸られけり。狗の押へし鶉を鷹に取られ、獵師の罠に懸りし兎を、狼に喰はれしが如く、信玄既に今川を追落し、氏康即ち駿州を手に入れらる。然れ

ば北條・武田の兩家、久しく親好の交をなし、互に加勢して相救はれしに、忽に矛盾を企て、敵對して弊(つひえ)を計ること、人間世界の轉變、昨日の花は昨日の芥となる、亂國の有樣こそ悲しけれ。

十二　今川氏眞行㆓小田原㆒ 附三浦右衛門佐縛首被㆑討

今川氏眞は、懸川の城に入り給へば、舊功恩顧の家人等、諸方より來り集りけれども、猶其中にも敵に內通するものありて、城中靜ならず。動もすれば、根小屋に火を付けて、燒上ぐること度々なり。之を打消すに隙なかりければ、之にては中々立籠りて、敵を防ぐこと叶ふべからずと、案じ煩ひ、小田原に使を立て、賴むべき由申されたり。北條阿波守申されけるは、駿遠兩國の間に、今川家譜代の侍多くして、國家は滅亡し乍ら、志を氏眞に通はす。今當家の手に入られても、全く治りたるには候はず。時節を窺ひ蜂起すること候べきか。氏眞を呼入れなば、諸將皆北條家に歸伏す

今川氏眞を小田原に移す

べし。斯くあらば、信玄いかに駿州を打取らんとせらるゝとも、叶ふべからず。是れ駿州を治むる、一國の人質ならずやと申されしかば、此儀然るべしとて、氏眞を小田原に呼取りたり。今迄附從ひたる忠貞の輩は、浪にも磯にも附かぬ心地して、憤を忍び恨を抑へて、思々に別れ散り、己がやう／＼に身を寄せ、影を隱して日を送る。三浦左衞門佐は、前代義元の世に、上方浪人武藤新兵衞とて、算勘に達せし者を召抱へ、田畠の支配、出納の利德、皆此計らひに任せらる。武藤が嫡子生付(うまれつき)容顏美麗なりければ、氏眞之を愛して、三浦左衞門佐と名付け、文にもあらず武にもあらず、周の董賢、漢の鄧通が佞幸の寵に矜り、亂舞・猿樂・雪月花の戲、茶湯・歌の會・河狩・舟遊・萬の遊興、皆左衞門佐が心を慰め、淫樂酒宴に長じ、風流榮耀に陷り、義元討たれて年重なれども、父の弔戰とて、馬を出されし事もなく、朦々として深く籠り、たゞ右衞門が政道に任せられしかば、目前の利分に、御爲と號して土民百姓を貪り、理なく道もなき法度を立て、家老舊臣に權を爭ひ、讒を構へて追退けしかば、家中の上下恐をなし、殘盃を飲み垢脚を洗ひ、其言葉にかゝらんことを希ふ。國費え民疲れ、上

下倦果てゝ、敵に內通する者多く、さしもの大家、一時に滅亡せり。日來の積惡玆に顯れ、三浦右衞門佐が所行故に、國家亡びたりといふこと、氏眞今思ひ知つて、懸川より突放されしかば、一朝に威を失ひ、片時に權を落し、鎧甲を着してたゞ一騎、三州を指して走せ行く所を、世が世の時にこそ、いかなる大身の輩も、三浦に向ひては、手を束ね腰を屈めて、媚をなし諛ひしに、すはや落人の通るぞと呼はりしかば、村々より出向ひ、百姓共、垢たる鑓長刀を拔きて走り懸る。之は三浦右衞門佐ぞ。過すなと言葉を懸くれば、何條其三浦を捕へて、年來の恨を思ひ知らせよといふ者あり。たはぎ剝りて赤裸になし、突出して恥を曝させよといふもあり。前後より取廻し、已れ主君の寵に矜り、我等の妻子家財迄も、沽却せさせて攻取りこき取り、或時は簀卷水牢、或時は打擲蹂躪、又は夫をさして、つらめしく責使ひし其惡行の報は、來世迄もなく、爰にて思ひ知らせ、嬲殺にせよやとて、馬より引下し、鎧甲太刀をも奪ひ、下の小袖迄引むくり剝取りて、赤裸になしければ、三浦右衞門佐は手を合せ、切て其小袖一つは、得させてたべといふ。若き者共は、しやつに物ないはせそ。高手小手に

縛上げて、木の下に結付け、嬲殺せと罵りけるを、老たる百姓共は可愛氣に、さのみはなせそ。只免して追遣れとて、繩を解きて突放す。命計りは助けられ乍ら、破れたる菅笠を前に當て、千切れたる古菰を腰に纏ひ、泣々夜もすがら、道にもあらぬ田の畦を傳ひ、天に跼り地に抜足して、人に隱れ世を忍び、其處とも知らぬ山際を辿る辿る、手は荆に搔裂き、足は石に蹴破り、朱になりて、漸々三州高天神の城にかゝぐり付きて、小笠原與八郎を賴みけり。初の程こそ世の變を窺ひけれ。氏眞は懸川を開退き、小田原へ行き給ふと聞えしかば、小笠原は城飼郡を押領し、三浦右衞門佐を搦め捕り、年來諸人に慮外無禮の我儘を致し、土民を困窮せしめ、一門の貴族をも、心に叶はねば職を追開け知行を抑へ、君を瞞し政を亂り、上下恨を含み居たり。氏眞の家運傾き、佛神の冥慮に外れ、惡逆無道の罰當れり。命生け置きて、娑婆塞になさんより、疾して冥土に遣し、閻魔の廳の裁斷に任せんとて、人夫共に仰せて、廣庭に引出させければ、三浦右衞門は、霞の如くなる淚を、雨の如くに流し、聲を上げて呼び叫ぶ。こは情なき計らひかな。親とも兄とも賴入りて來りしに、命計りは助け給へ

ゝ歎きければ、小笠原が侍足助長九郎といふもの、斬手にて側に立寄り、さらば何卒申入れて、命をば助け取らすべし。其代りに鼻を殺ぎ耳を切つて許すとも、それとても命が惜しきかと問ひければ、たとひ耳鼻なくとも、命を助けられなば、廣大の御恩なるべしと答へたり。之を聞きける人々、惡き奴かな。彼の汚き心故にこそ、恥を忘れて此迄は落來りけれ。疾々首を刎ねて、不忠不義の佞臣の懲めにせよといへば、右衞門は、身を揉み足擦して、聲をばかりに泣叫び、起臥歎き悲みけるを、最後は今ぞ念佛せよといへども、前後不覺に取亂して、太刀の當所も定まらず、俯伏に押伏せ、搔首にぞしたりける。尸を野邊に棄てたりければ、鳶烏集り、眼を攫み臓を啄み、犬狼群りて、手足を引散らし肉を爭ふ。往來の人之を見て、哀れとはいはずして、自業自得の因果の報、斯くこそあるべけれと、爪彈をし唾を吐いて打通る。されば運に乘じて威を振ふ時は、龍の雲に上るが如く、一旦果報盡きぬれば、數年の積惡、身を責めて免るゝ所なく、尸を叢の中に曝し、名を苔路の下に埋み、恥を後代に殘しける。あさましかりける事共なり。

武田信玄
今川氏康
對陣

十三　武田信玄陣二河鳴島一附津浪被レ取レ旗并落書

同じき六月二日、武田信玄二萬五千餘騎を率して甲府を打立ち、富士の裾野に出陣あり、民屋に火をかけ、韮山口まで働き、同十七日、伊豆の三島在々所々を燒拂ひ、それより人數を進めて、河輪鳴島に陣を居ゑらる。北條氏康此由を聞きて、三萬七千餘騎を率して駿州に發向し、暫く對陣せらるゝ所に、十九日の晩方より雨降出でつつ、夜に入りければ、風交りて横切り、篠を束ねて降る雨、宛ら覆すが如くなり。甲州勢雨皮澁紙にて、陣屋の周(めぐり)を圍(かこ)ふとせし間に、本篝末篝皆消えて、目刺すとも知れぬ暗(くらやみ)の、夜既に子の刻ばかりになりしかば、軍兵共大に疲れて、甲を枕として伏したり。下部共は猶草臥れて、大鼾かきて、前後をも知らざりけり。然る所に蒲原・高國寺、三枚橋の城に籠置かれたる勇士、物慣れたる兵一千三百餘騎、合圖を定め出向ひて、信玄の旗本に忍寄つて、竊に繋馬(つなぎうま)の綱を切り、陣屋に火をさし、三方より鬨をどつと作る。武田方鬨の聲に驚き、すはや夜討の入りたるぞ。一人も洩らすな討止め

よ。鐵砲・弓矢・太刀よ、鑓・長刀よと犇くと雖、燈は皆消えて暗さは闇し、敵とも味方とも見え分かず。陣中へは敵は入らざるぞ。同士討すなと呼はる聲のみ聞えて、取鎮めんとする所に、大水俄に出來り、陣屋に込かゝる。暫の程に腰だけ浸り、我れ先にと高きに上る。騒ぎ立ちて物音も定かならぬに、陣々に飾り置きたる鐵砲・鑓・長刀・鎧・甲・合印・兵糧迄も、津浪に取られ押流され、漲りて逆卷く浪を向ふに渡り、漸漸命を助かり、よもすがら甲府に引返さる。一時の變といひ乍ら、夜討のことはさもこそあらめ。思も寄らぬ津浪に、陣中の武具を皆押流され、能く取亂しぬらん。信玄家重代の寶物には、八幡大菩薩の小旗あり、之を打棄てゝ、北條方へぞ取られける。氏康も、次の日小田原に歸陣あり。いかなるものかしたりけん、甲府御館の門に、一首の歌を詠みて、札に書きて立てたり。

八幡の旗は流しつ名を代へよたけだがほすな逃げた信玄

これはいかさま、北條方より立てつらん。武具を津浪に流したるを、拾ひて手柄と思はゞ、いかほども作りて取らすべしとはいひけれども、武田方、心よしとは思はざ

りけり。

十四　三增峠軍

同年十月上旬、武田入道信玄は、信州・上州・武州三ヶ國の諸士と一味して、北條陸奥守が籠りたる、武州瀧山の城に取懸け、攻められしかども、堅固にして落ちざりければ、終に圍を解きて引取り、小田原に押寄せ、蓮池・揚土邊まで攻入りけれども、城中更に切つても出でず、強く防ぎ固く守りければ、武田の先陣內藤修理亮、既に倦みしかば、たゞ地下の民屋を燒拂ひ、軍を引きて歸りし所に、武州鉢形の城主北條安房守氏邦・同國瀧山の城主北條陸奥守氏照・相州甘繩の城主北條上總介綱成等、軍兵を率して、相州三增峠に待うけ、信玄と相戰ふ。武田方侍大將淺利式部丞信音、眞先に進んで戰ふに、北條方より打出す鐵砲に、胸板を打貫かれ、馬より落ちて矢庭に死す。北條上總介、勝に乘つて追懸くる。曾禰內匠備を鎭めて、北條方の二千餘騎と戰ふ。馬場美濃守突いて懸り、鎚を傾けて揉合ひたり。北條方には、侍大將內藤大和守、

七ヶ所迄手負ひて引退く。武田方小幡尾張守・山縣三郎兵衞六千餘騎にて、搦手より廻りて、後よりどつと駈出でたりければ、前後左右の敵に攻立てられ、北條方敗北して、小田原に引返しければ、信玄は甲府にぞ歸られける。

十五　武田信玄乘取蒲原城附城主北條新三郎討死

同年十二月上旬、武田信玄二萬五千の人數を引率して、大宮通を駿州に發向し、北條新三郎が籠りし、蒲原の城に押寄せて、晝夜三日攻めけれども、城中強く防ぎ固く持ちければ、只寄手のみ手負死人多くして、仕出したる事もなし。武田信玄、さらば和を請うて、引退くべしと思はれけるにや、小宮山内膳・原勘四郎兩使を以て、城中へいひ遣されけるやう、此頃新庄・足柄・湯澤以下九ヶ所の城は、皆信玄に開渡されて候に、此城一つ持固められ候とも、何を賴みとして、久しくは怺へ給ふべき。不日に攻干さんことは、案の內にて候べし。無用の心を抱き、軍兵を損ぜられんより、早く開退きて無事を作り給へ。命計は助け奉るべしとぞ仰遣す。城主新三郎、使者に對

面していひけるやう、某愁に、北條方一族同心の列に數へられ、親父元庵が跡を嗣ぎて、一家榮名の地に住する事、偏に恩顧の惠に浴す。然るに今、是れ事の急なればとて、城を棄てゝ開渡しなば、多年の芳恩を忘れ、往事の忠義を失ひ、空しく亡父の恨は、苔の下に深く、徒に不義の謗は、後代に殘るべし。苟も生きて義なからんよりは、死して名を止めんには如かじ。心に任せて、此城を攻干し給へ。命を限りに防戰して、其後は兎も角も、時宜によるべく候とぞ返答せられける。信玄聞きて仰せけるは、城中兵糧澤山に、軍兵心を合せたると覺ゆるなり。力攻にしては、中々容易く落つべからず。味方の兵多く損じて、敵に利を付け勢を與ふるとは此事なるべし。枝葉の事はせぬに如かず。明日は先づ、駿府の城に取懸くべし。此城は重ねての事にせんと、陣中に觸れられ、既に卷解すべき用意をぞせられける。信玄又仰出されけるは、去ぬる十月、三增峠にして軍に打勝ち、北條方の兵多く亡びしかば、新庄・湯澤以下の城、大に手懲りし、一揆もせず皆開渡し、信玄に手向するものなし。此蒲原の城ばかりこそ強く守りて、攻干し難く覺えたるは、大將新三郎、諸人に勝りて、武勇剛

強なる故ぞかし。明日引取らば、新三郎城より打つて出でつゝ、喰止めらるゝ事あるべし。さり乍ら城兵は、皆臆病神の未だ覺めざる內なれば、大將打出でんとするとも、軍兵は出でまじと覺えたり。若し大將の武勇なるに引連れられて出でたらんには、極めて大事なり。味方は少しも之に取合はずして引取るべし。立向うて軍をいたし、味方の人數を損じたらば、駿府の城を攻むるに難義なるべし。構へて喰止むるとも、立合ふべからずと、武田方の陣中へ、中間頭の者共を遣し、高聲に觸れられたり。城中より出し置きたる忍の者共、城へ歸りて告げたりしかば、城內の諸軍之に乘せられ、信玄さては此城を恐れたりと聞ゆ。明日濱洲賀を引越す時分に、城より打て出づべしといふもあり、只跡より慕うて、喰止めんといふもあり。大將北條新三郎申されけるは、信玄の先陣と旗本の間を取切りて、急に攻めたる程ならば、信玄は度に迷ひ、大宮筋に懸りて、甲府に逃げ歸るべし。先陣は薩埵山にして攻め合ふとも、大將に離れ力を失うて、亂れ立つべき事疑なし。其時緊々と押寄せて、一人も洩らさず討取るべしとて、軍兵の手配をぞ相定めける。信玄は十二月五日の夜半ば

かりに、陣を拂つて打立ちつゝ、明くれば六日の早朝に、由井・倉澤まで押通る。先陣は小山田備中守、手勢七十騎雜兵五百餘人、備を立て押して行く所に、城の大將北條新三郞・狩野新八郞一千八百餘騎、城を拂つて打出でつゝ、武田方先陣と旗本の間を取切つて、小山田備中守と北條新三郞と軍を始め、矢一つ射違へ、鐵砲を打合すかと見えし。兩陣互に鑓を入れ亂れて戰ふ。豫て定め置きたりし事なれば、武田四郞勝賴、後の道場山より、鬨の聲をどつと作りて、蒲原の城に乘入れたり。北條新三郞、引返して城に歸らんとす。備亂れてしどろになる。武田の旗本、後陣脇備むずと固めて突懸る。先陣小山田、鬨の聲を上げて打つて懸る。新三郞前後左右の敵に圍まれ、舍弟箱根の僧少將卿覺胤・狩野新八郞・清水太郞左衞門・笠原・多目・荒川、其外同心被官の輩には、大草右近大夫・新田又八郞・鈴木但馬守・比企大膳・同舍弟圖書・山口宗次郞・石卷彌三郞・石井忠兵衞・南條又十郞・早野玄蕃・二見右馬介以下一千餘騎を、一所に集め魚鱗に備へて、前なる敵を突崩して、駈通らんとすれば、後より追懸つて討止めんとす。取て返して防がんとすれば、小山田備へて押詰むる。武田の

旗本小幡尾張守が二男彈正信氏・落合市之丞・吉田左近・初鹿野傳右衛門、續いて城に乘入らんとす。北條方には狩野新八郎・上原甚太郎・久保宗四郎・加藤助次郎、渡り合ひて突合ひける所に、彈正信氏は、狩野に引組んで討たれ、新八郎は、又落合に首をぞ取られける。北條新三郎を始めて、大將分六人侍二百餘騎、雜兵合せて七百十一人ぞ討はれたり。城既に落ちければ、勝鬨を執行ひ、直に駿府にぞ赴かれける。

十六　岡部次郎右衛門兄弟降二參武田信玄一

今川家譜代の舊臣岡部次郎右衛門・同舍弟治部少輔は、猶も忠義の志を棄て兼ね、氏眞の住み給ひし館の內に要害を構へ、堀を深くし逆茂木を引きて、近習小身の侍、此處彼處に蟄居して、欝憤を世の變に待ちける輩、庵原彌右衛門尉・小原長七・三浦兵部少輔、此等を先として、武勇忠義の侍五十六人、其外中間被官の者共都合四百餘人を、招き集めて籠りければ、信玄既に取懸け、先陣小山田備中守、竹束を突寄せて攻

懸る。城中より打出す鐵砲に、六七十人打倒され、引色になる所を、城兵百五十騎、木戸を開きて突いで出づ。寄手を三方に追散らし、輕々と引入りたり。信玄は、工藤市兵衞・吉田左近兩使を以て、城中に遣し仰せけるやう、今川氏眞愚暗の行跡を以て、既に天命に放たれ人望に背き、國家危きに臨みしかば、信玄深く之を痛み思ふ故に、不義を戒め非道を懲さん爲、軍を起す所に、氏眞怠狀和睦して、非を改むる心はなく、思の外に怯え惑ひ、俄に歿落せられしこと、全く信玄が本意にあらず。爰に北條氏康、傍より出でて之を妨げ、此弊に乘りて駿州を押領せんとす。鷹に搏たれし雉子を、狐の窺ふに同じ。頗る危氣なき仕業にあらずや。信玄之を目覺しく思ひ、打治め追退けたり。氏眞若し昨日の非を改め、今日の是に歸して、正道に赴かれなば、信玄いかでか慇念せざるべき。然るを剩へ、小田原を賴みて居住せらるゝと雖、氏康更に駿府安堵の祕計にも及ばず、今此城に後詰の加勢もなし。岡部以下の諸侍、何の爲に此城を守るべきや。北條にも與せず、信玄に楯を突き、岸を離れし捨舟の、浪にも磯にも片寄らぬ風情かと覺え候。同じくは信玄に屬して、軍功を顯されて然る

べきかとぞいはせられける。兄の次郎右衞門は、たゞ兎に角に討死して、義に畢すべきかとぞいはせられける。

戸は、原上の土となるとも、名を末代に止むべしと申しけれども、舍弟治部少輔只管に、降參して時を待ち給へとて、五十六人の侍衆を引連れ、和降の無事をぞ作りける。章邯は楚王に降りて、秦の國破れ、管仲は桓公に仕へて、齊の地治まれり。岡部既に武田に降參して、駿州漸く信玄の手に屬しけり。

十七 北條氏康・武田信玄死去附簗田反逆幷武田勝頼衰弱

北條氏康死去

元龜元年十月三日、北條氏康卒去せらる。行年五十六歳。無常の嵐忽に起りて、有待の命葉を散らし失ふこと、高きも賤きも、古今皆此の如し。年去り歳來り、同三年に改元あり、天正元年四月十二日、甲州武田晴信入道信玄卒去せらる。春秋五十三歳なり。小田原は氏政其跡を守り、甲州は勝頼其遺跡を相續して、諸方の手扱をぞいたされける。同年の冬、古河公方義氏の老臣簗田中務大輔、下總國關宿の城に居て、

武田信玄死去

軍兵を招き集め、北條氏政に逆心す。氏政、一萬五千餘騎を率して押寄せらる。城兵木造清左衞門以下二百餘騎、切つて出でたり。北條陸奥守が家來大石源左衞門・諸岡山城守等散々に戰ひ、城中に追入りしかば、重ねて首をも差出さず、木戸を下して固く守る。佐竹義重、後詰の爲に馳せ向ふと雖、叶はずして引退く。今は賴み方なくなり果てゝ、兵糧も乏しかりければ、次の年五月十七日、簗田降參して、城を開渡しけり。同三年五月廿一日、甲州武田大膳大夫勝賴は、三州長篠の合戰に後を取り、一族家老の舊臣、譜代被官の勇士一萬三千餘騎を打取られ、武田一家の猛威忽に衰滅し、分國の諸侍皆力を失ひ、郡邑困窮し、土民疲勞せしかば、軍用の助乏しくなり、兵氣の勢弱り行く有樣、危き事、累卵の譬にも越えざりけり。高坂彈正忠之を歎き、さまざま諫言すと雖も、傾く運命の習にや、勝賴更に用ひ給はず。只跡部大炊介・長坂釣閑が邪慾奸曲の支配にのみ任せられ、勝賴は、是非の思慮分別もなかりけり。高坂深く思案して、北條家に手を入れつゝ、和睦の事を整へ、同五年正月廿二日、北條氏政の妹を甲府に迎へ、勝賴の妻室として、一門の好を結びたりしにぞ、少しは安堵の思

をばいたしけり。同六年五月十一日、高坂彈正病死せしかば、武田柱礎の老臣一人もなく絶え果て、跡部・長坂心の儘に振舞ひ、勝賴いよ〳〵剛强に慢じ、悪欲非道の行、日を經るに從ひて益重疊せしかば、貴賤眉を顰めて、上下手を握りて、危み思はぬものはなし。

上杉謙信死去

十八　上杉謙信卒去附景勝・景虎軍 并武田勝賴討二景虎一

上杉入道謙信は、織田信長と一戰を遂ぐべしとて、加賀・能登・越中・越後・佐渡・庄內・飛驒の軍兵を催し、其勢五萬餘騎、三月十五日に、軍立あるべしと定められし所に、九日の早朝、謙信俄に卒中昏倒して、人事を顧みず。上下驚き騷ぎ、藥石鍼灸百計すれども驗なく、十三日終に儚くなり給ふ。春秋四十九歲なり。旣に葬送の事を營まんとする所に、其上北條氏康の子息氏政には、舍弟三郞を謙信養子として、景虎と名付け、又謙信の甥長尾喜平次を、同じく養子として、景勝とぞ號しける。兄弟遺跡

を爭ひ出で、春日山の城内にして雙方立分れ、葬禮の事を打置きて、喜平次景勝は本城に取上り、三郎景虎は、二の郭にありて色を立てしかば、本城より鐵砲を放ち懸けたり。景虎叶はずして、越後の國府御館の城に引籠る。謙信の家老北條丹後守は、同國橡生(とちふ)の城代なるが、馳來りて景勝に諫言し、和睦の事を繕ひけれども、耳にも聞入れず、却て北條を討つべしと犇きければ、丹後守力なく、景虎の手に屬し、越後の善光寺に陣取りしを、景勝八百餘騎にて、夜討して追落す。荻田主馬助に渡し合せ、丹後守手負ひければ、府中の城に落ち來り、翌日死したりけり。北條氏政聞付けて、武田勝賴に牒し合せ、兩將都合三萬五千餘騎にて、景虎を見繼ぐべしとて押出でらる。喜平次大に恐れて、武田勝賴に黃金一萬兩を送り、跡部・長坂に二千兩宛與へて、景勝は、武田の旗下に屬すべしといはせければ、跡部・長坂此黃金に義を違へ、勝賴に申進め、喜平次を妹聟に約諾し、三郎景虎が城に押寄せ、攻殺されけるぞ口惜しき。氏政には舍弟なり、勝賴には小舅なり。さしも近き親類を、黃金の賂に打替へて、義を變じ道を失ひける事よとて、北條・武田、確執に及びたるこそ理なれ。何者か

したりけん、甲府の三日市場の辻に、落書をぞ立てたりける。

無常やな國を寂滅することは越後のかねの所行なりけり

厭ひこし妹背あふ夜の中ならで國に別れの鐘の音ぞうき

上杉四郎憲政は、日來御館の城におはせしを、三郎景虎滅亡の時、一所に自害し給ひけり。武田の家風、之より愈衰弱して、北條家と、度々の軍止む時なし。同十年三月十一日、織田信長の爲に甲州を落され、田野といふ所にして、御曹司太郎信勝を始めて、北の方女房達、譜代の家臣、同時に亡びけるこそ無慙なれ。

武田家亡ぶ

十九　古河公方逝去并天下一統

同年六月二日、明智日向守光秀反逆して、信長・信忠父子、京都本能寺にして生害あり。羽柴筑前守秀吉軍を率して、明智を討ち給ふ。北條氏政・同じく子息氏直は、關八州を治めて世を取らんとす。同十五年十二月廿一日、公方左馬頭病惱に犯され、古河の城に於て逝去し給ふ。鎌倉公方の苗孫九代にして斷絶す。同十八年七月六日、

織田信長信忠自盡

足利義氏逝去鎌倉公方亡ぶ

北條氏政氏直死去

小田原の北條氏政・氏直父子、既に豐臣太閤秀吉の爲に歿落生害して、天下一統に歸し、萬民安全を謳ふといふ。

鎌倉九代後記

元弘三年五月廿二日、相模守入道高時一類、新田義貞の爲に滅亡。將軍守邦剃髮。義貞暫く鎌倉に居す。其後義貞入洛。建武元年十二月廿四日、後醍醐天皇の王子成良親王、關東の將軍として鎌倉へ下向。左馬頭直義尊氏弟執權として、同じく鎌倉に住す。高時が子時行、信州より蜂起に依りて其威に恐れ、同二年七月廿六日成良に具足し、直義鎌倉を發して上方に趣く。遠州に至る時、時行追討の爲に、尊氏京都より下向。直義に會す。時行軍を率ゐて發向、同國にて合戰。時行殁落。尊氏・直義、直に鎌倉に下りて居す。同年十二月、尊氏追討の爲、義貞京都より發向。尊氏・直義、鎌倉を立つて行向ふ。此時義詮を鎌倉留守の主とす。已にして尊氏と義貞合戰。尊氏打勝ちて、延元元年正月十一日兄弟入洛。貞和五年十月廿二日、義詮鎌倉より上洛して、基氏を鎌倉の守護に定むと云々。

基氏 尊氏末子。左兵衛督左馬頭。此時代合戰の事は太平記に詳なり。仍て略す。

貞和五年基氏鎌倉下向。于時十歲。○上杉民部大輔憲顯兵庫頭憲房男高播磨守師冬武藏守師直子兩執事たり。○觀應元年十二月廿五日、播磨守師冬鎌倉歿落。翌年正月廿五日甲州栖溪城にて討たる。其後上杉憲顯一人執事とす。○同二年正月五日基氏判始。世谷原にて旗を揚ぐるにより、元服以前に此儀あり。○同年十月、直義越前より北海道を回りて鎌倉に亂入。同月廿四日直義追討の爲、尊氏京都を發し、同十一月晦日、駿州薩埵山に屯して兄弟合戰。直義打負けて伊豆北條へ歿落。其後和睦す。此時上杉憲顯、直義に屬す。其科を恐れて越後に蟄居す。去る貞和五年義詮上洛、政務に預るに依りて、同年十二月八日直義京都にて剃髮。觀應元年十月十二日夜、京都を逐電、南帝と合體す。同二年三月尊氏と和睦して歸京。同七月晦日又北國へ赴き、同十月八日越前を發し鎌倉に入る。太平記に委し。○文和元年正月五日、尊氏・直義鎌倉に入る。卽ち直義籠居す。○同年二年廿五日、直義鎌倉にて逝去。四十六歲。大休寺と號す。毒食と云々。○同月同日基氏元服。十三歲。直義逝去以後と云々。○同年三月十三日沙汰始。○同二年七月十日、畠山阿波守國淸管領とす。○同年基氏武州入間川下向、卽ち入間川殿と號す。○同年八月朔日、尊氏鎌倉より上洛。○延文四

足利直義死去

年十月八日、畠山國淸入道道誓、南方の敵退治の爲に、東八州の諸軍を率し、武州入間川を發して上洛す。〇同五年、畠山道誓關東下向。〇康安元年十一月廿三日、畠山道誓、基氏に背きて豆州へ歿落。（先年尊氏薨逝の後、道誓思慮して、義詮と基氏兄弟の間不和なるべし。東國の諸軍を以て南方の敵を打平げ、義詮の疑を散すべしと、基氏に諫めて上洛すと雖、皆已に威勢を付くべき隂謀露顯し、諸人の訴に依りて終に基氏に背く。太平記に詳なり。）

上杉管領の始

〇貞治二年上杉憲顯入道桂山管領とす。（去る觀應年中直義に屬す。其罪を免して、越後より招きて管領とす。上杉家管領職の始なり。）〇同年七月廿七日、世良田伊豫守義政、基氏の命に背く。同廿八日討手を向けらる。如來堂にて自殺。〇同四年五月四日長壽寺殿（尊氏法名、關東にて稱す）後室從二位時子逝去。

足利基氏逝去

〇同六年四月廿六日基氏逝去。（法名道所、瑞泉寺と號す。歲二十八。）

氏滿

（基氏男、左馬頭。父基氏逝去以後家督。于時金王、九歲。）

平一揆

上杉憲顯（桂山）管領元の如し。〇應安元年二月八日、武州河越の館に平一揆栖籠る。氏滿（于時金王、十歲）發向。同閏六月十七日合戰、悉く退治。同八月六日、野州宇都宮の城を攻む。九月廿日降參。〇同年平一揆に與する輩、罪科の事、去る觀應年中駿州薩埵山戰功

上杉憲顯死去

兩上杉

上杉能憲死去

の恩賞として給はる新地收公せられ、本領安堵す。又観應に恩賞の地なき族は、本領三分一收公せらる。○同年九月十九日、管領上杉憲顯（法名道昌桂山）、野州足利陣所にて卒す、年六十三歲。（去三月廿八日京都を立ちて同四月五日上州に下着す。）○上杉兵部少輔能憲（憲顯子、重能養子）同彈正少弼朝房（憲藤子、能憲從弟）各兩人管領とす。卽ち鎌倉兩上杉と號す。（朝房は後に上京して卒す。）○同二年九月三日大風、鎌倉大佛殿顚倒。○同年十一日廿一日氏滿元服。○同三年二月十五日、左馬頭滿詮（義滿弟）關東下着、武州米田に陣す。同十月十三日歸陣。上杉彈正少弼朝房・畠山右衞門佐基國入道（得元）、本田より信州へ發向。○同四年十月報恩寺供養、上杉能憲執行す。養父伊豆守重能、去る建武二年建立に依りてなり。○同五年十一月廿八日、管領上杉能憲上洛す。○同六年十一月三日、宅間左京亮重兼卒す。（上杉兵庫頭憲房末子、或說鎌倉管領と云々。）○同月六日氏滿敍爵、從五位下左馬頭に任ず。○同年十二月廿五日氏滿判始。○同七年春、上杉彈正少弼朝房鎌倉より上洛す。義滿公（鹿苑院）九州菊池退治として發向。朝房を京都の警固に定めらる。同年十一月朝房鎌倉に歸る。○永和元年六月廿五日評定、氏滿始めて出座。○同四年四月十七日、管領能憲（法名敬堂道謹）卒す。（歲四十六。）○上杉刑部大輔憲春

上杉憲春自盡

小山義政自盡

能憲弟、法名道珍管領とす。○同年八月廿七日越訴、幷官途吹擧所付長井掃部頭入道道廣、頭人として始めて之を行ふ。○同年十月十五日、大方殿氏満母儀伊豆箱根二所權現參詣。○康暦元年三月十日、土岐退治の爲に、上杉安房守入道道合、憲春弟、俗名憲方、氏満の旗を給はり、關東諸軍近將を率ゐて三島まで發向。○同年四月七日、管領憲春自殺、義満公に對して氏満反逆の志あり。憲春頻に諫言すと雖、許容なし。義満、憲春に書を給はりて、靜謐の事を示さる。憲春書を見て卽ち閉門自殺すと云々。是に依りて氏満心底解けて都鄙和平す。○同月卅日、上杉安房守憲方法名道合管領とす。○同二年氏満左兵衞督に任じ、從四位に敍す。○同年小山下野守義政（イ將）退治の爲に氏満發向、卽ち降參す。○永德元年氏満判を改む。○同年六月十五日小山義政（イ將）退治の爲、氏満鎌倉を立ち、同九月十九日武州に在陣。義政黒衣を着し永賢と號して降を乞ふと雖、遂に來り從はざるに依りて、氏満小山へ發向す。管領道合軍忠あり。○同二年正月十六日管領道合職を辭す。○同年四月十三日小山落城、義政（イ將）糟尾山にて自害す。卅三歳。○同五月朔日、氏満鎌倉へ歸陣、大御堂に居す。○同年六月廿七日、道合管領職還任

上杉憲方死去

す。○同年十二月廿日、氏滿大御堂より御所に歸座。○同三年六月、氏滿竊に瑞泉寺へ隱居の志あり。義滿公之を怪まると云々。○至德三年六月廿六日、義政（將イ）の子若犬丸、小九城に入る。同七月氏滿發向、下總古河邊にて度々合戰、上杉兵庫助憲孝（憲方男、宅間と號す）戰功あり、遂に若犬丸退散す。○嘉慶元年常州宍戸男體城に、小田一族等栖籠る。上杉中務少輔朝宗入道禪助（朝房弟）大將として發向、同十一月廿四日合戰あり。○同二年五月十八日男體城殁落。○同年鎌倉濱大鳥居立つ。上杉安房守入道道合自願なり。○明德二年義滿の命に依りて、氏滿出羽奥州兩國を領す。○同三年四月廿二日、上杉右京亮（兵庫助イ）憲孝管領とす。（道合所勞に依てなり。）○同年十二月廿一日、若宮八幡遷宮。○應永元年十月廿四日、前管領道合卒す。○同年十二月三日、憲孝管領職を辭す。（系圖には憲孝明德三年九月廿六日卒、歲廿六と云々。兩說決せず。）○同二年三月九日、上杉中務少輔朝宗（于時入道禪助）管領とす。○同年十二月廿日、壽福寺炎上。○同三年二月十三日、小山若犬丸重ねて小山城へ入る。同廿八日、氏滿古河へ發向、若犬丸奥州へ退散す。又同國田村庄司追討の爲に、同五月廿七日、氏滿古河を進發して、同六月朔日、奥州白河へ着陣、田村の逆

足利氏滿逝去

徒歿落す。同十九日白河を立ちて、七月朔日鎌倉に歸陣す。○同年鎌倉圓覺寺の佛牙舍利を、義滿求め取る。氏滿抑留すること叶はず。○同四年正月十五日、小山若犬丸、奥州會津にて自害す。同廿四日男子二人、(七歳、五歳、)葦名某之を生捕りて鎌倉へ召具す。即ち六面の澳へ沈めらる。○同五年十一月四日(十月十四日イ)氏滿逝去。(法名道全、永安寺と號す。)

滿兼 (氏滿男、左兵衛佐。一說氏兼。)

應永六年七月廿八日、滿貞(氏滿子、但奥州篠川・稻村兩御所の間未だ決せず)出羽奥州國分の爲め鎌倉を發足、奥州白河に至る。○同年大内左京權大夫、義滿公に對して逆心を企て、泉州堺に籠城の由關東へ告げ來る。是に依つて十一月廿一日、滿兼鎌倉を立ちて、武州府中へ發向す。同十二月廿一日義弘滅亡。○同年義持の命に依りて、滿兼野州足利庄を領す。○同七年三月五日、滿兼武府より鎌倉に歸る。○同年五月廿五日、上杉安房守憲定入道長基(憲方二男)三島參詣、直に上州に赴く。同六月四日乙若君(持仲幼齡)迎の爲め下向、是に依りて長基歸參す。○同月九月八日、斯波左京權大夫持詮、(法名法英、)奥州にて宇都宮氏廣・氏

足利滿兼逝去

公・島氏等を誅戮して、彼等が首を鎌倉に持參。卽ち侍所にて實檢あり。〇同九年、伊達大膳大夫入道某、滿貞（兼カ）に對して逆心す。彼を追伐の爲に、同五月廿一日上杉右衞門佐氏憲、鎌倉を立ちて奥州に發向。同九月五日、赤館城にて合戰す。〇同十年四月廿五日、新田相州を、木賀彦六入道が在所底倉にて誅す。〇同十二年九月十二日、禪助管領職を辭す。〇同月十月八日、上杉安房守憲定（于時入道長基）管領とす。〇同年十二月十七日永福寺炎上。〇同十四年八月廿九日、鎌倉の御所回祿。滿兼、宍戸遠江入道が宅に居す。〇同年十一月六日、圓覺寺炎上。〇同十五年七月十三日、御所新造釿始。上杉右衞門佐氏憲奉行す。〇同年八月廿七日、新造の御所立柱上棟。同月十二月七日移徙。〇同十六年七月廿二日滿兼逝去。（勝光院と號す）〇同日新田某殿を、侍所千葉介、七里濱にて誅す。〇同日前管領禪助遁世、御所中より直に上總國下向、長柄山に閑居す。滿兼逝去に依りてなり。

持氏（滿兼男、左兵衞佐。父歿後家督。于時幸王、十二歲。）

上杉憲定死去

上杉朝宗死去

應永十七年六月廿九日評定始、持氏童形出座なし。○同年八月十五日、滿隆（滿氏三男）隱謀の沙汰ありて、持氏管領入道長基が山内の宅へ入來る。虛說に依りて同九月三日御所へ歸座。○同十八年正月十六日、長基職を辭す。○同年二月九日、上杉右衞門佐氏憲（朝宗男、于時入道禪秀）管領とす。○同十九年三月五日持氏判始。○同年十二月十八日、前管領長基頓死。（沈醉病發して卽日卒す。）○同月廿七日滿隆御堂御所移徙。○同廿年三月六日、濱大鳥居立つ。○同年、奧州伊達松犬丸幷懸田播磨守入道以下の輩退治として、持氏の命に依りて畠山修理大夫、彼國に發向して在陣す。同十二月廿一日、松犬丸等大佛の城を退去す。二階堂幷信夫常陸介鎌倉に注進す。○廿一年八月廿五日、禪助上總長柄山にて卒す。（歲七十六。）○同年十二月廿八日、建長寺炎上、同廿二年三月五日、持氏意見始、○同年四月廿五日、常陸越幡六郎罪なくして所領を闕所あり。禪秀諫れども、持氏承引なし。是に依りて禪秀、翌廿六日より、所勞と稱して出仕を止む。○同年五月二日禪秀職を辭す。○同年五月十八日、上杉安房守憲基（憲定男）管領とす。○同年七月、巷說に依りて諸勢忍びて鎌倉に參集す。無事なるによりて皆退散。○同年八月九日禪秀出仕、○同

上杉滿隆氏憲兵を催す

廿三年八月、上杉右衛門佐氏憲入道禪秀、持氏の叔父滿隆の住所新御堂の館へ行向ひて、謀叛のことを勸む。滿隆も豫て所存あるによりて卽ち同意す。禪秀喜びて虚病を構へ、出仕を止む。滿隆の書翰を乞請け、禪秀己が狀を添へて、密に之を回らす。同意の輩は、千葉新介・新田岩松・澁川左馬助・舞木太郎・大類・倉賀野、武州には丹黨の族幷に荏原・蓮沼・別府・玉井・瀨山・䩮尻、甲州に武田入道、信州に小笠原、豆州には狩野一類、相模國に曾我・中村・土肥・土屋、常州には、名越一黨・上總入道・佐竹の一族・小田太郎・常陸大掾・行方・小栗、野州に那須・越後入道・宇都宮左衛門尉、奥州には篠川御所（氏滿子、但滿直滿貞の間決せず）大將として、葦名・白河・田村・石川・南部・葛西寺の輩相從ふ。又御所中の侍には、木戸内匠伯父甥・二階堂・佐々木等の一族之に與す。同十月二日の夜滿隆並持仲（殿御所又乙の御所と號す。滿兼二男持氏弟なり）忍びて御所を退出、西御門寶壽院へ入る。禪秀、持氏の御所を圍み、殿中に入らんとす。持氏醉中未だ臥せず、木戸將監急ぎ此事を告げて、禪秀が兵を追退かす。其間に持氏は、上杉安房守憲基が佐介の亭へ入る。（或説、十月二日夜滿隆・持仲退出。持氏は翌三日の暮に及びて、岩殿の山路を經て佐介の亭へ入ると云々。此說の時は禪秀十月三日持氏の亭を圍む歟。）其從者は、一色兵部大

輔・同其子左馬之助・同左京亮・故讃岐守が弟掃部助・同甥左馬助・龍崎尾張守・同嫡子伊勢守・品川左京亮・同下總守父子・梶原但馬守兄弟・印東次郎左衛門尉・新田四郎・木戸將監・那波掃部助・島崎大炊助・海上筑後守・同信濃守・梶原能登守・江戸近江守・三浦備前守・高山信濃守・今川三河守・同修理亮・板倉式部丞・香河修理亮・畠山伊豆守・筑波源八・同八郎・藥師寺の常陸・佐野左馬助・二階堂・小瀧・宍戸大炊助・同又四郎・小田宮內少輔・高瀧次郎、都合五百餘人云々。 安房守憲基が亭へは、上杉修理大夫（今按に、八條中務大輔朝顯男修理亮滿朝歟。其外時代相應と考へず）を始として、長尾出雲守・大石源左衛門・羽繼修理亮・同弟彦四郎・安保丹後守・椎助五郎・長井藤內左衛門、其外木部・寺尾・小幡・白倉・加沼・金子・金田・力石等馳集る。 同四日、佐介へ寄來る敵を防がん爲、諸口へ人數の手分す。 濱面法界門へは、長尾出雲守入道並上杉安房守憲基が手勢、海士繩小路へは、佐竹左馬助義憲、（又義人憲基弟）藥師堂面へは結城彈正少弼、無量寺口へは上杉藏人憲長、（顯鼻右馬助憲光男）氣生坂へは三浦介並相模の輩、扇谷へは上杉彈正少弼氏定（伊豫守顯定男）・同子息治部少輔持定、各之を守護す。 同日、滿隆は寶壽院より打出で、若宮小路に陣す。 千

葉新介・同嫡子修理大夫・同陸奥守・相馬・大須賀・原・圓城寺等、米野面に陣を張る。佐竹上總入道・嫡子刑部大輔・次男依上三郎・同尾張守・土佐美濃守・三河五郎等、濱の大鳥居より極樂寺に押寄せ、陣を取る。犬懸入道禪秀が陣には嫡子中務大輔（今按に伊豫守憲方歟。中務少輔持房は禪秀が次男にて、幼年より在京なり、不審）上杉修理亮氏顯（禪秀弟）郎等に千坂駿河守・同子三郎・岡谷豐前守・嫡子孫六・次男彌五郎・同從弟式部大輔・埴谷入道・弟平次左衞門尉・蓮沼安藝守・石川助三郎・加藤將監・矢野小次郎・長尾信濃守・同帶刀左衞門尉・坂田彈正忠・小早川越前守・同甥孫六・矢部伊勢守・嫡子三郎、其外臼井・小櫃・大武・沓懸・太田・神田・秋本・神崎・曾我・中村の族、鳥居の前より東に向きて陣す。同六日、禪秀が軍六本松に押寄す。上杉霜臺、扇谷より出向ひて、岩松・澁川が兵と相戰ふ。彈正が家人上田上野介・疋田右京亮討死す。霜臺深手を負ひ、叶はずして引退く。（後同月八日藤澤に於て自害す。）禪秀勝に乘る。岩松治部少輔、進んで氣生坂へ押寄す。持氏の馬廻梶原但馬守・海上筑後守・同信濃守・椎津出羽守・園田四郎・飯田小次郎等、氣生坂へ打上り防ぎ戰ふ。梶原・椎津討死す。其餘疵を蒙る。飯田・海上・園田、無量寺口にて合戰す。二階堂

尾張守・同山城守、其外駿河・下總の士卒馳向つて相戰ふ。上杉藏人が家來大庭を始め悉く討死す。所々の合戰皆持氏の軍敗北。岩松・澁川が士卒國淸寺を放火す。諸軍火に迷ふ。江戸近江守・畠山伊豆守以下三十餘人討死。佐介の館悉燒失す。持氏は極樂寺へ引退き、其より肩瀨・腰越の汀を經て、相州小田原に至る。土肥・土屋が士卒、出向ひて矢を放つ。一色兵部大輔・同左馬助・今川三河守討死す。同七日、持氏箱根に着く。別當案內して豆州名古屋に至り、或寺に蟄居す。狩野介大將として、走湯山の大衆相加はり、彼寺に押寄せて放火す。木戸將監其外廿人餘自害。其間に持氏は、上杉安房守憲基・佐竹左馬助義憲相從ひて、駿州大森が館に着きて、山林に入りて落行き、國司今川上總介に賴りて、瀨名の奧安樂寺に居す。憲基・義憲は越後へ赴く。其後持氏、禪秀が反逆の事を京都へ告ぐ。又同十一月廿一日に、持仲をば、上杉伊豫守憲方（一名憲盛禪秀嫡子）具足して、武州へ發向す。南一揆・江戸・豐島の輩並二階堂下總入道等一味し、持氏に屬して持仲に背く。同十二月廿五日夜、持仲並伊豫守、入間川より鎌倉へ引退く。上杉安房守憲基は、越州より京都義持公へ訴へて、禪秀以下

上杉禪秀滿隆氏憲等自盡

追討の儀を調ふ。卽ち義持より加勢の兵士あり。是に依りて佐竹左馬助義憲、同十二月十五日に越後を立ちて、同十九日に臼井坂を越え、上州にて度々の合戰に打勝つ。或說、上州にて合戰、十二月十八日同廿二日と云々。○同廿四年正月朔日、滿隆・持仲を具足し、禪秀鎌倉を立ちて、同五日世谷原にて、南一揆・江戶・豐島の輩と合戰。禪秀が軍利あり。同九日又合戰す。今度岩松一族、禪秀に功ありて驕心甚なり。是に依り諸士と不和なる故、逆心のもの多くして、禪秀遂に打負け、其夜鎌倉へ退く。同十日、雪の下にて滿隆・持仲並に禪秀・同長子伊豫守憲方于時十九歲・同五郎憲春・僧快尊鶴岡別當・僧禪瑾皆禪秀子・長尾兵庫助氏春等自害す。族黨凡五十七人、禪秀男女子以上四十二人皆自殺。上杉宮內大輔憲秋禪秀三男・同治部少輔敎朝禪秀四男兩人は、竊に京都に奔りて難を遁る。同十一日憲基管領、還任して鎌倉に入る。同十七日、持氏鎌倉に歸り、淨智寺に居す。同三月廿四日、梶原美作守入道が宅に移る。同四月廿八日御所に歸座す。○同年四月廿八日、憲基職を辭して豆州三島に赴く。○同年五月廿九日、岩松治部大輔、禪秀と與力する殘黨等を相伴ひて出張す。舞木宮內丞、之を生捕りて鎌倉に獻ず。閏五月十三日、瀧口にて

上杉憲基死去

誅せらる。○同年閏五月廿四日、憲基鎌倉に歸參。同六月晦日管領に再任す。○同年持氏判を改む。○同廿五年正月四日、管領憲基卒す。（海印と號す。）○同年五月廿九日、上總國本一揆反逆に依りて、一色左近將監大將として、持氏旗を給はり、鎌倉を立ちて發向す。即ち本一揆退散。○同廿六年、上杉安房守憲基（憲基男）管領とす。○同年正月十九日、上總國本一揆重ねて蜂起に依りて、木戶內匠助大將として鎌倉を進發、三月三日坂水城を攻む。堅固にして落ちず。同五月六日降參す。○同廿七年持氏從三位に敍す。○同廿八年九月、吉見伊豫守甲州に發向す。○同年九月十二日、若宮中島居立つ。○同年十一月十二日圓覺寺炎上。○同廿九年、小栗孫次郎滿重反逆に依りて、上杉三郎重方（憲實弟）發向す。○同年閏十月十三日、佐竹上總入道常元、持氏の命に背く。討手の大將として、上杉淡路守房實（滿方男 憲實甥）行向ふ。比企谷法華堂にて上總入道父子自害、並に家人十三人討死す。○同年上杉宮內大輔憲秋（右衞門佐氏憲子）、己が父の敵たるに依りて、持氏に仇をなすべき志あり。義持公（勝定院）許容あるに依りて關東に赴き、駿州沼津・千本・松原・豆州三島、所々合戰に打勝つて、豆州・相州代官を討つて歸陣す。○

同卅年五月廿八日、小栗孫次郎滿重退治の爲、持氏鎌倉を立ちて、下總國結城に發向。同八月二日城を攻む。滿重歿落す。又宇都宮持綱、滿重に同意するに依りて逃去る。鹽谷駿河守之を討つ。同月八日、桃井下野入道・佐々木隱岐入道等誅せらる。同十六日、持氏結城より武府迄歸陣す。（或記に此時眞壁某も退治と云々。）○同卅一年正月廿五日淨妙寺炎上。○同年三月三日照西堂下向。同五月十日上洛。同九月八日又下向。義持と持氏、和睦の事を調ふ。○同年十月十四日、持氏武府より鎌倉に歸陣す。○同年十一月十一日、奥州福村御所（氏滿子、但滿直滿貞の內決せず）鎌倉へ參上、泰安寺に居す。○同卅二年二月廿九日極樂寺炎上。○同年八月十六日、甲州武田を退治として、上杉淡路守房實、持氏の旗を給はりて發向す。○同年九月八日の夜、鎌倉の御所回祿。○同卅三年二月十四日藤澤山炎上。○同年六月廿六日、武田右馬助信長出張す。一色刑部少輔、大將として甲州に發向す。同八月朔日、武州白旗一揆着陣して一色に加はる。同廿五日信長降參、其後鎌倉に來り從ふ。○永享元年正月卅日淨妙寺炎上。○同年二月十一日、永安寺並大樂寺炎上。○同三年八月十八日、關東にて始めて永享の年號を用ふ。

○同五年三月朔日の曉、武田右馬助信長鎌倉を逐電す。是に依りて同日に、村山氏の某、信長が跡を追ひ甲州へ發向す。○同八年、信州守護人小笠原大膳大夫入道と、村上中務大輔確執の事あり。村上は頻に持氏へ志を通ずるに依りて、村上が合力として、桃井左衛門督を大將として、上州一揆・武州新一揆を信州に赴かしむ。管領上杉安房守憲實之を聞きて、信濃は京都公方の御分國なり、小笠原其守護たれば、村上是に敵對すること謂なし。鎌倉よりの加勢、然る可らずと思ふに依りて、上州は憲實が守護たる故に、彼一揆は出陣すと雖、憲實が計らひにて國境を越えず。是に依りて其事延引す。○同九年、重ねて小笠原退治の爲に、上杉陸奥守憲直(榎本掃部助憲清男)大將として、武州本一揆を差向けらるべき沙汰ありしが、其儀ならず、管領安房守憲實を討たるべき結構の由雜說ありて、憲實が被官人等鎌倉に群集す。是に依りて同六月三日四日以來、猥に騷動す。同七日、持氏、憲實が宿所へ赴きて寬がる。同十五日、陸奥守並其子淡路守憲家は、憲實に恐れて藤澤へ退く。同七月廿五日、憲實が嫡子(七歲)忍びて上州へ下向す。同廿七日の曉、一色宮內大輔直兼も、今度の讒者の張本たる故に、三浦へ

退く。又憲實が家人大石石見守憲重・長尾左衞門尉景仲、今度騷動の本人なり、鎌倉を退き宜しかるべしと沙汰すれ共、憲實之を用ひず。同八月十三日、持氏重ねて憲實が宿所へ來りて、管領職元の如くたるべしと、頻に宥めらる。憲實固辭する事叶はずして領掌す。然れども其年、武州代官につきて施行の事あれども、判形に及ばずして、心底解けずと云々。〇同年十月十七日、常州鳥渡呂宇城を、持氏の命に依りて、佐竹・白石中務丞等之を攻む。〇同十年六月、持氏長子賢王義久元服の沙汰あり。先例、京都にして元服すと雖、初め義持公嫡子義量早世、持氏を養子の約あり。既に義持薨去して、弟義敎を繼子とす。是に依りて持氏、義敎と不和。義敎又鎌倉を亡すべき志あり。此故に持氏先規を黜して、往昔義家の例ありとて、鎌倉鶴岡八幡宮にて、元服の催あり。憲實京都を憚りて、頻に諫言すと雖、承引なく、終に彼實前にて元服の儀を調ふ。諸國より召に應じて、參勤の武士多し。此時を得て、一色直兼・上杉憲直も鎌倉に歸參す。憲實は違例と稱して出仕を止む。弟上杉三郎重方出仕す。其後憲實を誅伐せらるべき風聞あり。是に依りて同八月十四日、憲實鎌倉を發して、上州白

上杉憲實上野に赴く

足利持氏上杉憲實を攻む

井へ引退く。上杉修理大夫持朝扇谷治部少輔持定男・同右馬助憲信右馬助憲光男、隴鼻性順と號す・永井三郎入道・小山田小四郎・那須太郎等、跡を慕ひて上州に赴く。同十五日、一色宮内大輔直兼・同刑部少輔時家、先手の兩大將として、鎌倉を發して上州に赴く。同十六日持氏出馬して、武州高安寺に陣す。憲實白井より京都へ訴ふ。持氏を誅伐すべき旨、義敎の御敎書を給はる。又上杉中務大輔持房禪秀次男一名持憲義敎の旗を給はりて、大將節となりて、東海道を發向す。九月十日、京方横地・勝間田が勢、伊豆國守護代寺尾四郎左衞門同心して、箱根越山し水呑に至る。持氏方大森伊豆守・箱根別當等謀を運らし、惡所に引懸けて數百人討取り、横地討死す。寺尾兄弟疵を蒙る。持氏の命にて、上杉陸奥守憲直大將として、二階堂一黨・宍戸備前守・海老名上野介・安房國の軍士等、大森が加勢に發向す。同廿七日、相州早川尻にて合戰、憲直利を失ひて、家人肥田勘解由左衞門・蒲田彌次郎・足立・萩窪以下多く討死す。同廿九日、持氏相州海老名の道場へ陣を移す。此時千葉介胤直、持氏に諫めて、憲實が歸參の事を謀ると雖、承引なきに依りて、胤直恨を含みて持氏に反く。又京勢箱根山を越ゆる由を聞きて、十月二日、木戸左近

大夫將監持季大將として、相州八幡林に陣を取る。上方の大將上杉持房、同國高麗寺に陣す。同三日、三浦介時高、鎌倉留守の警固たりしが、心を飜して三浦へ歸る。又一色直兼・同時家は、相隨ふ群士皆退散に依りて、同四日持氏の陣へ歸參す。同六日憲實上州を進發す。同十七日、三浦時高鎌倉へ入りて、大藏・犬懸等放火す。同十九日憲實分倍に着陣。同十一月朔日、三浦介時高は、二階堂一家・上杉修理大夫持朝が被官等を相語らひて、大藏の御所へ押寄せ、義久持氏嫡子・滿貞持氏伯父・扇谷へ具足し、鎌倉中を放火す。御所中にて近習の輩、簗田河内守・同出羽守・名塚右衞門尉・河津三郎等討死す。同日、憲實家老長尾尾張入道芳傳鎌倉に赴く。此時持氏海老名より歸陣、葛原にて參會し、合戰に及ぶ所に、持氏、一色持家を使として、芳傳が許へ遣し、直兼・憲直讒人たる間、憲實が心に任すべしとあり。芳傳僞りて和を約し、卽ち持氏を供奉し、同四日金澤稱名寺に入れ奉る。同五日持氏剃髮す。同七日、一色直兼父子三人、上杉憲直・其子淡路守憲家・同小五郎持成・淺羽下野守、皆戰負けて自害す。同十一日持氏永安寺へ移る。憲實が代官大石源左衞門尉憲儀・上杉修理大夫持朝・千葉介

足利持氏滿貞自盡

足利義久自盡

胤直等、相替りて警固す。海老名尾張入道は、六浦引越の道場にて自害す。三戸治部少輔は、永安寺甲雲庵にて討たれ、海老名上野介は、扇谷海藏寺にて自害す。二階堂信濃守は、相模の陣より逐電す。若宮社務尊仲は、今度の讒人たりとて、海道邊にて生捕られ、京都にて首を刎ねらる。○同十一年正月、義教の命に依りて、小笠原信濃守政康・今川上總介範忠(範政子)・武田太郎信重・朝倉小太郎敎景等、諸國軍勢關東發向鎌倉を攻む。上杉憲實軍を率ゐて會す。同二月十日、永安寺へ武士亂入し、持氏(于時四十二歲、後に長春院と號す)・滿貞自害。此時近習面々木戸伊豆守入道・冷泉民部少輔・小笠原山城守・平子因幡守・印東伊豆守入道・武田因幡守・賀島駿河守・曾我越中守・設樂遠江守・沼田丹後守・木內伊勢守入道・神崎周防守・中村壹岐守討死す。滿貞の家來には、南山上總入道・同左馬助・里見治部少輔・今川左近藏人・二階堂伊勢守入道・同民部少輔・下條左京亮・逸見甲斐守入道・石川民部少輔・新宮十郎左衛門尉・岩淵修理亮・泉田掃部助等防ぎ戰つて討死す。同廿八日、義久報國寺にて自害す。(今按に永享十一年正月京勢鎌倉發向の說を用ひば、去歲持氏永安寺に籠居、武士相替りて警固する事不審。)○同年上杉兵庫頭淸方(民部少輔房方四男)鎌倉の管領とす。(淸方は憲實が弟なり。憲實は職を止

結城氏朝兵を擧ぐ

め、（剃髪して長棟庵と稱す。實子幼少なる故に、成長の間淸方を名代に爲さん爲、憲實が所爲にて越後より招きて管領とす。）○同年六月廿八日、上杉安房守憲實、持氏の影前に詣で、燒香落涙して自害に及ぶ。近習の者走寄りて之を止む。同十一月廿日、鎌倉を去つて藤澤に至り、同十二月六日、豆州國淸寺に籠居す。○同十二年正月十三日、一色伊豫守鎌倉を逐電して、相州今泉に引籠る。長尾出雲守景憲・太田備中守資光馳向ふ。伊豫守落ちて行方を知らず。舞木駿河守持廣、一色が同類に依りて、同廿二日、長尾入道芳傳が宿所へ詐り寄せて、之を殺す。持廣が與力赤井若狹守戰死す。○同年結城七郎氏朝、持氏の子息春王・安王、野州日光山に隱れありしを、結城の城へ招き入れ、一門悉く籠城す。彼を退治の爲に、鎌倉管領上杉兵庫頭淸方相催して、上杉固廳鼻性順（俗名右馬助憲信）・長尾左衛門尉景仲兩大將として、同三月十五日鎌倉を立ちて、性順は苦林に陣を張り、景仲は入間川原に陣を取る。又上州・野州の輩、新田・田中・佐野・高階・傍土塚等、其外少々結城に心を合せて、野州足利郡高橋郷野田の要害に集る。是に依りて彼を攻討たんが爲に、上州の守護代大石石見守憲重、彼の國中の一揆を催すと雖、兩方の安否を伺ひて一人も從はず。已にして石見

守手勢計にて出陣す。近所の輩少々馳加はる。同月十九日高橋の城へ押寄す。其夜城兵退散し、國府美濃守兄弟、殘り留りて討死す。同四月六日、安房入道長棟禪門、京都よりの催促に依りて、豆州を立ちて、鎌倉山内に歸參す。同月十九日、管領淸方・上杉修理大夫持朝、結城へ發向の爲め鎌倉を發して、所々催促して軍勢を集む。同廿日三浦介時高、鎌倉警固として馳來る。又上杉中務少輔持房、京都よりの大將として、五月朔日鎌倉に下着す。同月十一日、長棟、武州神奈川まで出陣す。○同年七月朔日、一色伊豫守、武州北一揆を相語らひ、利根川を越えて、武州の須賀土佐入道が城へ押寄せ放火す。須賀が郎等暫く支へて討死す。此由を聞きて、同三日上杉性順・長尾景仲、成田が館へ發向し、一色と合戰數度に及ぶ。同四日又戰ふ。此日一色に馳加はる軍兵多し。性順・景仲無勢にて引色になれば、一色勝に乘りて荒川を渡り、村岡河原に打出づ。性順・景仲一手になつて相戰ふ。一色終に敗北す。上杉修理大夫持朝は、同國岩付にありしが、此戰を聞きて、後詰の士卒を出す。軍退散するに依りて引返す。同八日、長棟庵主神奈川を發足して、立野本・唐子に逗留す。同廿五日、勝

豐後守、結城に與するに依りて、足利の町屋にて、一類等八人、持朝が爲に誅せらる。同廿九日、清方・持朝、路次の軍勢を引率して結城に着陣す。又上杉治部少輔敎朝（禪秀四男）は、持氏退治の時、義敎公旗を給はりて、北陸道を發向し、奥州に至り、諸軍を催促して今爰に會す。同八月九日、長棟は小山祇園坂に着く。上杉修理亮は相州の警固として、高麗寺の下能宜に陣す。其頃箱根別當並大森伊豆守、結城の後詰に馳向ふと風聞しければ、彼を押へん爲、今川上總介平塚に陣を取る。蒲原播磨守は國府津の道場に陣す。又結城の城には、結城中務大輔・同右馬頭・同駿河守・同七郎・同次郎・今川式部丞・木戸左近將監・宇都宮伊豫守・小山大膳大夫・其子九郎・桃井刑部大輔・同修理亮・同和泉守・同左京亮・里見修理亮・一宮〔色イ〕伊豫六郎・小山大膳大夫が弟生源寺・寺岡左近將監・內田信濃守・小笠原但馬守以下の軍兵立籠る。寄手は、坤の方には、總大將清方、西は上州一揆、乾は上杉修理大夫持朝大將として、安房國の軍兵、坎艮は京勢並宇都宮新右馬頭・土岐刑部少輔・上杉治部少輔敎朝・小田讃岐守・常陸の北條駿河守、艮巽は越後・信濃等の軍兵・武田大膳大夫入道、南は岩松三河守・小山小四郎・

結城氏朝持朝等戰死

春王安王殺さる

武田刑部少輔・武藏一揆・千葉介・上總・下總の軍兵、各相圍むと雖、堀堅固にして落ち難ければ、空しく數日を送る。是に依りて管領淸方、太田駿河守を、寄手の大將へ遣して、城を落すべき手段(てだて)を問ふ。各所存を返答す。又結城氏朝が弟山内兵部大輔は、降人となりて出城す。〇嘉吉元年四月十六日、諸勢結城の城を攻む。城中より火出でて遂に落城す。氏朝・同嫡子持朝戰死、其外一萬餘人殺戮す。同十七日、總州古河城を攻むべしと相催す。野田右馬助・矢部大炊助以下、結城に與して立籠ると雖、彼の落城を聞きて、城兵多く退去す。大炊助殘り留りて、野田讃岐守に誅せらる。又結城歿落の時、春王・安王は、長尾因幡守生捕り、路次を守護して上洛す。一説、小笠原信濃守政康相添ふと云々。同五月十六日、濃州垂井の道場金蓮寺にて害せらる。小山大膳大夫兄弟も、長尾に生捕られて京都に赴く。

成氏

持氏四男、永壽王左馬頭。持氏滅亡の時信州に奔す。大井越前守持光扶助す。普廣院義教公京都にて薨逝の後、上杉舊臣長尾昌賢、

成氏を尋出して關東の主となし鎌倉に居す。

足利成氏上杉憲忠を殺す

上杉右京亮憲忠（憲實男）管領とす。父法體の時、同じく剃髪して豆州奥山に閑居す。長尾昌賢、之を求め得て此職とす。○享德三年十二月廿七日、成氏、鎌倉の西御門にて、管領右京亮憲忠を誅す。故持氏は、憲忠が父憲實が所爲にて歿するにより、其遺恨に依りてなり。又結城成朝（氏朝子）成氏と同意して之を謀る。○康正元年正月廿一日、上杉宮内大輔憲秋（憲秀三男）武州池龜にて、成氏の爲に自殺す。○同月廿四日、上杉彈正少弼顯房（持朝男歳廿一）夜瀬にて成氏の爲に自害。小山田八郎藤朝（上杉一族、小山田三郎定頼男）同所にて討死す。○同年上杉の家臣相議し、憲忠弟兵部少輔房顯を主君と定め、成氏と相戰ふ。關東諸士或は成氏に屬し、或は房顯に應じ、合戰止む時なし。其後上杉一族長尾の諸類、相謀りて朝廷に奏す。綸旨日旗を下し賜ふ。成氏遂に打負け、鎌倉を去りて、野州古河の城へ入る。是に依りて房顯、鎌倉に居して大將節となる。○同二年上杉定正家老太田備中守資長（稚名源六郎、法名道灌、于時廿五歳）武州江戸城を築く。○寬正二年關東逆亂を鎭めん爲に、故義敎公の庶男左兵衞督政知（香嚴院還俗）下向、成氏追討すべき旨、京都よりの御敎書、先立つて關東に到着す。政知、豆州北條に住して、關東を成敗す。上杉伊豫守敎朝（禪秀

上杉兩管領

上杉憲實死去

末子、一名治部少輔相從つて居す。其後敎朝不慮に自殺。又政知の息茶々丸成就院と號す後に北條に住す。○同六年太田道灌上洛して、將軍義政に始め謁す。○文正元年二月十二日、上杉憲顯三十二歲武州五十子陣所にて病死。○應仁元年上杉が老臣長尾左衛門尉昌賢相計らひて、上杉民部大輔顯定房顯男、時十四歲を越後より招きて、上州平井城を築きて立籠り、成氏と合戰度々に及ぶ。其後顯定鎌倉に入りて山内に住す。又上杉修理大夫定正持朝末子享德の頃より關東に居住す扇谷に居す。兩管領として政知に相從ふ。此後定正家老太田道眞・其子道灌謀略を運らし、關東諸家多く定正に屬す。○同二年三月六日、長棟庵主俗名憲實周防國にて卒す。豆州より西國行脚して防州に住す。○文明三年、成氏と上杉顯定相戰つて、成氏打負け、古河城を去り武州千葉の城に移る。千葉陸奧守康胤之を扶助す。○同五年十二月廿四日、上杉修理大夫政眞顯房男害せらる。○同八年四月十三日、定正家老太田道灌、武州豐島と相戰ひ之を破る。○同十年五月五日、道灌相州平塚の城を攻落す。○同年七月十七日、成氏と上杉顯定和睦あつて、成氏四十二歲古河城へ歸り入り、關宿の城をば、成氏の家臣簗田中務大輔に守らす。○同十一年七月十五日、太田道灌、

下總國臼井城を攻む。此時鵠臺に始めて城を構へて、臼井の城を落す。○同十五年十月五日、道灌長南の城を攻落す。○同十七年都鄙和合す。○文明年中、扇谷定正家老長尾四郎左衛門景春、後入道伊玄と號す、定正に對し逆心して、武州五十子にて合戰、定正利なくして同國鉢形城に入る。是より先に定正老臣太田道灌、景春が奢甚なるを見て、退けんことを諫むれども、定正許容なく、其後景春遂に反逆す。○同十八年扇谷定正家臣太田道灌、山内顯定に對して逆心す。定正制すれども承引せず。是に依りて同七月廿六日、相州糟屋館にて道灌を誅す。顯定も合力して高見原まで出馬す。其後道灌が城地川越城は、定正嫡子朝良が執事曾我兵庫頭を守護とし、江戶城は同豐後守に守らす。道灌が家來齋藤加賀守は、軍法の故實ありとて、定正が近臣にす。又道灌を誅して以後、顯定心を飜して、定正を亡すべき企あり。顯定には關東の諸士多く屬するに依りて、愈定正を討つべき謀を運らす。定正は古河政氏成氏男と一味して、顯定を亡さんことを謀る。一說、先年長尾四郎左衛門景春、定正に背きし後、顯定の麾下に屬す。是に依りて兩上杉不和なり。其後定正の家臣太田道灌が武略あることを嫉みて、顯定、定正の許へ使を遣して、兩家元來遺恨なし。定正家臣道灌を誅戮せば、我亦景春を殺して、兩家の戰を止むべしといへり。定正之を承引して、遂に道灌を殺す。顯定謀略の爲にいひけるによりて、景春を誅せず。定正怒りて兩家愈不和なりと云々。○長享二年、兩上杉武州松山にて戰ふ。○延德元年二

太田道灌害せらる

足利政知死去

北條早雲起る

月五日、山内顯定・憲房顯定養子兩將と扇谷定正、相州眞巻原にて相戰ふ。顯定は一千餘騎、定正は僅に二百騎に過ぎず。顯定利を失ひ敗北す。○同年六月十八日、顯定・憲房相州須賀谷原へ出陣、關東の諸勢悉く屬す。定正並子息五郎朝良出張。古河政氏、定正が合力として同じく出馬。長尾景春入道、定正と古河政氏一味の後、景春、定正に屬すと云々、定正が陣にあり。兩陣相戰ふ。朝良一番に懸り、長尾新五郎・同修理亮に懸合ひて追立てらる。顯定・憲房横合に之を追ふ。定正左右の軍兵に下知して之を撃つ。又長尾入道は藤田と懸合ひて追散らし、其勢に顯定の旗本に懸る。顯定・憲房、利を失ひ引退く。○同年十一月三日、定正並古河政氏、武州高見原へ出張、顯定同じく出陣して相戰ふ。始め定正の軍兵懸け惱まさる。定正と長尾入道下知して、新手にて急に戰ふ。顯定が軍兵疲れて引退く。○同三年四月五日政知逝去。五十七歲、系圖、關東にて逝去すと云々。○明應年中、政知の子息茶々丸、伊豆國堀越の御所に居す。其家臣外山豐前守、秋山藏人を讒言に依りて誅伐す。此時豆州騷動。伊勢新九郎長氏、後北條早雲と號す。去る長享元年京都より駿州に下向す、今川氏親に屬して、駿州興國寺にあり、時節到來すと相謀りて、堀越へ押寄せ亂入す。堀越方の侍關戶

上杉定正死去

三浦義同時高を殺す

播磨守討死す。茶々丸大森山へ退去し、卽ち彼の山下の寺にて自害す。其後長氏豆州を領し、韮山の城に居す。彼國の住人三津の松下・江梨の鈴木・火見の梅原・佐藤・上村・土肥・田子の山本・雲見・高橋・女羅の村田といふ侍、皆長氏に屬す。（或曰、伊勢新九郞長氏、駿州にありて定正と通謀し、伊豆の國を取る。豆州は顯定の領國たるに依りてなり。）○同二年十月五日、定正（五十一歲）卒して後、其子朝良（實は定正兄朝昌男）江戶・川越兩城を守護し、顯定と相戰ふ。○同三年九月廿三日夜、三浦時高が守る相州新井城へ、時高が養子陸奧守義同（後道寸と號す。實は上杉高救の子なり）押寄せて之を攻む。大森筑前守合力し、遂に時高を誅す。中村民部少輔（相州梅澤住人）城を切つて出で討死す。時高・義同不和の起は、時高、義同を養ひて後、實子誕生す。是に依りて義同を追出すべき氣色あり。家臣等諫むれども、時高之を用ひず。義同剃髮して三浦を忍び出で、相州諏訪原摠世寺へ蟄居す。其後時高が振舞を惡みて、三浦の一族被官等時高を背き、義同を慕ひて摠世寺へ馳集る。又義同が實母は、大森實賴が娘なれば、彼の門葉一味して、時高を亡すと云々。○同年伊勢新九郞長氏、相州小田原城主大森式部少輔實賴入道（扇谷定正に屬して數年此城に居す）を僞（たばか）り、親（したしみ）をなして後、鹿狩に事寄せ、軍兵等箱根を越山して小田原へ

北條早雲小田原を奪ふ
足利成氏逝去

押寄せ、之を攻む。同國住人成田某大森に屬して、長氏が先陣多目玄番が同心栗田六郎を討つて後討死す。實頼は遂に逃去る。長氏彼城を攻取つて居す。又松田左衛門頼重といふもの、同國にありしが、馳來つて長氏に屬す。或曰、伊勢新九郎長氏、顯定に内通して相州小田原を取る。彼城は故定正に屬して、其子朝長に相隨ふに依りてなり。○同六年九月廿日成氏逝去。六十四歳。

政氏 成氏男、左馬頭。

文龜二年相州にて、北條長氏と上杉顯定相戰ふ。○永正元年九月廿七日、武州河原にて、上杉朝良と同顯定・憲房合戰、駿河國主今川氏親、兵を遣して朝良に合力す。又北條長氏も、松田左衛門に八十騎の兵を相添へて、朝良に加勢す。長氏初め朝良の分領小田原城を攻取ると雖、朝良の旗下に屬すべしと和を約するに依りて、今合力に及ぶ。終日戰つて勝負を決せず。夜に入りて、顯定の加勢として、越後の軍勢馳來る。朝良新手に駈負け、引退きて川越城に入る。○同年十月、顯定・憲房並上杉民部大輔房能顯定の弟、越後に住す・其家臣長尾能景等、越州・上州の軍勢を率して川越を圍み、日夜攻め戰ふ。○同二年三月、朝良と顯定和睦し、川越城の圍を解き

て、顯定は上州に歸陣、朝良は江戸城に入る。○同四年政氏・高基不和にして相戰ふ、○同六年越後の住人上杉民部大輔房能、其家臣長尾六郎爲景と、主從不和なりて合戰。房能遂に戰負け、越中國雨溝にて討死す。○同七月廿八日、顯定・憲房武州を立ちて、翌月越州へ着陣し、爲景と合戰。即ち打勝ちて國中を治む。爲景は越中の境西濱へ敗走す。○同七年六月十二日、越後の一揆蜂起。高梨攝津守大將として爲景に一味す。憲房同國椎屋へ寄せて之を攻む。憲房戰負けて妻有庄に引籠り、上州の加勢を待つ。長尾・高梨勝に乘る。同月廿日、顯定長森原へ出張、相戰ふ。長尾敗軍すと雖、高梨進み懸つて、遂に顯定討死す。年五十七。憲房は越後の在國叶はずして、上州へ歸陣、白井城に籠る。其後上杉の長臣長尾左衞門尉景春入道伊玄反逆して、爲景に與す。其家子三戸駿河守・太田備中守等諫言すと雖、用ひずして、上州沼田へ出陣す。憲房白井にありて陣を對す。又小田原城主北條長氏も爲景と一味して、相州高麗寺并住吉の古城を取立て出張す。上杉治部少輔入道・建芳が被官上杉藏人入道も、長氏が下知に從ひ、武州神奈川權現山に城郭を構へ籠城す。○同年七月十一日、上田藏人が籠

上杉房能戰死

上杉顯定戰死

る神奈川權現山へ、上杉治部少輔入道建芳、手勢を率して押寄す。憲房より加勢として、成田下總守・澁江孫次郎・藤田虎壽丸・大石源左衞門・長尾孫太郎が名代矢野安藝入道・長尾但馬守が名代成田中務丞、其外武州南一揆發向し、權現山を圍む。藏人が本學寺の地藏堂を根城にして立籠る。神奈川住人間宮某切つて出で、戰ひ負けて城中へ引退く。寄手の先陣武州稻毛住人田島某、木戶口に進みて相戰ふ。諸勢日夜之を攻む。城兵遂に氣屈して、同月十九日夜皆退去す。○古河政氏の舍弟四郎、上杉顯定の遺言にて養子となり、顯實と號して山內管領家を繼ぎ、武州鉢形に住す。○同九年八月十三日、三浦道寸が居す相州岡崎城へ、北條早雲押寄せて、急に之を攻む。三浦が郎等佐保田豐後守以下防戰すと雖、叶はず、道寸搦手より遁れ出で、同國住吉城に入る。彼城も遂に早雲が爲に退去し、其後三浦の新井城に居す。○同十二年上杉五郎憲房（顯定養子、實は憲實孫、僧周淸子）山內管領家を續ぐ。後に兵庫頭と號す。○同十五年四月十一日、三浦道寸並其子彈正少弼義意（荒二郎と號す）三浦新井城にて、北條早雲が爲に自殺す。家臣大森越後守・佐保田河內守・同彥四郎・三須三河守以下百餘輩討死す。是より先

道寸父子三浦より鎌倉へ出張す。是に依りて早雲發向、道寸戰負けて、新井城へ引籠る。早雲向城を構へ、之を圍むこと三年に及べり。籠城旣にして義意が舅眞里谷三河守を賴み、上總國へ落つべきことを、郎等等諫むと雖、道寸之を用ひずして遂に戰死すと云々。彼城落居以前に江戸城主上杉修理大夫朝興（朝良男實は朝良兄朝寧の子なり）道寸に合力して後詰の兵を遣し、早雲が兵と相戰ふ。朝興の兵散々に討負けて引退く。早雲新井城を攻取りて後、道寸が殘黨を召出して、横井越前守を大將として、小林平六左衞門等に守らしむ。又同國三崎に城を構へ、房州の押をなす。○同十六年八月十五日北條早雲、豆州韮山城にて卒す。○大永四年正月十三日、上州の家臣太田源六郎・同源三郎反逆して、北條左京大夫氏綱（早雲嫡子）に内通す。是に依りて氏綱時刻を移さず、武州江戸城へ押寄す。城主朝興品川まで出張、氏綱が先陣と、上杉が先勢曾我神四郎某、高繩原にて行向ひ相戰ふ。氏綱が二陣馳付けて、二手に分れて急に撃たんとす。朝興戰負けて江戸城に引籠る。氏綱進んで之を圍む。朝興叶はずして、夜に入り退去して、同國川越の城へ入る。翌日氏綱板橋邊まで兵を遣して之を追はしむ。其後武州の住人毛呂太郎・岡本將監氏綱に屬す。江戸城をば遠山四郎右衞門に守らしむ。○同六年四月十六日（一說大永五年）上杉五郎憲房、上州高山庄平井の陣にて病死す。（年五十九。）○同年

北條早雲死去

上杉憲房死去

憲寛或憲宗古河高基の息なり憲房の養子として、山内管領家を續ぎ、五ヶ年職に居す。憲房實子憲政幼稚なる故と云々。○同年十二年十五日、房州守護里見左馬頭義弘、小弓の右兵衞佐源義明に從ひて、數百艘の兵船を催して、鎌倉へ渡海、寺社へ亂入して、神寳を奪ひ取り佛閣を破り、鶴岡の寳藏をも破却す。氏綱之を聞きて兵を引率し、鎌倉へ馳向ひて相戰ふ。房州一方の大將里見左近右近イ大夫討死し、其外雜兵多く討取らる。義弘船に乘つて本國へ引退く。小弓の義明は古河政氏の二男にて高基の弟なり。父氏と不和にして、先年奥州へ出奔す。其後上總の守護武田豐三・眞里谷三河守（後入道恕閑と號す）等と、同國の原次郎所領を論じ、度々合戰に及ぶ。原は小弓に在城す。下總の守護千葉介が家來なれば、千葉より加勢ありて、武田利を得ることなし。是に依りて近年義明を奥州より招きて、武田之を大將とす。兩總州・房州邊にて、管領に從はざる輩皆馳集つて義明に屬す。原が家子高城越前守父子を討取り、同下野守を追放し、遂に原をも討取り、勢日に增し、小弓に住して御所と號すと云々。○享祿元年關東無雙の强弓横井神助、小田原に來りて北條に屬す。○同三年六月十五日、上杉朝興と北條氏康氏綱嫡子武府玉川の端小澤原にて合戰。朝興先年江戸城を落されし恥を雪がんとて、家子難波田彈正・上田藏人等以下宗徒の兵を引率し、出張するに依つて、北條氏綱、嫡子氏康を大將として差向けらる。氏康今年十六歳、初陣なり。氏康が乳母子淸水小太郎等を始めて、勇み爭ひて相戰ふ。夜に入りて上杉戰負け引退く。○同年沙

足利政氏逝去

足利高基逝去

上杉朝興死去

門惟宗、義晴の公帖を給はり、長老となりて鎌倉圓覺寺に住す。〇同四年七月十八日政氏逝去。甘棠院と號す。〇同年上杉四郎憲政、憲房。實子憲寛高基の息に代りて山内管領家を嗣ぐ。

高　基 政氏男。

天文四年十月八日高基逝去。千光院と號す。

晴　氏 高基男、左兵衛督。

北條氏綱が女を晴氏に嫁し、古河城主として扶助す。東國の諸士小山・佐竹・宇都宮・那須・長沼・結城・小田大掾等晴氏を崇敬す。是に依りて氏綱、晴氏と縁を結びて、彼の諸士を従ふべき計策なり。〇天文六年卯月下旬、上杉朝興川越城にて病死す。〇同年七月、武州川越城主上杉朝定朝興男、于時十三歳父朝興が遺言に任せ、佛事等を差置きて、同國神太寺の古き要害を取立て、氏綱を退治すべき企をなす。是に依りて同十一日、氏綱一説、氏康、但父子出陣か井浪・橋本・多目・荒川等を先駈の足輕大將とし、松田・志水・朝倉・石卷等を

侍大將として出馬し、同十五日川越へ逆寄にす。朝定は、伯父左近大夫朝成・曾我丹波守に、武州・上州の兵を相添へて戰はしむ。左近大夫深入して生捕らる。是に依りて上杉が兵敗北す。朝定は難波田彈正が居す同國松山城へ逃入る。城主難波田殘黨を集め、川越へ押寄せんとす。同十八日氏綱又松山へ逆寄にして之を攻む。同廿日、彈正父子戰負けて逃去る。朝定同じく敗走す。是より後川越城は、北條之を領す。

上杉朝成生擒せらる

○同七年七月、北條氏康と兩上杉・山内憲政・扇谷朝定、川越にて相戰ふ。氏康兩上杉の軍を打破る。朝定戰死す。憲政上野に走る。一説、天文十四年兩上杉川越城を圍む。北條氏康後詰して之を擊つ。上杉敗北と云々。卽此末に記す年號の相違か。但兩度に及ぶか。又天文六年七月川越合戰、上杉朝成生捕のことあり。此段天文七年七月朝定戰死とあり、若し名乘と年號の相違にて、天文六年の事を重記するか決せず。

北條氏綱小弓を攻む

○同年小弓義明威勢廣大になりし故、古河晴氏より、北條氏綱へ諫言に依りて退治の企あり。義明之を聞きて、子息御曹司・舍弟基頼を大將とし、里見義弘を副將とし、房州・兩總州の軍兵を催し、下總國高野臺へ出張し、市川を前に當てゝ陣す。氏綱一説、氏康、但父子出陣か、は、十月四日に小田原を立ちて、江戸城に着く。其勢二萬餘騎と着到に記す。軍の評定あり、敵は要害に陣して皆案内者なり。少しく延引して敵の進むを待

つべきか。但義明より關東の諸士へ御敎書あらば、加勢の輩あるべし。時日を移さず押寄すべきかとありしに、根來金谷齋といふものが言葉に付きて、翌七日〔十月七日イ〕の朝合戰と定む。一陣は松田・志水・狩野・笠原、二陣は遠山・山中・多目・荒川・金谷齋以下なり。先陣は宵より市川の端に忍び付きて、明けなば松戸を越ゆべしと、堤の下に控へ、夜已に明くれば、川端に打つて出づ。義明の先陣椎津・村上・堀江・鹿島等、向の川端にありて、敵の猛勢なるを見て、旗本へ物見の兵を遣し、敵多勢にして味方無勢なり。平地の合戰叶ひ難し。急ぎ旗を寄せらるべし。味方引色に見せて、敵半川を越さん時、川中にて勝負を決さむ。治定味方勝つべしと諫めけれども、味方引色に見することを嫌ひて、義明之を用ひず。軈て小田原勢、悉く川を越し相戰ふ。椎津隼人佐・鹿島・郡司等打負けて引退く。里見義弘・逸見山城守競ひ懸りて戰ふ。小田原勢事ともせず、猶進み懸る。義明の御曹司・舍弟基頼喚いて先駈す。伊藤・朝倉・桑原・石卷等が兵、之を圍み、散々に戰ふ。御曹司・基頼共に討死す。義明之を聞きて、進みて駈出づ。佐々木少府次郎以下馬廻二十餘騎、續いて懸く。義明大勢の中に入りて、氏綱が兵

小弓義明戰死

北條氏綱死去

安藤某を始め敵數十人、手ら之を討つ。又里見義弘は、氏綱の旗本と懸合ひ戰ひしが、叶はずして引退く。義明は、小田原勢の中に、關八州無雙の强弓横井神助といふものが射る矢に中りて死す。横井、義明の首を取らんと進む。義明の近習等馳來つて之を防ぐ。神助が同心小林平左衛門、向ふ敵一騎討つて皆追散らす。其間に松田彌次郎馬を馳せて、義明の首を討つ。義明の馬廻佐々木四郎・逸見八郎・佐野藤三・町野十郎以下皆自殺に及ぶ所に、逸見山城守が諫に依りて、小弓に行きて御所を放火し、義明の小兒等を具足し、房州へ退去す。其後山城守は、戰場にして、氏綱が兵士山中修理亮に會ひて討死す。○同九年、北條氏綱鎌倉鶴岡八幡宮再興し、神宮寺・若宮・辨財天の社・白旗の明神・鐘樓・總門・廻廊・瑞籬以下悉く造營す。○同十年七月十九日、北條氏綱卒す。○同十一年四月十日、鎌倉由井濱大鳥居、北條氏康の願として建立。此日供養ありて一切經轉讀す。南都七大寺・高野・槇尾・三井寺の僧を招請し、其外鎌倉五山・雪下院家・極樂寺・稱名寺の僧集會すと云々。○同十四年今川義元・上杉憲政一味して、義元は駿州長久保城を圍む。長久保は駿州の地なれども北條領す。氏康之を聞きて、長久保へ

加勢を催す。又兩上杉は、長久保の後詰の爲、關東の軍勢を集め、先づ武州川越城を攻むべしとて、同年九月廿六日、憲政砂窪に陣し、先勢進んで川越を圍む。彼城は北條左衛門大夫綱成（初名九島左衛門、近年北條と號す。後上總介に改む。世俗黄八幡といふ）守護たり。日夜攻め戰ふと雖、堅固にして落ちず。憲政、古河晴氏へ加勢を請ふ。晴氏は故氏綱の聟なり。氏康と緣者なれば早速許容なし。氏康此由を聞きて、雙方合力然るべからずと諫言す。是に依りて加勢の沙汰なし。其後上杉が家人難波田彈正入道・小幡因幡守頻に訴ふるに依りて、晴氏遂に上杉と一味し、同十月廿七日、川越へ出馬ありて、城の通路を塞ぎ、翌年迄在陣す。是に依りて城中糧乏しくして勞す。○同十五年、氏康川越の後詰に出張し、先づ謀に、諏訪右馬助を使として、常州住人小田政治が代官菅谷隱岐守に賴みて、晴氏へ和を乞ふと雖、用ひず。又北條左衛門大夫が弟九島辨千代とて、生年十七歲なるを、氏康が使として城內へ遣して約を示す。同四月廿日、上杉が陣を夜討にせんと議す。態と松明を持たず、鑓印を付け、合言葉を定め、重き指物・馬・鑓等を略し、首を取らず切捨にすべしと言合せて、大道寺・印浪・荒川・諏訪・橋本等を始め、氏康が

景虎、上杉の姓を冒す

兵士子の刻ばかりに、砂窪へ押寄せ之を討つ。上杉が勢戰負け、小野因幡守・本間近江守・倉賀野三河守・難波田彈正・其子隼人佐以下、究竟の兵士三十餘人討死し、憲政は命を遁れて敗走す。又北條左衛門大夫、城を拂つて切つて出で、晴氏の勢を追散らす。晴氏古河へ引退く。上杉が家人大石源左衛門・藤田右衛門佐等、降を乞うて氏康に屬す。是より北條が威勢倍せり。其後氏康、輕部豊前守を使として、晴氏へ一通の書を送りて、遺恨を達すと云々。○同年十月、上杉憲政、家人上原兵庫助等が諫に依りて、甲州武田晴信を退治すべしとて、笛吹峠を越えて甲州へ發向す。晴信、上杉が兵を惡所へ引請け、散々に撃つ。上杉戰負けて引追く。○同廿年、上杉憲政家來曾我兵庫助が諫に依りて、長尾景虎（爲景男、後輝虎と改む。法名謙信）を頼りて上州より越州へ赴く。彼景虎が父爲景は、故管領顯定を討つて敵たり。然れども爲景歿する上、遺恨なしとて勘氣を赦免し、剰へ憲政が養子として上杉となし、重代の太刀系圖を渡し、憲政は上野一國を領すべし。其外は景虎支配を約して、暫く越後に逗留す。（憲政先年川越の軍に討負け、上州へ歸陣以後、勢衰へ、相從ふ軍士氏康へ內通のもの多し。然れども太田美濃守、武州岩槻城に在りて、憲政へ無二の忠あり。又武州忍の城主成田下總守長康・上州箕輪城主長野信濃守業正。新田・長尾・由良・深谷・安

中・山上・和田・倉賀野・白倉以下屬して堅固なり。憲政不義にして菅野大膳・上原兵庫助などいふ佞人を愛し、酒宴にのみ日を送るに依りて、成田・由良・白倉等其外筑後左衛門以下氏康へ内通し、愈勢減す。是に依りて憲政越州に赴く。太田・長野は猶憲政に屬すと云々。○同廿一年、上杉憲政が家人妻方新助・其弟長三郎・九里釆女正・同與右衛門等、憲政越後在國の留守にありて逆心し、憲政の嫡男龍若丸を、北條氏康が手に渡し、彼等卽ち降參す。龍若白晝に小田原に入る。翌日神尾次郎右衛門を檢使にして首を刎ねらる。其外妻方兄弟・九里等、氏康へ對して忠あると雖、譜代の主へ不義なりとて遂に皆首を刎ねらる。一説、天文廿年北條氏康、上州平井城を攻落す。城主憲政越後に奔す。長尾景虎之を扶助す。氏康、憲政が子龍若を取りて殺す。○同廿三年二月中旬、北條氏康駿州へ出張す。先陣松田尾張守・北條常陸介・笠原能登守・志水・大道寺、下方庄に打入りて、吉原・柏原邊に陣す。今川義元は、尾州の敵蜂起して、三州へ發向す。甲州武田晴信、義元に緣者たれば、加勢として富士の大宮通・あつはら邊を經て、富士川の端、賀島の柳島に至り、加藤下野といふ地侍の屋敷を陣所とす。小山田彌三郎・馬場民部少輔を先手として、足輕を出して日々に相戰ふ。同三月三日、氏康父子、天香久山に旗を立て、池三の川端に人數を備ふ。甲州勢、賀島より苅屋川の邊に出でて、終日戰ふ。氏康方には大橋山城守・桑原平内・諏訪

足利晴氏氏康に虜せらる

右馬助、先驅して鑓を合す。又同越智彈正といふもの、甲州の侍小田某と鑓を合せ、既に討死に及ばんとす。原美濃守平虎胤（下總千葉の侍原能登守友胤が子なり）と名乘りて、敵二騎を討取り、彈正を助く。甲州勢小山田が手より、騎兵馳出でて、美濃守を追懸く。武州江戶の住人太田源六郎之を追散らす。相甲の兩軍此日勝負を決せず、互に引退く。其後同國善德寺の住僧府中臨濟寺の住持等、雙方和睦を整へ、互に緣を約し、武田晴信の女を、氏康の嫡男氏政に嫁し、氏康の女を、義元の嫡子氏眞に嫁すと云々。（一說、弘治二年武田晴信・今川義元・北條氏康互に緣を組んで和睦すと云々。）○同年古河晴氏、氏康を退治の企ありと聞きて、同十月四日、氏康古河城へ押寄せ攻め戰ふ。晴氏の侍一色・二階堂・簗田・沼田以下戰負く。氏康遂に城を落し、晴氏父子を虜にして、相州波多野へ配す。○弘治二年北條氏康相計らひて、晴氏の子息に元服を整へ、左馬頭義氏と號し、葛西谷へ移し、晴氏と和睦す。（義氏は北條氏綱が女の腹に生る。）○同年春、里見義弘兵船八十艘を催し、房州より相州三浦へ渡海し、城ヶ島に陣を取る。三浦に有合ふ氏康が船奉行梶原備前守・富永三郞左衞門・遠山丹波守等、出向つて相戰ふ。房州勢叶はずして、船に乘り引退く。○同年十月三日、上杉景虎・太

田美濃守資正一味して、上州へ發向す。北條氏康出陣して相戰ふ。（景虎、憲政が養子として、上杉と稱すにより、武州岩付の城主太田美濃守、上杉譜代の諸士へ景虎の器量を告ぐ。成田中務以下多く景虎に屬す。）○同年十二月十五日、義氏下總關宿へ移る。○永祿元年四月、左馬頭義氏（十八歲）拜賀の爲、鎌倉鶴岡八幡宮參詣。網代輿に乘り、供の輿十五丁あり。關宿城主簗田中務大輔太刀を持ち、一色刑部少輔沓を役し、吉良左兵衞佐唐笠の役を勤む。北條氏康老臣等を遣し、路次の馳走警衞等をなさしむ。歸路の時關戶に懸りて、義氏道中にて和歌を詠ずと云々。○同二年十月、上杉景虎、北條氏康を亡さん爲に、東國の群士と內通して出張し、上州沼田（北條孫次郞守護す）・同國前橋の城を攻取る。其外所々の城主降參するもの多し。皆人質を取りて前橋の城に入れ置く。

上杉謙信小田原に向ふ

○同三年三月、上杉景虎、信濃・上野・下野・常陸・武藏等の群士を相從へ、北條氏康が居す小田原城下に發向す。鎌倉鶴岡八幡宮拜賀の爲、先づ小田原へ寄せて、押を置かん術（てだて）なり。先陣太田美濃守・長尾信濃守・本城左衞門大夫、其外上杉舊功の侍等、各國府津・前川・酒匂に着陣す。氏康思ふ所ありて、出戰に及ばずして籠城す。景虎暫く在陣し、遂に城を攻めず、押を置きて鎌倉鶴岡へ參詣す。白尾・小幡・白倉・大石

足利晴氏逝去

を前後に召具し、太田美濃守が弟に太刀を持たしむ。關東の諸士、辻々の警固を勤仕す。此時成田下總守長康、景虎の氣色に背き、烏帽子を打落さる。成田恥辱を思ひて、氏康へ屬して、領地忍に歸りて籠城す。其外の諸士も、景虎が振舞を見て、居城へ歸るもの多し。景虎已に鎌倉を立ちて、同國甘繩城を攻む。城主北條上總介綱成が長子左衛門大夫氏繁、自戰して堅固なり。景虎は太田美濃守を後殿とし、長尾義景を先陣として上州に歸る。又成田が末子若王丸・同家老豐島美作守、人質の爲め前橋城にあり。成田が事を聞きて、豐島は城中を忍び出で、忍の城へ歸り入る。若王丸も城を遁れ出しが、豐島に後れ、遂に利根川に入つて死す。○同年五月廿日、今川義元尾州に討死す。○同年五月廿七日、左兵衛督晴氏高基弟關宿にて逝す。永仙院と號す。○此年武州岩付城主太田美濃守資正、後三樂齋と號す、北條氏康に襲れて城を退去す。○此年北條氏康隱居して萬松軒と號し、嫡男氏政に家督を讓る。

義氏 晴氏男、右兵衛佐。

同四年九月九日、上杉謙信越後・信濃の境へ出張す。武田信玄、信州川中島に陣す。北條氏康、多目周防守・石卷隼人を遣して信玄に合力す。○同年十一月十一日、北條氏康・同氏政出陣して、武州松山城を圍む。彼城は北條が分領にて、上田又次郎（後安獨齋と號す）守護たりしを、太田美濃守資正入道（三樂齋）、謙信が下知に依りて攻取り、上杉憲政が末子藏人憲勝に守らしめ、北條之を圍まば、里見義高と謙信、後詰すべしと約諾す。是に依り氏康父子出陣して攻戰ふ。北條左衞門大夫、外曲輪を放火し、已に二三の曲輪まで攻入らんとす。憲勝防戰し、堅固に之を守る。武田信玄・同義信（信玄男勝頼兄）氏康に加勢として爰に會す。山城なるに依り金鑿（かねほり）を入れて崩す。城兵烈しく鐵砲を打つて之を拂ひ、城落つること能はず。○同五年三月四日、信玄の家人飯富源四郎昌景、謀を運らし、松山城中へ内通して和睦を整へ、憲勝城を退去す。北條此城を取返して、上田又次郎に元の如く守らす。同六日、上杉謙信は、越後の兵を率し、太田三樂は、關東に相從ふ士卒を引具し、松山の後詰に馳來る。里見義高も出陣すと雖、之を待たずして落城す。謙信怒りて、人質の爲に、三樂が取置きたる憲勝が子を害す。又

里見義弘北條氏康對陣

此度の出勢、空しく歸陣すべきことを悔みて、北條方の城を尋ね、武州私市の城主小田助三郎が氏康に屬する事を聞きて、彼城へ押寄せ、一日一夜攻戰ふ。小田は成田長康が二男なり。遂に打負けて自殺す。其後上州へ歸り、前橋の城主長尾彈正少弼が、累代の主人憲勝に加勢せざることを惡みて、謙信手ら誅伐して、北條丹後守を前橋の城代とす。○同六年、江戸住人太田源六郎・其弟源次郎・同源四郎等、北條へ先忠あれども、恩賞の輕きことを恨に含みて、太田美濃守入道三樂齋と密談し、里見義弘へ內通して反逆す。○同七年正月七日、里見義弘・同義高父子に、太田三樂齋合力し、下總國高野臺にて、北條氏父子と合戰す。氏康・氏政は、北條上總介綱成・同左衞門大夫氏繁を先鋒として出陣す。又遠山・富永等、北條が出馬を待たず、先に進みてからめき川の端まで出張す。義弘父子は房州・總州の軍兵を率して、高野臺に軍を備ふ。太田三樂爰に會す。富永・遠山等進んで相戰ふ。里見方には柾木大膳を先鋒とし、黑川・川崎等の强力の兵、並太田源六郎兄弟三人・長南七郎等、勇み懸りて戰ふ。中にも太田源六郎、遠山が勢に切つて懸り、遠山を始め、進む騎兵を切つて落し、又

己れが舅太田下野守を討つ。其外戰場にて、富永三郎左衞門・山方四郎左衞門・中條出羽守・川村修理亮を始め、北條が先勢百四十騎討死し、北條が軍已に敗せんとす。北條上總介綱成、高野臺の後へ廻り、里見が陣の後を討つ。里見が兵士五十騎ばかり討たれて敗北す。上總介は木村・堀內・佐板・横江・間宮以下、主從十四五騎になりて、逃る敵を追駈く。氏政旗本を進ませ、遂に敵を追散らす。同八日夕に及ぶまで、北條が勢寄せざりしかば、里見が陣油斷す。北條が物見之を告ぐ。北條此由を聞きて、時刻を移さず押寄せ、氏康・氏政二手になりて、兩方より切つて懸る。里見が勢散々に打負け、里見民部少輔・同右兵衞尉・秋木左近大夫・同平六・同平七・菅野神五郎・秋木彈正左衞門父子・勝山豐前守・秋本將監・加藤左馬允父子・長南七郎・鳥居信濃守・其子惡左衞門・佐貫伊賀守・多賀越後守・里見長九郎越前守忠弘が子なり等戰死す。秋木彈正は、山角伊豫守之を討ち、里見長九郎は、松田左京亮討取る。義弘遂に打負け、上總の山中を經て房州へ退去す。今度の張本太田三樂齋・同源六郎・其弟等は薄手負ひ、死を遁れ逃去る。此一戰に依りて、上總國椎津・米本・舍人・和田以下の諸城悉く明退く。○同

里見義弘敗軍

年上杉謙信出張して、北條氏康が領する下總國臼井城を攻む。城主原上總介無勢なるに依りて、松田孫太郎(後肥前守と號す)來り、合力して相戰ふ。謙信が兵退去す。原・松田跡を慕ひて、上杉が兵を討つ。○同年北條氏政、東國へ發向す。野州宇都宮・結城・小山等の諸將、其外常陸・下野の士卒悉く北條に屬す。氏政古河原に在陣し、皆質を取りて小田原に歸る。○同年里見義弘が家人多賀藏人が守る上總池和田城を、北條氏康父子攻めて之を落す。○同九年八月十六日、武州忍城主成田下總守長康が長子氏長、老臣豊島美作守が諫によりて、父長康に反逆を企て、長康城外の別業に遊興せし留守を相謀りて、門戶を閉ぢて入れず。長康本城の水道を潜りて入る。然れ共後には父子和睦し、遂に長康隱居し剃髮す。成田は武州の住人にて私黨の旗頭なり。同黨に、忍・酒卷・中條・別府・久下・須賀などいへる侍あり。長康が父中務入道宗蓮が時代に、忍某を討取つて其處に城を築きて居す。酒卷以下の同黨等成田に從ふ。長康が代、勢猶倍せり。長尾景虎、上杉と稱する時、長康早く之に屬す。其後景虎鶴岡參詣の時、意趣ありて上杉を背き北條に屬す。長康が城の近所盃尾といふ處に、景虎城を構へ、木戶源齋を籠め置き、成田と度々戰はしむ。或時長康父子、盃尾に押寄す。岩付太田道譽(後成田氏長が舅なり)後詰して成田と戰つて長康敗北す。是に依り盃尾を攻落し、恥辱を雪ぐべしと時節を窺ふ。故に老後迄隱居延引して父子不和の事出來すと云々。

上杉謙信北條氏康和睦

○同十一年五月、北條氏康と上杉謙信和睦して、氏康が末子三郎(第七男と云々)謙信が養子として越後に招き入る。○同十二年正月十

八日、北條氏康・氏政豆州へ發向す。去歳駿河の國司今川氏眞、武田信玄が爲に駿州を追落され、遠州懸川の城へ入る。北條は氏眞に緣たるに依りて出張す。先づ蒲原・高國寺・大宮等の城へ士卒を籠置き、三島に陣す。武田・典厩、薩埵の小崎に陣を張り、信玄は久能に城を構へて居す。同月廿五日夜、北條父子は、松田尾張守氏秀・北條常陸介・大道寺駿河守政繁等を先陣とし、三島より出陣して、油井・蒲原へ押寄す。又兵船數百艘相催し、北條美濃守氏規・同上總介綱成・梶原備前守を大將として、三保が崎へ廻し、夜中に海陸前後より、薩埵の敵を討たんと擬す。兵船逆風に遭ひて着岸せず。既に夜明けて謀相違す。同廿六日、陸勢薩埵山の峠へ押寄す。信玄久能より興津河原に出張す。北條が先鋒松田尾張守、川を越えて備ふ。武田が先陣跡部大炊助、二陣内藤修理亮、松田に懸負けて引退く。其後武田は興津河原に屯し、北條は薩埵の山上に旗を立て互に對陣す。同四月廿八日、信長遂に軍を引きて甲州に歸る。北條猶駿州に留り、氏眞が譜代の家人等を招寄せ、彼舊館を守らせ、同國蒲原城には、北條新三郎、幼庵長子が大宮神田屋敷に北條常陸介、善德寺に 大藤左衞門、其外高國寺・長

久保等には、北條が譜代の家人を籠置き、小田原へ歸陣す。其後北條家來を遣して、氏眞を小田原に招き入る。此以後武田・北條愈不和なり。○同年六月廿日、信玄、駿河へ人數を赴かしむ。甲州勢、駿州加波鳴島に陣す。先陣は豆州三島へ亂入し、洪水に會ひて勞す。土倉・高國寺に有合ふ北條が家人、夜討にして之を追散らす。○同年十月、信玄、信州・上州・武州等の諸士と一味して、相州小田原へ寄すべしと擬して、先づ武州瀧山の城を攻む。此城には北條陸奥守氏照が籠りて、堅固に守護す。信玄遂に圍を解きて、小田原へ押寄せ、蓮沼・揚土邊に至る。先陣内藤修理亮人屋を放火し、信玄軍を引いて歸る。小田原勢跡を追ふ。又武州鉢形の城主北條安房守氏邦・同國瀧山城主北條陸奥守氏照・相州甘繩城主北條上總介綱成、小田原の後詰に馳來る。敵の退散を聞きて、同月八日、相州三增峠にて信長と相戰ふ。綱成軍を進めて武田が武將淺利を討取ると雖、遂に北條が軍敗北す。信玄甲州に歸陣す。氏政萩野迄出陣して小田原に歸る。○同年十二月、信玄大宮通を駿州へ出張し、蒲原城へ押寄す。彼城は北條新三郎之を守護す。信玄使者を立て、城を開渡すべしと示す。新三

北條氏康死去
武田信玄死去

郎其使を殺して、猶堅固に之を守る。是に依りて同月十二日夜、信玄軍を引きて、岩淵より油井・倉澤へ懸りて府中へ赴く。小山田後殿をなす。新三郎之を聞きて、狩野新八郎を先陣とし、城を出でて追懸け、小山田と戰ふ。信玄引返して合戰す。其間城に殘る兵士に逆心のものありて、信玄の長子四郎勝頼を城中へ引入る。北條新三郎・其弟童形箱根の兒並狩野新八郎・志水・笠原・荒川・多目等の侍大將、其外雜兵三百餘討死す。信玄直に駿府に入る。氏眞が譜代の輩、信玄に屬するに依りて、遂に彼國を領す。○元龜元年四月中旬、北條氏康父子軍を率し、駿州へ出張して、信玄が家人駒井右京が守護する深澤の城を圍む。堅固にて攻懸ること叶はず。北條軍を引きて歸る。○同年信玄上州蓑輪へ出張す。北條氏政と上杉謙信約して、氏政は武州秩父へ出陣す。謙信は思慮ありて、軍を引き越州へ歸る。是に依りて氏政歸陣す。信玄猶上州に在陣す。此時小幡・長井等武田に屬す。同七月甲州に歸る。○同年十月三日、北條氏康卒去。五十六歲。○同二年秋、氏政常州に出陣、佐竹義重同じく出張して對陣す。○天正元年四月十二日武田信玄卒す。五十三歲。○同年冬、古河義氏の老臣簗田中務大

輔、下總國關宿の城にありて、北條氏政へ逆心す。氏政出陣して之を攻む。城兵木造淸左衞門以下切つて出づ。北條陸奥守が家來大石源左衞門・諸岡山城守等相戰ふ。簗田が兵城內へ引退く。其後城兵出戰に及ばず。佐竹義重後詰として發向すと雖、軍を引いて歸る。○同二年五月十七日、關宿城主簗田降を乞うて城を退去す。○同五年、氏政が妹を武田勝頼に嫁して和を約し、駿州は武田が領國とし、豆州は北條が領國とす。○同年里見義高が嫡子義頼、氏政へ質人を出して和睦す。○同六年三月

上杉謙信死去

十三日、上杉謙信四十九歳にして卒去す。同三郎氏康末子・同景勝謙信甥 各々不和にして、家督を爭ひて戰ふ。家老北條丹後守景勝へ諫言して、戰を止めんとす。景勝之を用ひずして、却て丹後守を殺す。武田勝頼は三郎が縁者たるに依り、合力の爲に出陣す。景勝謀を廻らして、勝頼を頼む。同月十八日、景勝・勝頼一味して三郎を誅す。此時三

上杉憲政死去

郎は上杉四郎憲政が館に在り。是に依りて憲政も一所に歿す。又氏政は、三郎が合力として、北條治部大輔・太田大膳・遠山・富永等の諸將を引率して、武州川越まで出陣し、先手は上州沼田に至る。三郎が滅亡を聞きて歸陣す。一說、三郎並憲政滅亡は、謙信卒去の翌年天正七年三月十

八日と云々。〇同七年春、武田と北條不和、勝頼西上州へ出張す。氏政同じく進發して相戰ふ。是より先、氏政と勝頼和睦すと雖、去年勝頼が爲に、上杉三郎誅せらる。是に依りて又戰に及ぶ。〇同八年春、勝頼駿州へ出陣して浮島が原に陣す。先陣は沼津千本松原に至る。北條氏直豆州まで出張して三島に屯し、黄瀨川を隔てゝ相戰ふ。氏直豆州重須の湊より、梶原備前守・其子兵部大輔・志水越後守・富永左衞門尉・山角治部少輔・松下三郎左衞門・山本信濃守等の船大將に下知して、兵船を廻して海上に至らしむ。又勝頼が船奉行向井・小濱・間宮等、兵船を出して相戰ふ。旣に日暮れて雙方引退く。〇同年冬、北條が家人笠原新六郎、松田尾張守が一男、他名を稱す、駿州戸倉城にあり、北條に反逆して武田勝頼に降る。北條方の城、駿州に四ヶ所あり。泉頭は大藤長門守・多目周防守・荒川豐前守等、長久保は志水上野介が子太郎左衞門尉、獅子濱は大石越後守、戸倉は北條右衞門佐氏眞に守らす。其後氏眞に代りて笠原新六郎之を守護すと云々。〇同九年二月、勝頼駿河へ出張す。氏政・氏直豆州へ出陣し、三島の小河を前に當てゝ備ふ。合戰に及ばずして雙方歸陣す。〇同年十二月、笠原新六郎戸倉の城にありて、勝頼の加勢海野組を引率し、北條右衞門佐が籠る太平の城へ押寄す。先年新六郎反逆以後、戸倉の向城として、此城を構へて居す。右衞門佐は家子武州小机の城主笠原平左衞門を大將として、平太と戸倉との間、手白山へ人

數を出して戰はしむ。其勢僅にして散々に懸負け、平左衛門討死す。〇同十年正月、北條右衛門佐、大平の勢減じ籠城難儀して、小田原へ加勢を乞ふ。北條左衛門大夫氏勝（左衛門大夫氏繁が男）發向す。間宮肥前守・朝倉能登守・行方彈正忠以下を率し、箱根を越して、大平の城に入りて守護す。右衛門佐之に代りて小田原に歸る。〇同年三月、織田信長信州に入りて、勝賴父子を亡す。其注進を聞きて、戶倉の城兵、城を退去して北條に渡し、笠原新六郎降參す。父松田が忠功に依りて、笠原が命を助く。甲州加勢の兵、城を出でて本國に歸る。北條が兵、跡を追うて之を討つ。又氏眞は信長の合力として、駿州へ出張す。高國寺・三枚橋兩城の兵士退去す。氏直浮島が原に陣して、富士の麓の民屋を放火し歸陣す。其後陸奧守氏照を使者として甲州に赴かしめ、馬・鷹を信長に送る。〇同年織田信長甲州を治めて後、關東を退治の爲、瀧川左近將監一益を赴かしむ。一益、信州を經て上州に入り、箕輪城へ移り、其後前橋城に居す。倉賀野淡路守・內藤大和守・小幡上野介・由良信濃守・安中左近大夫・深谷勝（イ左）兵衛、成田下總守・上田安獨齋・高山遠江守・本部宮內大輔・長尾新五郎・眞田安房守・業田

下總守等一益に相從ふ。各人質を取りて箕輪城に入置く。同六月七日、飛脚到來して、今日二日、信長・信忠父子、京都にて明智日向守光秀が爲に生害の由を告ぐ。一益其注進を聞きて謀を廻らし、諸士に之を告ぐ。各一益が密させる事を感じて、皆瀧川に一味す。一益、北條が寄せ來らんことを思慮して、前橋城の留守には、瀧川彦次郎を定め、松枝城をば津田小平次・稻田九藏に守らせ、諸勢を整へて後、先づ謀に小田原へ使者を立て、信長の生害を告げ、前橋城を明渡すべきことを示す。武州鉢形城主北條安房守氏邦之を聞きて、瀧川が退散の所を討たん爲、急ぎ出勢して、神奈川を越え金窪へ押寄す。其後氏直出陣して、先勢は富田・石神に陣し、氏直は本庄に旗を立て、後陣は深谷・能谷邊に支ふ。一益は倉賀野の方に陣し、上州の諸士悉く前陣に備ふ。同十八日、氏直が先手安房守氏邦、瀧川が先陣上州勢と合戰す。北條が軍敗北す。氏邦が家人石山大學・保坂大炊助以下雜兵二百餘人討死す。上州勢にも佐伯伊賀守等戰死す。同十九日、一益己が手勢篠岡右衞門・瀧川儀太夫・津田次右衞門・同八郎五郎・同理助・富田喜太郎・槇田傳藏・谷崎忠右衞門・栗田金右衞門・日置文左衞

織田信長信忠弑せらる

門・岩日市右衞門同平藏・太田五右衞門以下を引率して先陣に進む。上州勢をば後陣に定む。氏直は松田尾張守・大道寺駿河守を先手とす。遠山豐前守・羽賀伊豫守・山角上野介・同紀伊守・福島伊賀守・依田大膳・南條山城守・志水太郎左衞門尉・伊勢備中守・松田肥後守等之に列す。旣にして兩陣相戰ふ。瀧川が家來篠岡平右衞門、先頭に進み、切つて懸る。遂に瀧川が軍打負け、篠岡・津田兄弟三人・岩田兄弟・栗田・太田以下五百餘人討たれ、一益前橋の城へ引退き、其夜上州の諸士と暇乞の酒宴をして、曉天勢州に歸る。○同年七月廿七日、大權現甲州へ御動座。同八月六日、北條氏直、同國若見子に出張對陣す。同十二年、北條左衞門佐氏能[氏政弟]故府中に入る。大權現の兵士戰つて大に勝つ。同十月晦日、和睦ありて、甲州兩國を大權現の御領とし、上州を北條が國と定めて軍を引く。○同十三年四月、皆川山城守が居す野州長沼城を攻めん爲に、北條氏直出陣して、同國藤岡に屯す。佐竹義重後詰に出陣して、同國太田和に陣す。此時壬生上總介は佐竹に背き、北條に屬して軍功あり。北條・佐竹七月に至りて對陣す。兩陣の間に切所ありて、遂に合戰に及ばず、雙方和を約して歸陣

足利義氏薨去
秀吉、北條を攻む

す。○同十五年十二月廿一日、義氏古河にて逝去す。○同十八年、豊臣秀吉關東征伐の爲に發向。三月十九日、京都を立ちて、同廿七日、駿河浮島が原に着陣す。北條が城地駿州・豆州に數多あり。豆州に韮山・下田兩城を殘して之を守らせ、其餘は皆破却し、同國山中に新城を構へ、松田兵衞大夫を城代として、北條左衞門大夫・間宮豊前守・池田民部少輔・椎津隼人正等を籠置く。同廿九日、秀吉浮島が原を出勢す。先陣近江中納言秀次が手にて、山中城を圍む。中村式部少輔一氏・堀尾帶刀吉晴・山內對馬守一豊・一柳伊豆守・同監物並長谷川藤五郎秀一・木村常陸介・堀左衞門督秀政等、進みて之を乘取る。一柳伊豆守等討死す。城兵松田・間宮・池田・椎津、其外佐藤左衞門尉・粟本備前守・山本兵庫助・同深三・山岡左京亮・片山大膳・富田豊後守以下悉く戰死す。又同國韮山城には、北條美濃守氏規籠城す。同日福島左衞門正則・戸田民部少輔・蜂須賀阿波守家政・生駒雅樂頭一正・前野但馬守長康・伊賀侍從定次〔筒井〕等押寄せ攻戰ふ。氏規堅固に之を守護す、四月一日、秀吉箱根・足柄を越えて、同三日、相州小田原に押寄せ、西の高山に、俄に城を構へて、秀吉の陣所とす。島津義久・大友義

純・毛利輝元並小早川隆景・吉川廣家、次に里見左馬頭義康等、旗本の前後に陣す。左陣は長岡越中守忠興・興津侍從信兼（織田上野介）・浮田宰相秀家・近江中納言秀次、其手中村式部少輔一氏・堀尾帶刀吉晴・一柳監物・山內對馬守一豐、次に大垣少將秀勝（秀次弟）・松ヶ島侍從氏鄉（蒲生飛驒守）・尾張內府信雄・同家中澤井左衞門尉・天野周防守・土方勘兵衞尉雄久・羽柴下總守勝雅、其次大權現の御陣所なり。御家人榊原式部大輔康政・大久保七郎右衞門忠世・酒井左衞門尉忠次・同宮內大輔家次・石川左衞門大夫康通・井伊兵部少輔直政・松平周防守康重・牧野右馬允康成等、各東南の海邊まで陣を取る。其續き海上には、加藤左馬助嘉明・長曾我部土佐守元親、其外大權現の舟手の輩、兵船を浮べて圍をなす。右陣は長谷川藤五郎秀一・堀左衞門督秀政・池田三左衞門尉輝政等、西南の海際まで陣す。其續き海上には、九鬼大隅守嘉隆・脇坂中務少輔安治等、舟を並べて陣す。城中には太田十郎・北條七郎・同新太郎・同陸奧守・同左衞門佐・同右衞門佐・同新三郎・同彥太郎・伊勢備中守・大和兵部少輔・小笠原播磨守・松田尾張守入道・同左馬助・同肥後守・山角上野介・同四郎左衞門尉・同左近大夫・多目權兵衞尉・山中主膳・

福島伊賀守・石卷勘解由・同下總守・南條山城守・同左京亮・同左馬允・小西隼人正・富永內膳・大藤左衞門尉・依田大膳・荒川豐前守・大森甲斐守・志水多郎左衞門尉・遠山左衞門尉・大道寺孫九郎・上田常陸介・羽賀伊豫守・朝倉右京進・伊東右馬允・大藤式部少輔・原豐前守・荒木兵衞尉・羽賀伯耆守・安中左近將監・由良信濃守・長尾新六郎・小幡孫市・上田兵衞太夫・成田下總守・內藤大和守・足利新六郎・小泉兵太夫・佐倉筑後守・布川彌太郎・長南五郎・倉賀野淡路守・皆川山城守・深谷才兵衞・大須賀權太夫・高井主水・立林喜平次等、東八ヶ國の兵悉く立籠る。又豆州下田城には、志水上野介籠城す。九鬼大隅守嘉隆後小田原に來り寄手に加はる大將として、兵船を着けて之を攻む。上野介降參して城を渡す。相州甘繩城は、北條左衞門太夫氏勝守護す。四月廿一日城を退去し、剃髮黑衣を着して降人となる。武州岩槻城は、太田十郎氏房が居城なり。其身は小田原に籠城して、家臣太田備中守・伊達與兵衞・宮城美作守之を守る。淺野彈正少弼長政・木村常陸介大將として、大權現の御家人本多中務少輔忠勝・鳥居彥右衞門元忠・平岩七之助親吉等發向し、攻戰つて外曲輪を乘取る。五月二日遂に城を渡す。同國忍城は、

成田下總守氏長城主たり。氏長小田原にありて、成田左衛門尉立籠る。石田治部少輔三成大將として、出羽・奥州並佐竹・結城の軍勢之を攻む。上杉松枝城は大道寺駿河守守る。羽柴筑前守利家・長尾喜平次景勝・葦田・眞田等押寄せ、屏を崩し堀を埋めて攻入る。大道寺降を乞うて退去す。武州鉢形城には、北條安房守氏邦居す。北國勢並淺野彈正少弼長政が人數等、押寄すべしと擬す。六月十四日、城を渡して退く。同國八王子城は、北條陸奥守氏照が家臣狩野一庵・横地與三郎・近藤出羽守等立籠る。羽柴筑前守利家大將として、越後・信濃の軍勢押寄せ、同月廿三日、早朝に之を攻落し、城代横地以下千餘人討取る。此外關東にて小田原へ屬す諸城、相模には新井・三崎、武藏には深谷・川越・松山・木栖・菖蒲・羽丹生・江戸・津久居、上野には大胡・小幡・伊勢崎・新田・倉賀野・那和・前橋・安中・小泉・箕輪・木部・白井・飯野・館林・藤岡・八幡山、下野には免取・佐野・足利・壬生・皆川・加沼・小山・榎本、上總に米本・椎津・窪田・萬騎・長南・池和田・東金・岩ヶ崎・土氣・成戸、下總には高田臺・鳥手・關宿・小金・助崎・印西・木瀏・佐倉・臼井・大須賀・孫子(あびこ)・東野・小久保・古河・山室・相馬・栗橋・覓水(みつみ)・布川、常陸に守山・土浦・江戸